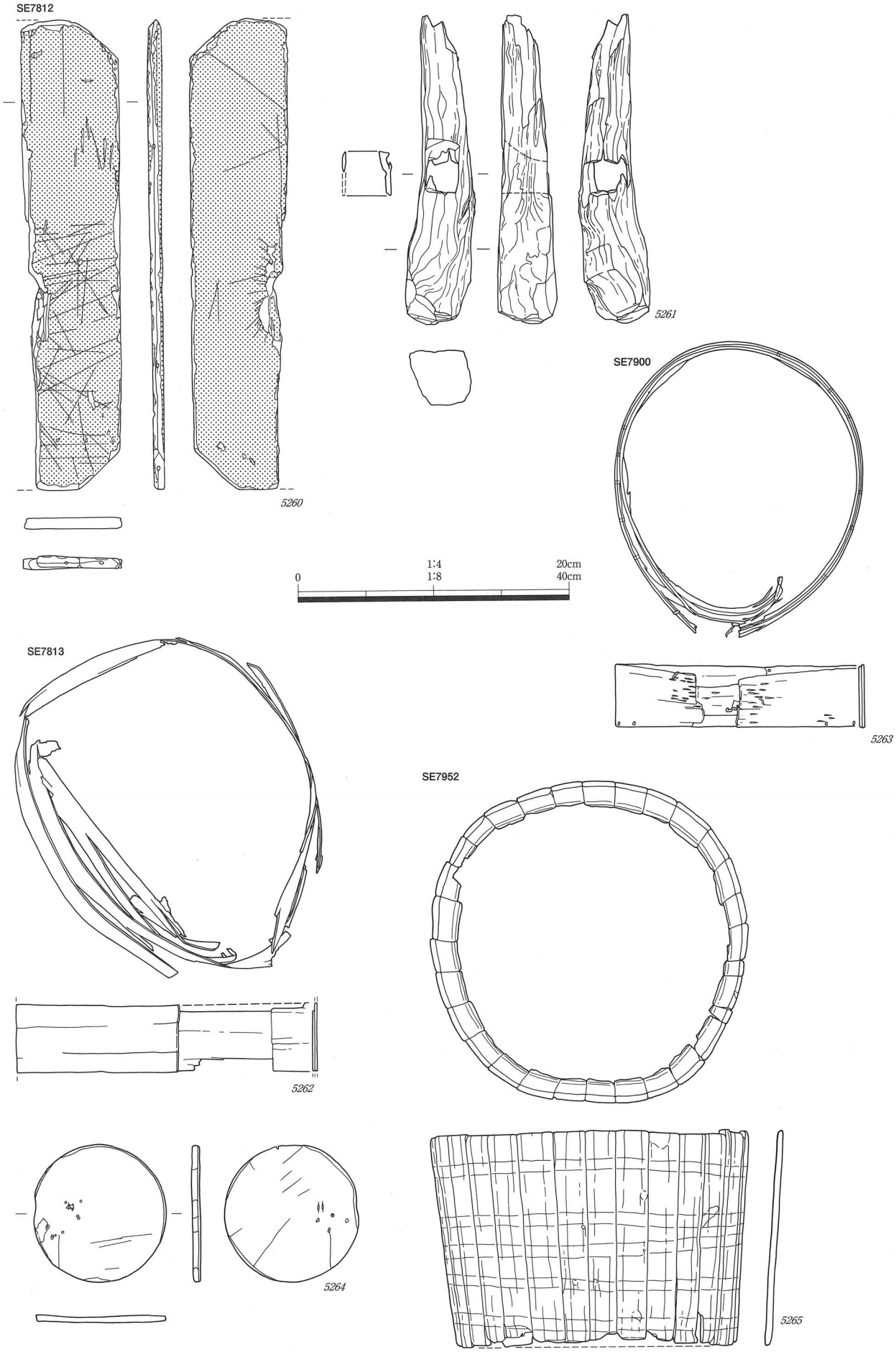
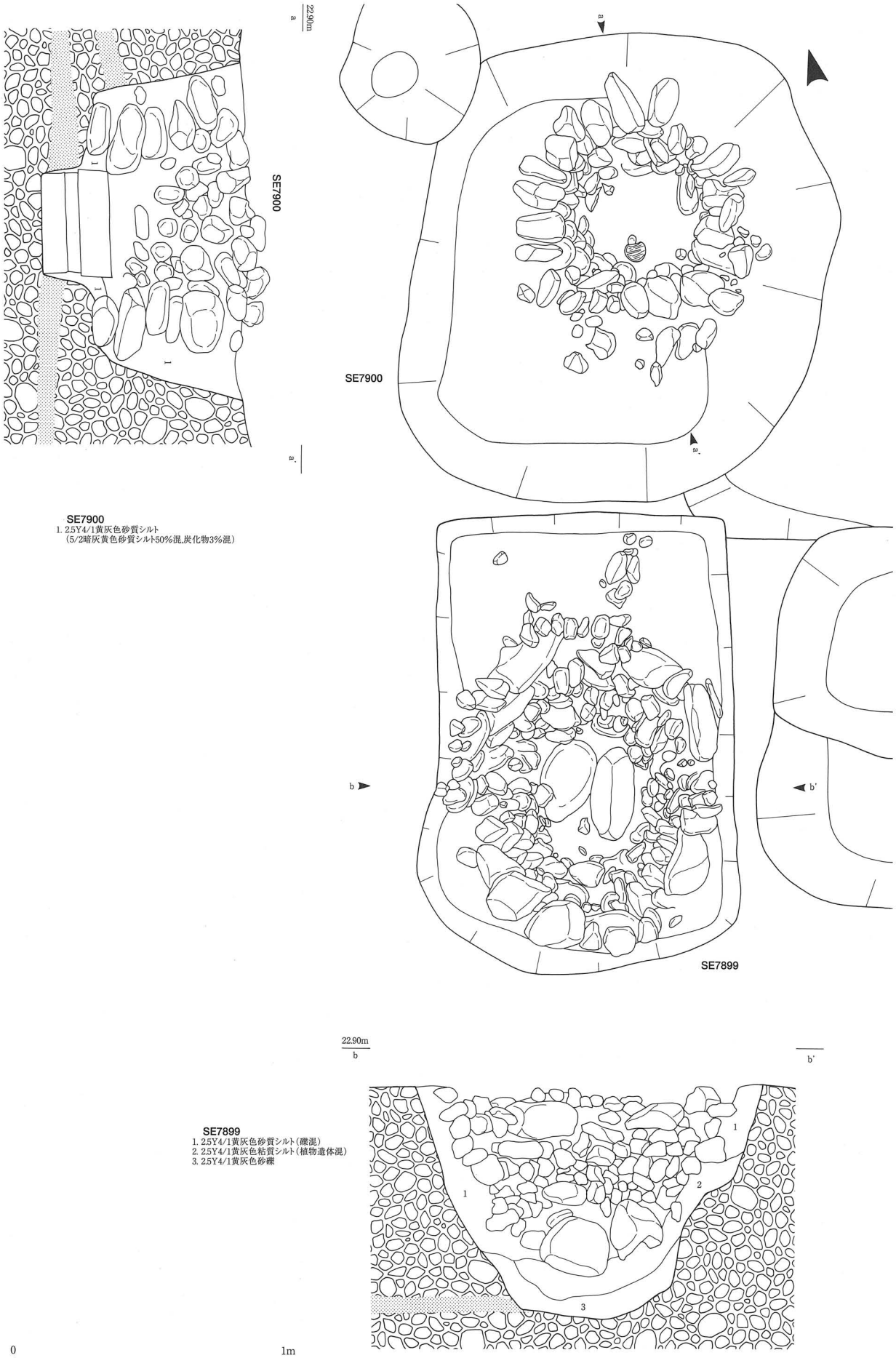


第478図　遺物実測図　（*5260・5264*　1/4，*5261・5262・5263・5265*　1/8）
SE7812（*5260・5261*）　SE7813（*5262*）　SE7900（*5263*）　SE7952（*5264・5265*）



SE7900
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
（5/2暗灰黄色砂質シルト50%混,炭化物3%混）

SE7899
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（礫混）
2. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト（植物遺体混）
3. 2.5Y4/1黄灰色砂礫

0　1m

第479図　遺構実測図
SE7899・SE7900

は曲物（5263）・円形板・加工材・加工板がある。

5263は釘結合曲物を水溜に転用しているため底板はない。破損が激しく直径，側板の重なり，綴じ方の復元は不可能である。下縁には釘孔が11箇所あるが間隔は不均等である。

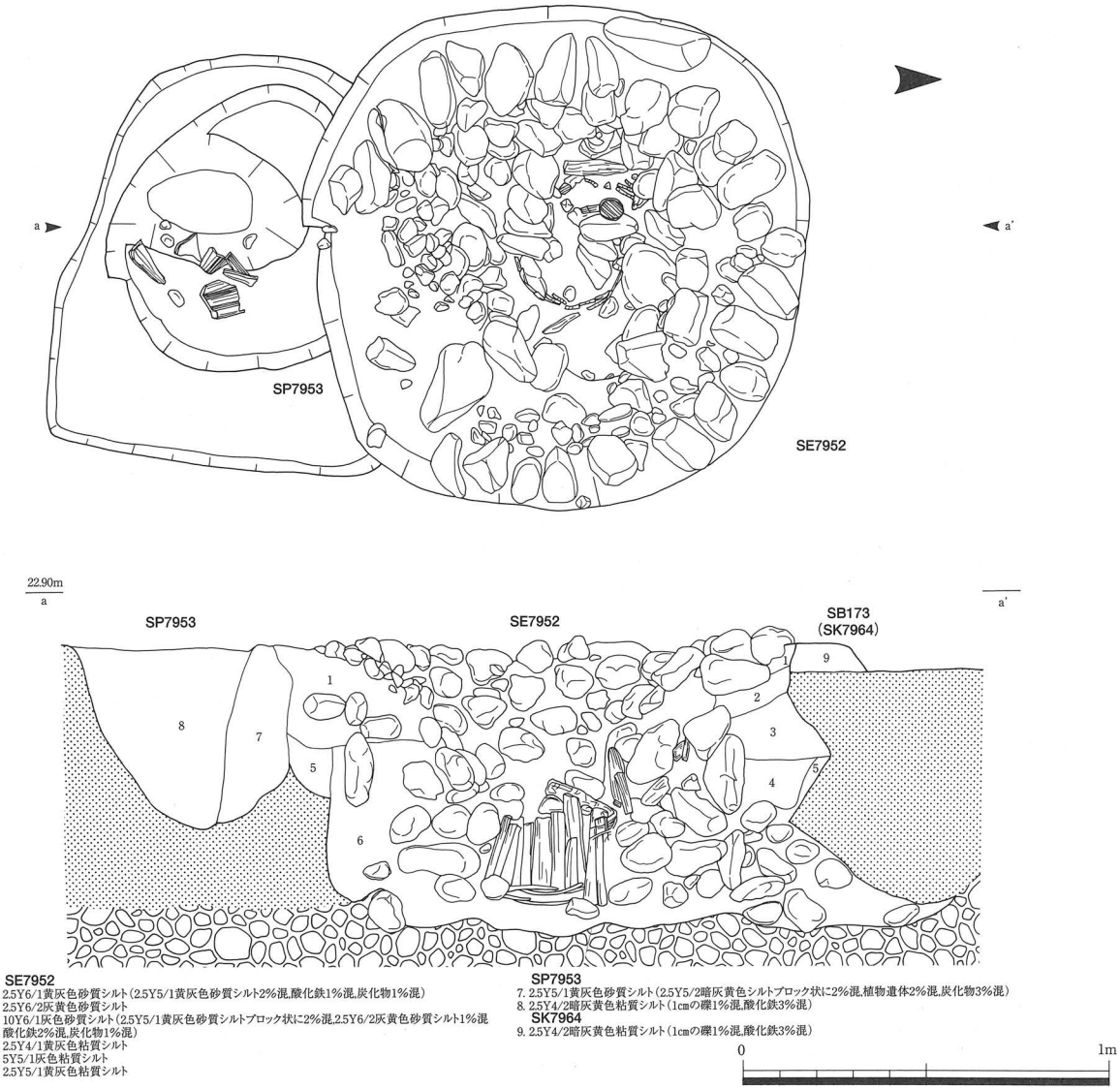
7952号井戸（ＳＥ7952，第478・480図，図版198・246）

ＳＢ173の整地部分ＳＫ7964のほぼ中央に位置する石組井戸で，直径1.7m，深さ84cmを測る。石組の石の並びはかなり乱れており，桶は歪み石組の下に潜るように中央から西へずれている。断面では下部の裏込土の黄灰色粘質シルトが地山の間に引き込まれており，地震の影響が考えられる。出土遺物には土師器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・瓦質土器・桶（5265）・漆器・円形板（5264）がある。

5265は水溜に転用したため底板は抜いている。直径47cm，高さ32cmを測り，外面には５条のタガ痕がみられる。5264は直径10cmを測る円形板で，中央から端にかけては樺皮が残存していることから，蓋として使用した可能性が考えられる。

7995号井戸（ＳＥ7995，第481・484図，図版199・246）

ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080内部，ＳＥ7363の南西１ｍに位置する。規模は1.7m×1.4m，深さ1.1ｍを測り，平面形は隅丸方形を呈する。上面には焼けた破砕礫が多量に入っており，その下部から水



第480図　遺構実測図
SE7952　SP7953　SK7964

溜の桶が出土した。桶は掘形の西端に偏り，直径の異なるものが２段積まれていたとみられるが，上段はタガが残存しているのみである。出土遺物には須恵器・中世土師器（5267～5270）・珠洲・瓦質土器・桶（5266）・漆器・加工板・加工材がある。

5267～5270は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.4cm～8.8cmを測り，口縁部が大きく外反しやや肥厚した端部をつまみ上げる。16世紀前半のもの。

5266は水溜に転用したため底板がない。内面の底板があった位置を中心に煤が付着していることから，底板が焼けたため水溜に転用されたものと推測する。

8107号井戸（ＳＥ8107，第482・484図，図版199・246）

ＳＥ7812の北約１ｍ，ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面で検出した石組井戸。平面形は1.6m×1.3mの不整形で，深さ97cmを測る。石組の残存状況は良くないが，水溜は曲物を天地逆にして２段積み重ねている。出土遺物には中世土師器（5285）・曲物（5284）・箸（5286）・加工板がある。

5285は非ロクロ成形の中世土師器皿。丸底で口縁部が短く外反する器形で，口径9.4cmを測る。15世紀中頃のもの。

5284は釘結合曲物を水溜（上段）に転用したため底板を抜いている。浅い側板がタガのように外側にあり，下縁には３箇所の釘孔がある。綴じ合わせは２列前外３段後内４段綴じである。

8128号井戸（ＳＥ8128，第482・484図，図版246）

調査区西端，ＳＥ8107の南西３ｍに位置し，ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面で検出した。直径96cm，深さ81cmを測り，水溜の曲物１段を確認した。曲物は石を並べた上に据えられており，曲物上部はかなり破損が激しい。出土遺物には中世土師器（5288）・曲物（5287）・加工板がある。

5288はロクロ成形の中世土師器皿。口径11.9cmを測り，口縁部が大きく外反して開き，口縁端部が尖る。内外面に煤が付着している。15世紀後半のもの。

5287は水溜に転用したため底板はない。直径47cm，高さ25cmを測り，綴じ合わせは樺皮によるとみられるが，側板端部に等間隔に４箇所の釘孔があることから，補強された可能性が考えられる。

8169号井戸（ＳＥ8169，第482・486図，図版199・246）

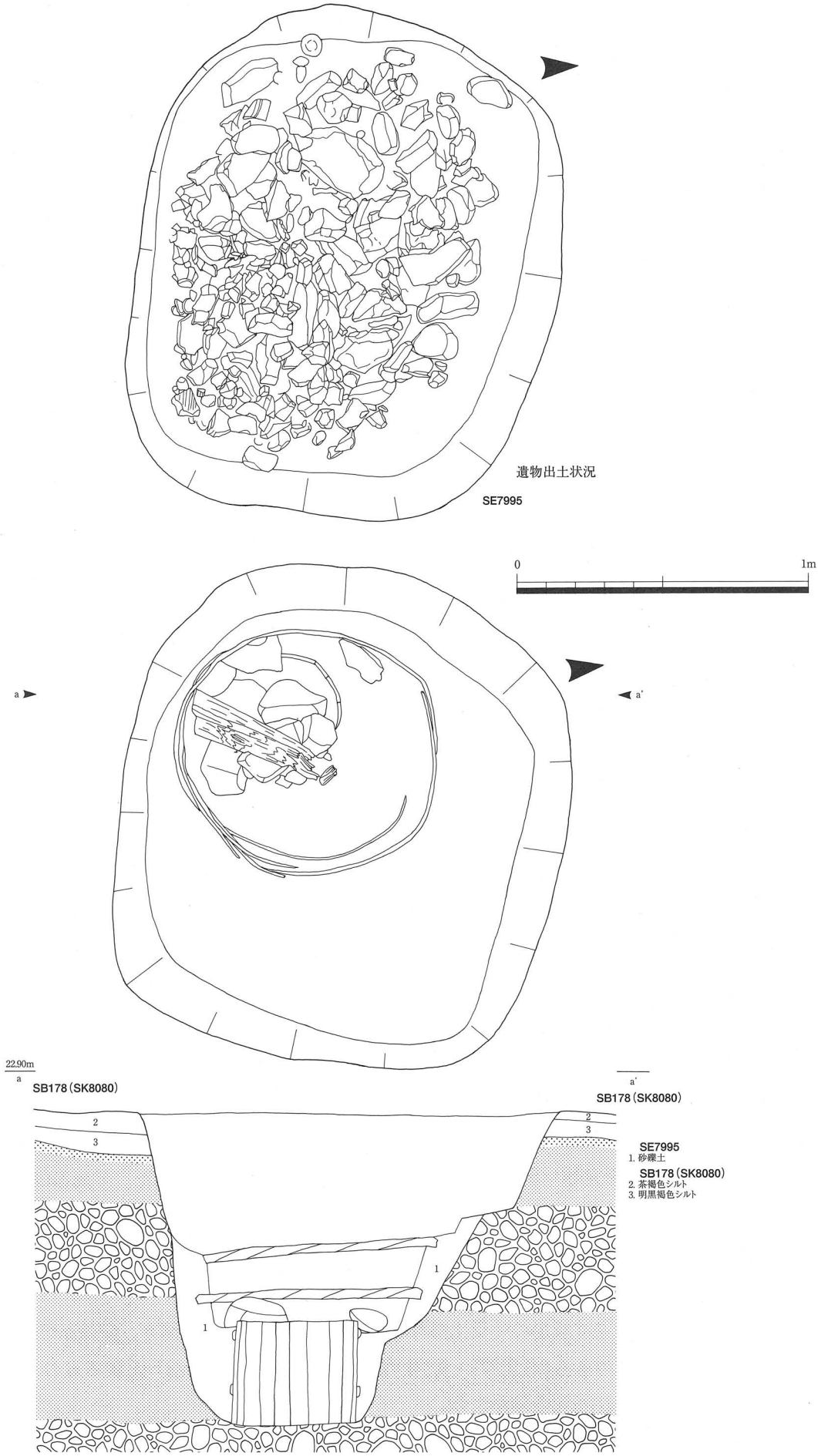
ＳＢ164の整地部分ＳＫ8051の底面で確認した石組井戸。石組は６段時計回りに整然と積まれ，水溜は曲物２段である。曲物は傾いて石組の下にやや潜っており，地震の影響が考えられる。出土遺物には曲物（5294）がある。

5294は浅いものが上段，深いものが下段の水溜に転用されているため，底板は抜かれている。下段のものは釘結合曲物で，綴じ合わせは１列外６段綴じである。上段の綴じ合わせは１列外５段綴じである。

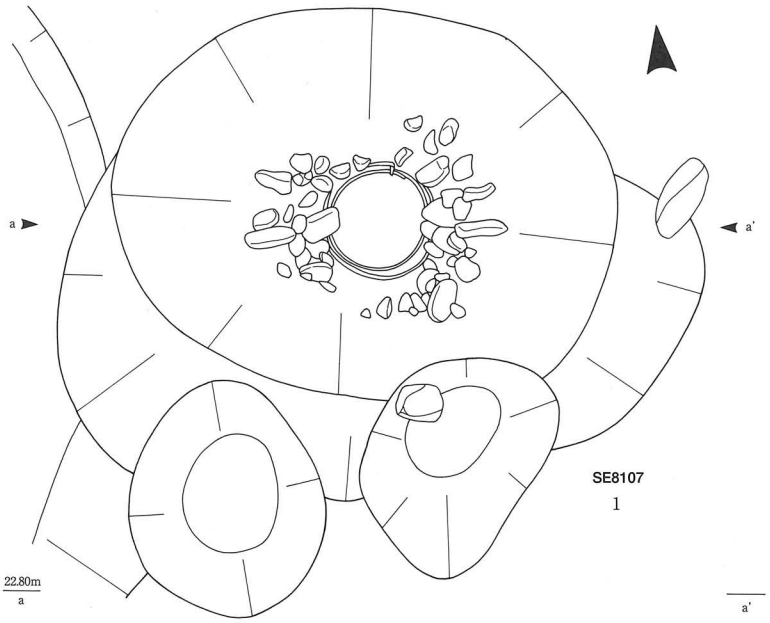
8037号井戸（ＳＥ8037，第483・484図）

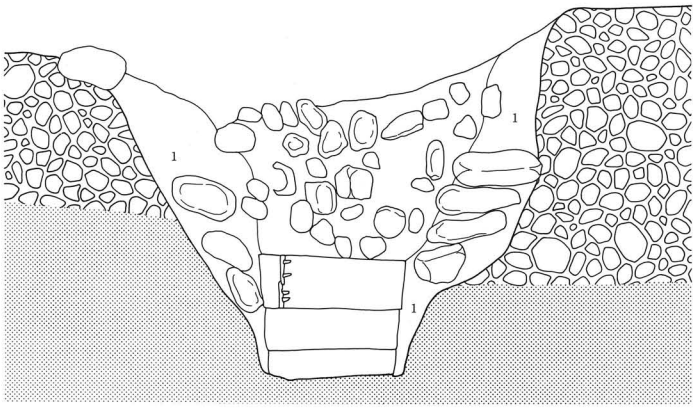
ＳＢ179の中央やや西寄りに位置し，整地部分ＳＫ8046上面で確認した。平面形は楕円形で，1.4m×1.3m，深さ92cmを測る。上部には礫が多いことから，井戸側は石組であった可能性が高い。水溜は桶であるが，残存状況は悪い。出土遺物には須恵器・中世土師器（5271～5283）・珠洲・瀬戸美濃・桶・円形板・加工板・加工材・焼石がある。

5271～5283は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.8cm～16.3cmを測り，口縁部が大きく外反して開く。端部はつまみ上げるもの（5271・5272・5274・5275・5277～5283）と尖るもの（5273・5276）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

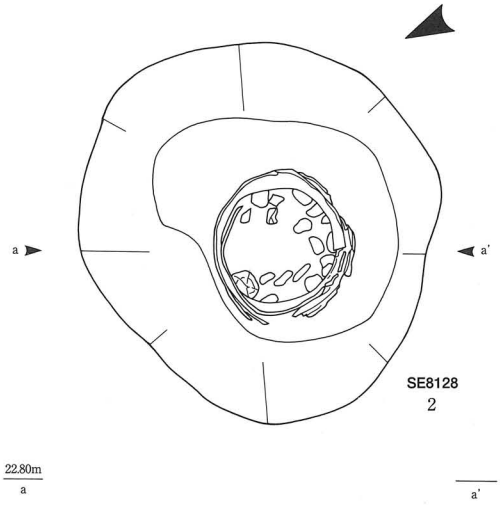


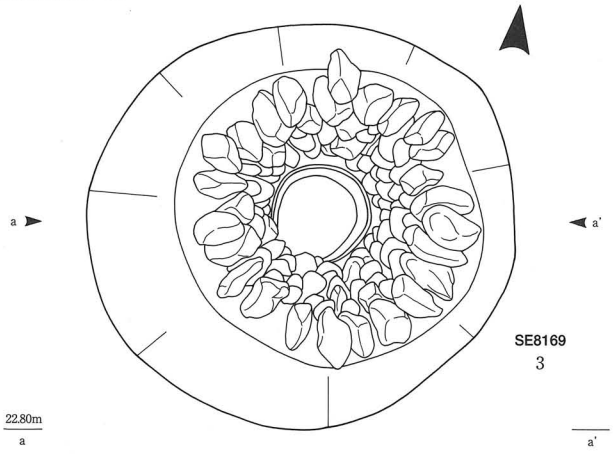
第481図　遺構実測図（中世）
SE7995・SK8080

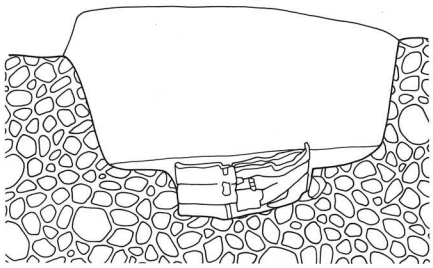




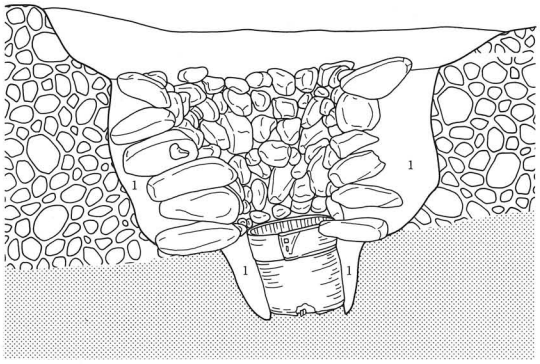
SE8107
1. 暗灰色砂質土（礫混）



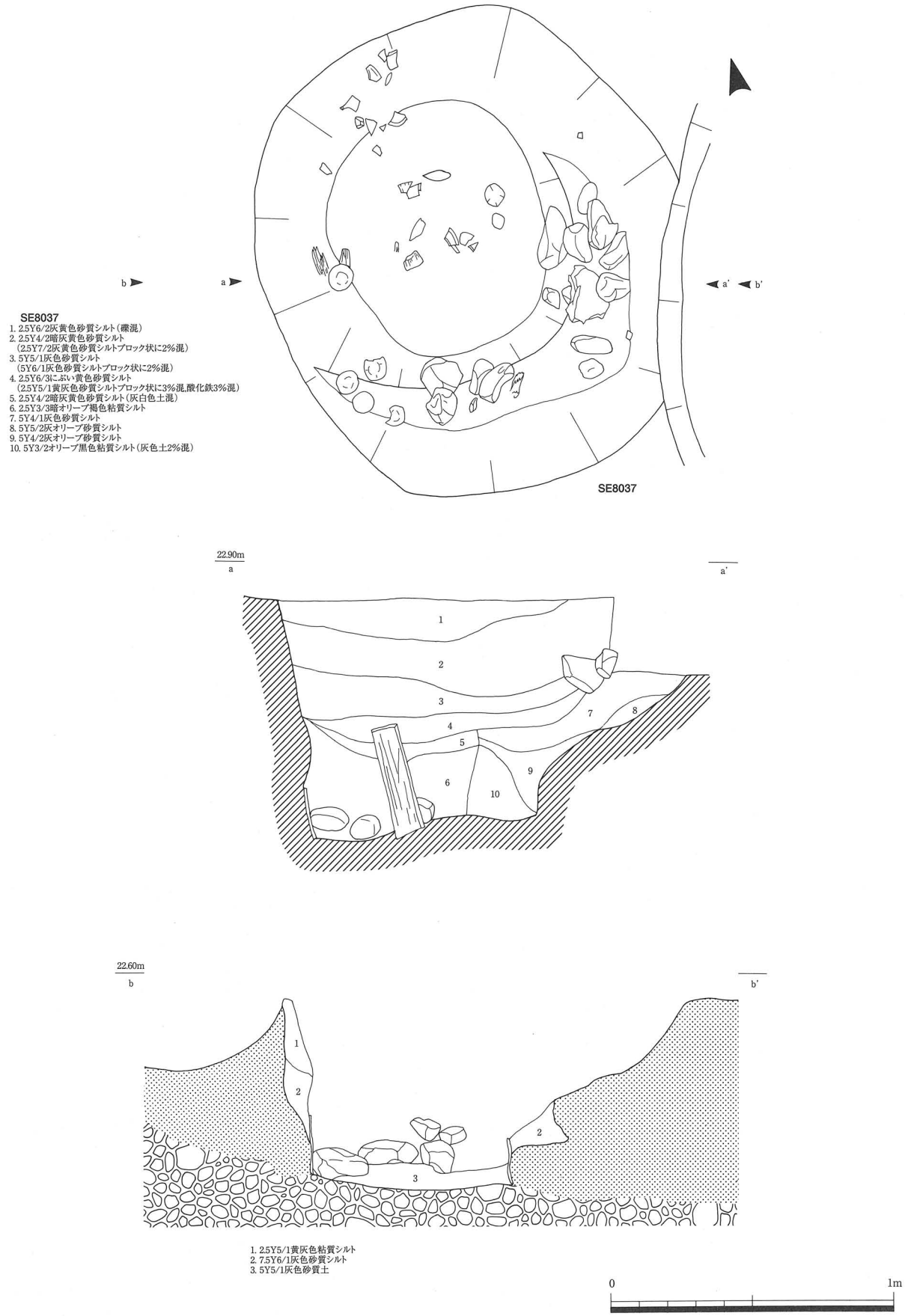




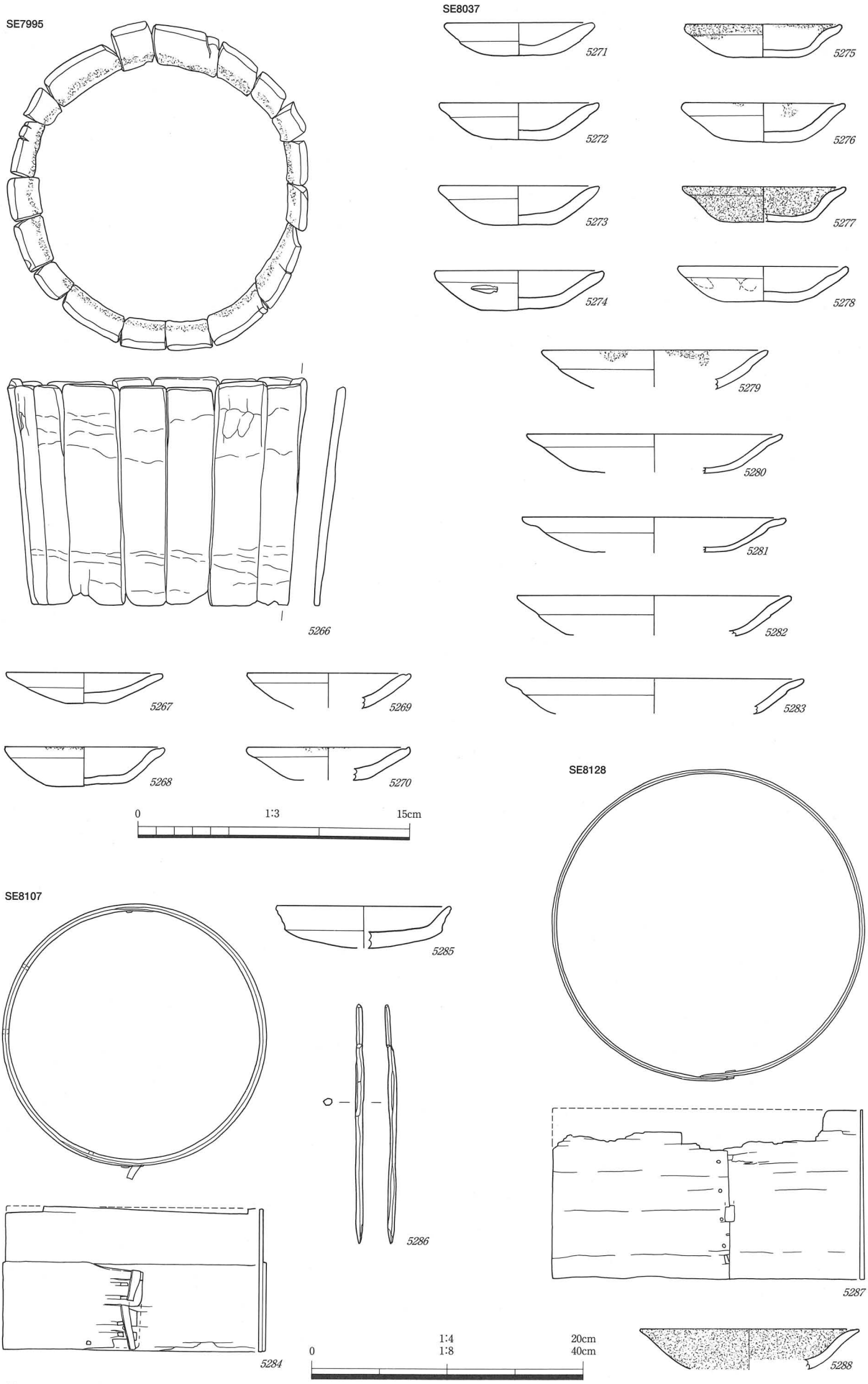
SE8169
1. 2.5Y4/2暗灰黄色
砂質シルト（礫混）



第482図　遺構実測図
1. SE8107　2. SE8128　3. SE8169



第483図　遺構実測図
SE8037

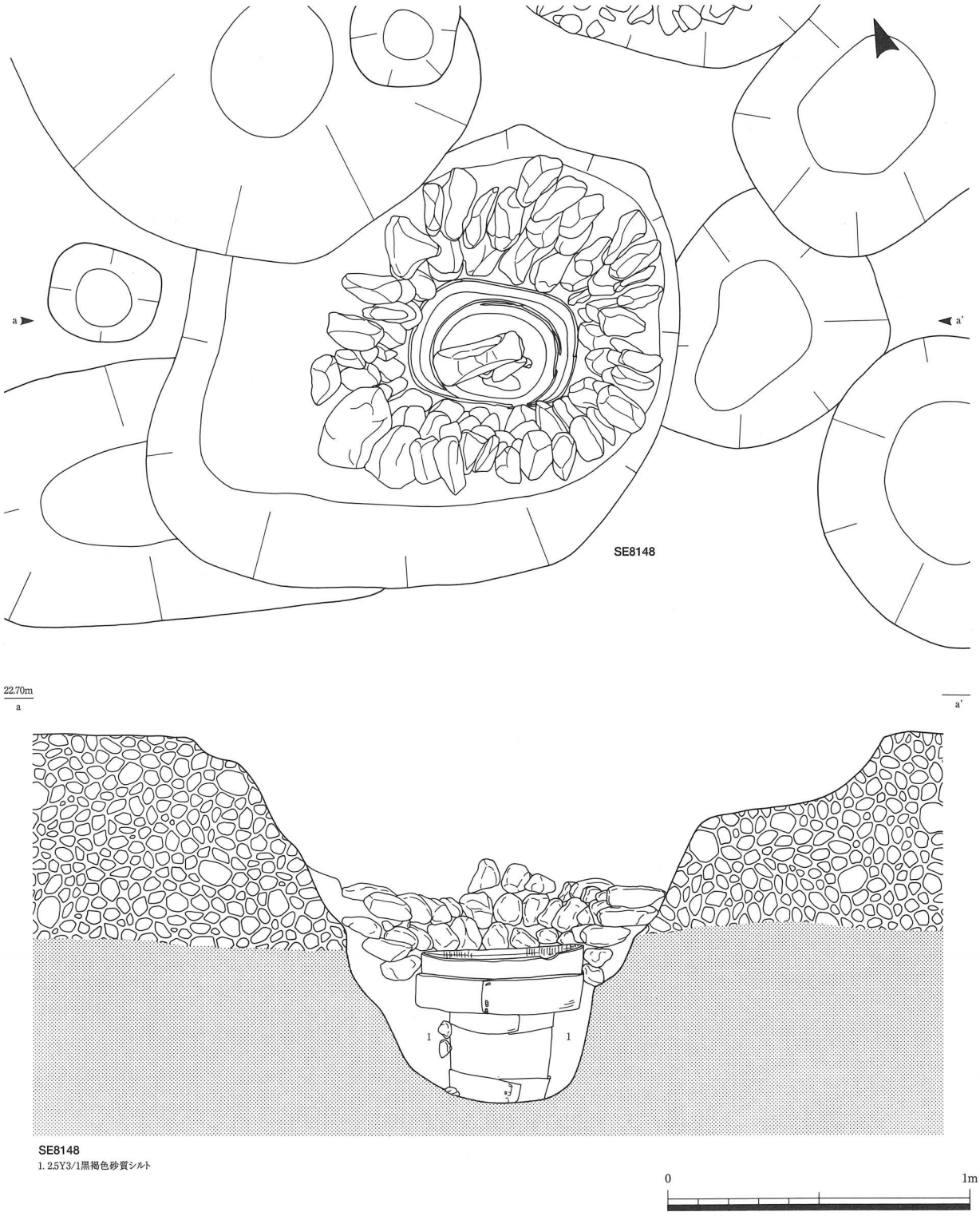


第484図　遺物実測図　（*5267*～*5283*・*5285*・*5288*　1/3，*5286*　1/4，*5266*・*5284*・*5287*　1/8）
SE7995（*5266*～*5270*）　SE8037（*5271*～*5283*）　SE8107（*5284*～*5286*）　SE8128（*5287*・*5288*）

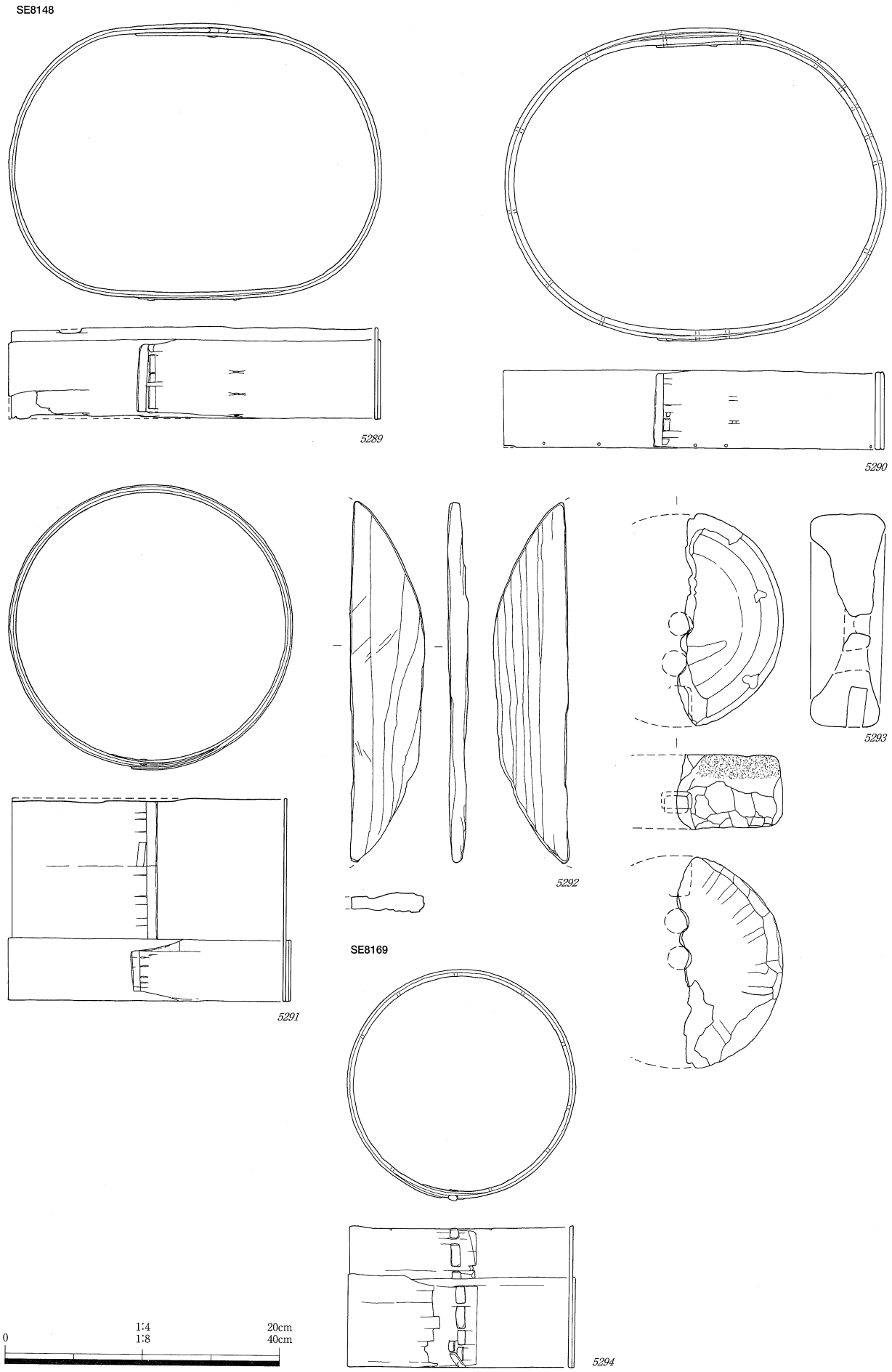
8148号井戸（ＳＥ8148，第485・486図，図版199・247）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面で検出した石組井戸。平面形は不整な方形を呈し，規模は1.6m×1.3m，深さ1.26mを測る。石組は３段～４段残存しており，水溜は下部に円形曲物を１段，上部に大きさの異なる楕円形曲物２段を積み重ねている。出土遺物には中世土師器・珠洲・瓦質土器・曲物（5289～5291）・円形板（5292）・柱・石臼（5293）がある。

5289～5291は水溜に転用されており底板はない。5289は長径54cm，短径40cm，5290は長径56cm，短径46cmを測る楕円形曲物で，5290は下縁に釘孔が不均等な間隔で15箇所ある釘結合曲物である。5289・



第485図　遺構実測図
SE8148



第486図　遺物実測図　（*5292*　1/4，*5289*～*5291*・*5293*・*5294*　1/8）
SE8148（*5289*～*5293*）　SE8169（*5294*）

5290とも綴じ合わせは２箇所で，外面から確認できるのは5289で２列前上外下内３段後内３段綴じである。5290は２列前不明後内２段綴じである。5291は図上ではタガが二重になっているが，本来は上下にタガがある円形曲物で，直径42cm，高さ29.4cmを測る。綴じ合わせは樺皮が残存していないため不明である。

5293は上臼。挽木は横打込み式で，側面に方形の穴が穿たれている。摺り目の摩耗が激しく副溝が僅かに残存するのみである。（中川道子）

9213号井戸（ＳＥ9213，第487・489図，図版200・247）

ＳＢ182内で検出した石組井戸。掘形は長径1.9m，短径1.5mの楕円形で，石組は中央より西に寄っており，検出面まで残る。深さは1.2mで，底は灰オリーブ色砂礫層に達する。埋土は上層が暗灰黄色粘質シルトで，最下層には有機物が多く混じる黒褐色シルト質粘土が堆積していた。裏込めには上層にはにぶい黄色砂質シルト，下層には灰オリーブ砂礫が充填されていた。水溜には竹製のタガで２箇所を締めた小型の桶（5296）が据えられている。口径40cm，高さ13.2cmで，21枚の板を巡らす。遺物は中世土師器・珠洲・漆器が出土している。

5295は総黒色の漆器椀。高台は摩耗し，畳付けは漆が剥げている。

9214号井戸（ＳＥ9214，第487図，図版200）

ＳＢ183の内部で検出した石組井戸。西側の楕円形の土坑とは切り合いはなく接している。掘形は直径約1.5mの円形で，深さは86cmである。石組は最下層の１段しか残っていなかった。水溜には曲物が１段据えられていた。埋土はオリーブ黒色粘質シルトが堆積していた。遺物は土師器・中世土師器・珠洲が出土している。

9286号井戸（ＳＥ9286，第488・489図，図版247）

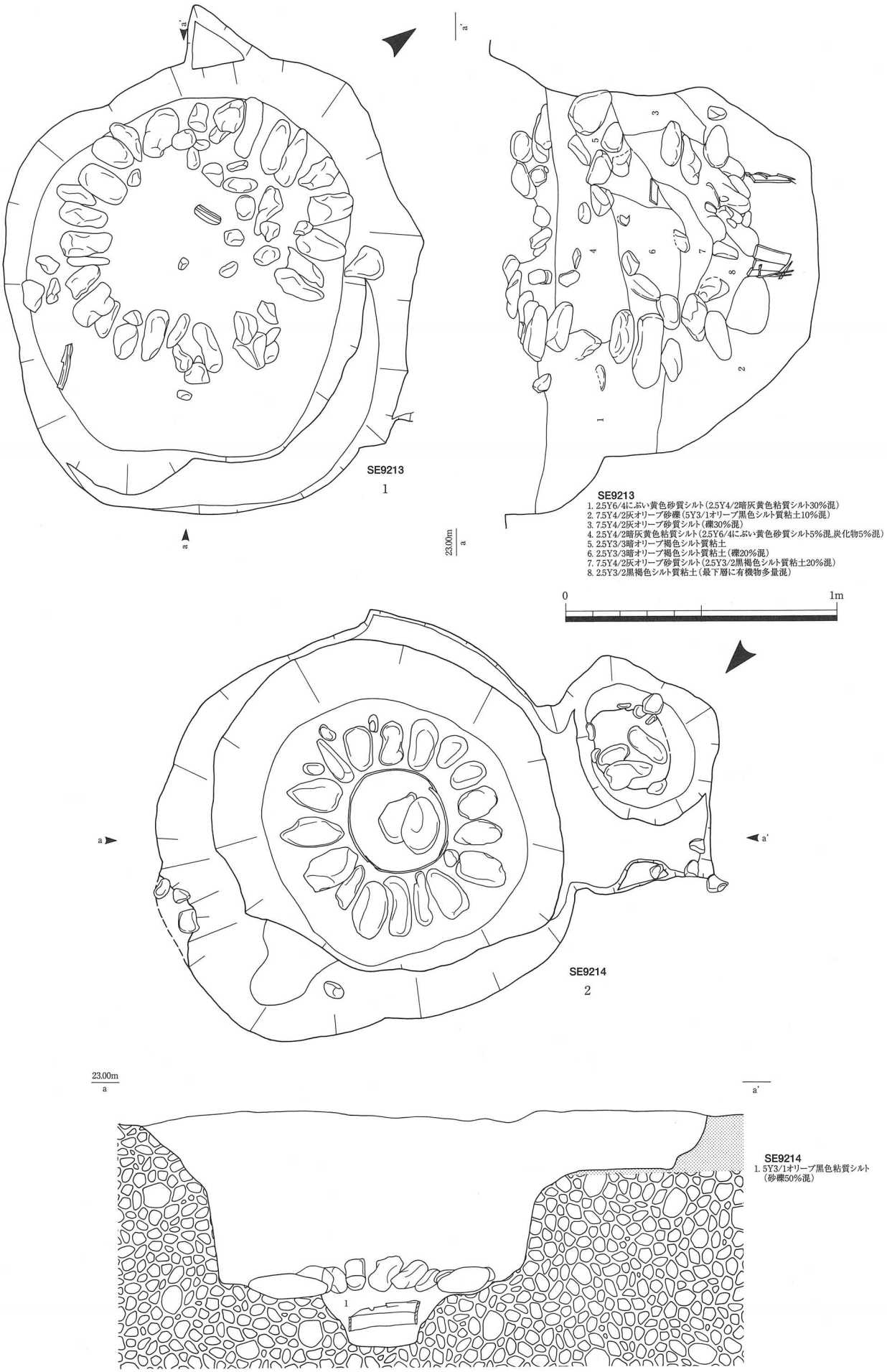
ＳＢ184内で検出した石組井戸。掘形は長径1.7m，短径1.4mの楕円形で，深さは83cmである。底は黄褐色砂礫層に達する。石組は下層の２～３段しか残っておらず，上の石は抜き取られたようである。石は下から時計回りに積まれる。水溜には１段の曲物（5301）が据えられる。曲物は楕円形を呈し，口径57cm，高さ12.6cmを測る。タガ部分にはキメカキがみられ，綴じ方は１列外５段である。下端には13箇所の釘穴が残る。埋土は炭化物が帯状に混じる暗灰黄色粘質シルトで，石組の裏込めには上層に黄褐色砂，下層に暗灰黄色シルト質粘土が充填される。遺物は土師器・木製品が出土している。

5297は表面に漆が塗布された板状木製品で，上端には１箇所綴じ皮が残る。箸（5298～5300）はいずれも欠損品である。

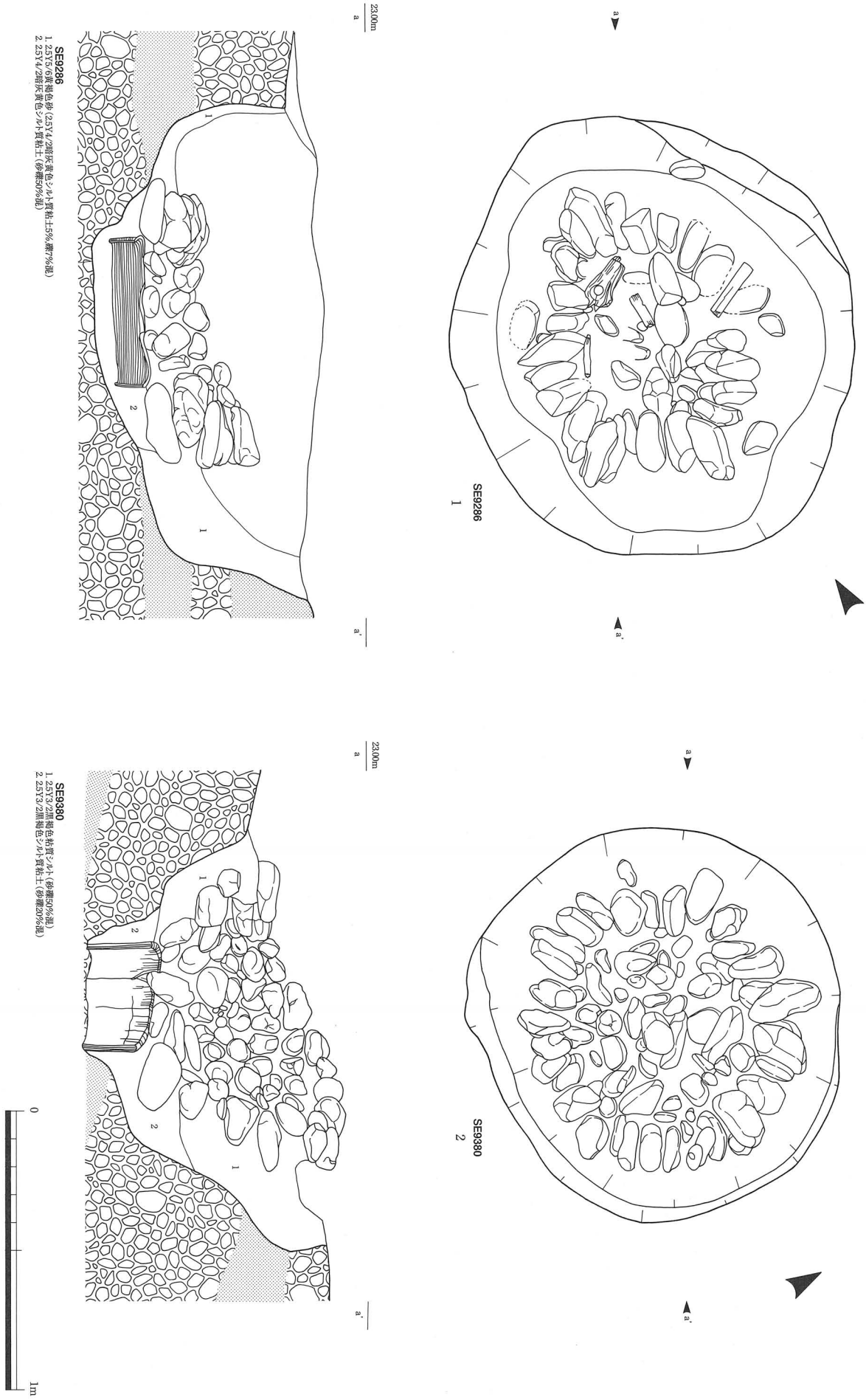
9380号井戸（ＳＥ9380，第488・489図，図版200・220・247）

整地跡と考えているＳＤ9285の東肩で検出した石組井戸。石組は遺構検出面まで残る。掘形は直径約1.4mの円形で，深さは93cmである。底は灰オリーブ砂層に達する。水溜には丸太材を刳り抜いたもの（5305）が据えられる。口径は41cm，高さは27cmである。埋土はオリーブ褐色粘質シルトが主に堆積するが，上層には灰層・炭化物層が堆積し，この中から漆器が出土している。裏込めには上層に黒褐色粘質シルト，下層に黒褐色シルト質粘土が使用されている。遺物は珠洲と木製品が出土している。

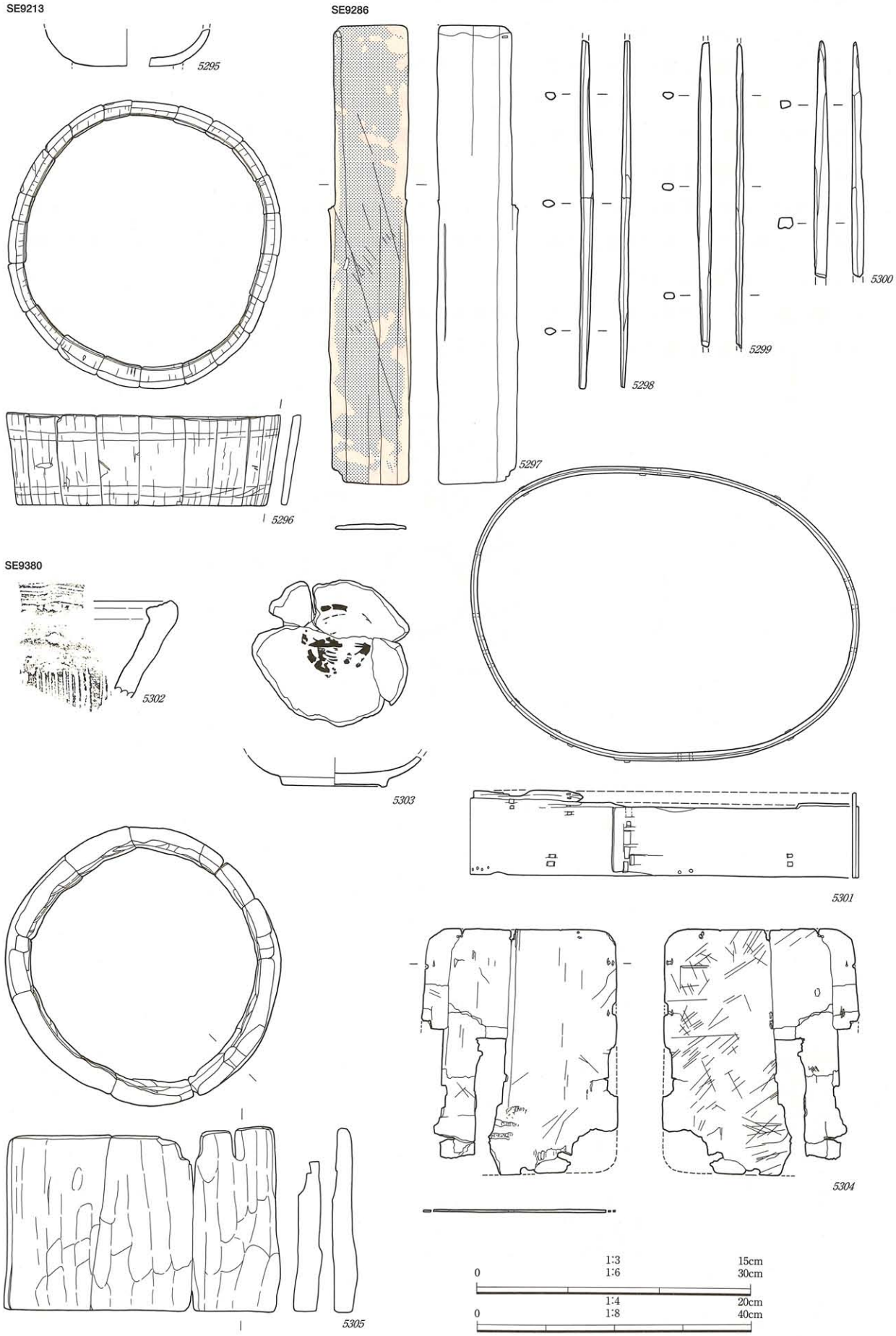
5302は珠洲の鉢。内傾する口縁端部にはややだれた櫛歯波状文が描かれる。Ⅴ期のもの。5303は総黒色の漆器椀で，内底面には朱漆で鶴丸文かと思われる文様が描かれる。5304は折敷の底板で外周縁部に綴じ皮が残る。片面に細かい線状痕が多く残り転用されたものであろう。



第487図　遺構実測図
1. SE9213　2. SE9214



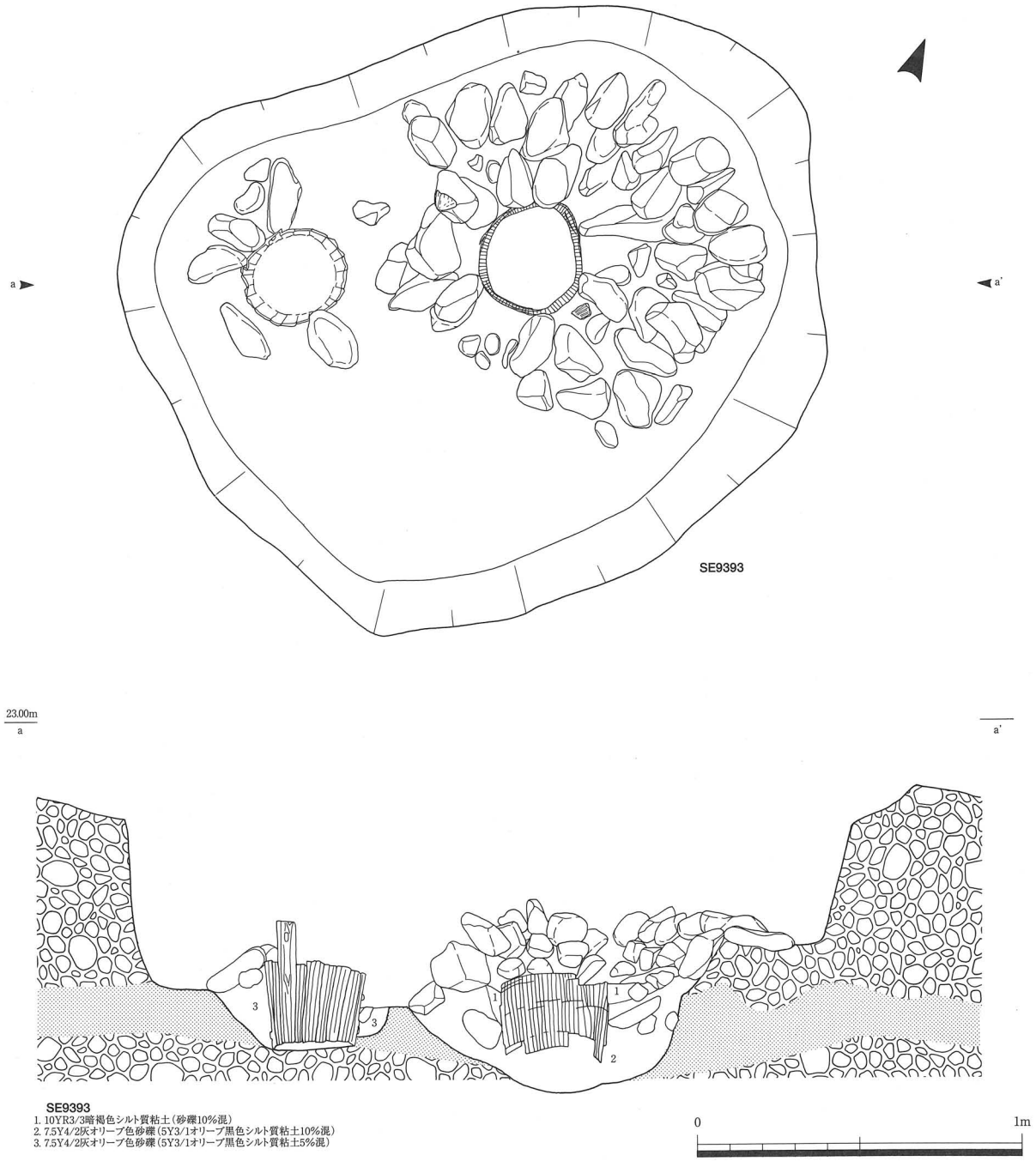
第488図　遺構実測図
1. SE9286　2. SE9380



第489図　遺物実測図（*5295・5297～5300・5302*　1/3，*5303*　1/4，*5304*　1/6，*5296・5301・5305*　1/8）
SE9213（5295・5296）　SE9286（5297～5301）　SE9380（5302～5305）

9393号井戸（ＳＥ9393，第490・492図，図版200・220・247）

ＳＢ185の東で重複して検出した井戸である。建物に伴うかは判断がつかなかった。掘形は大きく１つではあるが，掘削を進める内に水溜の施設が２基確認されたことから，造り替えが行われたことがわかった。掘形は長径2.2m，短径1.8mの長方形で，深さは1.1mで，底は黄灰色砂に達する。共に石組井戸であったもので，水溜に桶が据えられていた西側の井戸は石組が最下層１段の一部しか残っていなかった。東側の曲物が据えられていた井戸は石組が３段くらい残っており，遺存状況が西側のものより良いことから東側のもののほうが新しいと考えられる。桶は横に板を渡して持ち手にする手桶タイプ（5309）で，上端が１重，下端が２重のタガで締められる。曲物（5310）は下端がタガで締められており，直径50cm，高さ23.5cmで，外側には２箇所に固定のための棒が差し込まれていた。埋土は一部試掘トレンチで撹乱されているが，暗灰黄色粘質シルトとオリーブ褐色粘質シルトが上層に堆積する。水溜の施設の裏込めには黒色シルト質粘土が混じる灰オリーブ砂礫が使用されている。

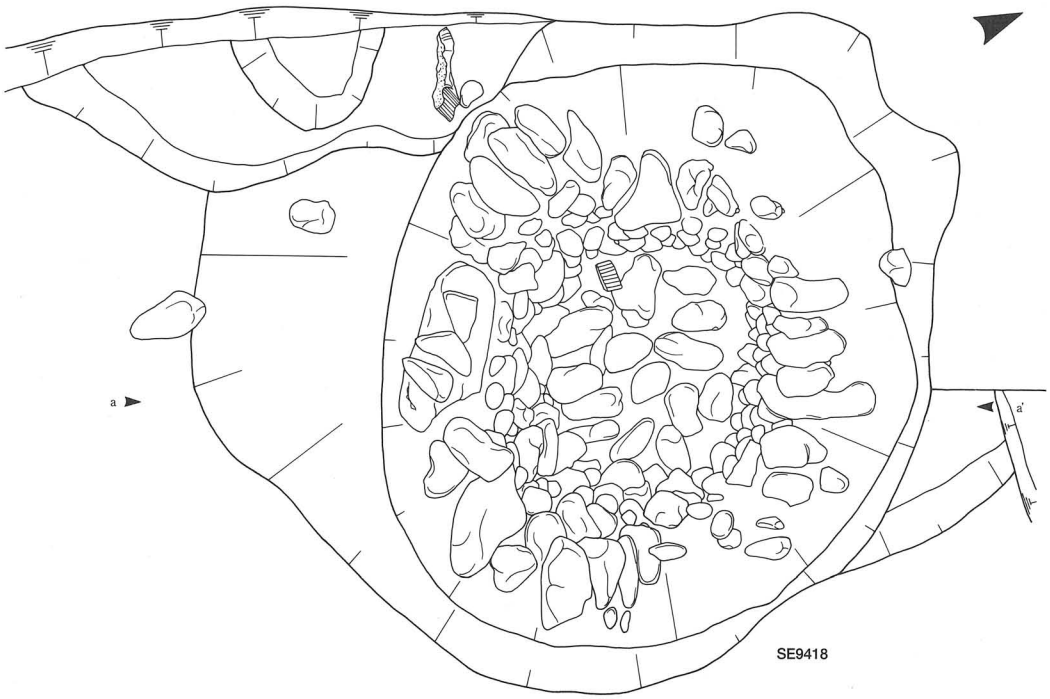


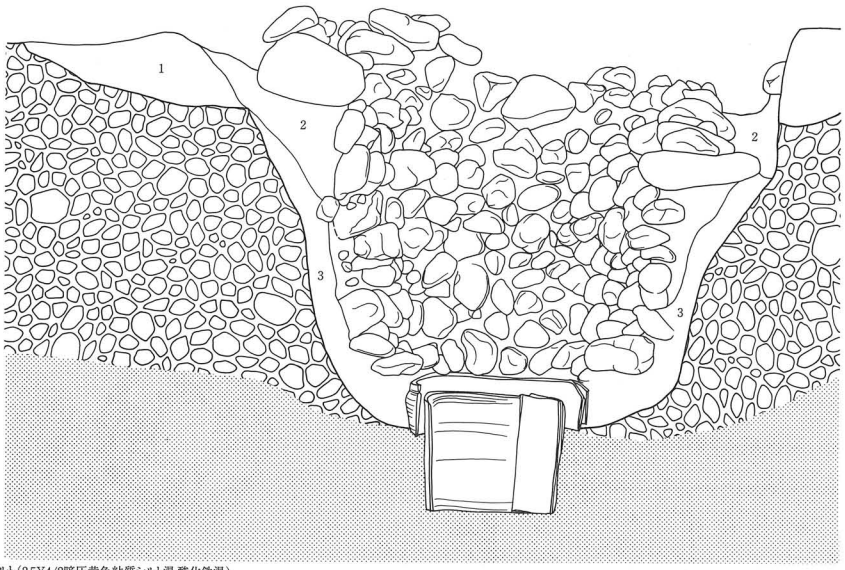
第490図　遺構実測図
SE9393

遺物は土師器・中世土師器・珠洲・中国製青磁・青花・石臼が出土している。中世土師器（5306）は口縁部が短く，底部近くまで強くヨコナデするタイプで，口縁端部にわずかに煤が付着する。5307は内外面に厚く油煙が付着する。珠洲の鉢（5308）は，長く伸びた内傾する口縁部端面は無文で，Ⅵ期（15世紀後半）に入るか。5311は石臼の上臼。目のパターンは８分画で，石材は凝灰角礫岩。

9414号井戸（ＳＥ9414）

ＳＸ9320の下層で検出した石組井戸最下層の１段の石組だけが残り，水溜には何の施設も残っていなかった。遺物の出土はない。

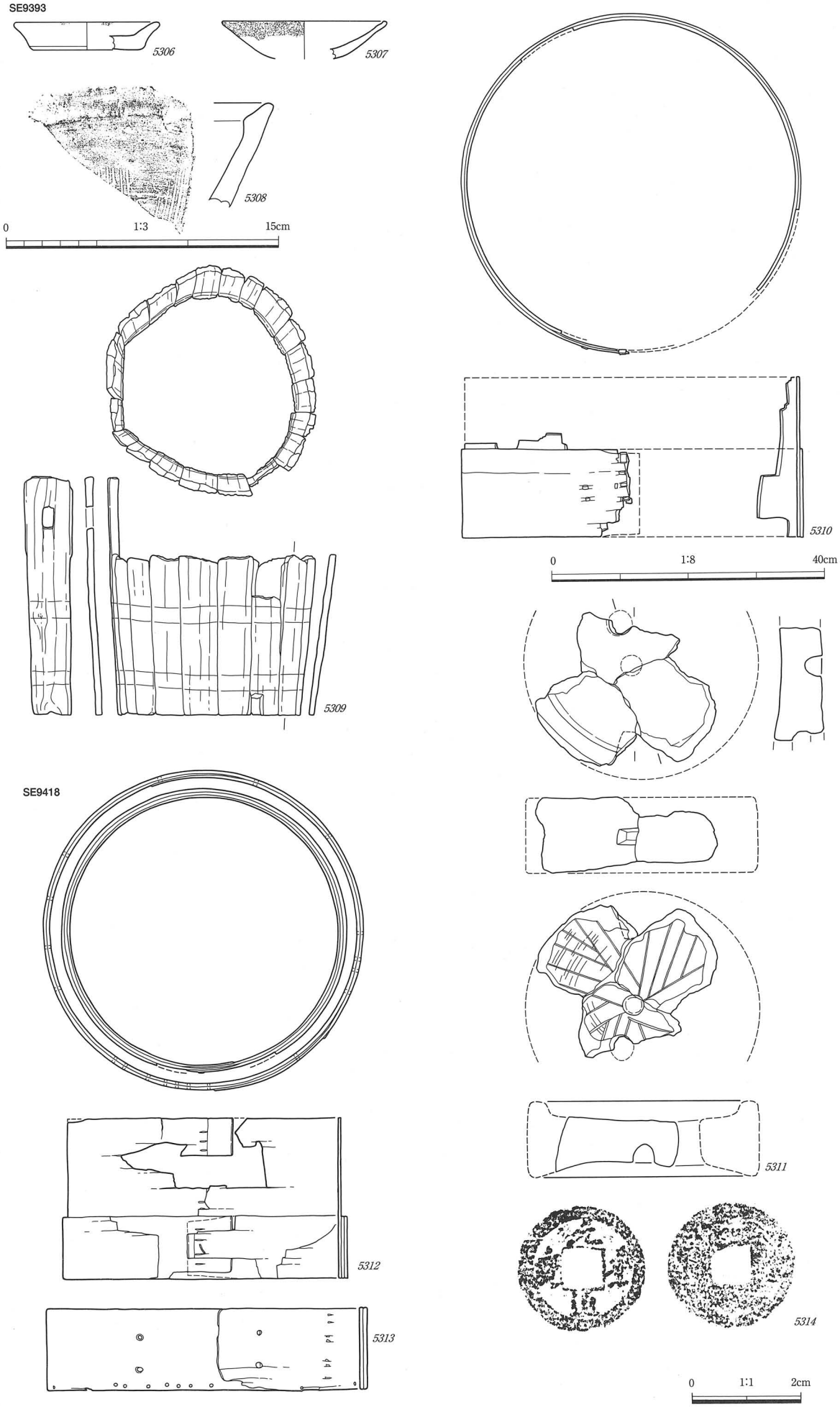




SE9418
1. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト（2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト混,酸化鉄混）
2. 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト（2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土10%混）
3. 10YR2/1黒色砂（粘質土混）

0　1m

第491図　遺構実測図
SE9418



第492図　遺物実測図　（*5314*　1/1，*5306～5308*　1/3，*5309～5313*　1/8）
SE9393（*5306～5311*）　SE9418（*5312～5314*）

9418号井戸（ＳＥ9418，第491・492図，図版201・248）

Ｆ４調査区北東端，調査区境で検出した石組井戸。ＳＸ9320より新しい。掘形は直径約1.9mの円形で，深さは1.3mと他と比べて深い。石組は検出面まで残り，石は他の井戸と比べ形や大きさが不揃いである。Ｆ４地区では一番新しい段階の井戸と考えている。水溜には大小の２段の曲物（5312・5313）が組み合わせて据えられていた。上段の曲物は直径42cm，高さ23.5cmで，タガの部分と思われるが，下端に釘穴が，側面には４箇所穴が開いていた。切れ込みが８箇所残っているが，綴じ方は不明である。下段の曲物は直径47cm，高さ12cmで，タガには４箇所の切れ込みが残る。井戸の埋土は上層に黄褐色シルト質粘土，下層にオリーブ黒色粘質シルトが堆積する。裏込めには黒褐色粘質シルトまたは黒褐色砂が充填される。遺物には中世土師器・珠洲・銅銭がある。銅銭（5314）は北宋銭の「元豊通寶」が出土している。（島田美佐子）

9601号井戸（ＳＥ9601，第493・496図，図版248）

ＳＢ191の南に近接する，直径1.22m，深さ60cmを測る石組井戸。水溜は曲物１段である。検出時は上面に礫が並べられており，黒褐色砂質シルトの埋土中には礫が非常に多いことから，人為的に埋め戻していると考えられる。出土遺物には珠洲・曲物（5315）がある。

5315は釘結合曲物を水溜に転用したため，底板は抜かれている。上端部は内側に崩れているが，直径34.4cm，高さ9.2cmと復元した。綴じ合わせは２箇所あり，一方は１列外10段綴じである。下縁には釘孔が８箇所みられるが，間隔は不均等である。

9602号井戸（ＳＥ9602，第493・496図，図版201・248）

ＳＫ9613の北東に近接している。平面形は楕円形を呈し，長径1.22m，短径1.02m，深さ48cmを測る石組井戸。水溜は曲物１段である。掘形は小さく，上面はびっしり礫を並べたようになっており，埋土は礫が多い黒褐色砂質シルトである。廃棄の際人為的に埋められたと推測する。出土遺物には中世土師器・曲物（5316）がある。

5316は曲物を水溜に転用したため，底板はない。欠損している部分が多いが，直径32.8cm，高さ15.5cmを測る。綴じ合わせは２箇所あり，一方は１列内４段綴じである。

9603号井戸（ＳＥ9603，第493・496図，図版248・264）

ＳＫ9613を掘り込んで作られている。掘形は小さく，直径97cm，深さ50cmを測る石組井戸で，水溜は曲物１段である。埋土中の礫に混じって石臼が詰められており，井戸を廃棄する際に人為的に埋め戻したと考えられる。出土遺物には曲物（5317）・石臼（5318）がある。

5317は曲物を水溜に転用したため，底板はない。直径38.8cm，高さ8.4cmを測り，綴じ合わせは１箇所２列前内２段綴じで，後は綴じるための切り込みが入っているのみである。5318は下臼。直径28.4cmを測り，上面の摺り目は摩滅し，全面焦げている。

9604号井戸（ＳＥ9604，第493・496図，図版248）

ＳＥ9603の西約50cmに位置し，掘形は楕円形を呈し長径1.6m，短径1.33mを測る。井戸は直径１m，深さ73cmの石組井戸で，水溜は曲物１段である。埋土は暗灰黄色砂質シルト，礫が多く混じる黒褐色砂質シルト，裏込土は砂礫が混じる茶褐色シルトである。ＳＥ9616より新しい。出土遺物には中世土師器・瀬戸美濃（5320）・珠洲・曲物（5319）・木製箱（5321）がある。

5319は釘結合曲物を水溜に転用しているため，底板は抜かれている。側板の残存状況は悪く，直径25cm，残存部分の高さ13.5cmを測る。下部にタガが残存しており，綴じ合わせは１箇所１列外３段綴じである。確認できた側板の綴じ合わせは１箇所であるが，方法は不明である。釘孔は２孔１対でほ

ぼ均等に３箇所と，綴じ合わせ付近に１孔みられ，1箇所には木釘が残存している。5320は瀬戸美濃の天目茶椀。口径11.3cmを測り，体部は直線的に開き口唇部はややくびれる。内外面には鉄釉，体部外面下部から高台周辺には錆釉が施される。大窯Ⅱ～Ⅲ期のもの。5321は残存部分の長さ11cm，幅4.5cm，高さ4.4cmを測る箱状を呈するもの。２面のみ残存している側面の立ち上がりはほぼ垂直で，厚さは0.9cmを測る。底面の厚さは1.4cmで均一である。

9605号井戸（ＳＥ9605，第494・496図，図版201・249）

ＳＥ9604の北2.5mに位置し，ＳＥ9615に隣接する。規模は直径1.28m，深さ82cmを測り，水溜の施設がない石組井戸。上面はびっしり礫を並べたようになっており，埋土は黒褐色砂質シルトが礫の間を埋めるように入っている。廃棄の際に人為的に埋められたと推測する。出土遺物には珠洲（5323・5324）・曲物（5322）がある。

5322は曲物を水溜に転用しており，底板はない。残存状況が悪いため側板の重なりは不明で，直径・高さは全て復元値である。下部にはタガがあり，綴じ合わせは２列前内５段後内４段綴じである。5323・5324は珠洲擂鉢。5323は口径40.8cmを測り，体部は直線的に開き，口縁は肥厚した内端に広く面をとり，櫛目波状文帯を巡らす。櫛目波状文帯は５条一単位で，内面の卸目は一単位３cmに９条の原体で全面に隙間なく施入されている。Ⅴ期のもの。5324は口径45.8cmを測り，直線的に開く体部と口縁内端に広い面をもつ。内端面には５条一単位の櫛目波状文帯が巡り，内面には一単位の幅3.3cmに８条，１目の幅３mm前後の太い櫛歯状原体による卸目が間隔をあけて施入される。Ⅵ期のもの。

また，断割調査の際に水溜から北東に40cm，20cm下の位置で曲物が発見され，概報ではＳＥ9759としたが，曲物内部には石組の石と同じ大きさの石が３個入っており，上部構造が確認されなかったことと，ＳＥ9605の井戸側下部が東西方向にずれていることから，下層で発見したＳＥ9759はＳＥ9605の水溜であった曲物が地震の影響でずれた可能性が高いと考えられる。曲物（5322）は上部を欠損しているが，直径35.2cm，高さ11.8cmを測る。側板は二重で，内外側の曲物とも綴じ合わせは１箇所である。外側は３列前内１段綴じ，中外４段綴じ，後外２段綴じを１本の樺皮で綴じている。内側は不明である。

9606号井戸（ＳＥ9606，第494・497図，図版249・264）

ＳＥ9605の北２mに位置する。検出時は上面にびっしり礫を並べたようになっており，人為的に埋め戻したと考えられる。規模は直径1.07m，深さ58cmを測る石組井戸で，水溜の施設はない。井戸側の石は右巻きに積まれており，炭化物が石の間に帯状に入っている。埋土は黒褐色砂質シルトで，裏込土は黄灰色砂質シルトである。出土遺物には曲物（5325）・円形板（5326）・加工板（5327）・石臼（5328）がある。

5325は釘結合曲物を井戸の水溜に転用したもので，底板を抜いている。直径29.7cm，高さ8.3cmを測り，側板の綴じ合わせは４箇所で行っている。側板の端に最も近いものは１列上外下内８段綴じ，次に遠いものは１列内４段綴じ，最も遠い２箇所は１列内１段綴じである。底板との木釘孔は12箇所あり，およそ２孔対になっており，底板を補修した可能性がある。5326は約半分を欠損した直径38cmの円形板。5327は側面に釘穴が２箇所ある加工板。5328は下臼。摺り目は６分画に６条～７条の副溝を刻んでいる。

9607号井戸（ＳＥ9607，第494・497図，図版202・249）

ＳＢ190の西約２mに位置し，直径1.32m，深さ1.14mを測る石組井戸で，水溜は曲物１段である。井戸側の石は右巻きに積まれ，７段を数える。最下段の石は曲物上に載っており，一回り小さい円を

描いている。埋土は礫が多く混じる黒褐色砂質シルトであるが，下層になるにつれ炭化物が多いやや粘質な土になる。裏込土は黒褐色砂質土である。出土遺物には珠洲・曲物（5329）・加工板・石臼がある。

5329は釘結合曲物を井戸の水溜に転用しており，底板を抜いている。直径34cm，高さ23.4cmを測り，側板の綴じ合わせは１箇所１列外６段綴じである。下縁にはタガがつき，綴じ合わせは１列外５段綴じである。木釘孔はほぼ均等に８箇所配する。

9608号井戸（ＳＥ9608，第495・497図，図版202・249）

ＳＥ9607の北東３ｍに位置する，直径1.35m，深さ70cmを測る石組井戸で，水溜は刳り抜き材である。埋土は黒褐色砂質シルトで，上層には礫が混じる黒褐色砂質土が堆積している。出土遺物には中世土師器・越前・刳り抜き材（5330）・加工材がある。

5330は水溜に利用されており，直径27.6cm，高さ19.2cm，厚さ2.4cmを測る。端部上面はやや外傾しており，一部突起がみられる。内外面には成形のための加工痕が明瞭である。

9609号井戸（ＳＥ9609，第495・497図，図版202）

ＳＢ187の東１ｍに位置する，直径1.25m，深さ59cmを測る石組井戸で，水溜は桶である。埋土は上層が黄灰色砂質土，中層が褐色砂質土，下層が灰色粘質土である。ＳＥ9637と隣接するが，深さが異なることから，地下水位の変化等が原因でＳＥ9609を構築したと考える。出土遺物には桶（5331）がある。

5331は水溜に転用したため，底板はない。直径48.2cm，高さ15cmの桶。19枚の板で構成され，上下にタガ痕がある。

9610号井戸（ＳＥ9610，第495・497図，図版202・249）

ＳＢ187の内部に位置するが，建物に付属したものではない。上部は削平されているため規模は直径1.11m，深さ37cmを測る石組井戸。石組は１段残存するのみで，水溜は桶である。埋土には礫が多く，上層が暗灰黄色砂質土，中層が灰褐色シルト，下層が黄灰色砂で，裏込土は灰色砂である。出土遺物には桶（5332）がある。

5332は水溜に転用したため，底板は抜かれている。直径32cm，高さ32.6cmを測り，19枚の板で構成される。側板の幅にはばらつきがあり，外面には上下にタガ痕がみられる。

9615号井戸（ＳＥ9615，第495・504図）

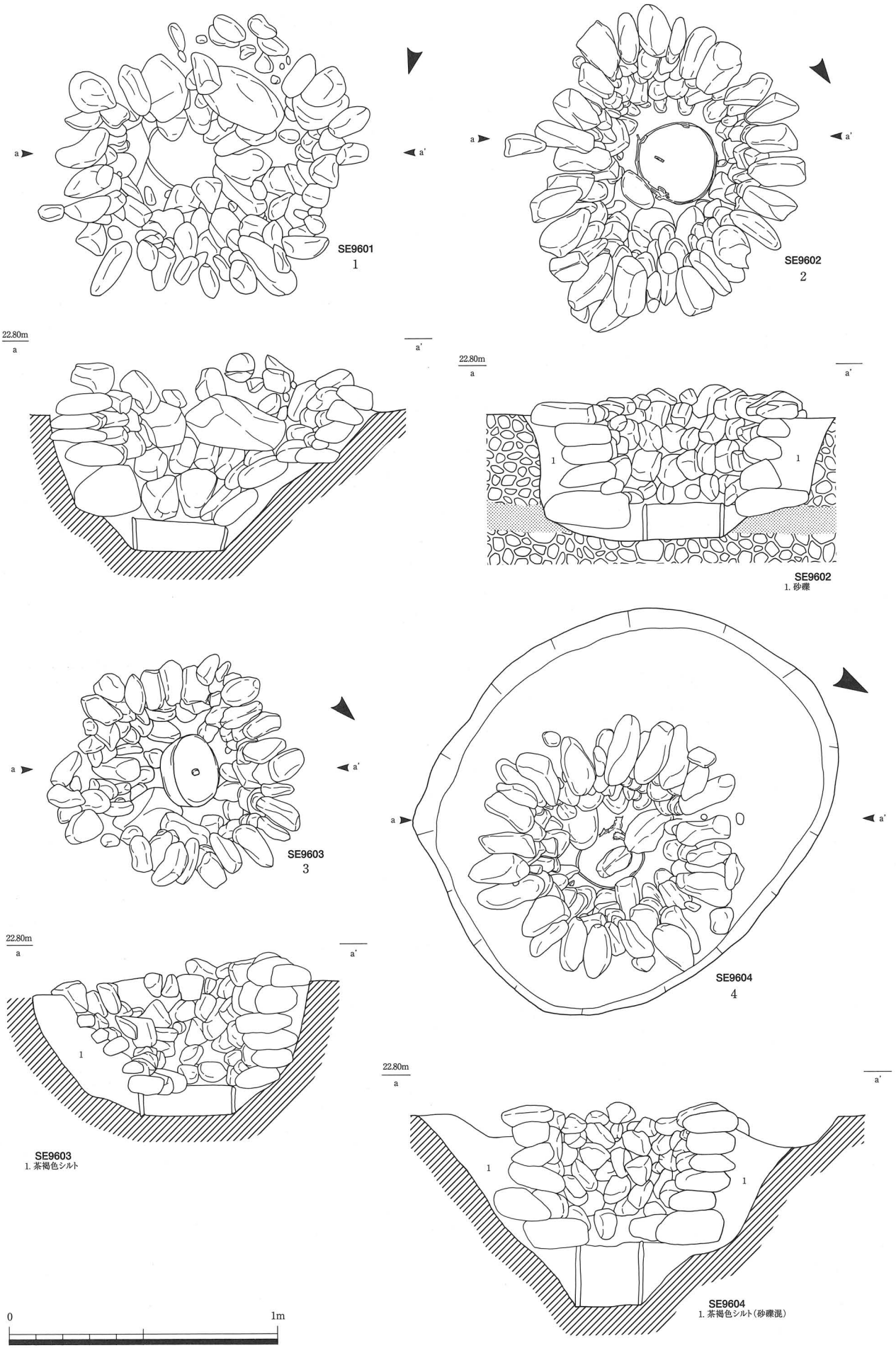
ＳＥ9605の南に隣接する，直径1.38m，深さ87cmを測る石組井戸。石組は放射状に組まれているが，中には横向きに入るものもある。水溜の施設はない。埋土は上層が黒褐色砂質土，下層が褐色砂礫で，裏込土は黒褐色粘質シルトである。出土遺物には漆器皿（5333）がある。

5333は口径8.1cmを測る漆器皿で，高台を欠損している。体部は緩やかなカーブを描いており，内外面黒色漆である。

9622号井戸（ＳＥ9622，第498・504図，図版203・250）

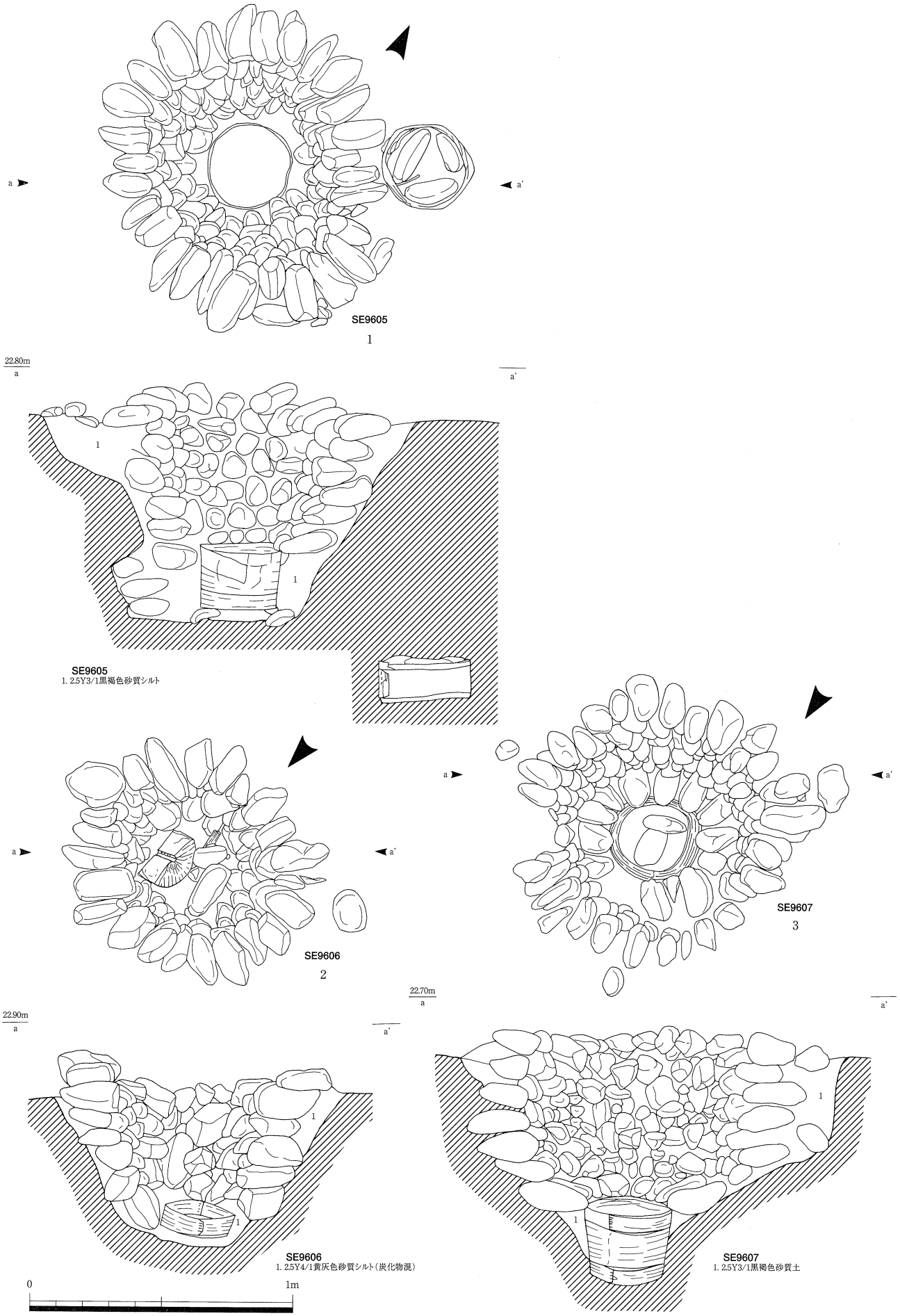
やや不整な楕円形を呈し，長径3.3m，短径2.6mを測る土坑ＳＫ9622の南端に位置する石組井戸。石組上部はＳＫ9622により壊されているが，規模は直径80cm，深さ60cmを測り，水溜は刳り抜き材である。井戸の埋土はオリーブ褐色砂礫である。出土遺物は刳り抜き材（5338）で，直径44cm，高さ24.5cmを測る。厚みは上部がやや厚く４cmある。端部上面は水平で，外面に加工痕がみられる。

ＳＫ9622はＳＢ191内部の南西隅にあり，土間状の作業スペースと考えられる。底面はほぼ水平で，埋土は暗灰黄色砂質土，黒褐色砂質シルトで，礫が混じる。出土遺物には中世土師器（5339）・珠洲・



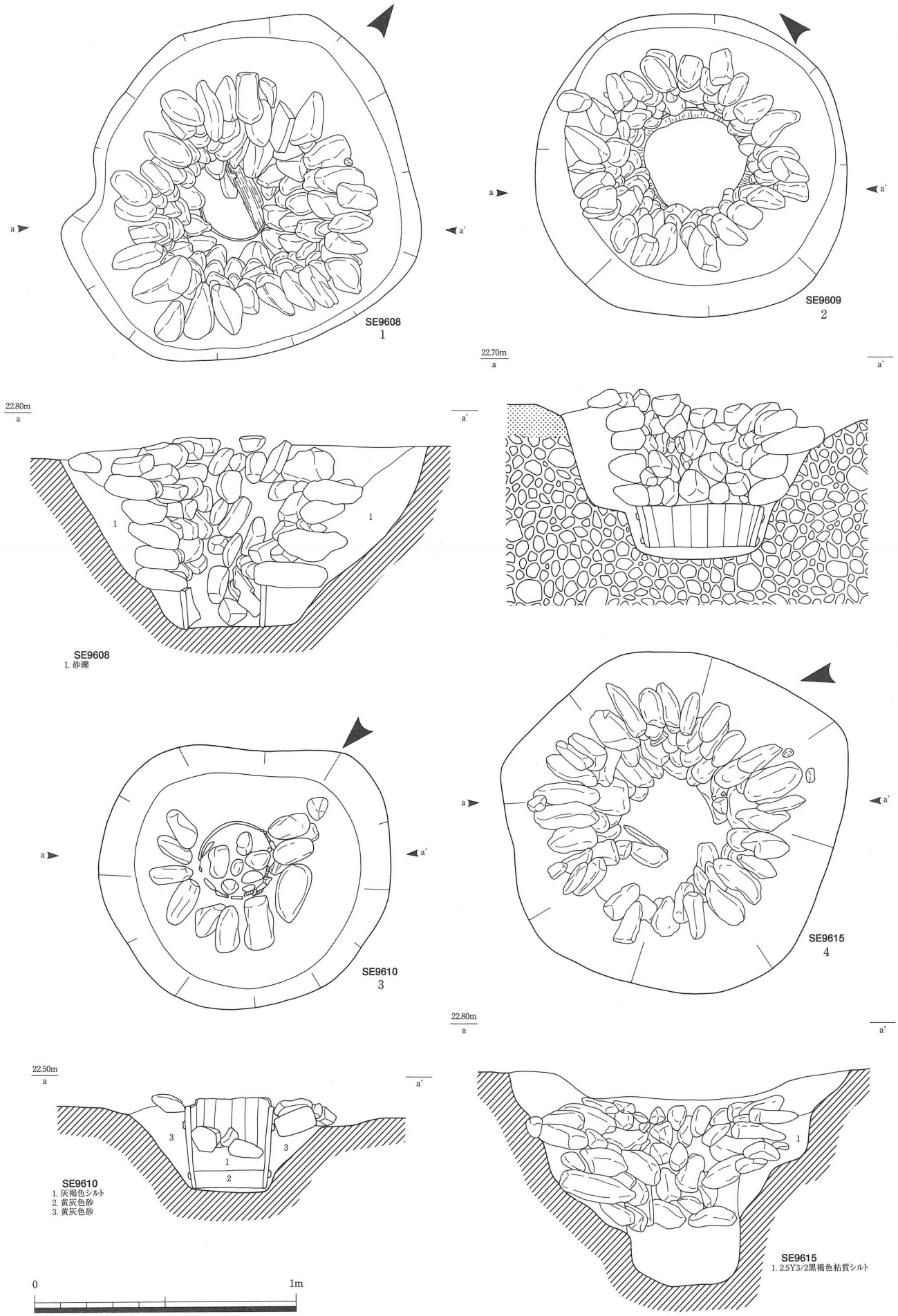
第493図　遺構実測図

1. SE9601　2. SE9602　3. SE9603　4. SE9604



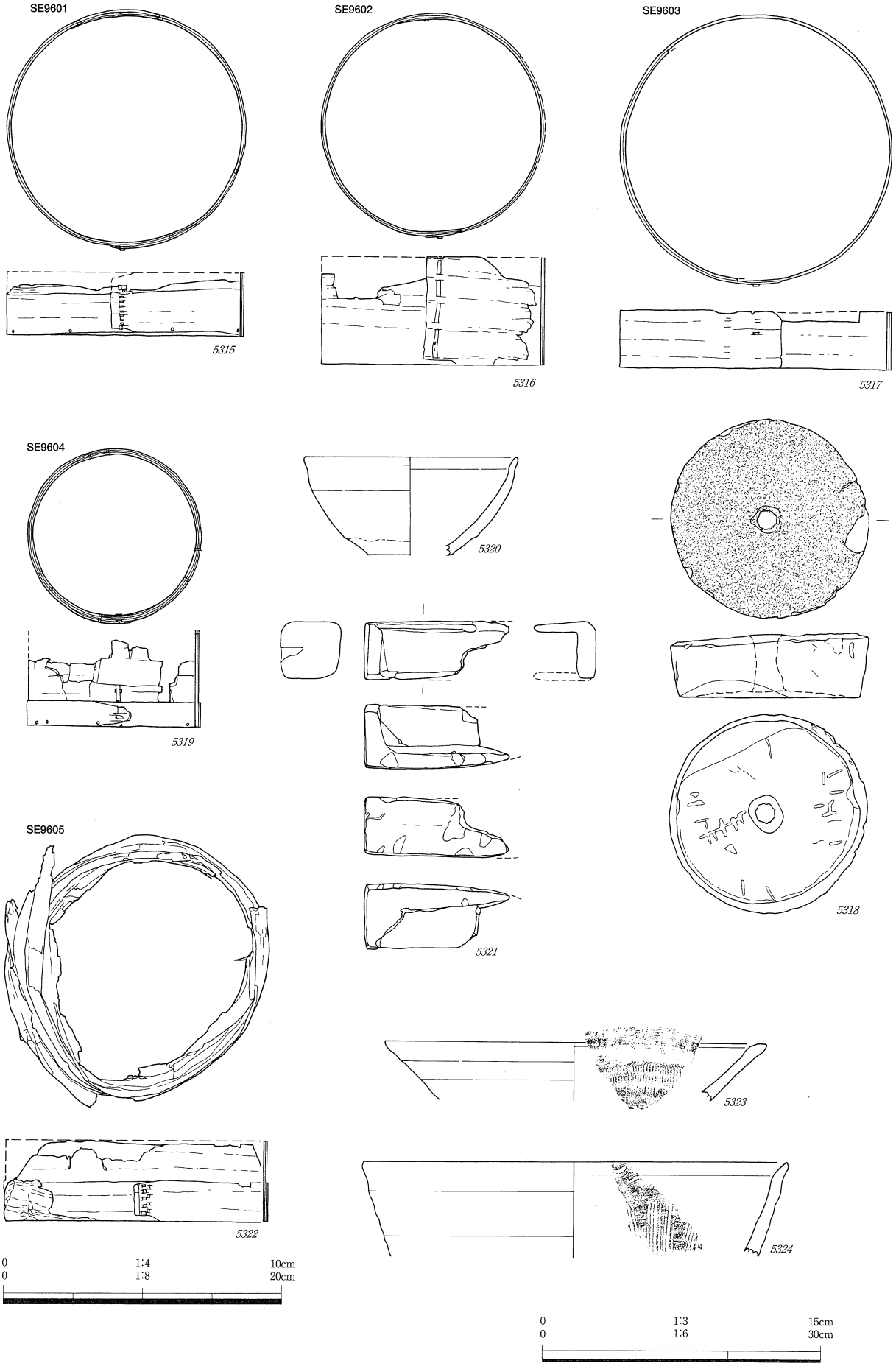
第494図　遺構実測図

1. SE9605　2. SE9606　3. SE9607

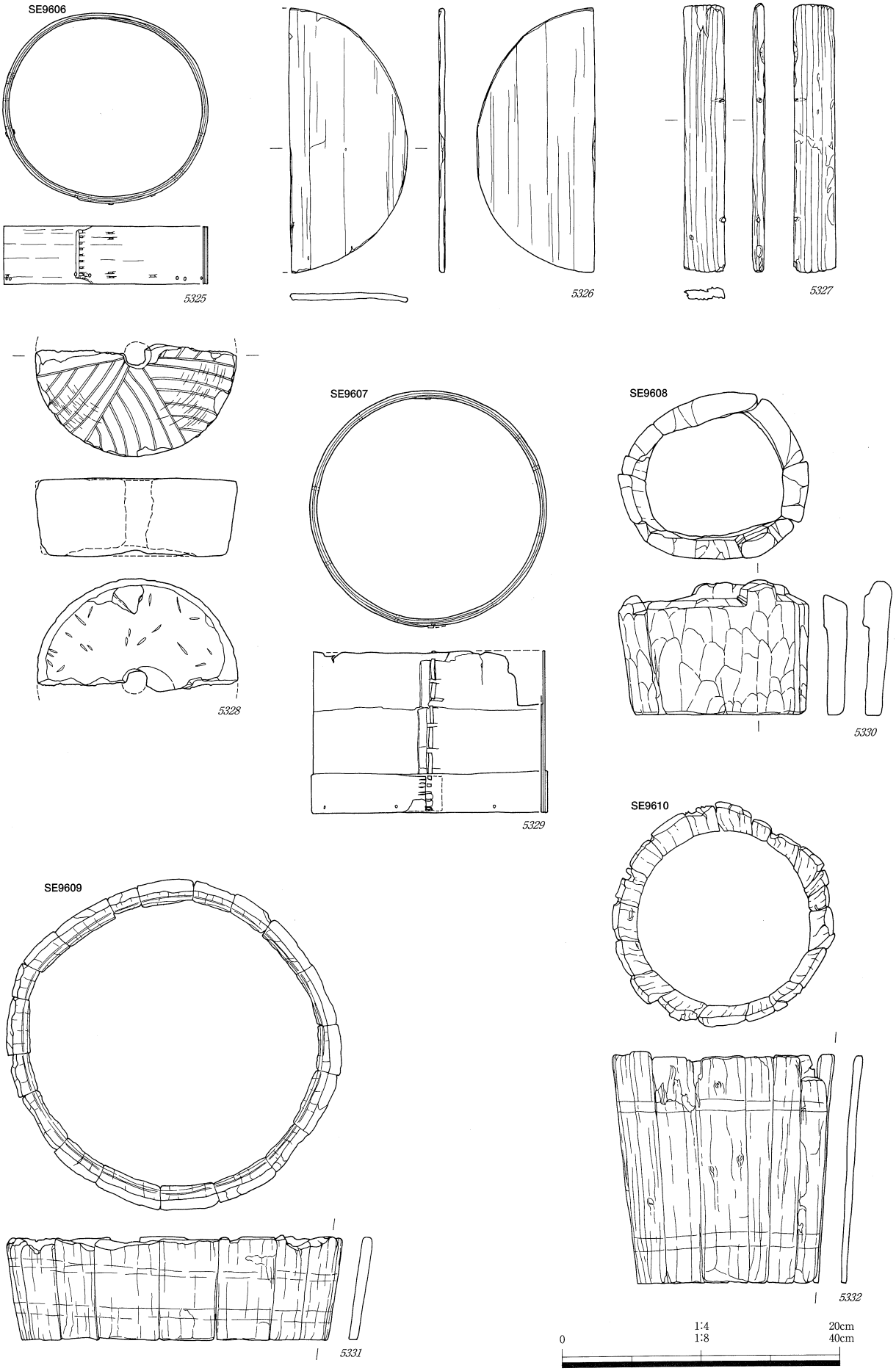


第495図　遺構実測図

1. SE9608　2. SE9609　3. SE9610　4. SE9615



第496図　遺物実測図（*5320*　1/3，*5321*　1/4，*5323・5324*　1/6，*5315～5319・5322*　1/8）
SE9601（*5315*）　SE9602（*5316*）　SE9603（*5317・5318*）　SE9604（*5319～5321*）　SE9605（*5322～5324*）



第497図　遺物実測図　（*5326・5327*　1/4，*5325・5328～5332*　1/8）
SE9606（*5325～5328*）　SE9607（*5329*）　SE9608（*5330*）　SE9609（*5331*）　SE9610（*5332*）

越前・中国製青磁（5340）がある。5339は中世土師器皿。口径9.4cmを測り，体部中程に沈線が巡る。体部は短く直線的に開き，端部は三角形に面をとる。15世紀代のもの。5340は龍泉窯系青磁碗で，口径10cmを測る。体部は直線的に外方に開いており，線描蓮弁文をもつ。15世紀のもの。

9619号井戸（ＳＥ9619，第499・504図，図版202・249）

調査区南端，ＳＫ9618の西に隣接し，直径90cm，深さ84cmを測る石組井戸。水溜は曲物１段で，石組は歪んでいる。埋土は礫が多く混じる黒褐色シルトである。また，掘形と石組は南北方向にずれており，地震の影響と考えられる。出土遺物には曲物（5335）がある。

5335は釘結合曲物を水溜に転用したため，底板は抜かれている。直径34.8cm，高さ10.8cmを測り，側板の綴じ合わせは１箇所１列外10段綴じである。釘孔は11箇所あるが，間隔が不均等であることや上下に近接している箇所があることから補修された可能性が考えられる。

9621号井戸（ＳＥ9621，第499・504図，図版249）

ＳＥ9605とＳＥ9606との間にあり，直径1.23m，深さ66cmを測る石組井戸。水溜は曲物２段で，上段の曲物は下段の中に崩れ落ちている。埋土は炭化物状の黒褐色砂質土が多量の礫の間に詰まっている。出土遺物には曲物（5336）・箸（5337）・加工材がある。

5336は釘結合曲物２基を水溜に転用したため，底板はない。下段は直径38cm，高さ11.2cmを測り，上段は直径37.6cm，高さ10cmとやや小さい。下段の綴じ合わせは１箇所１列内18段綴じで，上段は１列内６段綴じである。釘孔は下段には７箇所ほぼ均等にある。5337は箸で，両端を欠損している。

9623号井戸（ＳＥ9623，第499・504図，図版250）

ＳＢ189の南東隅に位置する，直径1.65m，深さ80cmを測る石組井戸。石組に使用している石は他の井戸のものより大きいが，２段の石組の一部が残存しているのみである。水溜は曲物１段である。埋土は上層が炭化物が混じる黒褐色砂質シルト，下層が礫が混じる黒褐色砂質土で，裏込土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器・珠洲・曲物（5341）がある。5341は釘結合曲物を水溜に転用したため，底板はない。直径34cm，高さ16cmを測り，綴じ合わせは３箇所あり，外側は３列前外２段綴じ，中内２段綴じ，後内３段綴じである。釘孔は８箇所ほぼ均等にある。

9626号井戸（ＳＥ9626，第499・504図，図版250）

ＳＢ189の北側の柱穴ＳＰ9731とＳＰ9733の中間に位置する，直径98cm，深さ57cmを測る石組井戸。水溜は曲物１段である。埋土は炭化物が混じる黒褐色砂質シルト，裏込土は茶褐色土である。石組と水溜は東西方向にずれており，地震によるものと考えられる。出土遺物には中世土師器・曲物（5342）がある。5342は曲物を水溜に転用したため，底板は抜かれている。直径25.1cm，残存部分の高さ9.2cmを測り，下部にタガがある。タガの綴じ合わせは１箇所であるが，一端を欠損しているため確認したのは２列前外２段綴じ，後内１段綴じである。

9627号井戸（ＳＥ9627，第500・504図，図版203・250）

ＳＢ189の柱穴ＳＰ9730の南東で調査区端に位置する，一辺1.5mの隅丸方形とみられる掘形をもち，深さ85cmを測る石組井戸。石は比較的大きいものを使用している。水溜は曲物１段で，上部が崩れている。埋土は上層が黒褐色砂質土，下層が黒褐色粘質シルトで，裏込土は黄灰色砂質土である。出土遺物には曲物（5343）・加工材（5344）がある。5343は曲物を水溜に転用したため，底板はない。変形が激しいため直径や側板の重なりの復元は不可能である。5344は残存長44cm，幅13.8cmを測る長方形の板材の両端中央に出枘を作出しているもの。一方の端には一対の方形枘孔をあけているが，用途は不明である。

9628号井戸（ＳＥ9628，第500・505図，図版250）

ＳＥ9626とＳＥ9627の中間に位置する。掘形の規模は直径1.92m，深さ71cmを測る石組井戸。石組の直径1.1mで，水溜は刳り抜き材である。埋土は上層が黒褐色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトで，裏込土は砂礫が混じる茶褐色シルトである。出土遺物には中世土師器・刳り抜き材（5345）・漆器椀（5346）がある。5345は直径39.2cm，高さ31.4cm，厚さ4.4cmを測る刳り抜き材。上方に突起を作り出しており，突起の端部上面はほぼ水平，それ以外は外傾している。内外面に加工痕がみられ，外面中程には沈線状の彫り込みが１条巡る。5346は口径９cm，器高３cmを測る漆器皿。低い高台が付き，体部は緩くカーブして垂直気味に立ち上がる。内外面とも黒色漆で，見込みには赤色漆で草花文が施文されている。

9630号井戸（ＳＥ9630，第501・505図，図版203・251）

ＳＥ9628の東に近接しており，直径1.68m，深さ96cmを測る石組井戸。石組の直径80cmで，水溜は曲物１段である。上層の埋土には礫が多く，土質は砂，砂質土，砂質シルトが主体である。裏込土は石組部分は黒褐色粘質シルト，水溜部分は黒褐色砂質土である。出土遺物には中世土師器・珠洲・越前・曲物（5347）・底板（5348）・折敷（5349）がある。

5347は釘結合曲物を水溜に転用したため，底板は抜かれている。側板の残存状態は悪く，上端部は内部に巻き込むように垂れており，井戸が廃棄される際には既に乾燥気味であったと考えられる。側板は一周していないため復元値ではあるが，直径37.2cm，高さ22cmを測り，下部にタガがある。タガの綴じ合わせ部分は欠損している。曲物の綴じ合わせは１箇所であるが，一端を欠損しているため確認したのは１列８段綴じである。釘孔は半周に７箇所偏って配されている。5348は直径17.6cmを測る円形板。側面に１箇所釘穴がある。5349は一辺17.7cmを測る方形板。釘穴が確認できるのは１箇所のみで，片面には円形の圧痕がみられる。

9633号井戸（ＳＥ9633，第502図）

ＳＢ188の北西，ＳＤ7002に隣接する。掘形はやや不整な楕円形を呈し，規模は長径1.78m，短径1.57m，深さ85cmを測る石組井戸。石組は３段残っており，水溜の施設はない。石組内部の埋土は灰色砂で，出土遺物には加工板がある。

9636号井戸（ＳＥ9636，第503・505図，図版251）

ＳＢ188に付属するＳＫ9635より新しい，直径１m，深さ90cmを測る石組井戸で，水溜は曲物１段である。上部を排水溝掘削の際に破壊したが，石組２段を確認した。埋土は礫が多く，上層が暗灰黄色砂質シルト，下層は黒褐色砂質シルトである。出土遺物には珠洲・曲物（5350）・漆器椀（5352）・箸（5351）がある。

5350は釘結合曲物を水溜に転用したため，底板はない。直径38.8cm，高さ30.6cmを測り，高さ14cmの曲物上下２段で内側の側板を締めている。曲物の綴じ合わせは上下逆ではあるがともに２箇所あり，２列前外２段後内４段綴じである。釘孔はほぼ均等に５箇所配されている。5352は漆器椀の底部。高台は低く，体部は直線的に立ち上がる。内外面黒色漆で，見込みには赤色漆で文様が描かれる。5351は長さ19cm，幅0.8cmを測る扁平な箸。

9637号井戸（ＳＥ9637，第503図）

ＳＢ187の東約２mに位置し，直径1.1m，深さ26cmを測る石組井戸。上部は圃場整備の際に削平されたとみられ，最下段の石組のみを確認した。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。底の標高は南に隣接するＳＥ9609より高いことから，地下水位の変化等が原因で廃棄されたものと考えられる。出土遺

物には瀬戸美濃がある。

9638号井戸（ＳＥ9638，第506・508図，図版252）

ＳＢ188に付属するＳＫ9635とＳＤ7002より新しい，直径1.41m，深さ76cmを測る石組井戸。水溜は曲物１段である。埋土は上層が礫が多く混じる黒褐色砂質シルト，中層が炭化物が混じるオリーブ黒色砂質シルト，下層は礫が多い灰色砂質土である。裏込土は井戸側部分は黄灰色砂質土，水溜部分は黒褐色砂礫である。重複するＳＥ9757より新しい。出土遺物には曲物（5353）・加工材がある。

5353は曲物を水溜に転用したため，底板は抜かれている。直径32cm，高さ25cmを測るが，上下端部を欠損している。綴じ合せは２箇所あり，一方は２列前内10段後上外下内３段綴じである。

9757号井戸（ＳＥ9757，第506・508図，図版252）

ＳＥ9638とＳＤ7002より古い，直径１m，深さ98cmを測る石組井戸。ＳＤ7002に上部を削られ，調査区端に位置するため一部を確認したのみである。水溜は曲物１段で，裏込土は灰色粘質シルトである。出土遺物には曲物（5356）・加工材がある。

5356は曲物を水溜に転用したため，底板はない。やや変形して上端部を欠損しているが，直径34.6cm，高さ25.6cmを測る。綴じ合わせは２箇所あり，１箇所は１列下外７段綴じで下の綴じ終りを上に返すものである。

9680号井戸（ＳＥ9680，第507・508図，図版252）

ＳＢ189の柱穴ＳＰ9733とＳＰ9748の中間に位置し，東にあるＳＥ9626との間隔は約１mである。直径82cm，深さ44cmを測る石組井戸で，水溜は刳り抜き材である。埋土は黒褐色砂質土に井戸側に使用している石と同程度の石が多く混じっている。石組と水溜は南北方向にずれており，地震の影響と考えられる。出土遺物には刳り抜き材（5354）がある。

5354は直径39.2cm，残存部分の高さ22cmを測るが，上部はかなり破損している。厚みは下ほど厚く3.2cmを測る。内外面に加工痕がみられるが，内面は摩耗しており，部分的に残っている。

9752号井戸（ＳＥ9752，第507・508図，図版252）

ＳＢ186の南に位置し，直径1.03m，深さ62cmを測る石組井戸。石組は６段で，水溜は曲物１段である。埋土は黒褐色砂質シルトで，裏込土は黒褐色砂質土である。出土遺物には曲物（5355）がある。

5355は曲物を水溜に転用したため，底板はない。二重の曲物の間に補修用と考えられる側板を挿んでおり，直径37cm，高さ10cmを測る。外側の曲物の綴じ合わせは１箇所１列外４段綴じで，上の綴じ終りを下へ返している。内側は２箇所で，１箇所は１列外５段綴じである。

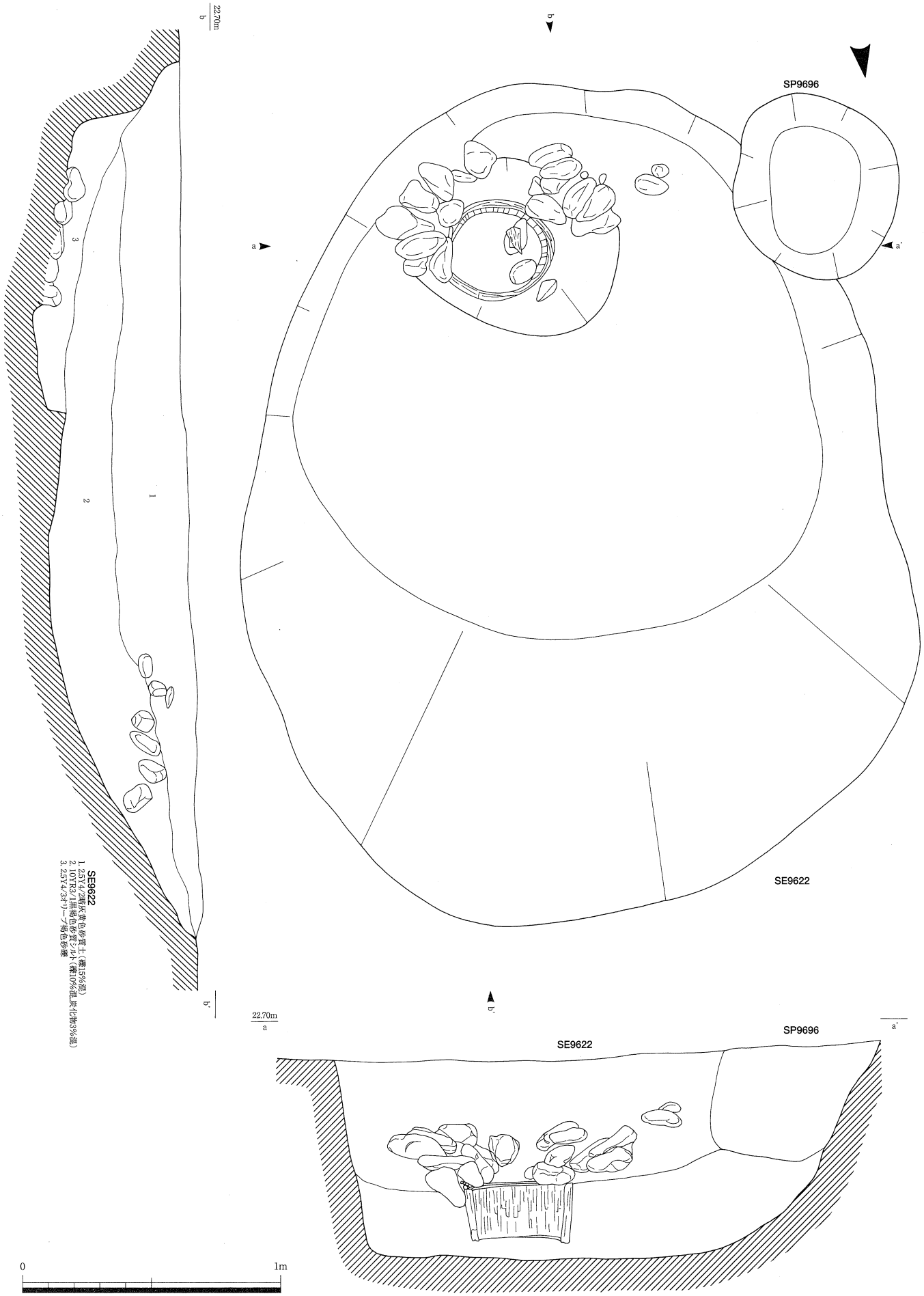
9634号井戸（ＳＥ9634，第507図）

ＳＥ9633の西に位置する，直径1.4m，深さ65cmを測る素掘り井戸。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，中層が黒褐色粘質シルト，下層は黒褐色砂質シルトである。埋土には石が非常に多いことから，本来は石組であった可能性が高い。

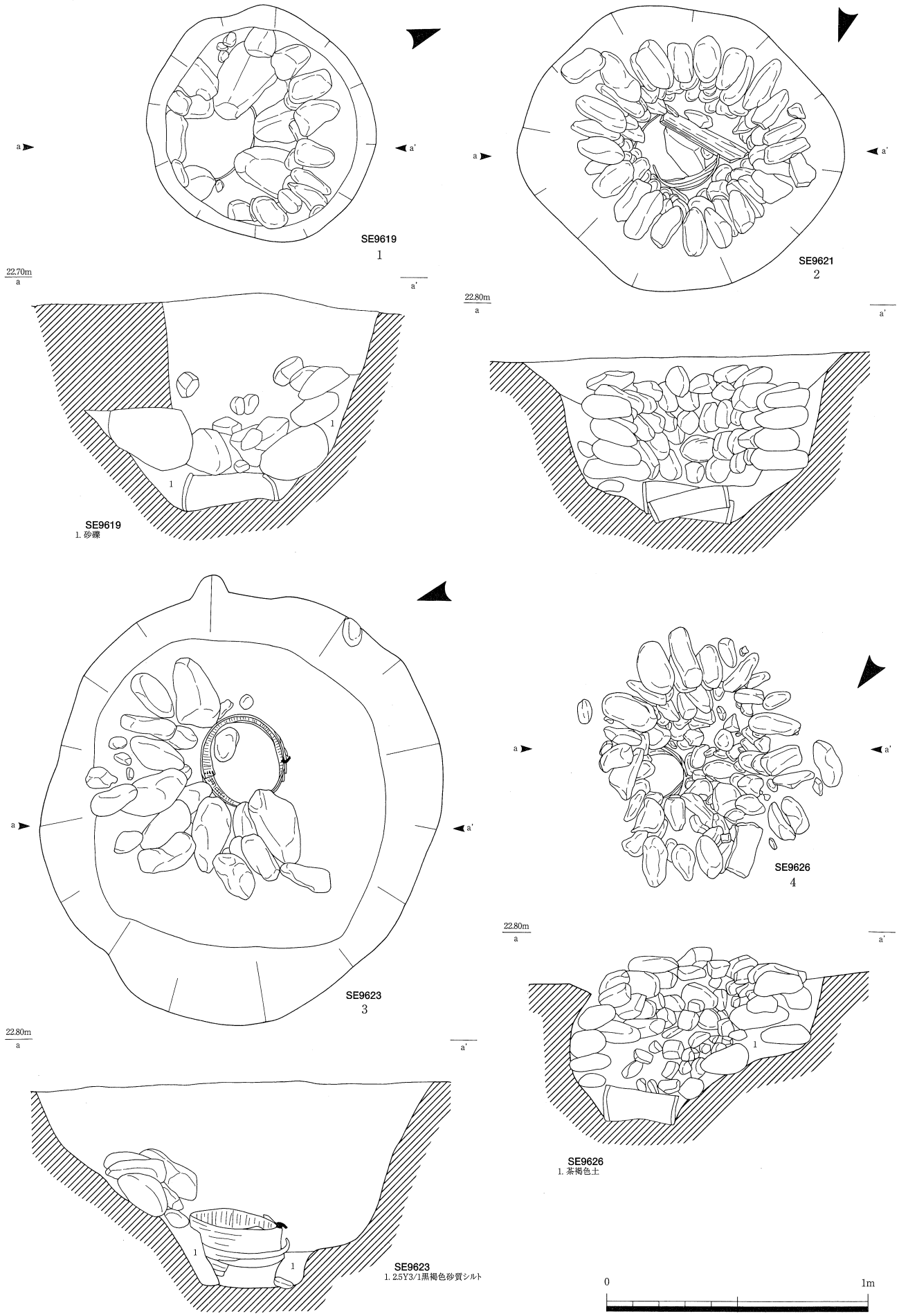
9616号井戸（ＳＥ9616，第504・507図）

ＳＢ192の西，ＳＢ193の中央に位置し，規模は直径1.56m，深さ54cmを測る。素掘り井戸であるが，埋土は礫が多い黒褐色砂質土，褐色砂礫であり，本来は石組井戸であった可能性が高い。廃棄後ＳＥ9604が作られ，深さ73cmと深いことから，地下水位の変化により使用不能となり廃棄されたと推測する。遺物は中世土師器（5334）が出土している。

5334は口径8.2cm，器高1.9cmを測る。口縁部は強くナデられ外反し，底部との境に段ができている。内外面とも全面に煤が付着している。14世紀後半～15世紀前半のもの。

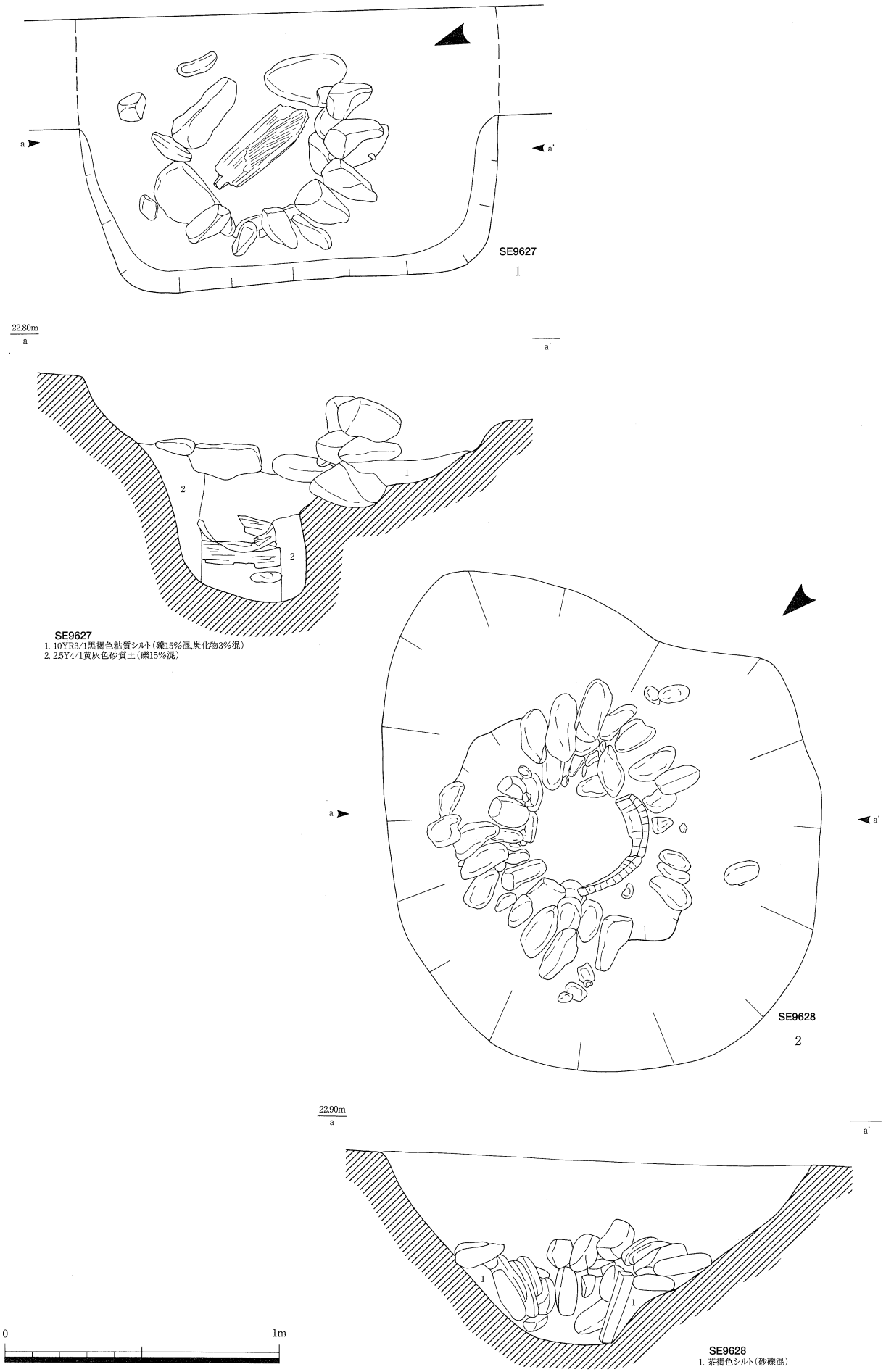


第498図　遺構実測図
SE9622

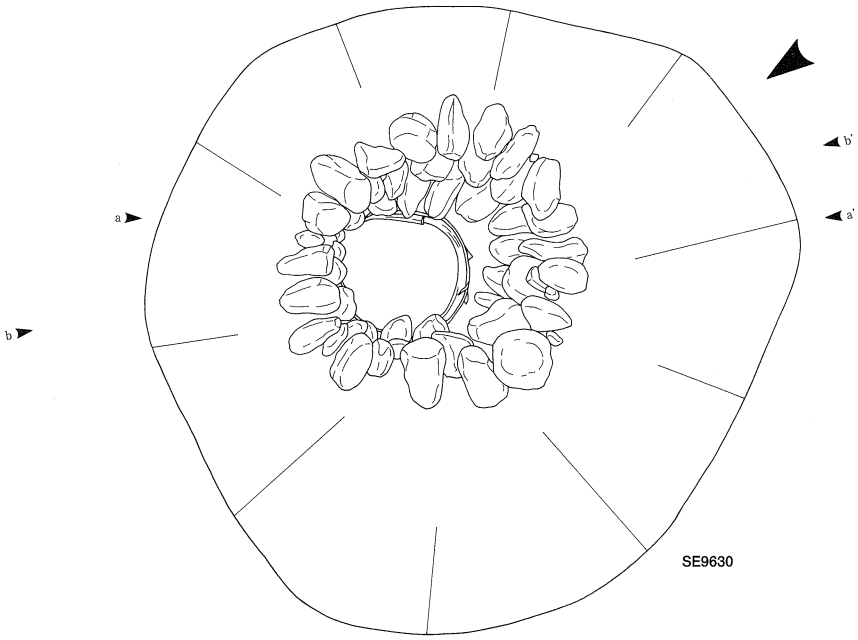


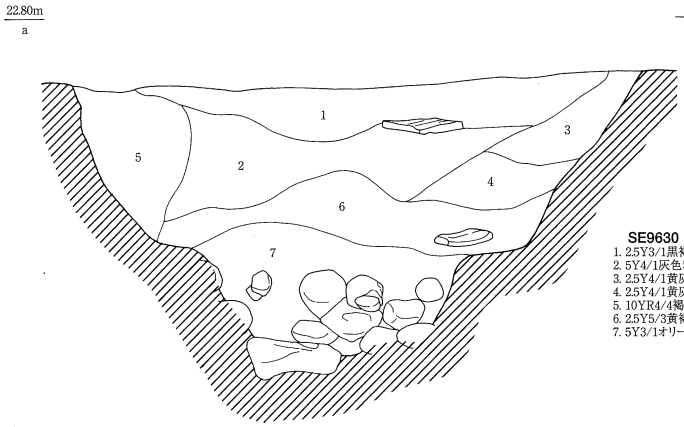
第499図　遺構実測図

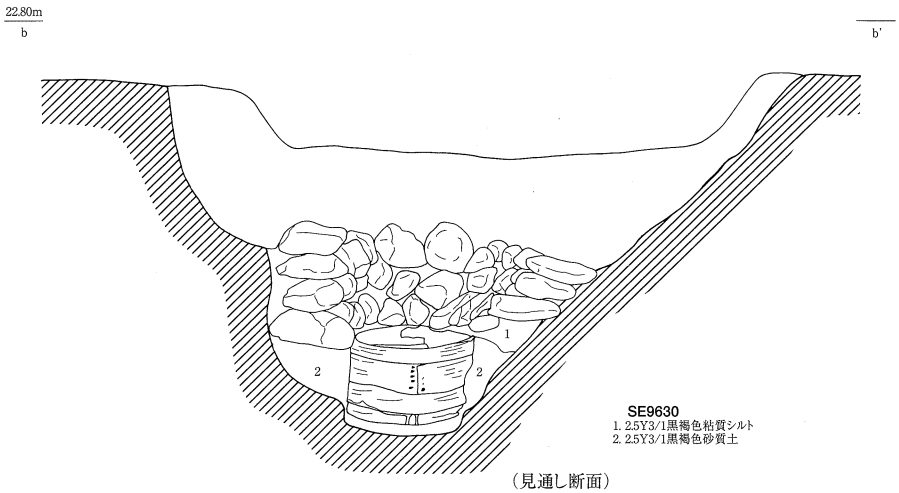
1. SE9619　2. SE9621　3. SE9623　4. SE9626



第500図　遺構実測図
1. SE9627　2. SE9628

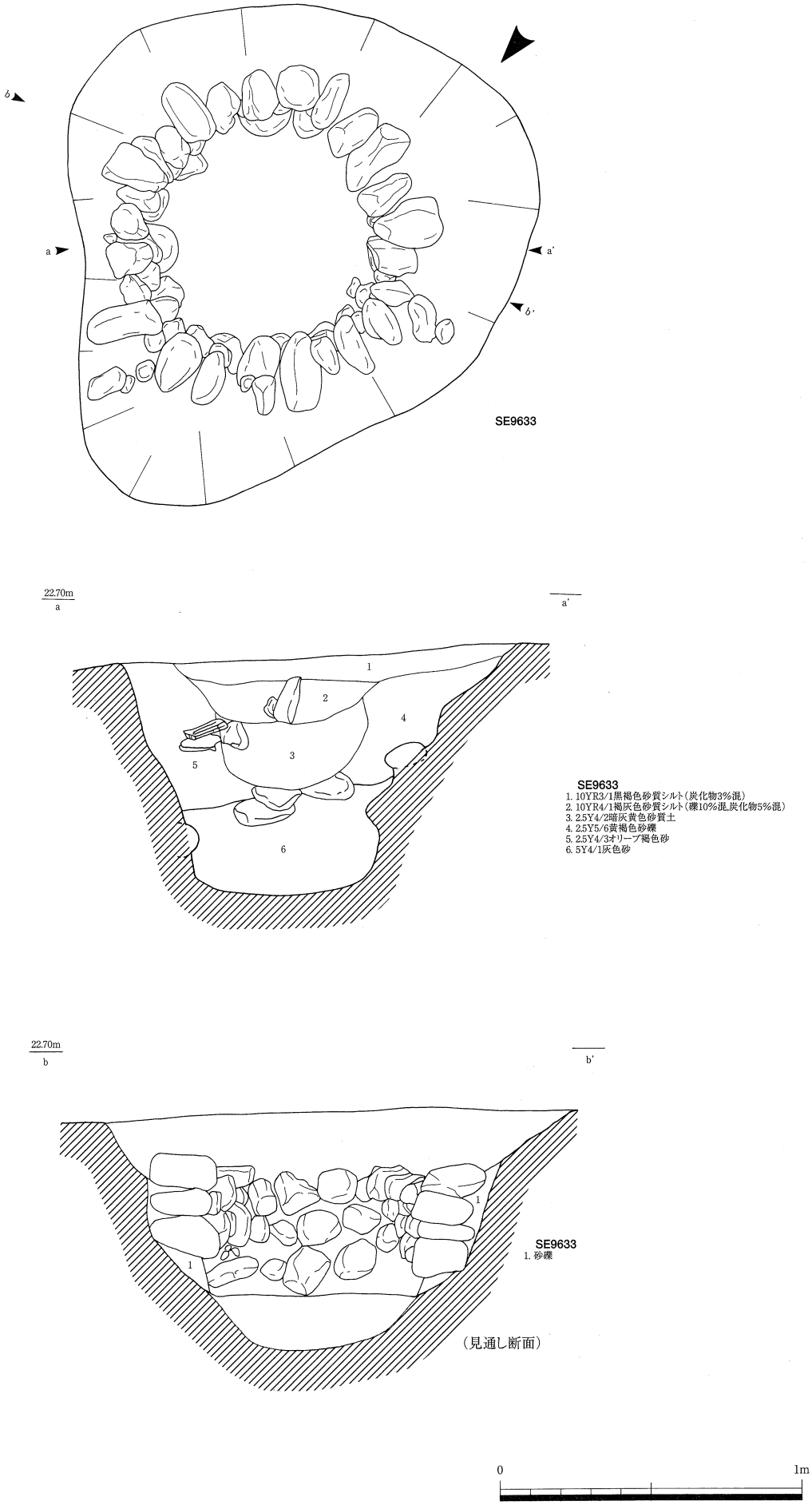




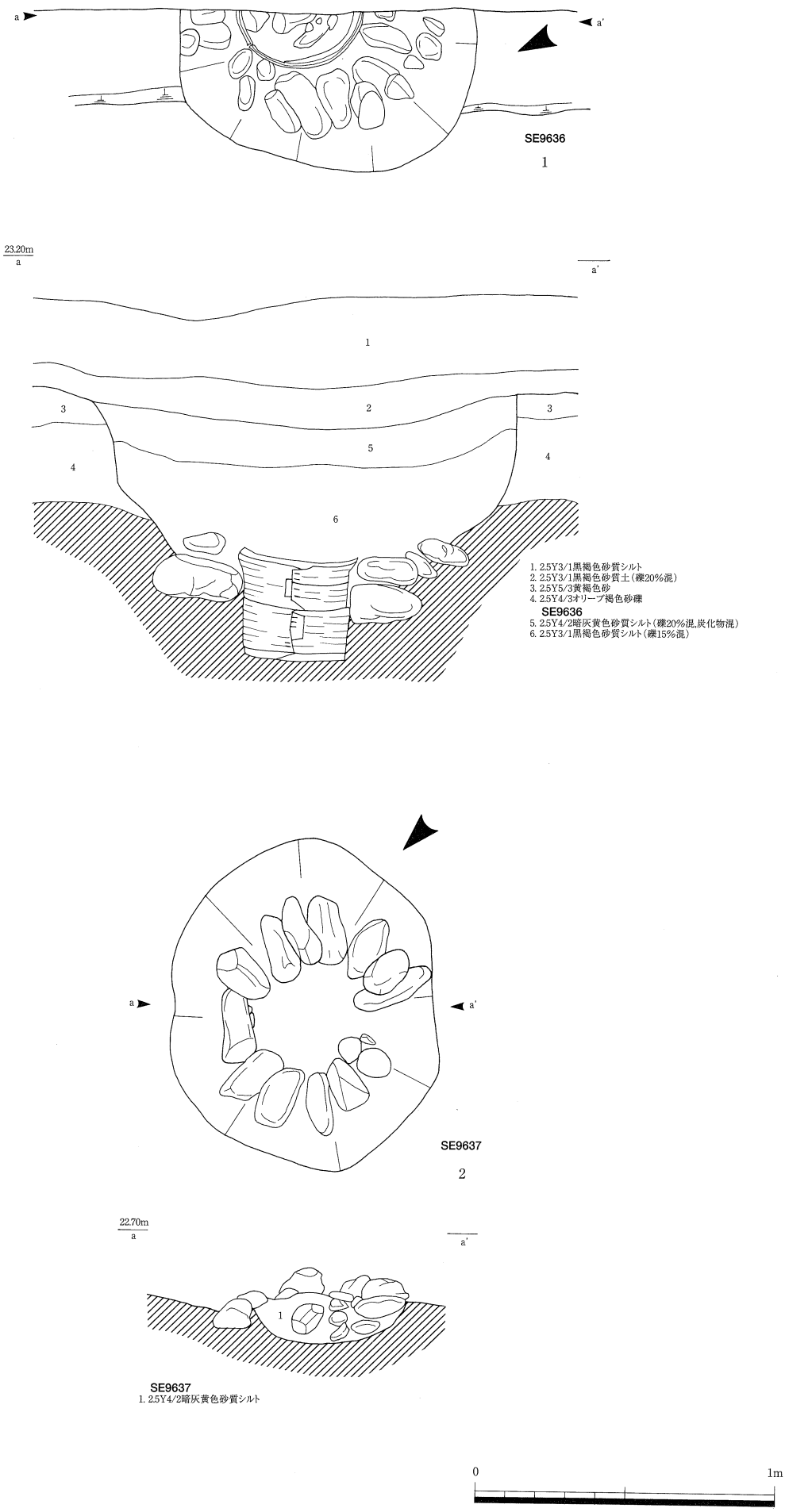


（見通し断面）

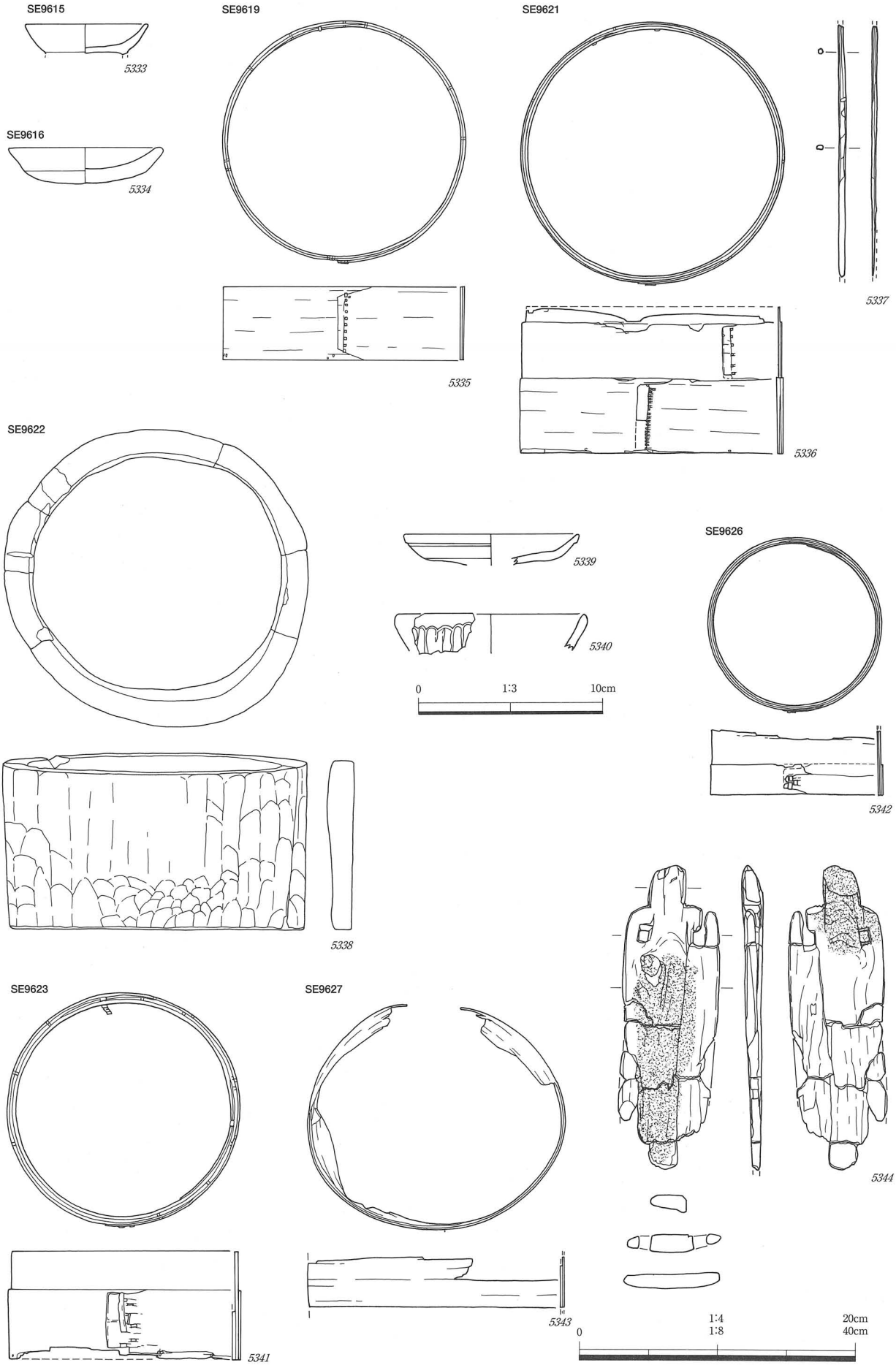
第501図　遺構実測図
SE9630



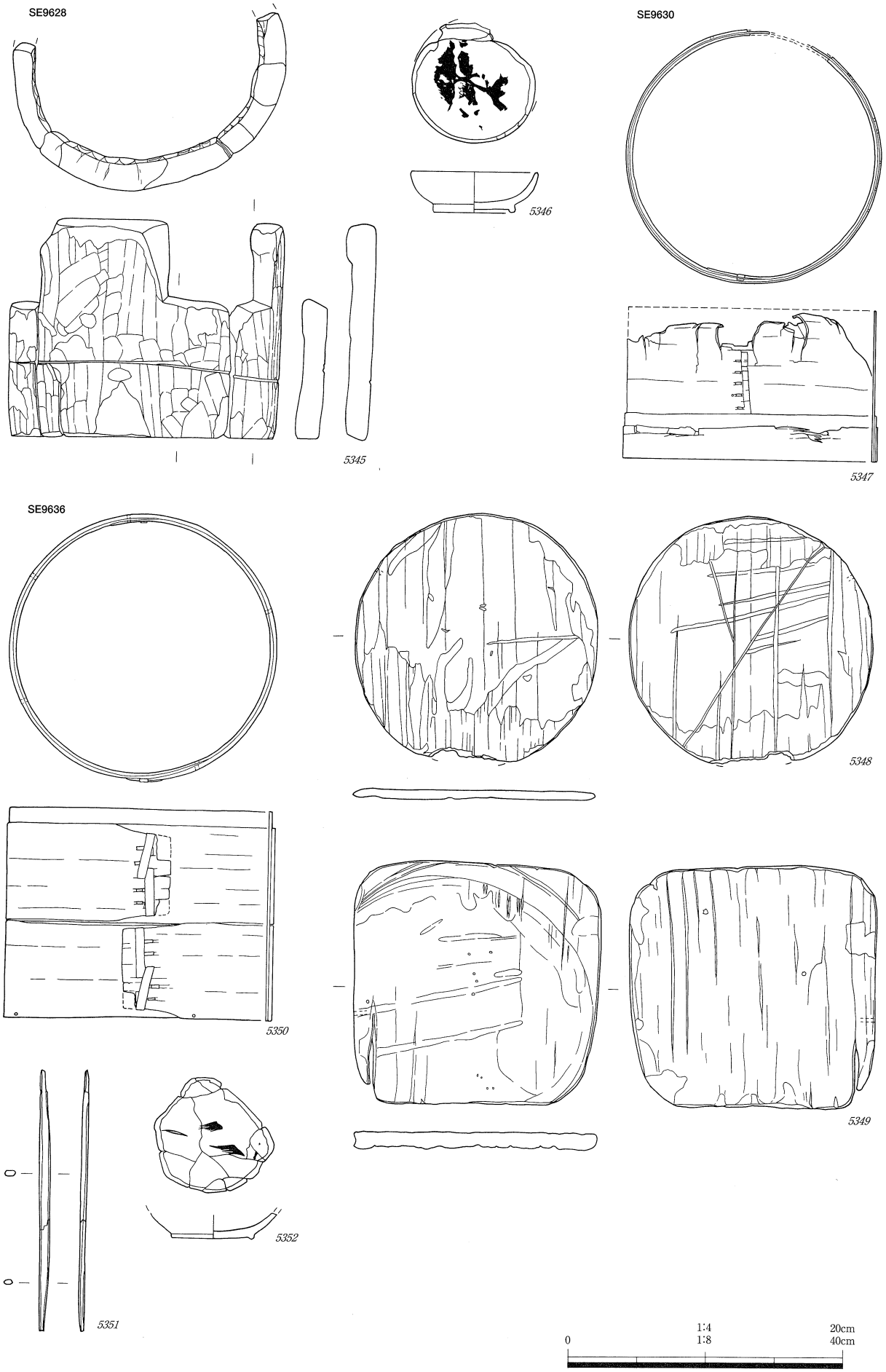
第502図　遺構実測図
SE9633



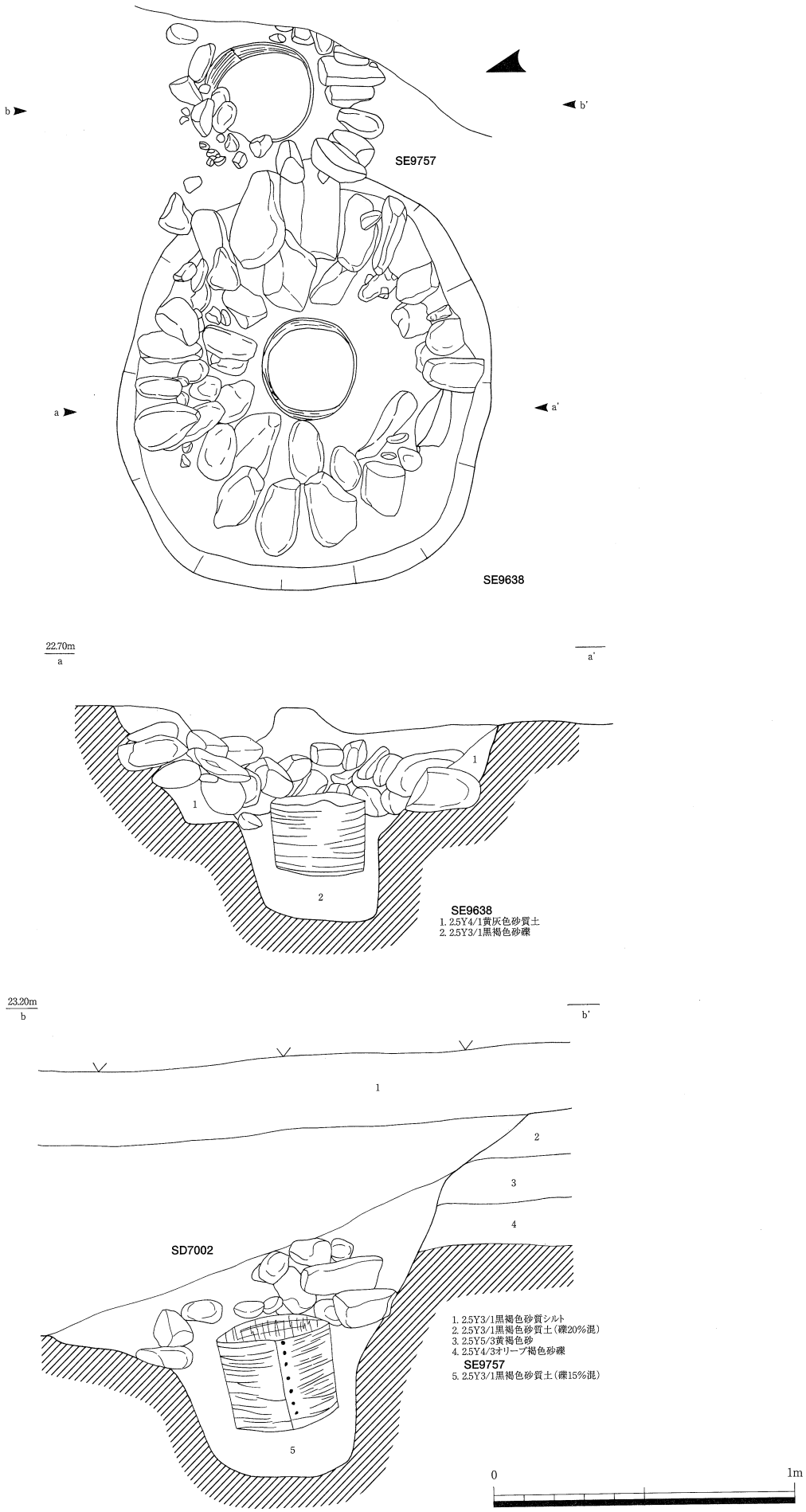
第503図　遺構実測図
1. SE9636　2. SE9637



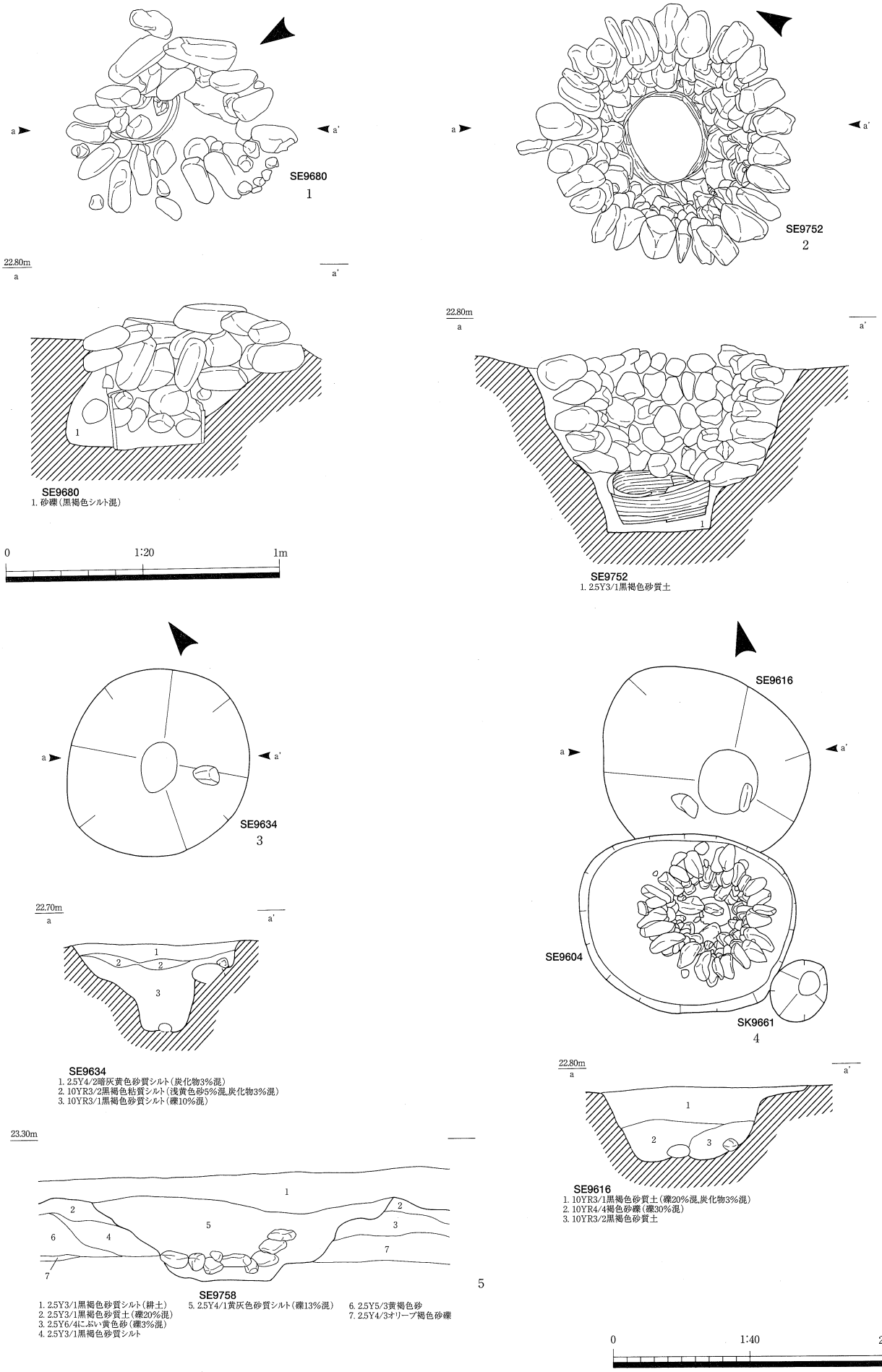
第504図　遺物実測図　（*5334・5339・5340*　1/3，*5333・5337*　1/4，*5335・5336・5338・5341～5344*　1/8）
SE9615（*5333*）　SE9616（*5334*）　SE9619（*5335*）　SE9621（*5336・5337*）　SE9622（*5338～5340*）　SE9623（*5341*）
SE9626（*5342*）　SE9627（*5343・5344*）



第505図　遺物実測図　（*5346～5349・5351・5352*　1/4，*5345・5350*　1/8）
SE9628（*5345・5346*）　SE9630（*5347～5349*）　SE9636（*5350～5352*）



第506図　遺構実測図
SE9638・SE9757



第507図　遺構実測図

1. SE9680　2. SE9752　3. SE9634　4. SE9616　5. SE9758

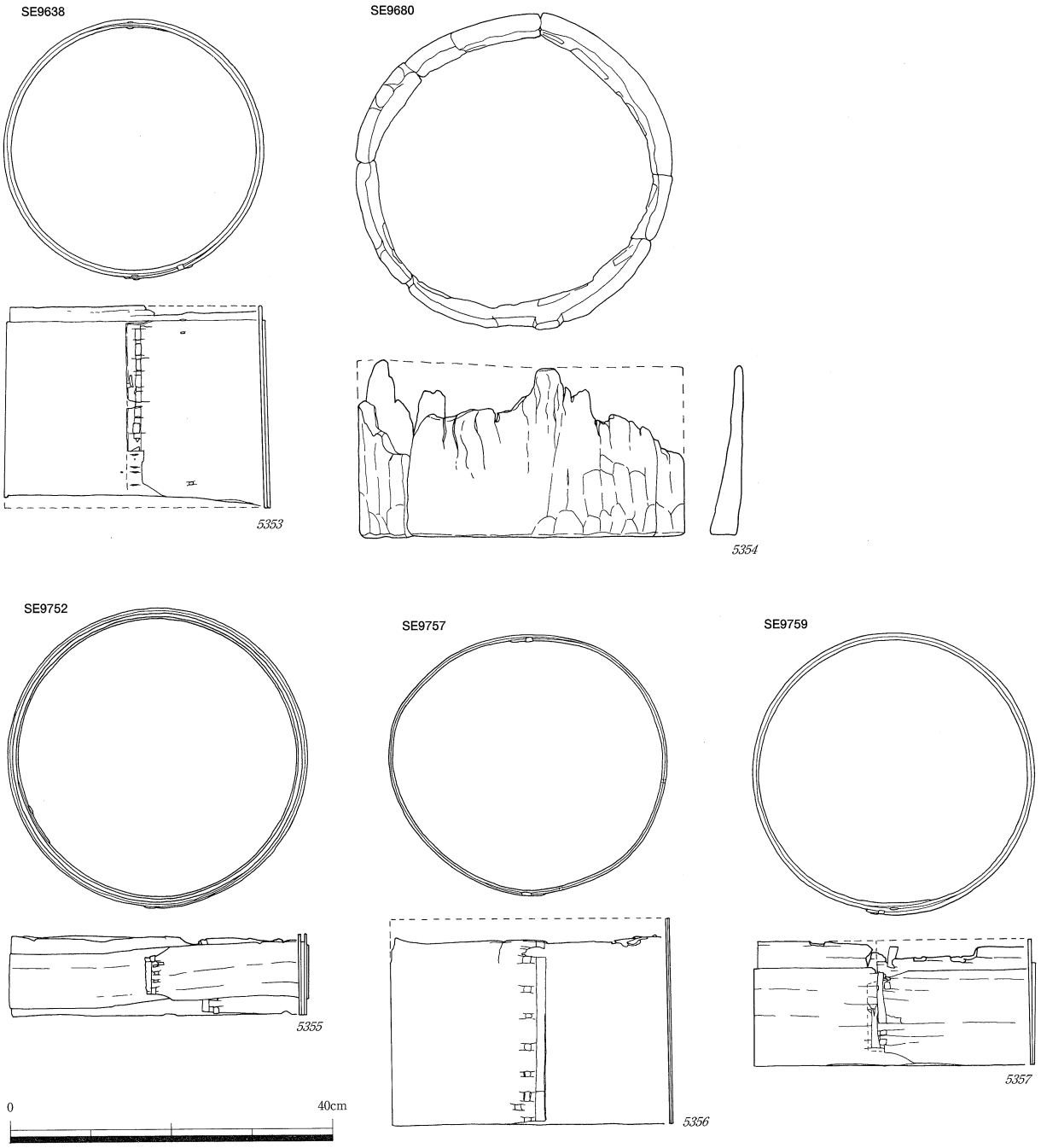
9758号井戸（ＳＥ9758，第507図）

ＳＥ9630の東に近接しており，調査区端の壁際で一部を確認したのみである。確認した部分の直径2.2m，深さ58cmで，石組があるが水溜部分は不明である。埋土は黄灰色砂質シルトである。

9821号井戸（ＳＥ9821，第509・511図，図版204・252）

ＳＢ197の内部に位置する石組井戸。掘形の規模は大きく，直径1.66m，深さ90cmを測る。水溜は曲物１段である。埋土は上層が暗オリーブ褐色砂質シルト，下層が黒褐色砂で，裏込土は黒褐色砂礫である。石組は中位でやや東西方向に歪んでおり，地震の影響と考えられる。出土遺物には珠洲・曲物（5358）・加工板がある。

5358は楕円形を呈する釘結合曲物で，長径45cm，短径40.8cm，高さ15.6cmを測る。水溜に転用しているため底板はないが，上下にタガがある。タガの綴じ合わせは上下とも２箇所あり，上段は１列内２段綴じである。下段は１列２段綴じである。側板の綴じ合わせは２箇所で，１箇所は１列外８段綴



第508図　遺物実測図　(1/8)
SE9638(*5353*)　SE9680(*5354*)　SE9752(*5355*)　SE9757(*5356*)　SE9759(*5357*)

じである。下縁にはタガからの釘孔が11箇所みられるが，間隔は不均等である。

9822号井戸（ＳＥ9822，第509・511図）

ＳＢ196の南東隅の柱穴ＳＰ9870の北に位置し，ＳＰ9870より新しい石組井戸。掘形の平面形はだるま形を呈し，長さ1.5m，最大幅１ｍを測り，水溜は曲物１段である。埋土は黒褐色砂で，裏込土は黒褐色砂質シルトである。石組の並びは乱れており，水溜が中心よりやや南にずれていることからも，地震の影響と考える。出土遺物には曲物・円形板（5359）がある。

5359は円形板で，同様な板を木釘で結合させていたとみられる釘孔が２箇所ある。

9844号井戸（ＳＥ9844，第510・511図，図版203・252）

ＳＢ194の南で，調査区端に位置する石組井戸。上部は削平されて石組１段が残存しているのみで，水溜は桶である。直径90cm，深さ43cmを測り，埋土は礫，裏込土は暗灰黄色砂礫である。石組と水溜は南北方向にずれており，地震の影響と考えられる。出土遺物には桶（5360）がある。

5360は水溜に転用している桶である。直径41cm，高さ32cmを測り，21枚の側板で構成されるが，その中には側板の孔を埋めて補修しているものもある。外面には上下２本のタガの痕跡がある。

9847号井戸（ＳＥ9847，第510図）

ＳＢ194の内部南東隅に位置する石組井戸。掘形の規模は直径1.35m，深さ49cmを測り，石組はやや歪んでいる。残存している石組は２段で，水溜は曲物１段である。埋土には礫が多く，上層が黒色砂，下層がオリーブ褐色砂で，裏込土はオリーブ褐色砂である。出土遺物には土師器・曲物がある。

9867号井戸（ＳＥ9867，第510・511図，図版204・253）

ＳＢ195の内部で，ＳＤ9760の東に隣接する石組井戸。ＳＥ9868と重複しており，ＳＥ9867の方が新しい。長径1.23m，短径1.04mの楕円形を呈し，深さ49cmを測る。水溜は曲物２段であり，上段のものは破損が著しい。埋土は上層が黒褐色砂質シルト，下層が礫，裏込土は砂礫が多量に混じる黒褐色砂質シルトである。出土遺物には越前・曲物（5363・5364）がある。

5363・5364は水溜に転用した曲物で，底板は抜かれている。5363は上段のものであるが，破損が著しく，側板の重なりや綴じ合わせ，直径や高さの復元は困難である。5364は釘結合曲物で，直径35.4cm，高さ8.2cmを測る。綴じ合わせは２箇所で，１箇所は１列内７段綴じである。下縁には釘孔が４箇所みられるが，間隔は不均等である。

9868号井戸（ＳＥ9868，第510・511図，図版204）

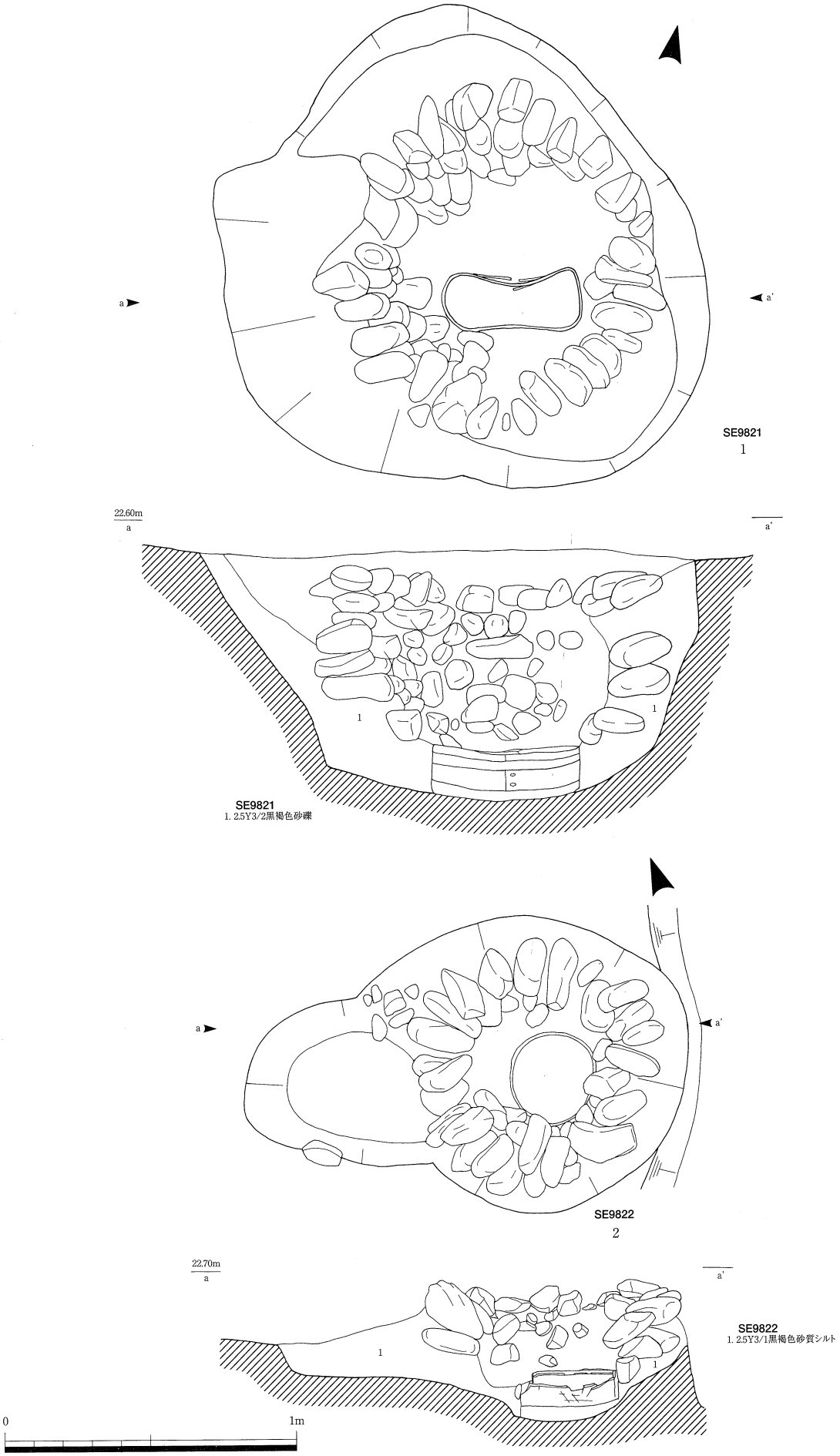
ＳＥ9867と重複しており，ＳＥ9867より古い石組井戸。直径1.12m，深さ50cmを測るが，底部の標高はＳＥ9868の方が高い。水溜は曲物１段であるが，傾いており破損が著しい。埋土は上層が礫，下層が黄灰色砂で，裏込土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物には珠洲・曲物（5365）・加工材がある。

5365は釘結合曲物を水溜に転用するため，底板を抜いている。破損が著しいため側板の重なりや綴じ合せ，直径や高さの復元は困難である。下縁には釘孔が17箇所あり，上下に近接していることから，補修した際の釘孔も含まれていると考える。

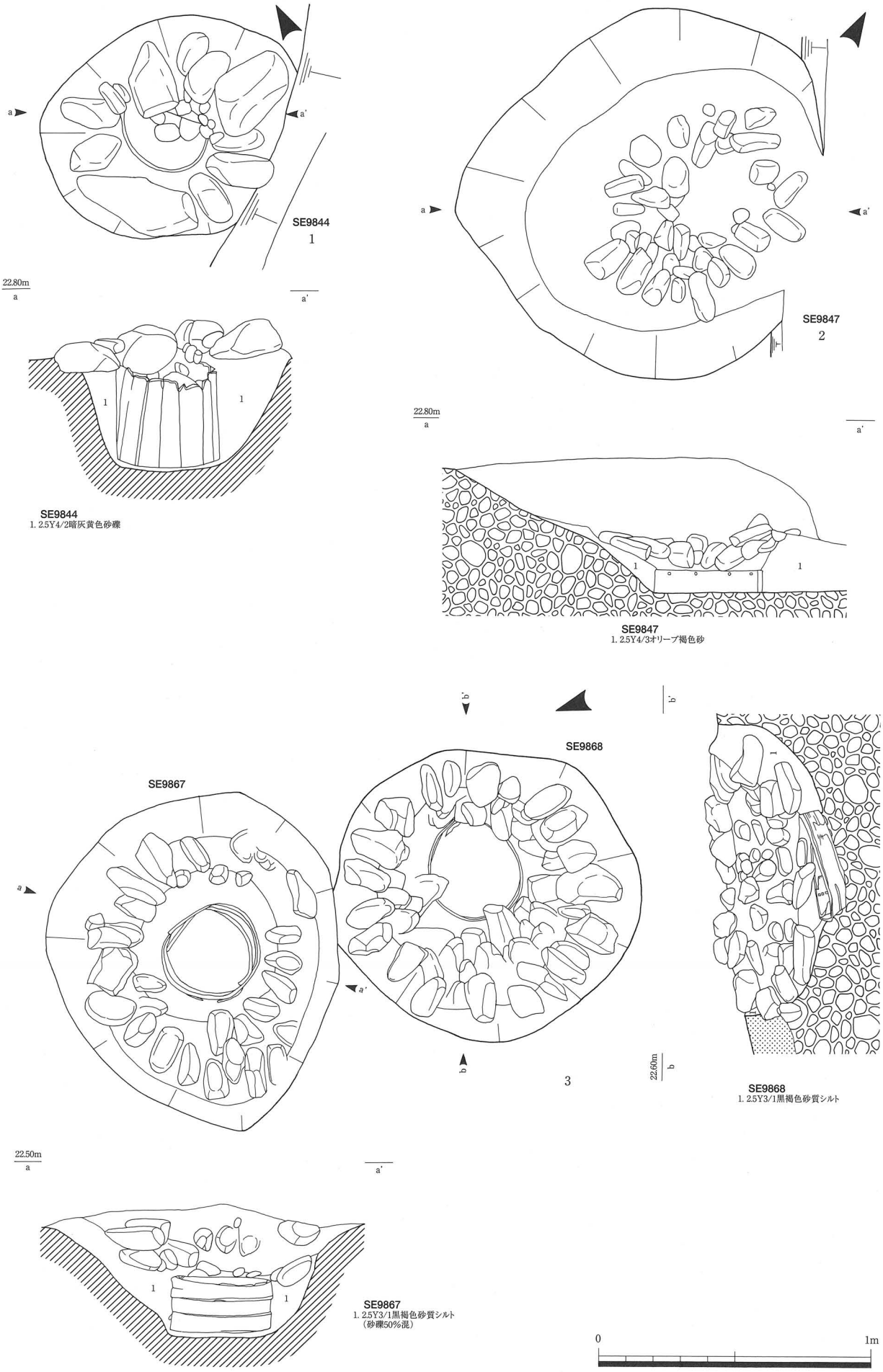
9863号井戸（ＳＥ9863，第511・512図，図版204・252・253）

ＳＢ196の北４ｍに位置する石組井戸。ＳＥ9864とＳＥ9882の３基が重複しており，ＳＥ9882より新しい。直径1.02m，深さ46cmを測り，石組は１段残っているのみで，水溜は曲物２段である。埋土は上層が黒褐色砂，下層が礫で，裏込土は黒褐色砂である。出土遺物には曲物（5361・5362）がある。

5361・5362は水溜に転用したため底板が抜かれている。5361は下段のもので，破損が激しいため側

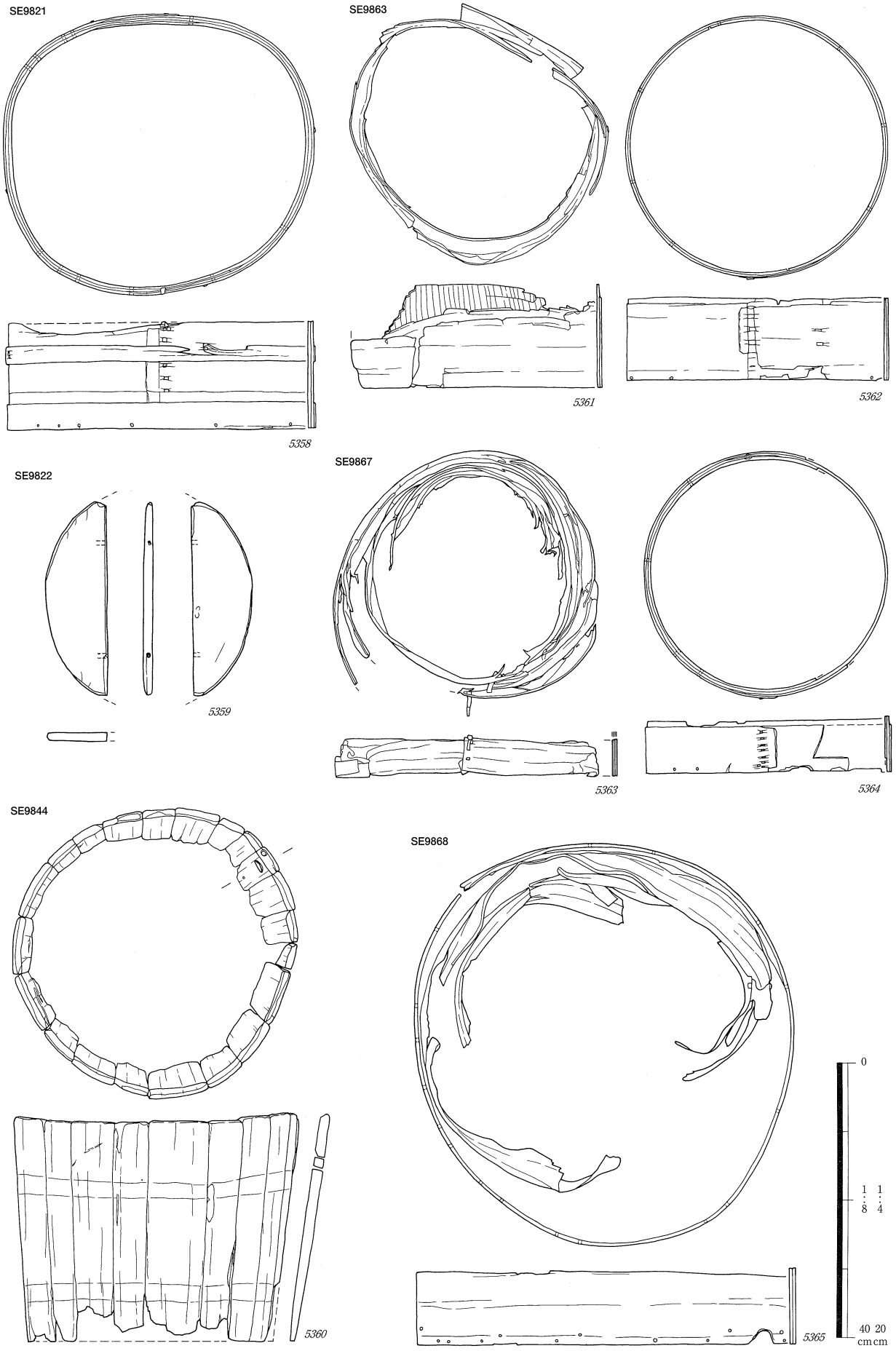


第509図　遺構実測図
1. SE9821　2. SE9822

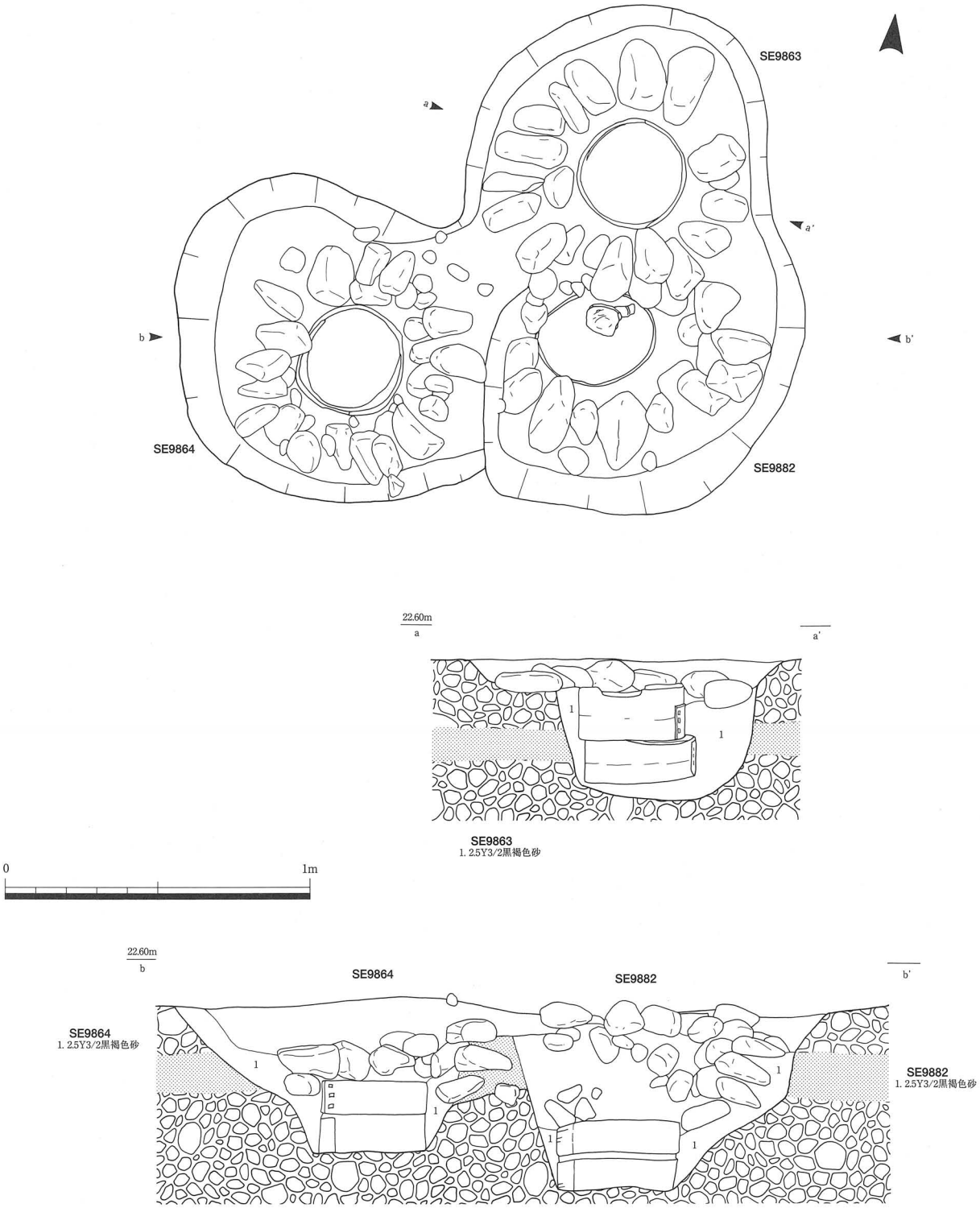


第510図　遺構実測図

1. SE9844　2. SE9847　3. SE9867・SE9868



第511図　遺物実測図　（*5359*　1/4，*5358・5360～5365*　1/8）
SE9821（*5358*）　SE9822（*5359*）　SE9844（*5360*）　SE9863（*5361・5362*）　SE9867（*5363・5364*）　SE9868（*5365*）



第512図　遺構実測図
SE9863・SE9864・SE9882

板の重なりや綴じ合わせ，直径や高さの復元は困難である。5362は上段の釘結合曲物で，直径38cm，高さ12cmと復元した。綴じ合わせは２箇所で１列内６段綴じと１列内２段綴じである。釘孔は７箇所確認でき，ほぼ等間隔で配されている。

9864号井戸（ＳＥ9864，第512・513図，図版204・253・254）

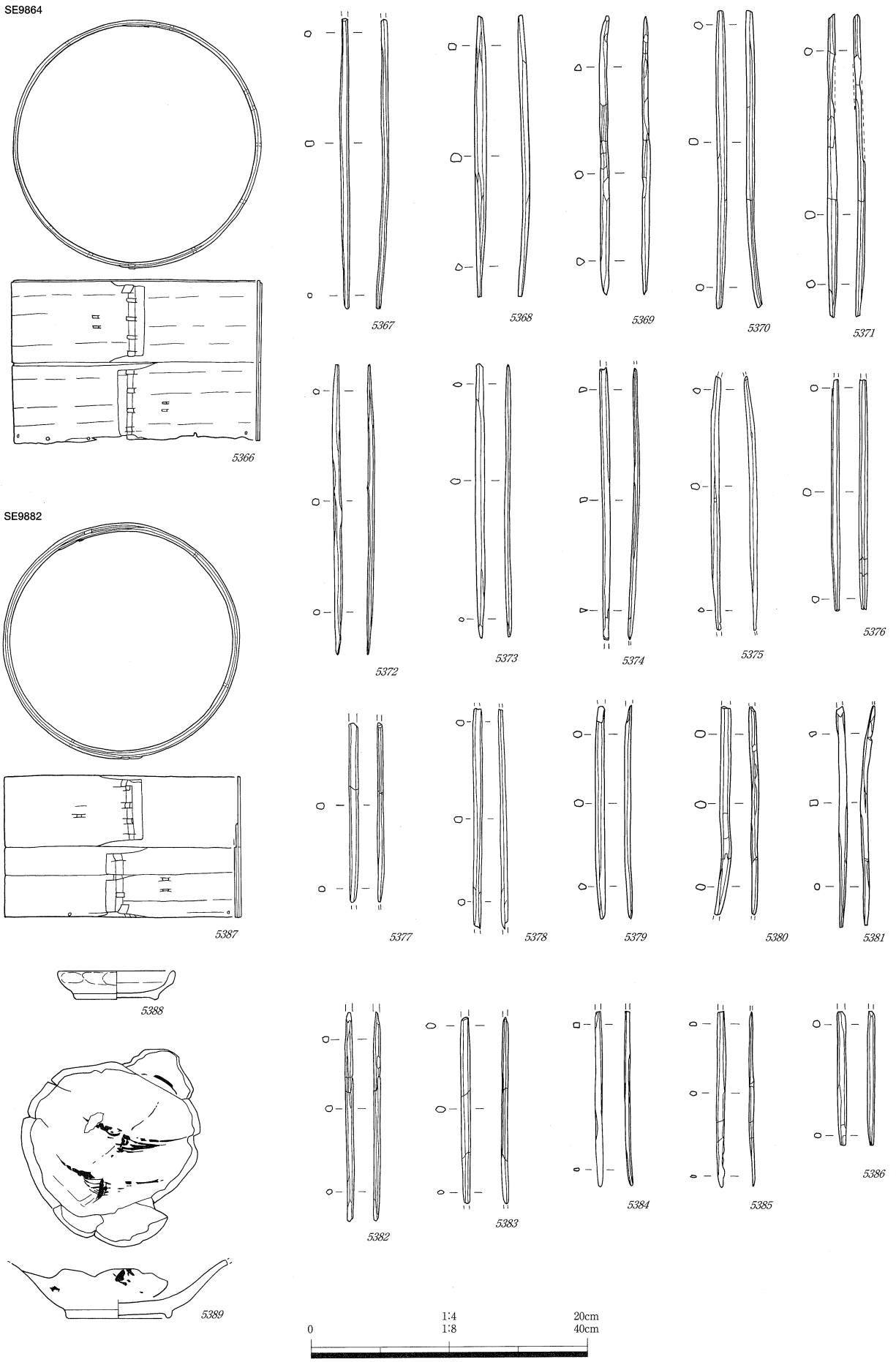
ＳＥ9882より古い石組井戸。直径1.01m，深さ52cmを測り，水溜は曲物１段である。石組は２段残っており，埋土は上層が礫が混じる黒褐色砂，水溜内部は礫で，裏込土は黒褐色砂である。出土遺物には曲物（5366）・箸（5367～5386）・加工材がある。

5366は釘結合曲物を水溜に転用しているため底板はない。直径36cm，高さ23.2cmを測り，内側には側板１枚，外側には上下２段の曲物を積み重ねタガの様に利用している。外側上段の綴じ合わせは２列前外５段後内２段綴じである。下段は２列前上外下内４段後内２段綴じで，下縁に釘孔が11箇所あるが間隔は不均等である。5367～5386は箸。5368～5373は完形で長さ21cm～22cmあり，両端を細めている。断面形は長方形から楕円形が多いが，円形のものもある。

9882号井戸（ＳＥ9882，第512・513図，図版204・253）

ＳＥ9864より新しく，ＳＥ9863より古い石組井戸。直径98cm，深さ59cmを測り，石組は４段残存している。水溜は曲物１段で，裏込土は黒褐色砂である。出土遺物には曲物（5387）・漆器（5388・5389）がある。

5387は釘結合曲物を水溜に転用しているため底板を抜いている。内側には二重の側板があり，外側には上下２段の曲物を積み重ねタガの様に利用している。内側の綴じ合わせは１箇所であるが詳細は不明である。外側上段の綴じ合わせは２列前外５段後内１段綴じである。下段は２列前外４段後内２段綴じで，下縁に釘孔が３箇所ある。5388は漆器皿。口径8.2cm，器高２cmを測り，低い高台脇から直線的に開いた体部は中位で屈曲し，口縁は垂直気味に立ち上がる。口縁部から体部上部にかけては器壁が厚く，外面には削りによる文様がみられる。5389は漆器椀。高台径７cmを測り，体部は緩くカーブしながら外反気味に開く。内外面とも黒色漆に赤色漆で文様が描かれており，見込みには鶴のような文様が，外面の意匠は不明である。（中川道子）



第513図　遺物実測図　（*5367～5386・5388・5389*　1/4，*5366・5387*　1/8）
SE9864（*5366～5386*）　SE9882（*5387～5389*）

E　土　　坑

6409号土坑（ＳＫ6409，第514・516図）

ＳＤ7005の南に隣接する。6.7m×5.3mの方形を呈し，深さ34cmを測る。床面はほぼ水平で，立ち上がりは緩やかである。埋土はレンズ状に堆積しており，最下層は黒褐色シルト質粘土である。中央やや西寄りの床面でＳＫ6410を確認した。出土遺物には須恵器・土師器・中世土師器（5390）・珠洲・越前・中国製青磁・瓦質土器・木製品（5391・5392）がある。5390は中世土師器皿。口径６cmを測り，口縁部を強くナデて外反させ，底部は平底である。見込みに円形の圧痕があり，ひも状のものが焼成前に付着していたと考える。15世紀前半のもの。5391は円形板。短径3.9cmを測る楕円形を呈する。5392は加工材。残存長8.8cm，幅3.7cm，厚み1.7cmを測る。側面を丁寧に削り，先端を丸く面取りしており，断面は長楕円形を呈する。柄であろうか。

6410号土坑（ＳＫ6410，第514図）

ＳＫ6409の床面で確認した。2.1m×1.9m，深さ60cmを測り，楕円形を呈する。埋土は灰色砂質シルトがブロック状に混じる黒色粘土である。遺物は中世土師器が出土している。

6411号土坑（ＳＫ6411，第515・516図）

ＳＤ6407とＳＤ7030の間に位置し，南側をＳＤ7030に削られ，北側はＳＤ6407を掘り込んでいる。検出した部分は長さ6.5m，幅1.4mで，深さ27cmを測る。埋土は上層がにぶい黄色砂，下層が暗オリーブ褐色粘質シルトである。出土遺物には土師器・中世土師器（5393）・珠洲がある。5393は口径11.9cmで，口縁が大きく外反し，端部を僅かにつまみ上げる。15世紀後半と考える。

6415号土坑（ＳＫ6415，第515・516図，図版222・265）

ＳＤ7005の北約２mに位置する方形の竪穴状土坑で，4.1m×3.6m，深さ54cmを測る。埋土はほぼ中間に薄い貼床状の炭化物が混じる黒褐色シルト質粘土があり，下層は褐灰色粘質シルト，最下層は黒褐色シルト質粘土である。貼床状の黒褐色シルト質粘土層より上層は炭化物が多く混じる暗灰黄色粘質シルト，灰黄褐色粘質シルトであり，これらの層から被熱した遺物が出土している。焼土等は検出していないことから，ゴミ穴として使用されたものと推測する。また，南に延びるＳＤ6414は底部近くに樹皮状のものと炭化物があることから，ＳＫ6415に関連した遺構と考える。遺物は須恵器・中世土師器（5394～5407）・珠洲（5409）・中国製青磁（5408）・瓦質土器（5410）・木製品（5411～5417）・石製品（5418）・銭（5419・5420）が出土している。

5394～5407は中世土師器皿。5394～5400は口径8.4cm～8.8cmで，口縁が大きく外反し，端部をつまみ上げる。端部の形態にはやや丸いもの（5394～5397），面をとるもの（5398），尖るもの（5399・5400）がある。5394・5396は内外面全面に，5397・5399は口縁端部内外面に煤が付着しており，灯明皿に使用されたと考えられる。5401・5402は口径11.7cm・11.8cmで，5401は口縁部が大きく外反し，端部は丸く収めており，5402は口縁部を強くナデ，体部との境に段ができている。5403・5404は口径13.8cmで，大きく外反する口縁部を強くナデ，体部との境に段ができている。端部はやや尖る。5405は口径14.9cm，器高２cmを測り，底部は平底，口縁部は大きく開き端部はさらに外反する。5406は口径16.4cm，器高2.7cmを測る。口縁部を強くナデ，体部との境に段ができ，端部はやや内湾気味である。底部の器壁は薄く，体部にかけて厚みを増す。ＳＤ6416出土の破片と接合している。5407は口径17.8cmを測る大型品で，口縁は大きく外反し，端部は丸い。5408は龍泉窯系青磁碗の底部である。釉は内面と高台にかけられ，高台内部は削り取られている。見込みには２条の沈線状の文様がある。5409は珠洲擂鉢。口縁端部は尖頭で，口縁内端の幅の広い面とりが痕跡化するが，櫛目波状文は施入する。

卸目は３㎝に９条で，全面に施入する。珠洲Ⅵ期のもの。5410は瓦質の鉢で，口径15㎝を測る。口縁端部は断面四角形で端部と内面を削り，体部は直立気味でナデている。

5411は曲物の側板の一部で，桜皮の綴じ皮が付いている。5412は方形の薄い板で，折敷の底板と考える。5413・5417は側板で，長さ13.3㎝・12.5㎝であることから手桶と考えられる。5413は下端に綴じ皮が残る。5414・5415は円形板で，5414の側面に１箇所釘穴，5415には２孔一対の釘孔が２箇所ある。5416は多角形の薄い板で，一方は欠損している。折敷の底板と考える。

5418は砥石。残存長3.4㎝，幅3.2㎝，厚さ0.4㎝の小さなもので，片面に使用痕がみられる。その他に石鉢がある。

5419は元符通寶，5420は永楽通寶である。

6422号土坑（ＳＫ6422，第515図）

ＳＫ6415の北約４ｍに位置し，1.9ｍ×１ｍ，深さ９㎝を測る不整形な土坑。埋土は暗灰黄色粘質シルト，黒褐色粘質シルト，暗オリーブ褐色粘質シルトである。出土遺物には珠洲がある。

6434号土坑（ＳＫ6434，第515図）

ＳＤ6430の北にあり，長さ1.7ｍ，幅0.7ｍ，深さ７㎝を測る。埋土は暗灰黄色粘質シルトで，遺物は須恵器・中世土師器が出土している。

9001号土坑（ＳＫ9001，第517図）

ＳＤ7001の北に位置する。検出した規模は2.5ｍ×２ｍで，深さ13㎝を測る隅丸方形の竪穴状土坑。埋土は炭化物が混じる暗灰黄色砂質シルトで，土師器（5421・5422）・中世土師器が出土している。5421・5422は土師器甕。5421は口縁部が外反し，端部が四角く面を取るもの。5422は口縁端部を丸く収めるもの。

9016号土坑（ＳＫ9016，第517図）

５号古墳の周溝ＳＤ9032と６号古墳周溝ＳＤ9009のほぼ中間に位置し，直径1.5ｍ，深さ36㎝を測る。埋土は礫が多く，上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が炭化物・植物遺体が混じる黒褐色砂質シルトである。出土遺物には珠洲がある。

9135号土坑（ＳＫ9135，第517図）

ＳＤ9132の東に隣接する。平面形は方形を呈し，規模は１ｍ×0.6ｍ，深さ９㎝を測る。埋土は黄褐色砂質シルトで，土師器・中世土師器が出土している。

7007号土坑（ＳＫ7007，第518図）

調査区東端，ＳＤ7005上で確認したもので，2.6ｍ×0.9ｍ，深さ11㎝を測る。埋土は植物遺体が混じる灰色粘質シルトで，新しい遺構と考える。出土遺物には中世土師器がある。

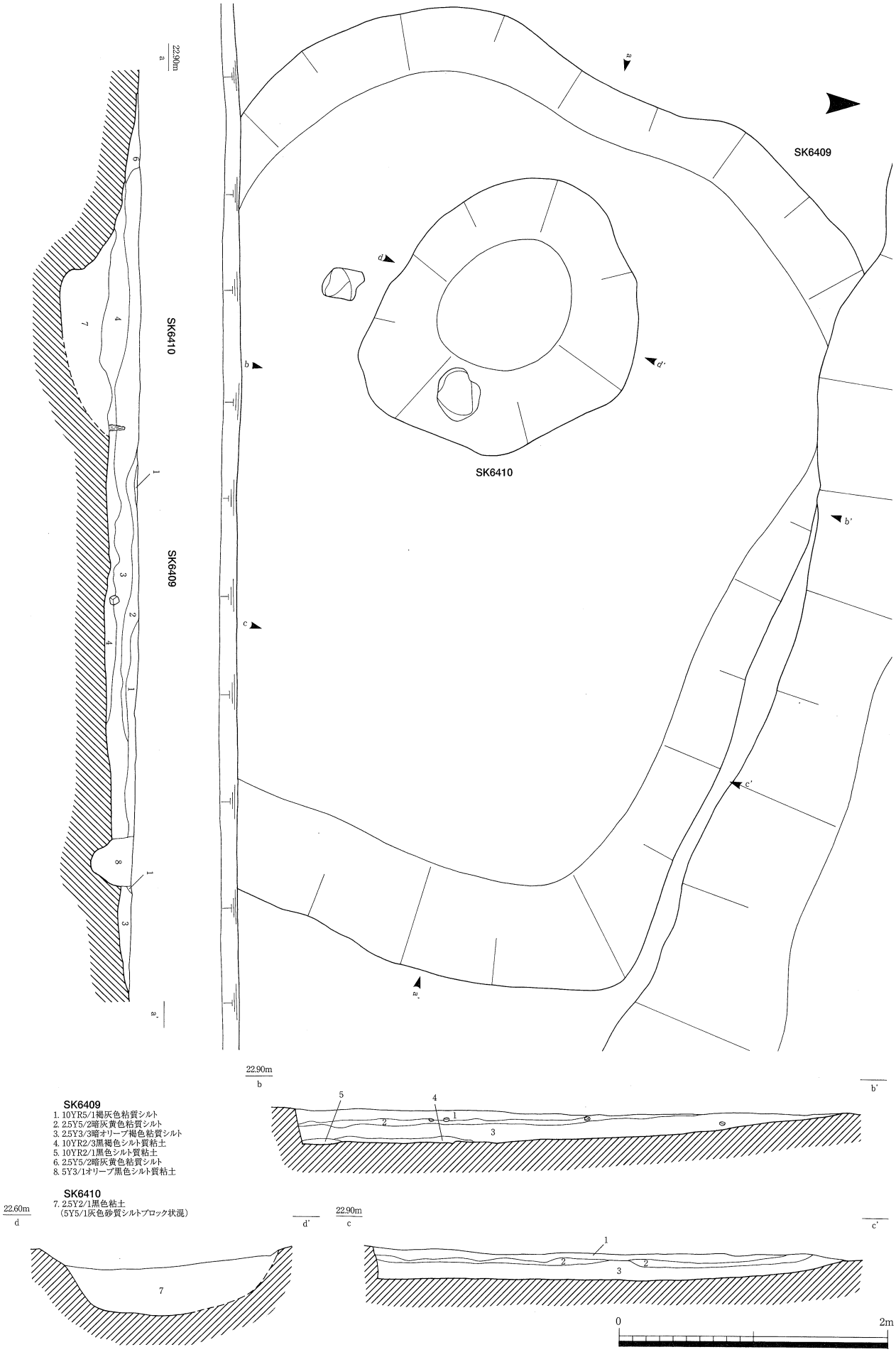
7008号土坑（ＳＫ7008，第518図）

ＳＤ7005の底面，ＳＫ7020の北に隣接しており，2.5ｍ×1.7ｍの方形を呈し，深さ18㎝を測る。埋土は植物遺体が混じる黄灰色粘土質シルトである。中世土師器が出土している。

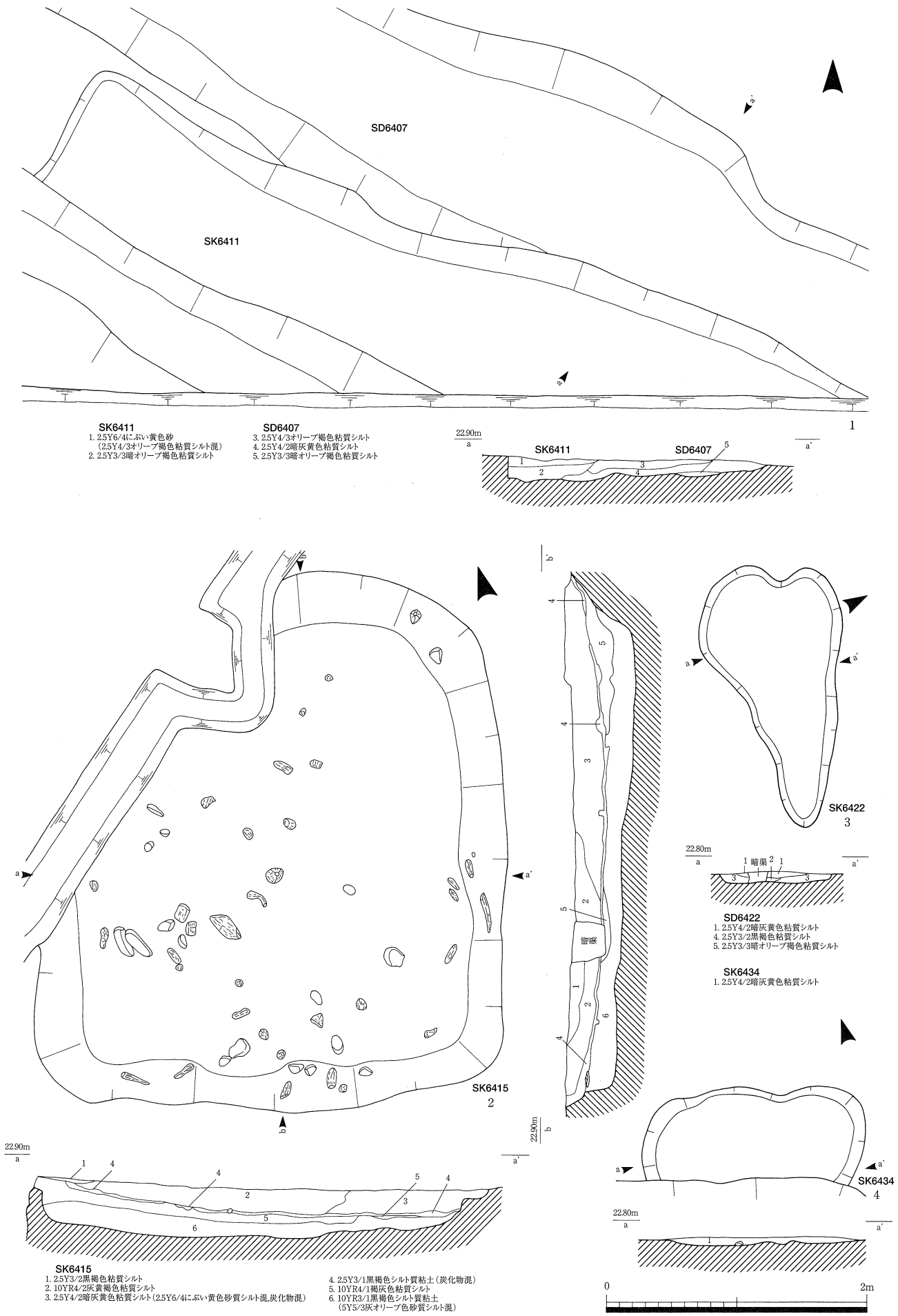
7013号土坑（ＳＫ7013，第519・522図，図版75・222）

調査区北端に位置し，ＳＤ7030上で確認した。規模は3.6ｍ×2.3ｍ，深さ48㎝を測り，埋土は上層が礫が混じる灰黄色砂質シルト，下層が炭化物が混じる灰オリーブ色粘質シルトである。出土遺物には須恵器・黒色土器（5423・5424）・中世土師器（5425・5426）がある。

5423・5424は黒色土器椀Ａ。5423は口径9.5㎝を測り，丸みをもった体部に直立した口縁部をもち，内外面にヘラミガキ調整がある。６世紀のもの。5424は口径13.4㎝を測り，口縁部が屈曲して外反す

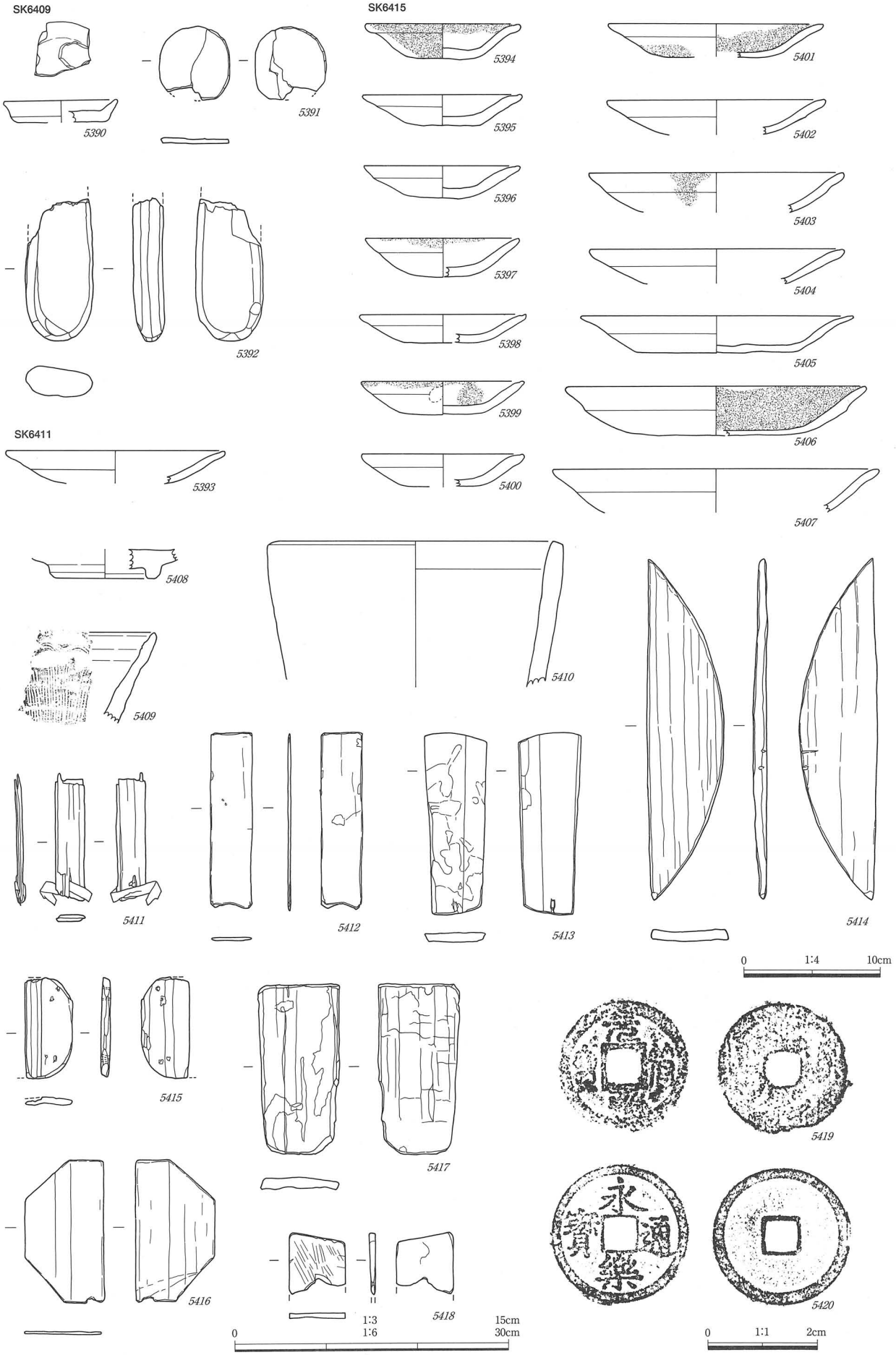


第514図　遺構実測図
SK6409・SK6410

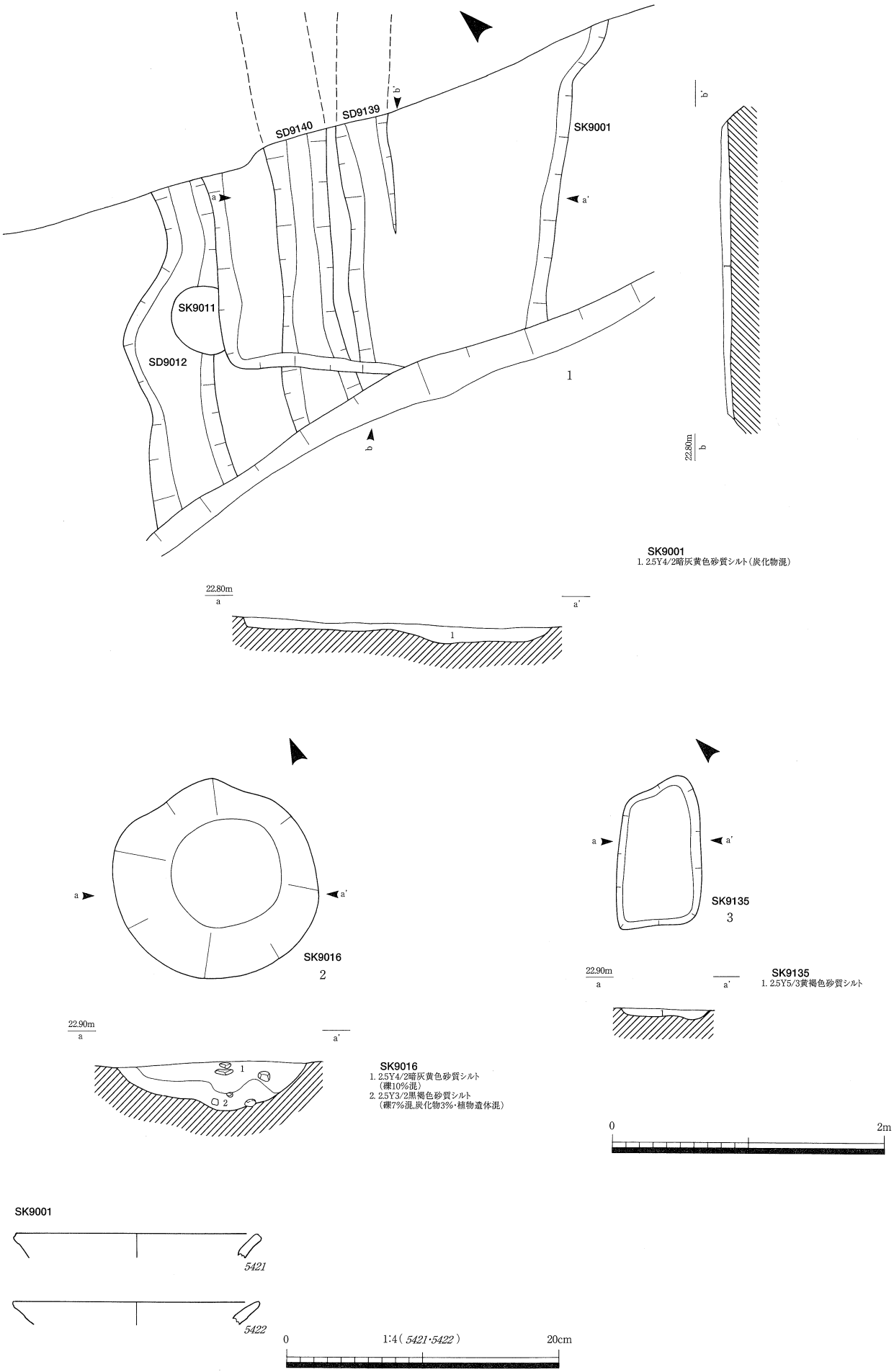


第515図　遺構実測図

1. SD6407・SK6411　2. SK6415　3. SK6422　4. SK6434



第516図　遺物実測図（*5419・5420*　1/1，*5390～5408・5410・5411・5415・5416・5418*　1/3，*5412～5414・5417*　1/4，*5409*　1/6）
SK6409（*5390～5392*）　SK6411（*5393*）　SK6415（*5394～5420*）



第517図　遺構・遺物実測図

1. SK9001　2. SK9016　3. SK9135
SK9001（*5421・5422*）

る。内外面にはヘラミガキ調整がみられるが，外面は体部のみである。7世紀代のものであろうか。

5425・5426は非ロクロ成形の中世土師器。口径8.4cm，14.2cmを測り，口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げている。15世紀後半のもの。

7014号土坑（ＳＫ7014，第437・519図）

ＳＤ7005とＳＤ8171の間に位置し，ＳＤ7005の東肩にかかっており，ＳＤ7005より古い。調査区外にのびているが，平面形は3.2m×2.8mの方形で，深さ46cmを測る。埋土は黄褐色砂質シルトに黄灰色砂質シルト，黒褐色砂質シルトが混じる。

7015号土坑（ＳＫ7015，第519図）

ＳＫ7014の北端肩，ＳＤ8171との間に位置し，新旧関係では最も古い。長径55cm，深さ38cmを測り，平面形は円形と考えられる。埋土は灰色粘質シルトである。

7020号土坑（ＳＫ7020，第518図）

ＳＤ7005の底面で確認した，平面形が不整形を呈するもので，調査区外にのびている。規模は2.8m×2.1m，深さ14cmで，埋土は灰色粘質シルトである。出土遺物には加工板がある。

7021号土坑（ＳＫ7021，第518図）

ＳＤ7005の底面，ＳＫ7008の北に位置し，平面形が不整形を呈する。埋土は植物遺体が混じる黄灰色砂質シルトで，黒褐色粘質シルト・灰白色粘土質シルトがブロック状に混じる。ＳＫ7022よりは新しいが，埋土がほぼ同質であることから，時期差は殆どないと考える。

7022号土坑（ＳＫ7022，第518図）

ＳＫ7021の北東に位置し，平面形は不整形で，4.9m×1.9m，深さ28cmを測る。埋土はＳＫ7021と同質であるが，自然木が多い。

7042号土坑（ＳＫ7042，第520図）

ＳＫ7046内部に位置し，直径46cm，深さ16cmを測る。ＳＫ7042の方が新しく，埋土は上層が灰黄色砂質シルト，下層が黒褐色粘土質シルトである。

7046号土坑（ＳＫ7046，第520図）

ＳＤ7005の南に位置し，確認した部分は5.9m×2.5m，深さ11cmであり，平面形は方形を呈するとみられる。埋土は黄灰色シルトで，中世土師器が出土している。

7073号土坑（ＳＫ7073，第520・522図）

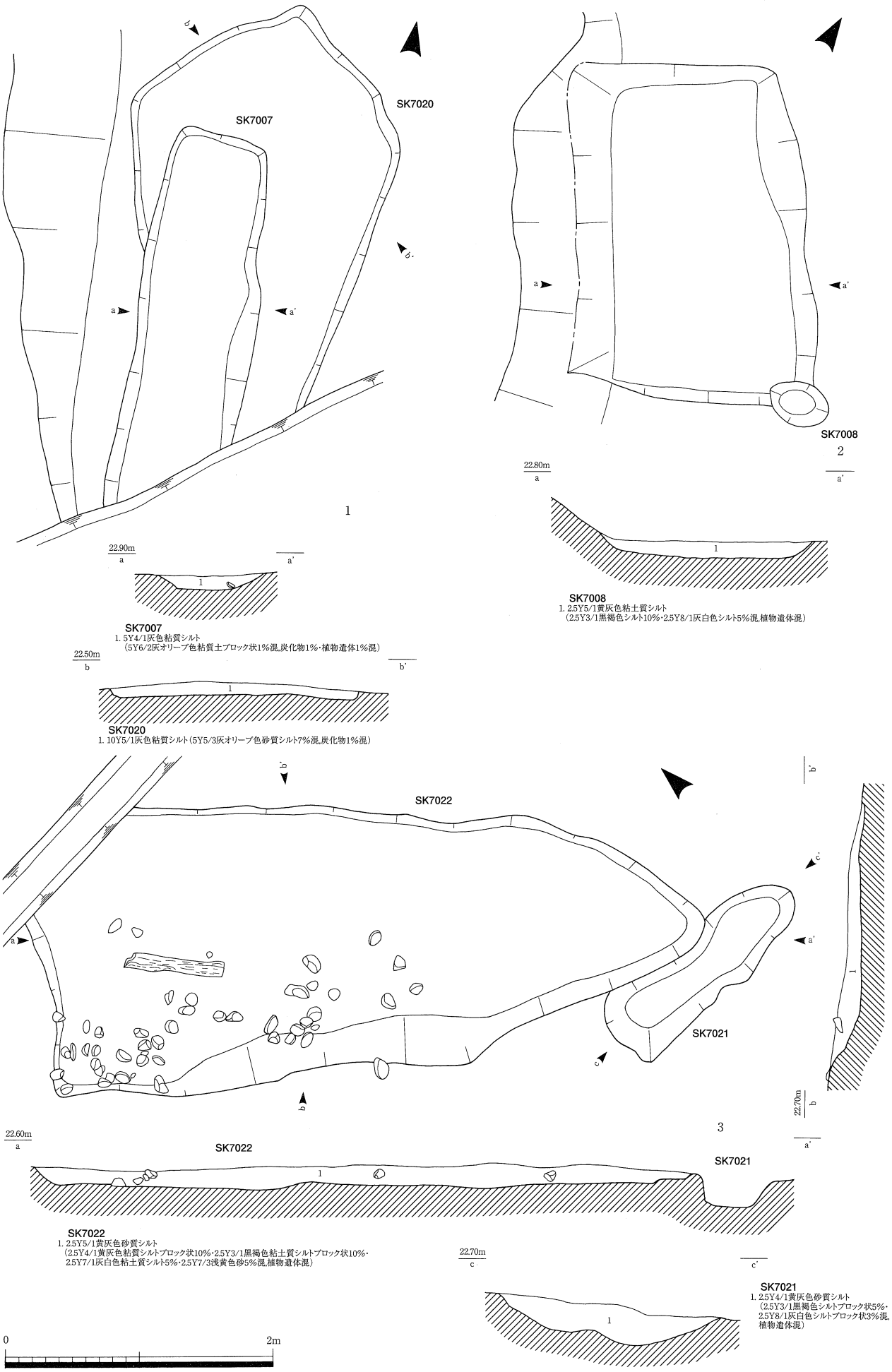
ＳＤ7030の東約１m，調査区端に位置するため全形は不明であるが，確認した部分は3.2m×1.6m，深さ28cmを測り，半円形を呈する。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層が黄灰色砂礫，下層が黄灰色粘土質シルトである。出土遺物には中世土師器（5427）がある。

5427はロクロ成形の中世土師器。底径は６cmを測り，体部は直線的にのびている。底部外面には回転糸切り痕をそのまま残す。

7086号土坑（ＳＫ7086，第522・523図）

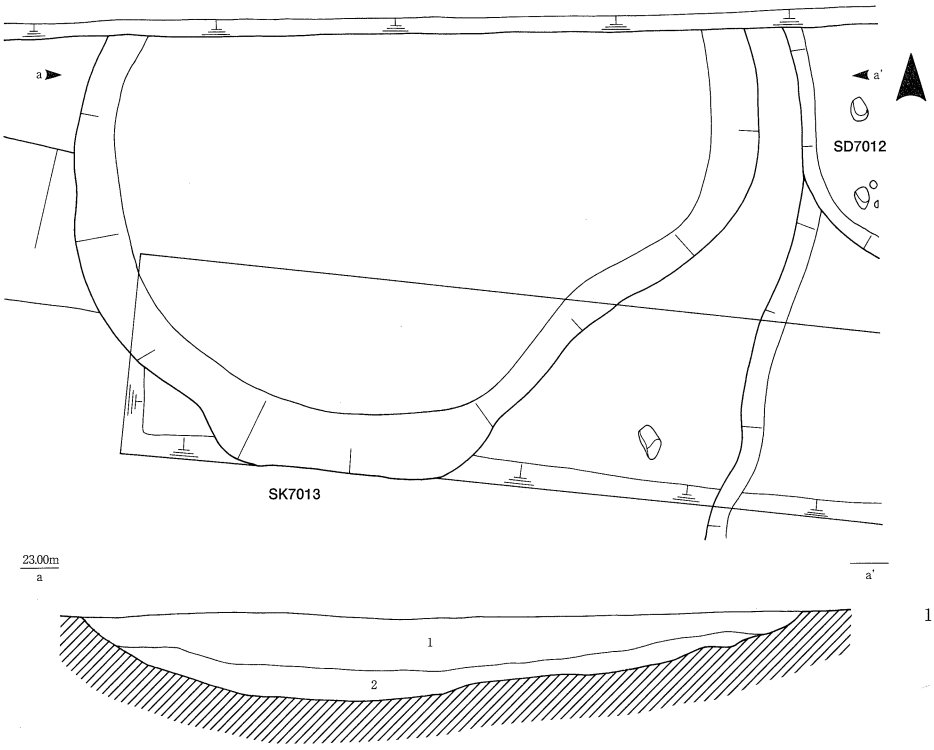
調査区西端に位置し，確認した部分は2.9m×1.3m，深さ42cmを測り，不整形を呈する。埋土は黄灰色砂質シルト，暗灰黄色砂質シルトが主体である。ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上で確認したものである。出土遺物には中世土師器（5434～5437）・越前・青花がある。

5434～5437は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.6cm～10.6cmを測り，口縁部が短く外反し，底部はやや丸底気味である。15世紀中頃のもの。



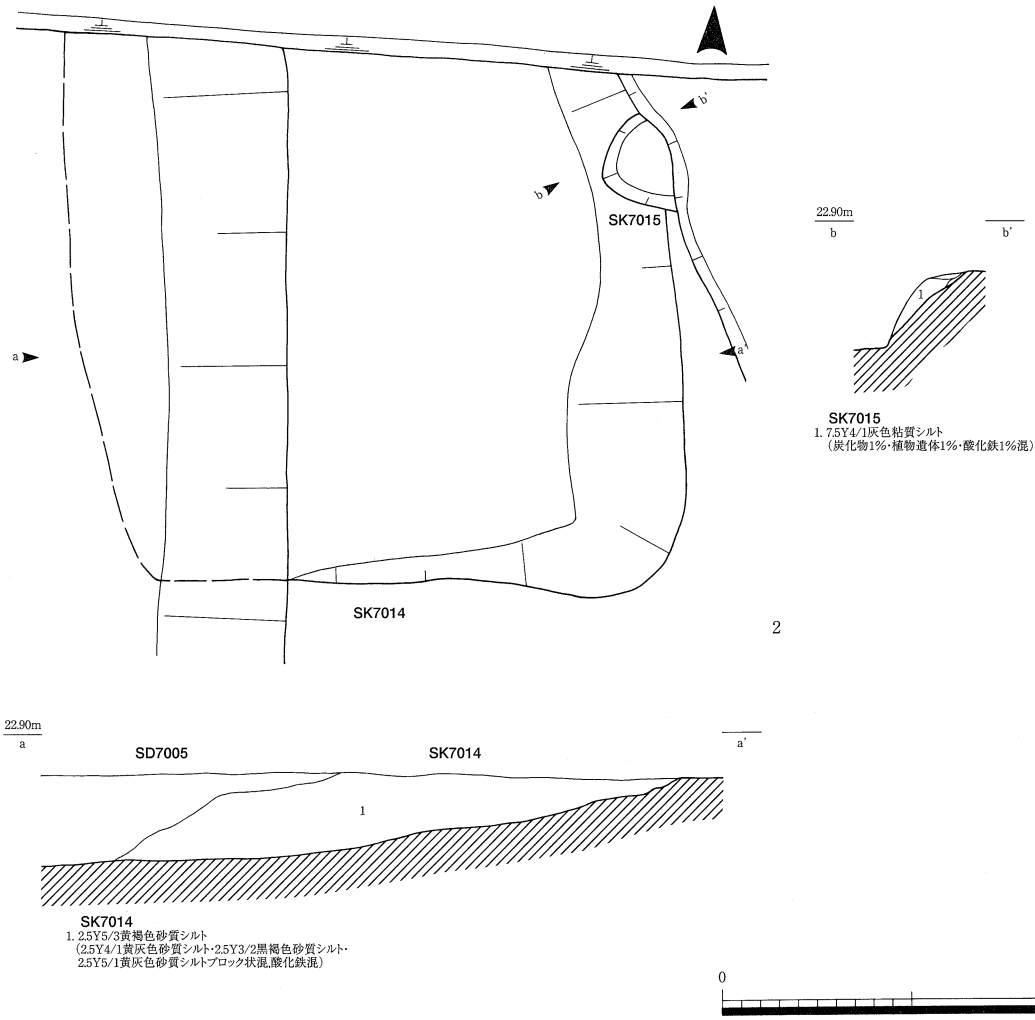
第518図　遺構実測図

1. SK7007・SK7020　2. SK7008　3. SK7021・SK7022



1

SK7013
1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
（2.5Y6/1黄灰色砂質シルト7%・2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト2%・2cm～5cm大の礫5%混,酸化鉄10%混）
2. 5Y5/2灰オリーブ色粘質シルト
（2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルトブロック状に3%・10Y6/1灰色粘質シルト2%混,炭化物2%・酸化鉄3%混）

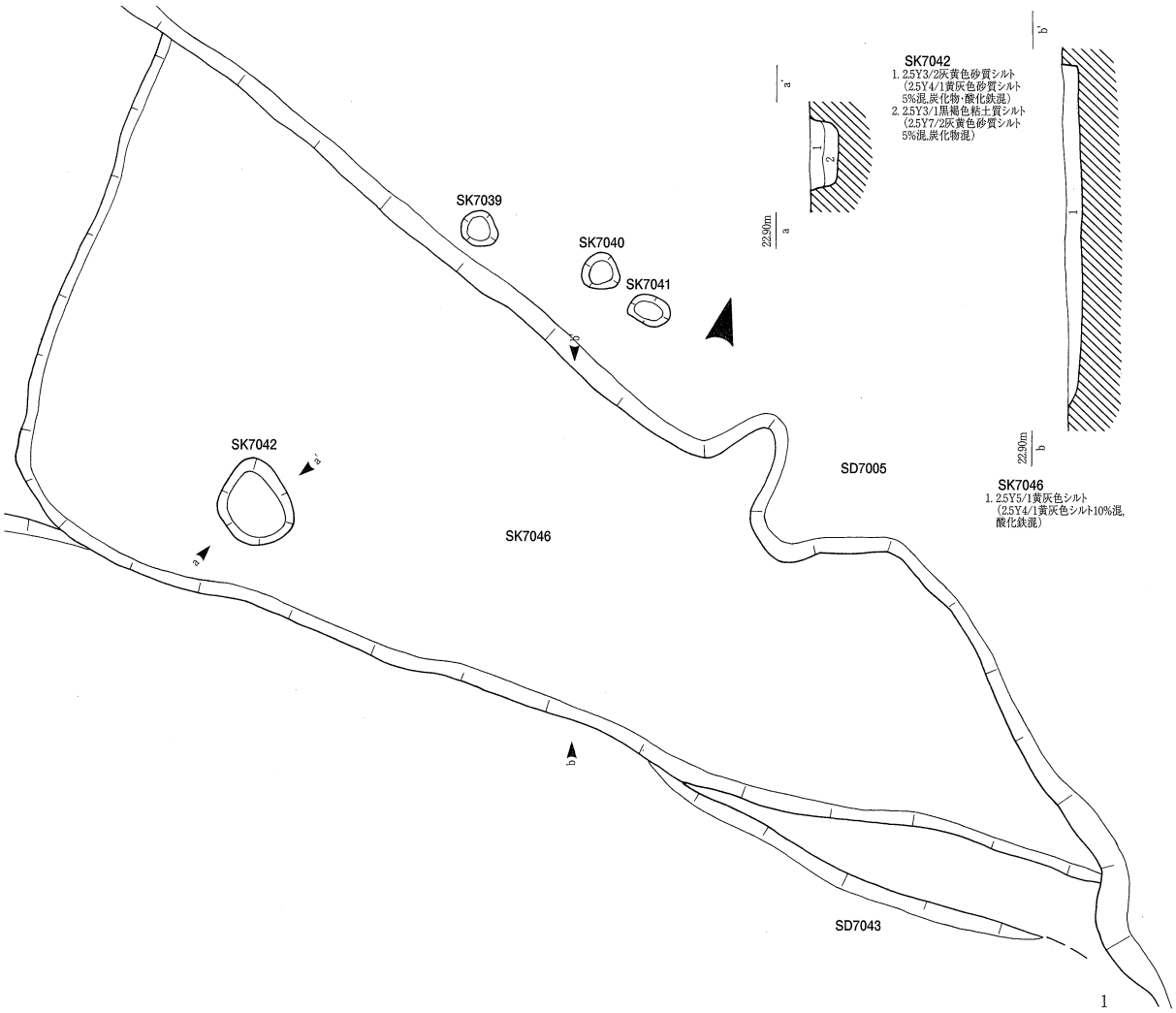


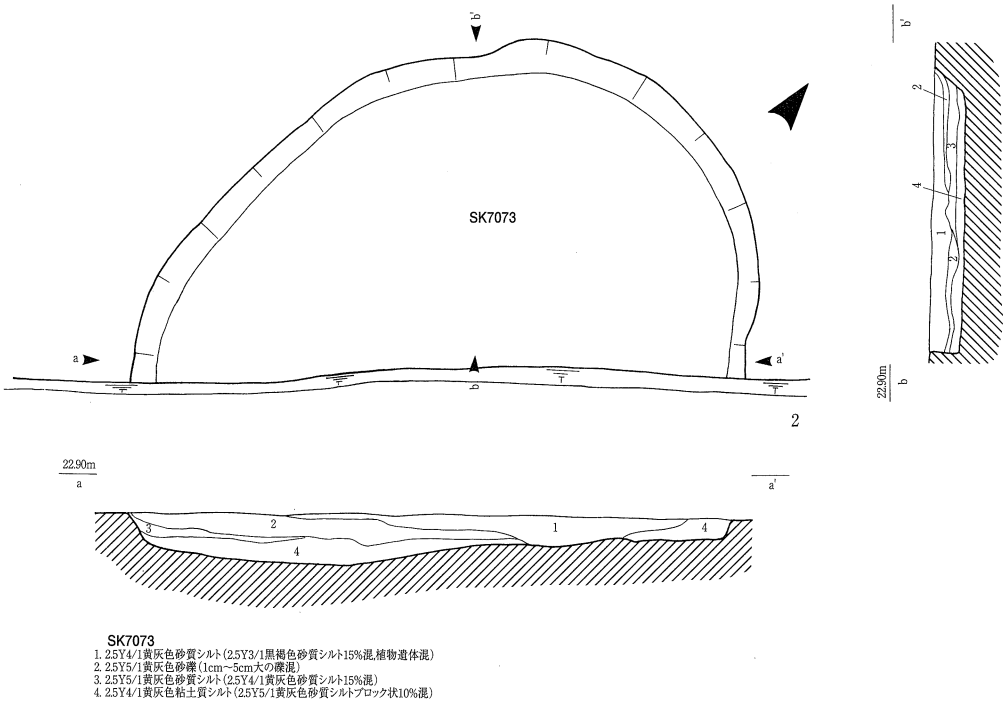
SK7015
1. 7.5Y4/1灰色粘質シルト
（炭化物1%・植物遺体1%・酸化鉄1%混）

SK7014
1. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
（2.5Y4/1黄灰色砂質シルト・2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・
2.5Y5/1黄灰色砂質シルトブロック状混,酸化鉄混）

0　2m

第519図　遺構実測図
1. SK7013　2. SK7014・SK7015





第520図　遺構実測図

1. SK7042・SK7046　2. SK7073

7131号土坑（ＳＫ7131，第524図）

ＳＤ7127の南端に位置し，試掘トレンチにより南部分が削られている。出土遺物には中世土師器・瓦質土器（5476）がある。

5476は瓦質火鉢で，口径14.8cmを測り，体部は直線的に開く。内外面黒色で，外面は縦方向のミガキにより表面は平滑に仕上げられている。

7088号土坑（ＳＫ7088，第521・522図，図版205・208・222・227・264）

ＳＤ7003の西約1.5m，ＳＤ7004の南側延長上に位置し，数基の土坑と重複している。試掘トレンチにより北側が破壊されているが，4.3m×3.5m，深さ41cmを測る。埋土は上層が浅黄色砂質シルト，下層が青灰色砂質シルトが主体である。ＳＤ7004との新旧関係は不明であるが，ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055，他の重複する土坑より新しい。出土遺物には土師器・中世土師器（5438～5456）・珠洲（5458・5459）・越前・中国製白磁（5457）・瓦質土器・曲物・折敷（5460）・箸（5461）・柱（5462）・杭・加工板・加工材・石製品（5463）がある。

5438～5456は非ロクロ成形の中世土師器皿。5438～5440は口縁部が短く外反するもので，底部が丸底のもの（5438～5442）と平底のもの（5440）がある。5443～5456は口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げるもので，口径8.5cm～16cmを測る。15世紀中頃～後半のもの。5457は中国製白磁皿で，底径6.4cmを測る。全面に施釉されており，平らな底部から体部が直線的に外上方に立ち上がる。太宰府分類Ⅸ類の底部にあたる。5458は珠洲四耳壺。肩部に櫛目波状文，やや下がった位置に沈線状の４目一単位の櫛目文が巡る。珠洲Ⅰ～Ⅱ期のもの。5459は珠洲擂鉢。3.3cmに22目の細密な櫛歯原体により間隔をあけて施入されている。底部外面には板状圧痕がみられる。珠洲Ⅳ～Ⅴ期のもの。

5460は折敷の底板。一側辺に２孔一対の孔が穿たれている。5462は柱。断面形が三角形を呈し，底面は側面から削って尖らせている。

5463は断面形が方形を呈し，一端に紐掛け状の溝が彫られているもので，錘であろうか。

7089号土坑（ＳＫ7089，第521図，図版205）

ＳＫ7088の南２mに位置し，ＳＫ7090・ＳＫ7091に重複するが，ＳＫ7089の方が新しい。規模は２m×1.7m，深さ42cmを測り，平面形は不整形である。埋土は黄灰色砂質シルト，灰色砂質シルト暗灰黄色砂質シルト，にぶい黄色砂質シルト，灰黄色砂質シルトが堆積している。出土遺物には須恵器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・加工材がある。

7090号土坑（ＳＫ7090，第524図，図版205）

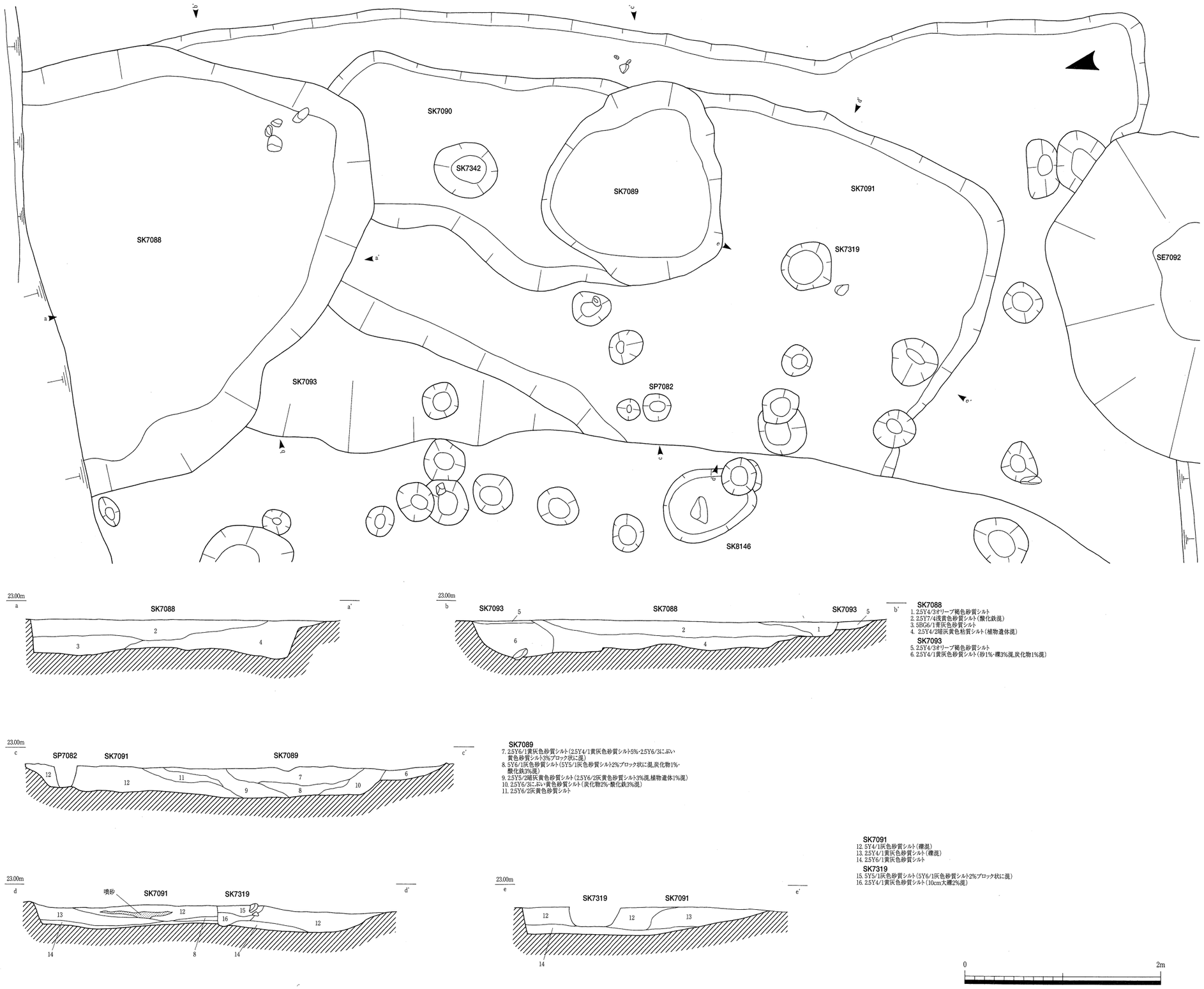
ＳＫ7088・ＳＫ7089に重複し，2.6m×1.7mの不整形を呈する。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5464～5468）・珠洲・瓦質土器・土製品（5469）・漆器・加工板がある。

5464～5468は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.7cm～14.4cmを測り，器形には口縁部が短く外反するもの（5464・5465），口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げるもの（5466～5468）がある。15世紀中頃～後半のもの。5469は土製メンコで，2.4cm×2.1cmの楕円形を呈する。

7091号土坑（ＳＫ7091，第368・371・521・524図，図版205・214）

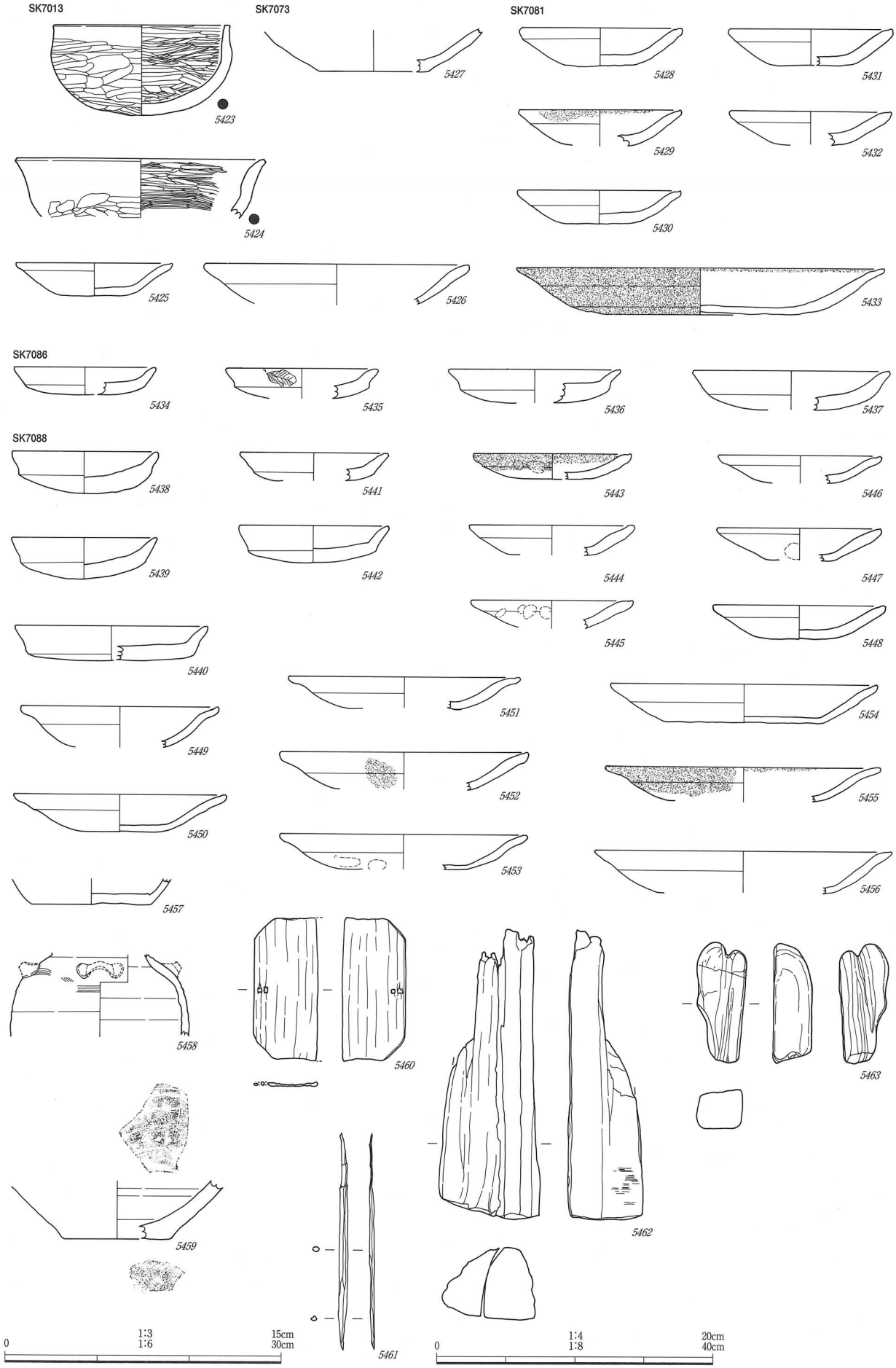
ＳＫ7088の南側に重複し，平面形は7.1m×3.7m，深さ99cmを測る不整な方形を呈する。埋土は礫が多く混じる灰色砂質シルトが主体で，最下層は黄灰色砂質シルトである。重複するＳＫ7089・ＳＫ7090・ＳＫ8055より古く，ＳＫ7093より新しい。出土遺物には須恵器・中世土師器（5470～5473）・珠洲・中国製青磁（5474）・瓦質土器がある。

5470～5473は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.2cm～12cmを測り，器形には口縁部が短く外反す



第521図　遺構実測図

SK7088・SK7089・SK7091・SK7093・SK7319



第522図　遺物実測図　（*5423～5457*　1/3，*5460・5461*　1/4，*5458・5459・5463*　1/6，*5462*　1/8）
SK7013（*5423～5426*）　SK7073（*5427*）　SK7081（*5428～5433*）　SK7086（*5434～5437*）　SK7088（*5438～5463*）

るもの（5470～5472），口縁部が外反して開くもの（5473）がある。15世紀中頃～後半のもの。5474は龍泉窯系青磁碗。外面には鎬蓮弁文が施され，釉は畳付けを越えて高台内面途中までかかり，畳付けの釉は削りとらない。

7093号土坑（ＳＫ7093，第368・521・524図）

ＳＤ7003の西に並行し，ＳＫ8055との間に位置する。ＳＫ7088～ＳＫ7091・ＳＥ7092と重複するが，新旧関係では最も古い。埋土は上層がオリーブ褐色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器（5475）・珠洲がある。

5475は中世土師器皿。口径11.2cmを測り，口縁部が外反して開き端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7081号土坑（ＳＫ7081，第522・523図）

西へ屈曲したＳＤ7030内部，ＳＤ7011の東約１ｍに位置し，平面形は3.4ｍ×2.1ｍの不整形を呈し，深さ38cmを測る。埋土は暗灰黄色砂礫土で，土師器・須恵器・中世土師器（5428～5433）・珠洲・瓦質土器・加工板・加工材が出土している。

5428～5433は非ロクロ成形の中世土師器。口径8.6cm～19.8cmを測り，口縁部が大きく外反し，端部はつまみ上げて面をとる。5433は口縁内端部から外面全面に煤が付着している。15世紀後半のもの。

7139号土坑（ＳＫ7139，第524図）

ＳＢ177の内部，ＳＢ180の東に位置し，直径62cm，深さ56cmを測る。出土遺物には中世土師器（5477・5478）・中国製青磁がある。

5477・5478は中世土師器皿。口径9.6cm・10.5cmを測り，口縁部が外反して開き端部はやや肥厚している。16世紀後半のもの。

7102号土坑（ＳＫ7102，第523図）

ＳＤ7099の南に位置し，北部分は不明であるが，長さ4.7ｍ，幅80cm，深さ８cmを測る。埋土は黄灰色粘質シルトで，中世土師器が出土している。

7165号土坑（ＳＫ7165，第523・524図）

ＳＤ7011の東，ＳＤ7133・ＳＤ7121上に位置し，1.6ｍ×0.9ｍ，深さ51cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，灰色砂質シルトが主体で，下層は灰色粘質シルトが堆積しており，埋土を貫く噴砂がみられる。出土遺物には中世土師器（5479～5486）・珠洲がある。

5479～5486は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径は7.6cm～11.8cmを測り，口縁部が大きく外反して開く。口縁端部の形態には面取りするもの（5479），つまみ上げるもの（5480～5482・5486），やや尖るもの（5483～5485）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

7166号土坑（ＳＫ7166，第524図，図版222・255）

ＳＤ7011の東に沿うように位置する。確認した規模は3.2ｍ×0.7ｍ，深さ51cmを測り，出土遺物には中世土師器（5487～5508）・珠洲・桶・曲物（5509）・箸（5510）・加工板（5511）がある。

5487～5508は中世土師器皿。口径は8.1cm～14.8cmを測り，器形には口縁部が内湾気味なもの（5487），口縁部が外反して開くもの（5488～5508）がある。口縁端部の形態にはつまみ上げるもの（5489～5495・5504～5508），つまみ上げてやや面をとるもの（5496～5498），つまみ上げて丸く収めるもの（5499～5503）がある。15世紀後半のもの。

5509は破損が激しく直径の復元が困難であるが，下端にタガがつく曲物。樺皮で綴じられているが綴じ方は不明である。5510は両端を尖らせた箸。5511は側面に等間隔で３箇所釘穴がある加工板。上

端の釘孔は貫通しており，下端は破損のため溝状に残存している。

7171号土坑（ＳＫ7171，第526図）

ＳＫ7166の北端，ＳＤ7030上に位置し，直径78cm，深さ９cmを測り，中世土師器（5512・5513）が出土している。

5512・5513は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径9.1cm・15.2cmを測り，口縁部が大きく外反して開き端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7188号土坑（ＳＫ7188，第526図）

ＳＤ7252の北端に位置し，平面形は1.1m×0.5mの楕円形を呈し，深さ22cmを測る。中世土師器（5514）が出土している。

5514は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径９cmを測り，口縁部が大きく外反して開き端部はやや肥厚する。16世紀前半のもの。

7204号土坑（ＳＫ7204，第525図）

ＳＤ7324の北東端に位置し，平面形が74cm×56cmの楕円形を呈し，深さ16cmを測る。ＳＫ7205と重複するが，ＳＫ7204の方が新しい。埋土は黄灰色砂質シルトが主体で，中世土師器・土錘が出土している。

7223号土坑（ＳＫ7223，第525図）

ＳＢ172の整地部分ＳＫ7966とＳＢ173の整地部分ＳＫ7964との中間に位置する。平面形は1.2m×0.9mの楕円形を呈し，深さ19cmを測る。埋土は上層が灰黄色砂質シルトに黄灰色砂質シルト，浅黄色砂質土がブロック状に混じり，下層は黄灰色砂質シルトに灰色砂質シルトがブロック状に混じる。出土遺物には土師器・中世土師器がある。

7226号土坑（ＳＫ7226，第526図）

ＳＤ7180の西に隣接し，直径59cm，深さ11cmを測る。出土遺物には中世土師器（5515～5517）・珠洲がある。

5515～5517は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.5cm～15.7cmを測り，口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7233号土坑（ＳＫ7233，第525図）

調査区南東端，ＳＤ7180の東３mに位置し，規模は1.3m×1.1m，深さ８cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，中世土師器・曲物が出土している。

7234号土坑（ＳＫ7234，第525図）

ＳＤ7001の北に調査区を跨ぎ位置し，平面形は半円形を呈する。埋土は上層が礫が混じる黄灰色砂質シルト，下層が灰色砂質シルトが主体で，数種類の砂質シルトがブロック状に混じる。出土遺物は須恵器・中世土師器・瀬戸美濃がある。

7241号土坑（ＳＫ7241，第525図，図版205）

ＳＤ7001の北約６mに位置し，ＳＫ7242と重複している。平面形は1.3m×1.2mの不整形を呈し，深さ41cmを測る。埋土は灰黄色砂質シルトが主体で，下層に灰オリーブ色砂質シルト，黄灰色砂質シルトが堆積している。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器・箸がある。

7322号土坑（ＳＫ7322，第428・526図）

ＳＤ7002の南側テラス状部分で確認したもので，平面形は2.5m×1.8mの楕円形を呈し，深さ28cmを測る。出土遺物には珠洲・越前・加工材（5518）があるが，上面からの出土であるためＳＤ7002の

遺物の可能性がある。

5518は芯持ち材で，一端を尖らせ，一端を平坦にする杭状のもの。

7323号土坑（ＳＫ7323，第526・530図）

ＳＤ7001の北約２ｍを並行する溝状のもので，規模は11.1ｍ×2.4ｍ，深さ40㎝を測る。埋土は灰色砂質シルト，黄灰色砂質シルトがブロック状に混じる暗灰黄色砂質シルトが主体で，下層は灰色砂質シルトがブロック状に混じる灰色粘質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5519）・珠洲・曲物がある。

5519は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径11.8㎝を測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7327号土坑（ＳＫ7327，第530図）

ＳＫ7323南端に重複するＳＫ7328の南西に重複しており，直径1.3ｍ，深さ７㎝を測る。埋土は黄灰色砂質シルトで，中世土師器が出土している。新旧関係ではＳＫ7328が最も新しい。

7336号土坑（ＳＫ7336，第525～528図，図版222・223・255）

ＳＤ7180の南端付近，ＳＤ7011の西に位置する。平面形は台形を呈し，長辺2.6ｍ，深さ60㎝を測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層は灰色砂質シルト，下層は灰色粘質シルトであり，出土した遺物の大半が中層からである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5520～5550）・珠洲・中国製青磁・瓦質土器・漆器・折敷（5551・5552）・円形板（5553・5554）・曲物・木札・杓子（5555）・箸（5557～5570）・柱（5571）・杭（5572）・加工板・加工材（5556）・竹製品がある。

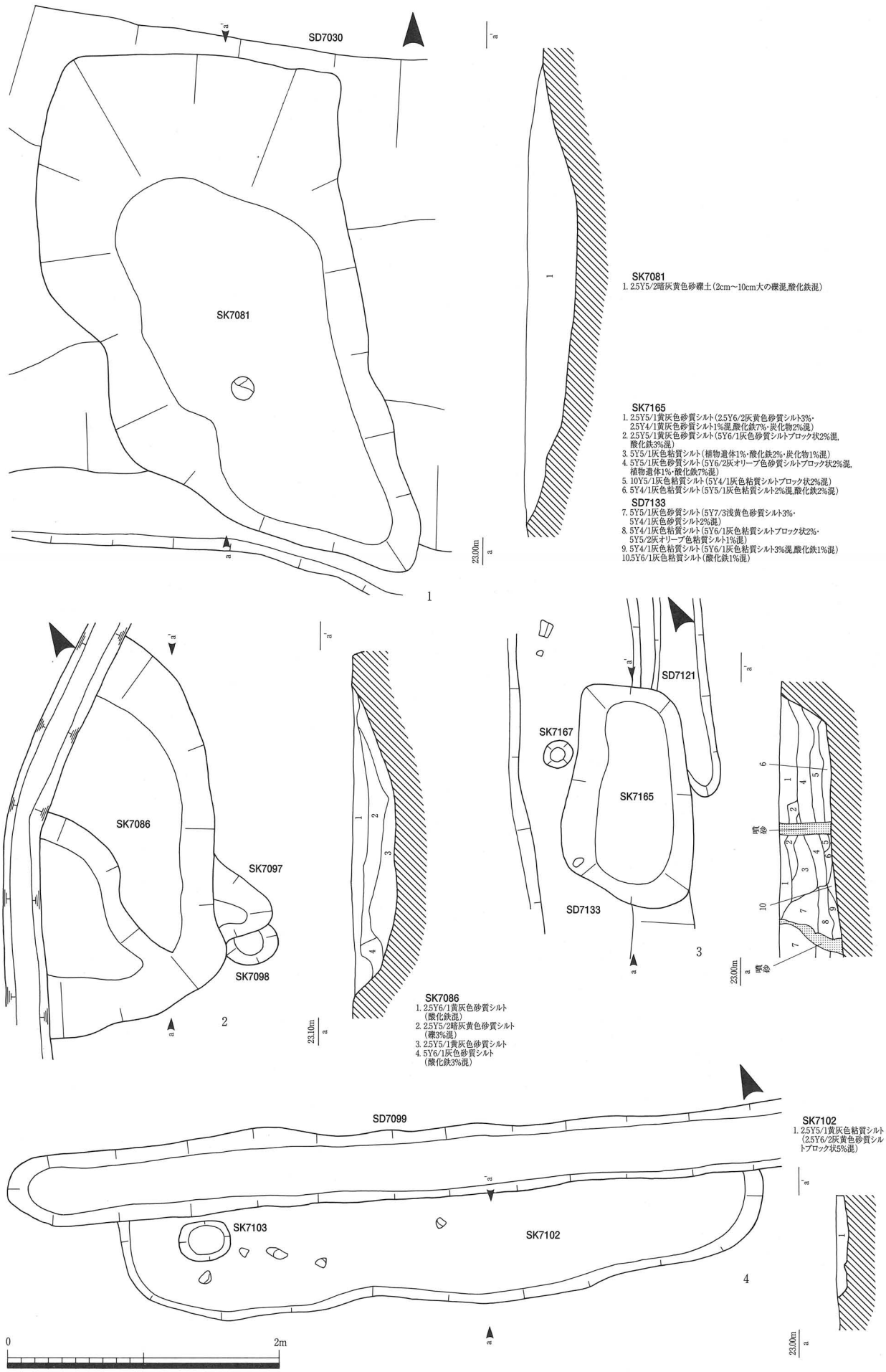
5520～5550は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径は7.4㎝～17.9㎝を測り，口縁部が大きく外反して開く。口縁端部の形態はつまみ上げて尖るもの（5520～5531），やや肥厚してつまみ上げるもの（5532～5535），つまみ上げるもの（5536～5550）がある。5548の外面には墨書と墨痕が点々とみられる。5527・5530・5533・5542には灯明皿に使用されたとみられる油痕や煤が付着している。15世紀後半～16世紀中頃のもの。

5551・5552は折敷底板。5551は一辺8.3㎝を測る方形の板の四隅を落とし，２側辺中央には側板との結合のため２孔一対の孔が穿たれている。5552も一側辺に２孔一対の孔が穿たれていることから同様な形態と考えられる。5553・5554は円形板。5553は楕円形を呈し，5554は円形を呈するとみられる。5556は断面が三角形を呈する加工材。先端を尖らせ，ほぼ中央にＶ字形の削り込みがある。5555は身幅が狭く先端を半円形にした杓子。柄が長く撹拌用とみられるが，柄と身に釘孔があることから再利用されている可能性が考えられる。5557～5570は箸。完形のものは少ないが，両端が尖るものと一端のみが尖るものがあり，断面形には長方形のものと楕円形から円形に近い多角形のものがある。5571は芯持ち材で，断面形が円形を呈し，底面は側面から削り込んで尖らせている。

7338号土坑（ＳＫ7338，第528・529図，図版255）

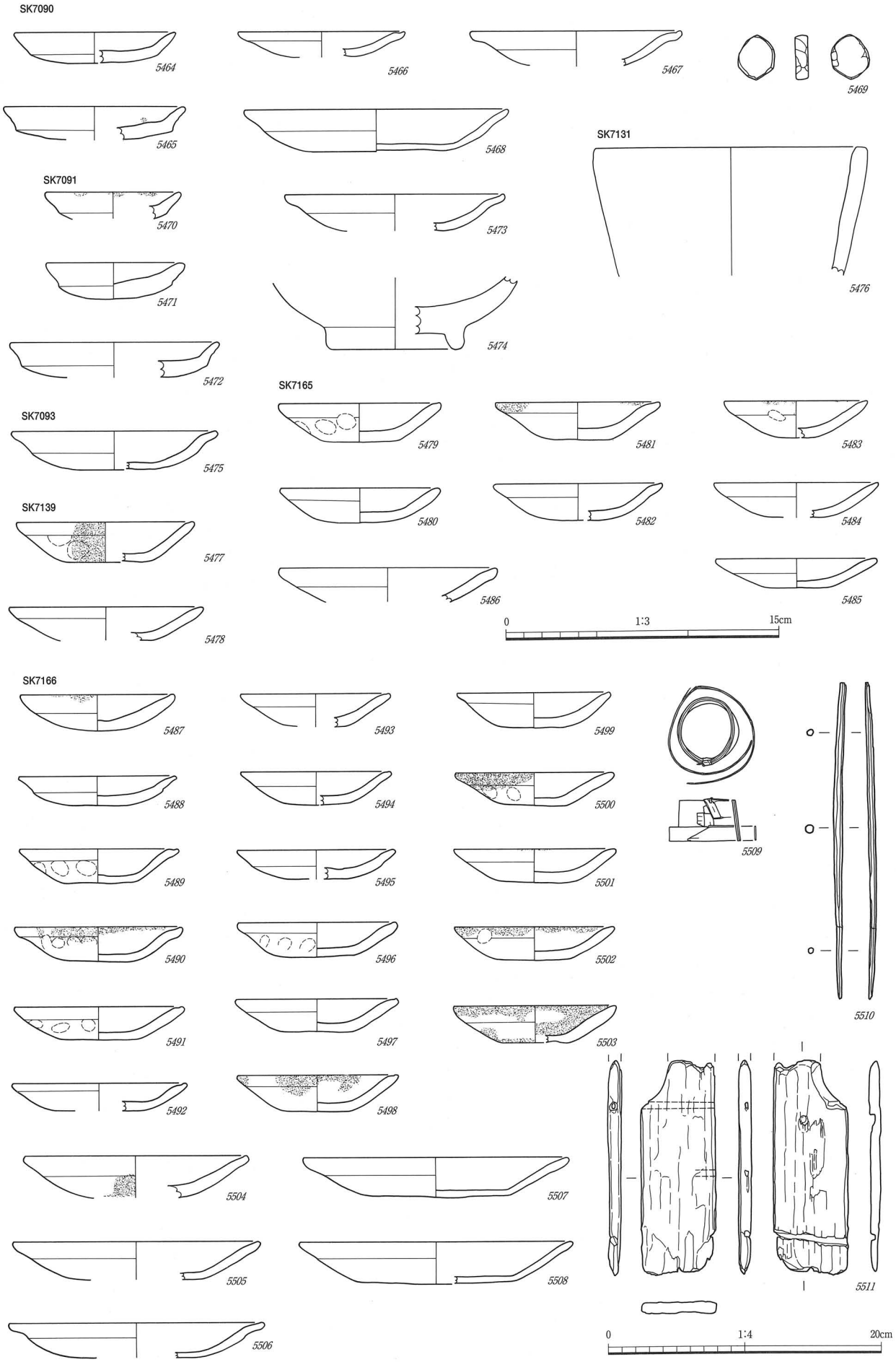
ＳＤ7180上から東西にのび，ＳＫ7337と重複している。5.9ｍ×0.9ｍの溝状で，深さ41㎝を測る。埋土は上層が灰黄色砂質シルト，中層は黄灰色砂質シルト，下層は灰色粘質シルトを主として，浅黄色砂質土などがブロック状に混じる。約３ｍ西にあるＳＤ7324とは同方向であり，区画溝の可能性が考えられる。出土遺物には須恵器・中世土師器（5575～5577）・珠洲・越前・漆器（5573）・箸（5574）がある。

5575～5577は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径9.8㎝～14.8㎝を測り，口縁部が大きく外反する。口縁端部はつまみ上げて丸く収めている。15世紀後半のもの。



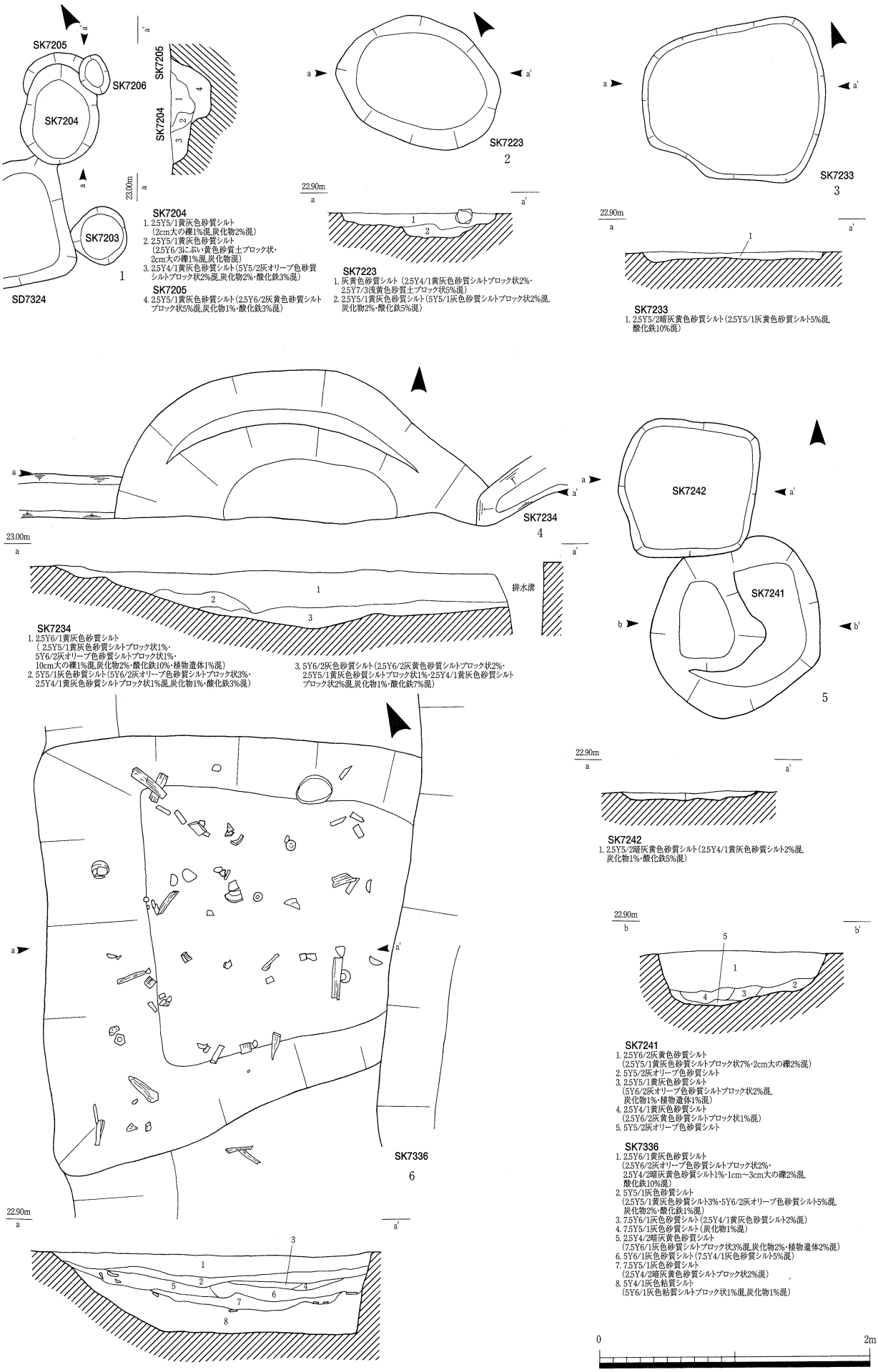
第523図　遺構実測図

1. SK7081　2. SK7086　3. SD7133・SK7165　4. SK7102



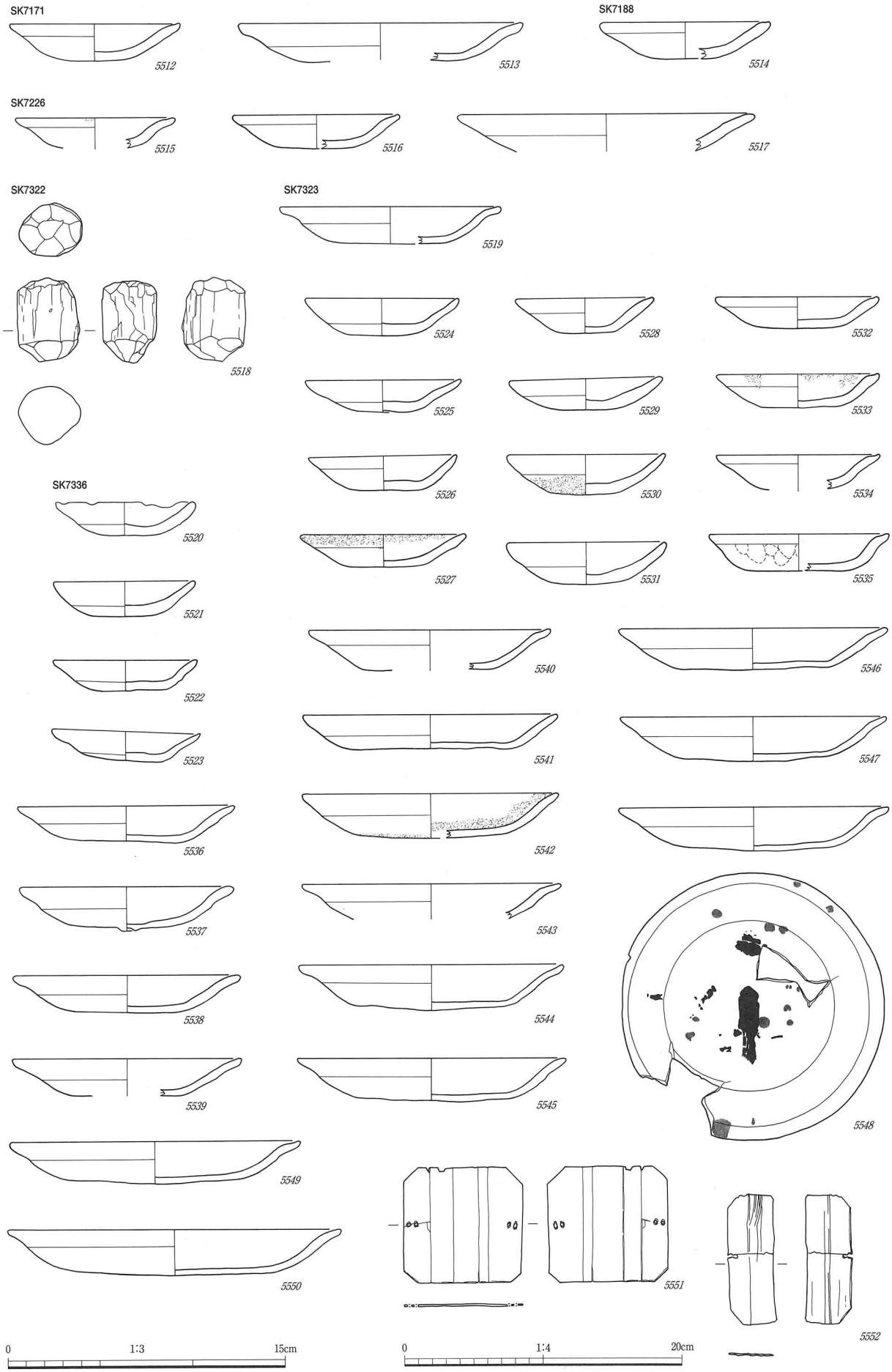
第524図　遺物実測図（*5464～5508*　1/3，*5509～5511*　1/4）

SK7090（*5464～5469*）　SK7091（*5470～5474*）　SK7093（*5475*）　SK7131（*5476*）　SK7139（*5477・5478*）
SK7165（*5479～5486*）　SK7166（*5487～5511*）

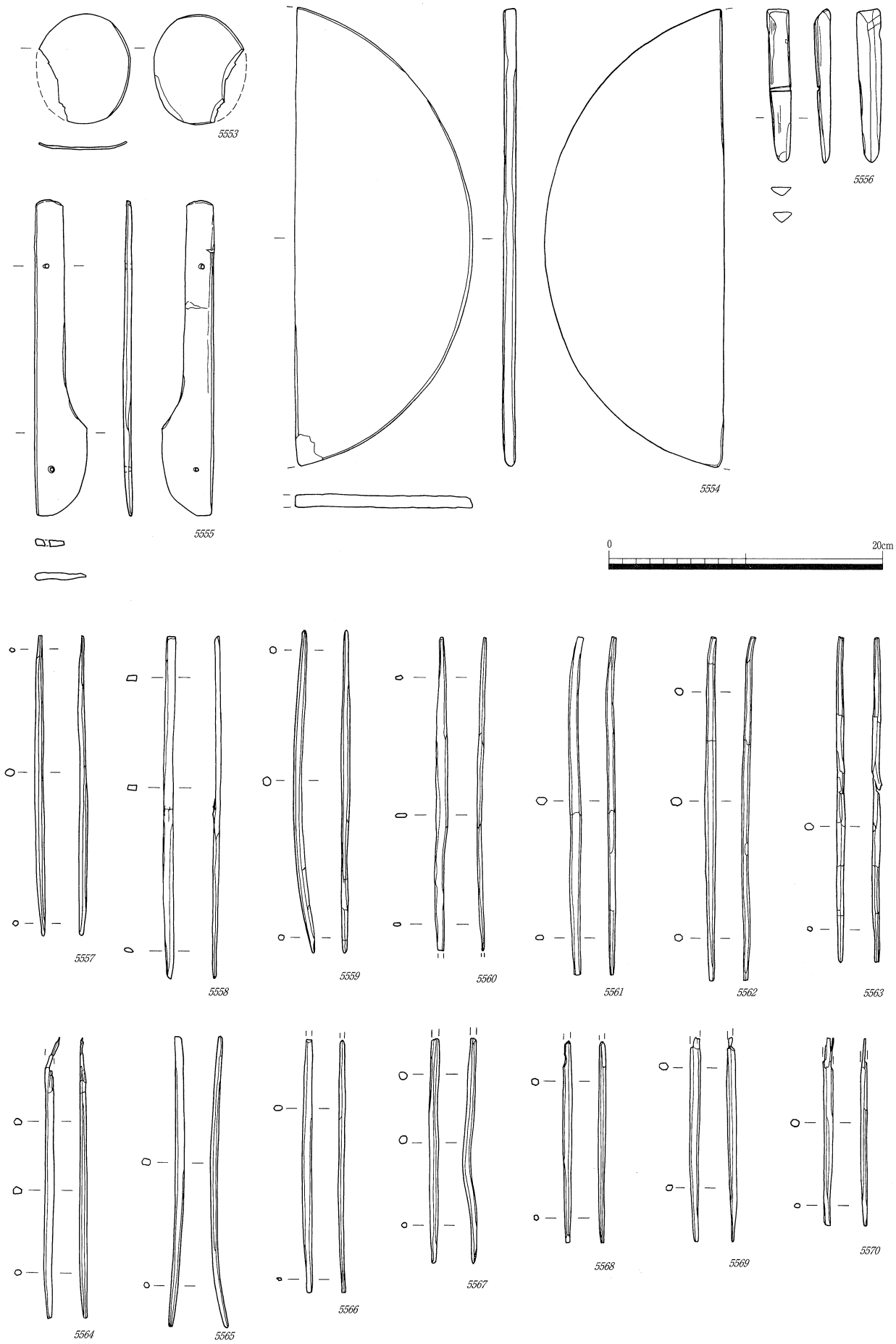


第525図　遺構実測図

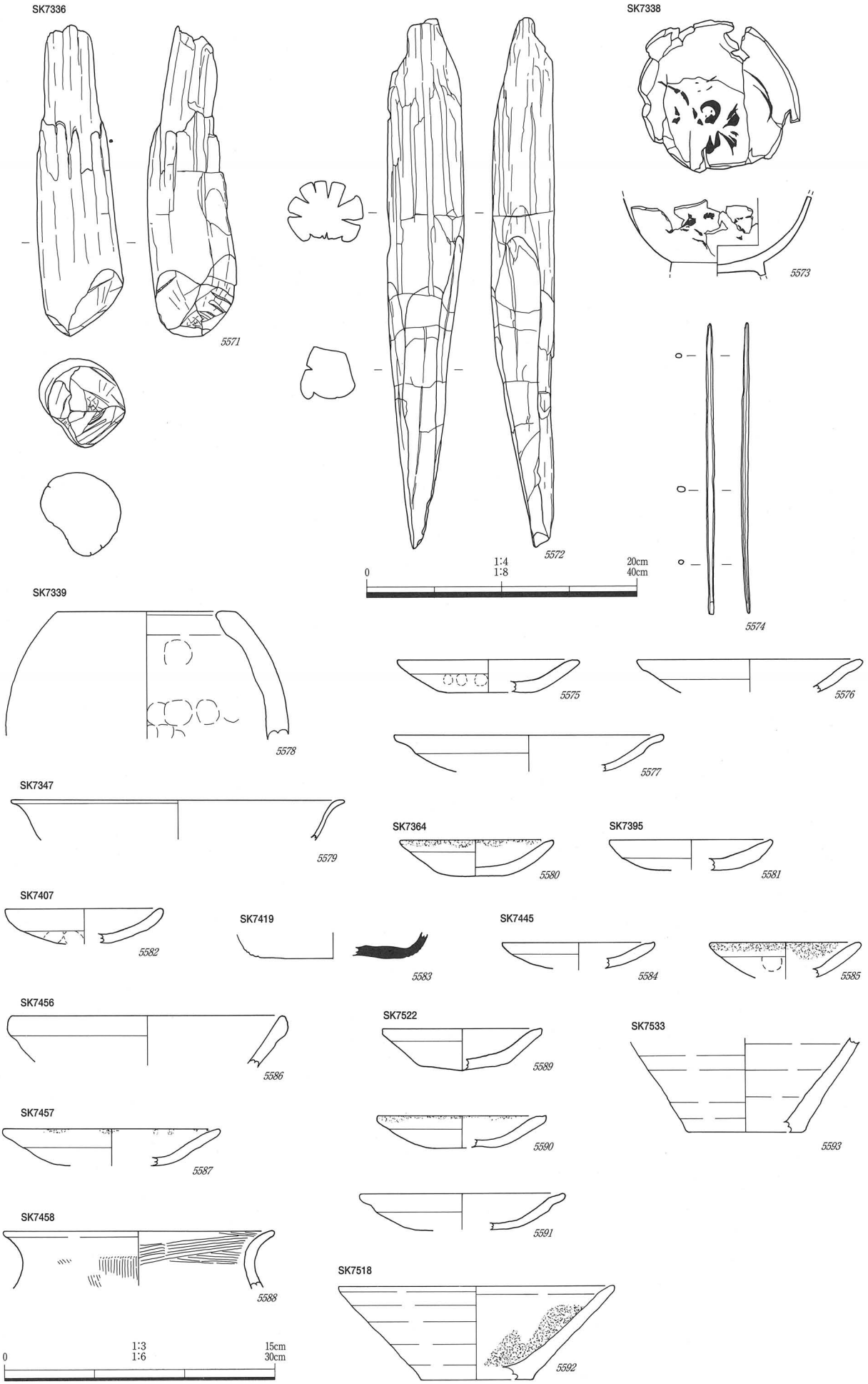
1. SK7204・SK7205　2. SK7223　3. SK7233　4. SK7234　5. SK7241・SK7242　6. SK7336



第526図　遺物実測図　（*5512～5517・5519～5550*　1/3，*5518・5551・5552*　1/4）
SK7171（*5512・5513*）　SK7188（*5514*）　SK7226（*5515～5517*）　SK7322（*5518*）　SK7323（*5519*）
SK7336（*5520～5552*）

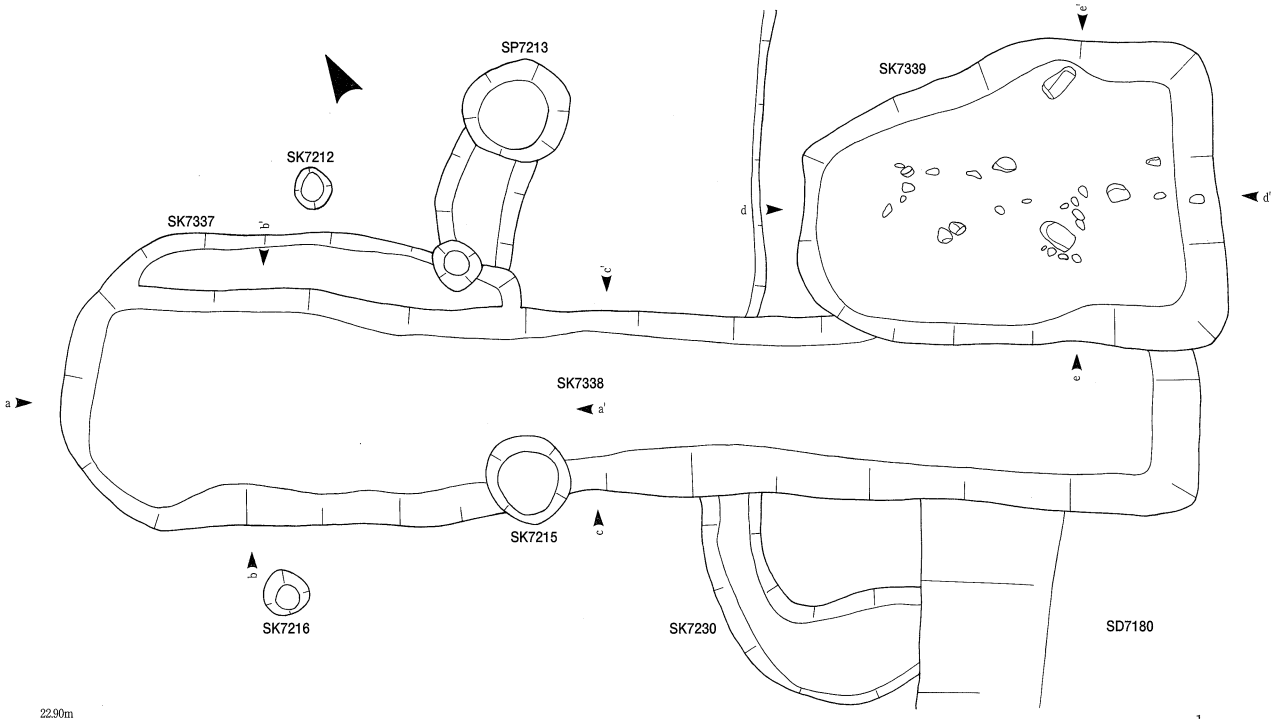


第527図　遺物実測図　(1/4)
SK7336

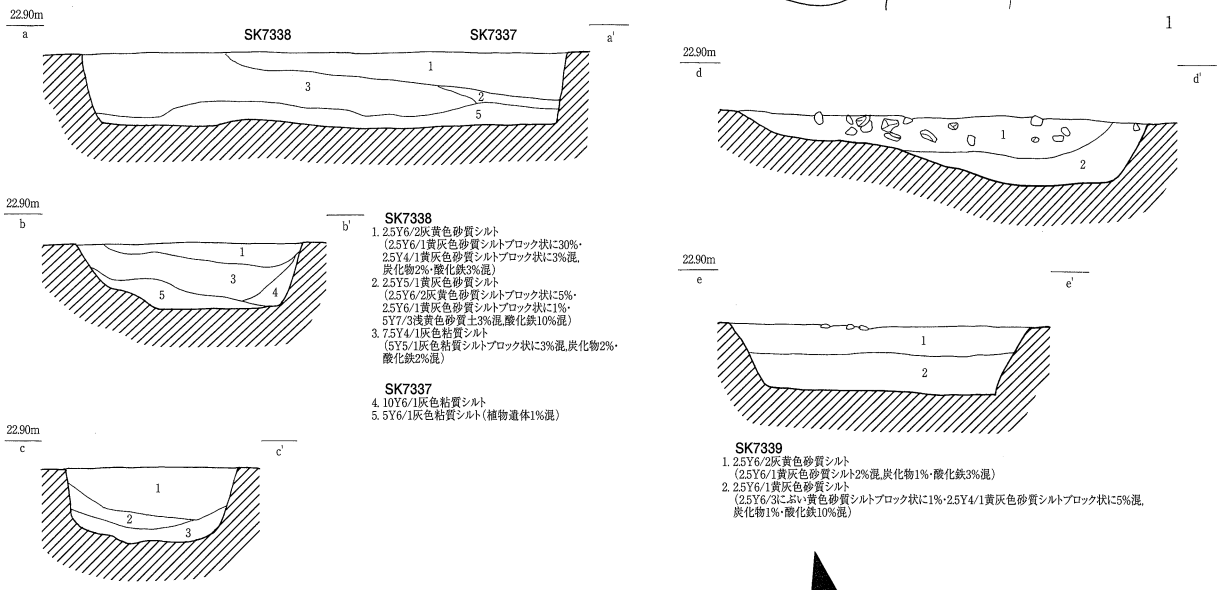


第528図　遺物実測図（*5575～5587・5589～5591*　1/3，*5573・5574・5588*　1/4，*5592・5593*　1/6，*5571・5572*　1/8）

SK7336（*5571・5572*）　SK7338（*5573～5577*）　SK7339（*5578*）　SK7347（*5579*）
SK7364（*5580*）　SK7395（*5581*）　SK7407（*5582*）　SK7419（*5583*）　SK7445（*5584・5585*）　SK7456（*5586*）
SK7457（*5587*）　SK7458（*5588*）　SK7518（*5592*）　SK7522（*5589～5591*）　SK7533（*5593*）



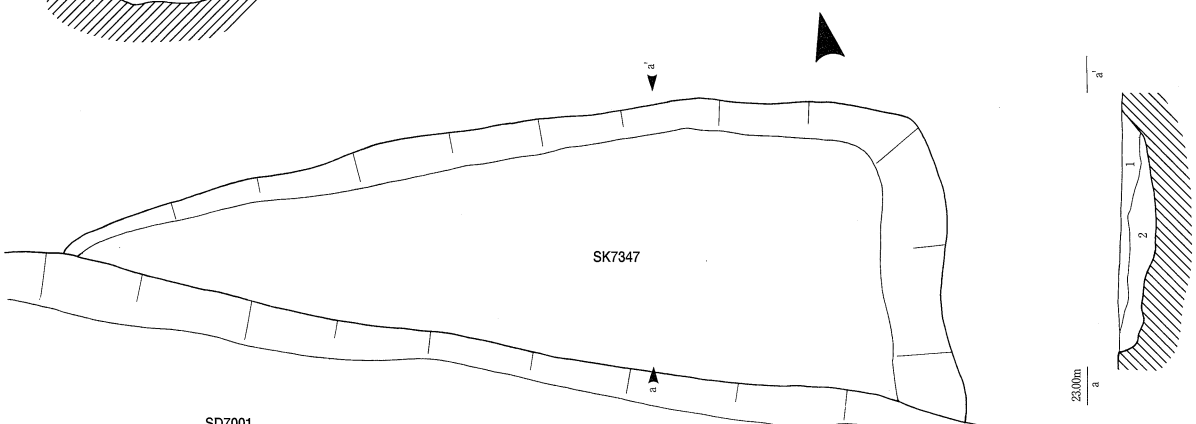
1



SK7338
1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
（2.5Y6/1黄灰色砂質シルトブロック状に30%・2.5Y4/1黄灰色砂質シルトブロック状に3%混,炭化物2%・酸化鉄3%混）
2. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状に5%・2.5Y6/1黄灰色砂質シルトブロック状に1%・5Y7/3浅黄色砂質土3%混,酸化鉄10%混）
3. 7.5Y4/1灰色粘質シルト
（5Y5/1灰色粘質シルトブロック状に3%混,炭化物2%・酸化鉄2%混）

SK7337
4. 10Y6/1灰色粘質シルト
5. 5Y6/1灰色粘質シルト（植物遺体1%混）

SK7339
1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
（2.5Y6/1黄灰色砂質シルト2%混,炭化物1%・酸化鉄3%混）
2. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトブロック状に1%・2.5Y4/1黄灰色砂質シルトブロック状に5%混,炭化物1%・酸化鉄10%混）



SK7347
1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
（2.5Y5/1黄灰色砂質シルト3%混,炭化物1%・酸化鉄3%混）
2. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトブロック状に1%・2.5Y4/1黄灰色砂質シルトブロック状に5%混,炭化物1%・酸化鉄10%混）

2

0　2m

第529図　遺構実測図
1. SK7337～SK7339　2. SK7347

5573は高台脇から緩やかに体部が立ち上がる椀で，内外面に赤色漆による花文がある。高台は欠損しているが，底部の厚みは体部のものと変わらない。5574は箸で，断面長方形で両端が尖る。

7339号土坑（ＳＫ7339，第528・529図，図版205）

ＳＫ7338の北に重複する不整形なもので，規模は2.2m×1.6m，深さ38cmを測る。ＳＤ7180上に位置しており，ＳＫ7338より新しい。埋土は上層が礫が多く，黄灰色砂質シルトが混じる灰黄色砂質シルト，下層はにぶい黄色砂質シルトがブロック状に混じる黄灰色砂質シルトである。出土遺物には土師器・中世土師器・珠洲・越前・瓦質土器（5578）・加工材がある。

5578は瓦質火鉢。口径10cmを測り，球形を呈する体部外面はミガキ，内面に指頭圧痕がみられ，体部下半は黒色化している。

7345号土坑（ＳＫ7345，第530図）

ＳＫ7323の北に位置し，東西方向に長い方形を呈するとみられ，埋土は黄灰色砂質シルトである。出土遺物には土師器・中世土師器・中国製青磁がある。

7347号土坑（ＳＫ7347，第528・529図，図版227）

ＳＤ7001の北に位置し，南側は不明であるが，確認した形状から平面形が方形を呈するとみられる。埋土は上層が灰黄色砂質シルト，下層はにぶい黄色砂質シルトがブロック状に混じる黄灰色砂質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器・中国製白磁（5579）がある。

5579は体部がやや内湾気味で口縁部が外反する口錆の端反皿で，16世紀後半のもの。

7352号土坑（ＳＫ7352，第530図）

調査区南西端，ＳＤ7002の南肩上に位置する。規模は2.2m×1.3m，深さ42cmを測り，埋土は黄灰色シルトである。出土遺物には中世土師器がある。

7356号土坑（ＳＫ7356，第531図）

ＳＤ7030の南に位置し，ＳＫ7357と重複している。平面形は4.1m×2.7mの方形を呈し，深さ35cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルト，灰色砂質シルトである。ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080がＳＫ7356を避けるように造られていることから，同時期に存在した可能性が高い。

7357号土坑（ＳＫ7357，第531図）

ＳＫ7356の西に重複し，平面形は不整な方形を呈し，規模はＳＫ7356より小さく，2.1m×1.6m，深さ27cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂礫土である。

7364号土坑（ＳＫ7364，第528・530図）

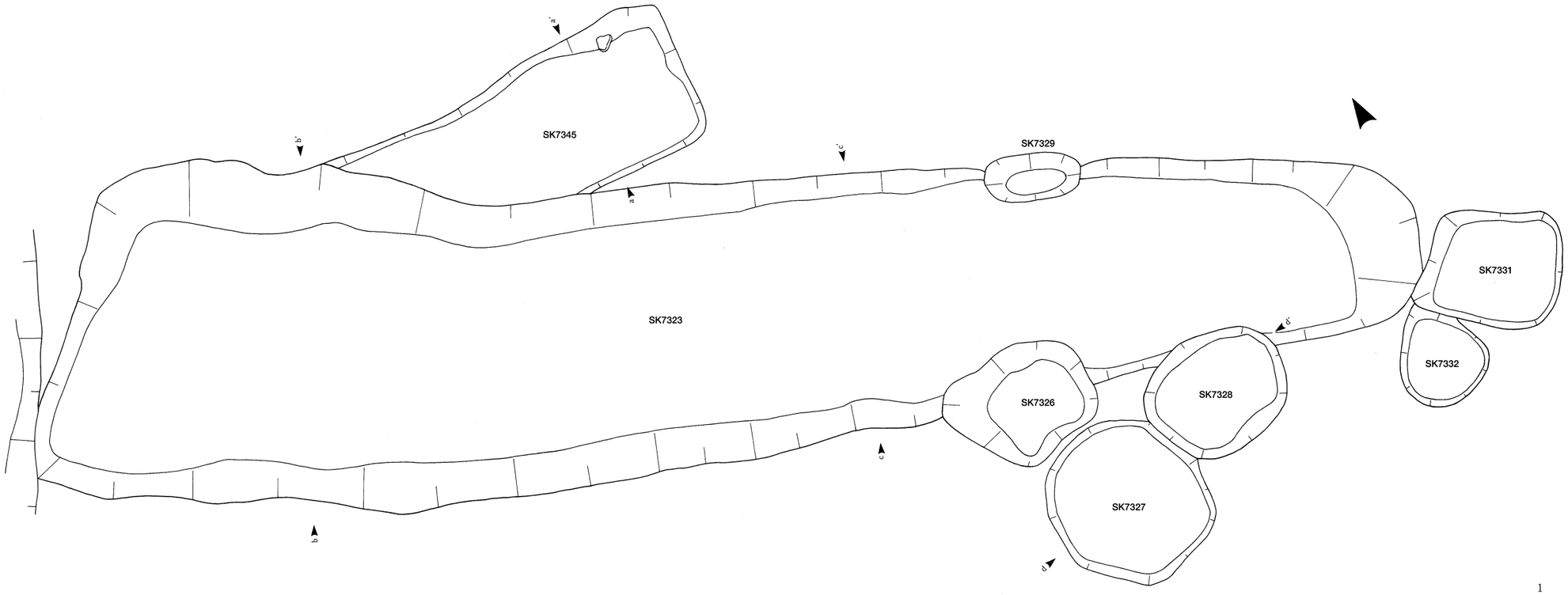
ＳＤ7180とＳＤ7023間に位置する。ＳＤ7180により南側が不明であるが，南北に長い溝状を呈する。埋土は暗灰黄色砂質シルトがブロック状に混じる灰黄色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器（5580）・珠洲がある。

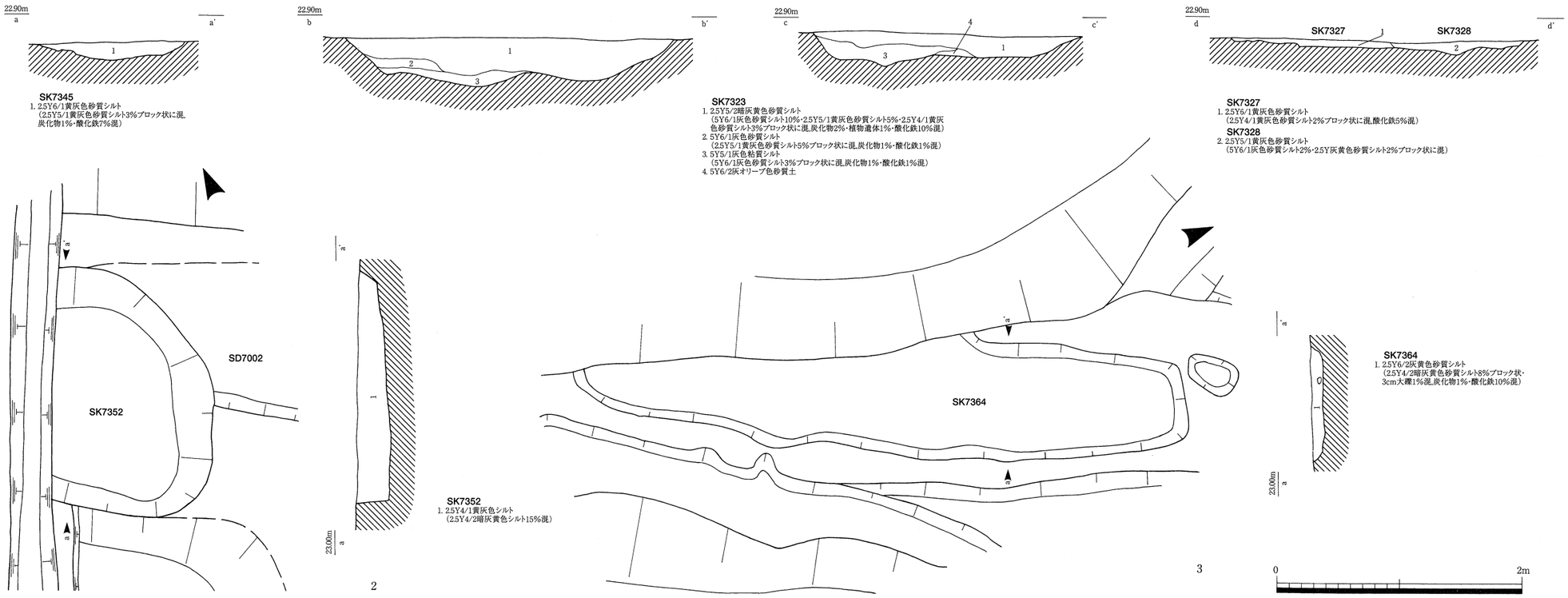
5580は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.4cmを測り，口縁端部がやや尖り，口縁端部内外面に油煙が付着している。16世紀前半のもの。

7395号土坑（ＳＫ7395，第528図）

ＳＤ7368の西に隣接し，平面形は直径42cmの円形を呈し，深さ20cmを測る。出土遺物には中世土師器（5581）がある。

5581は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.8cmを測り，丸底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。





第530図　遺構実測図

1. SK7323・SK7327・SK7328・SK7345　2. SK7352　3. SK7364

7445号土坑（ＳＫ7445，第528・532図）

調査区北端付近に位置し，ＳＫ7446～ＳＫ7448と重複するが，新旧関係では最も新しい。規模は1.5m×0.8m，深さ35cmを測り，平面形は楕円形を呈する。埋土は暗灰黄色砂質シルト，灰黄色砂質シルト，暗灰黄色砂質土であり，土師器・中世土師器（5584・5585）・珠洲が出土している。

5584・5585は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.2cm・8.4cmを測り，口縁部が大きく外反する。端部はやや肥厚してつまみ上げるもの（5584），丸く収めるもの（5585）がある。16世紀前半のもの。

7446号土坑（ＳＫ7446，第532図）

重複する土坑の中では最も古いもので，平面形は楕円形を呈するとみられる。埋土はにぶい黄色砂質シルトで，土師器・中世土師器が出土している。

7456号土坑（ＳＫ7456，第528・532図，図版227）

ＳＤ7368の西に位置するが，全形は不明である。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が灰黄色砂質土である。出土遺物には土師器・中世土師器・珠洲・中国製白磁（5586）がある。

5586は口径15cmを測り，口縁部には大きめの玉縁がつき，釉は灰色を帯びた白色を呈する。太宰府分類白磁碗Ⅳ類にあたる。

7457号土坑（ＳＫ7457，第528・532図）

調査区北端，ＳＤ7368の西に位置し，6基の土坑が重複している。規模は1.7m×1.5m，深さ45cmを測り，平面形は楕円形を呈する。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，中層が灰黄色砂質土，下層がにぶい黄色砂礫土である。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5587）がある。

5587は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径11.8cmを測り，口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げる。15世紀後半～16世紀前半のもの。

7458号土坑（ＳＫ7458，第528・532図，図版75）

調査区北端にかかり，ＳＫ7457と重複しているが，新旧関係ではＳＫ7458の方が古い。埋土は上層が灰黄色砂質シルト，下層が暗灰黄色砂質シルトで，噴砂が突き抜けている。出土遺物には土師器（5588）・須恵器・中世土師器がある。

5588は土師器甕。口径20cmを測り，内外面ともハケメ調整である。７世紀代のもの。

7518号土坑（ＳＫ7518，第411・528図，図版223）

ＳＢ180の方形竪穴状土坑ＳＫ7355の床面で確認した。平面形は60cm×32cmの楕円形を呈し，深さ17cmを測る。出土遺物には珠洲（5592）がある。

5592は珠洲擂鉢。口径30.4cmを測り，体部は直線的に開き，口縁端部に幅約２cmの内傾した内端面をもつ。卸目は摩滅が激しく不明瞭であるが，1.5cmに５目の比較的太い櫛目原体で間隔をあけて施入されている。底部内外面には煤，内面には炭化物が付着している。珠洲Ⅴ期のもの。

7522号土坑（ＳＫ7522，第528図）

ＳＤ7011・ＳＤ7170に挟まれ，規模は2.5m×1.2m，深さ14cmを測る。出土遺物には中世土師器（5589～5591）・珠洲・越前がある。

5589～5591は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.8cm～11.2cmを測り，口縁部が外反して開く。口縁端部はやや肥厚してつまみ上げるもの（5589・5590），やや強くナデてつまみ上げるもの（5591）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

7532号土坑（ＳＫ7532，第532図）

ＳＢ167の整地部分ＳＫ8065の南西隅に位置する。平面形は2.3m×1.9mの楕円形を呈し，深さ34cm

を測る。埋土は灰黄色砂質シルトが主体で，下層に黄灰色砂質シルトが堆積している。出土遺物には中世土師器・瓦質土器がある。

7533号土坑（ＳＫ7533，第528図）

ＳＢ167の整地部分ＳＫ8065上で確認した，40cm×33cm，深さ24cmを測るもの。出土遺物には中世土師器・珠洲（5593）・箆がある。

5593は珠洲壺底部。底径12.8cmを測り，底部外面には板状圧痕がみられる。

7565号土坑（ＳＫ7565，第533図）

ＳＤ7003南端付近の西肩に位置し，ＳＤ7003底面で東半部分を確認した。平面形は5.2m×2.2mの不整な方形を呈し，深さ29cmを測る。埋土は礫が混じる黄灰色砂質シルトである。西側にある建物群との関係は不明である。

7603号土坑（ＳＫ7603，第540図）

ＳＢ161～ＳＢ164が重複する地点にあり，1.3m×1.2m，深さ41cmを測る。出土遺物には中世土師器（5594）・柱があることから，建物を構成する柱穴の可能性が高いが，復元できなかった。

5594は中世土師器皿。口径8.7cmを測り，口縁部が短く外反し，底部は丸底である。15世紀中頃のもの。

7607号土坑（ＳＫ7607，第533図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上，Ｘ79Ｙ98に位置する。規模は1.3m×1.1m，深さ27cmを測り，平面形が楕円形を呈する。埋土は黄灰色砂質シルトであり，中世土師器が出土している。

7617号土坑（ＳＫ7617，第533・540図）

ＳＢ168の柱列上にあり，ＳＤ7003の東肩に位置する。一辺1.3mの隅丸方形を呈し，埋土は上層が礫・炭化物が混じる黄灰色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器（5595・5596）・珠洲がある。

5595・5596は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.4cm・13cmを測り，口縁部が大きく外反して開く。口縁端部の形態には肥厚してつまみ上げるもの（5595），つまみ上げるもの（5596）がある。16世紀前半のもの。

7622号土坑（ＳＫ7622，第533図）

ＳＫ7617の南約１ｍ，ＳＤ7003の東肩に位置する。西半部分は不明であるが，埋土は暗灰黄色砂質シルトで，下層には礫が多い。出土遺物には中世土師器がある。

7629号土坑（ＳＫ7629，第540図）

Ｘ81Ｙ107に位置し，直径33cm，深さ19cmを測る。出土遺物には中世土師器（5597）がある。

5597はロクロ成形の中世土師器皿。口径9.5cmを測り，口縁部が外反し端部を丸く収める。15世紀後半のもの。

7608号土坑（ＳＫ7608，第533図，図版205）

ＳＢ155に付随した方形竪穴状土坑ＳＫ7849の北西隅に位置する。平面形は1.9m×1.6mの楕円形を呈し，深さ16cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで，中世土師器・珠洲・越前が出土している。新旧関係ではＳＫ7608の方が新しい。

7634号土坑（ＳＫ7634，第534・540図）

ＳＢ168の柱穴ＳＰ8016と重複するが，ＳＫ7634の方が古い。平面形は2.1m×1.1mの楕円形を呈し，深さ12cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器（5598）がある。

5598は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径11.2cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7638号土坑（ＳＫ7638，第534・540図）

ＳＫ7634の南に近接し，ＳＫ7639と重複している。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，中世土師器（5599～5601）・珠洲・越前が出土している。

5599～5601は中世土師器皿。口径7.8cm～8.6cmを測り，器形には口縁部が短く外反するもの（5599・5600），口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げるもの（5601）がある。15世紀中頃～後半のもの。

7639号土坑（ＳＫ7639，第534・540図）

ＳＢ169の柱穴ＳＰ7636とＳＫ7638とに重複しており，新旧関係では最も新しい。南端はＳＤ7324により不明であるが，3.8m×2.1m，深さ33cmを測り，平面形は方形を呈するとみられる。埋土には炭化物が混じり，上層が灰黄色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5602～5611）・珠洲・越前・中国製青磁・瓦質土器・石製品がある。

5602～5611は中世土師器皿。口径7.4cm～12.4cmを測り，器形には平底で口縁部が短く外反するもの（5602），口縁部が大きく外反するもの（5603～5611）がある。口縁端部の形態にはつまみ上げて小さく面をとるもの（5603～5606・5608），端部をつまみ上げやや尖るもの（5607・5609～5611）がある。15世紀中頃～後半のもの。

7685号土坑（ＳＫ7685，第534・540図）

ＳＤ7324とＳＤ7003とに重複しており，新旧関係はＳＤ7324，ＳＫ7685，ＳＤ7003の順に新しくなる。平面形は方形を呈するとみられ，埋土は暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物には中世土師器（5612・5613）がある。

5612・5613は中世土師器皿。口径8.2cm・18.8cmを測り，口縁部が大きく外反し，端部形態にはやや肥厚してつまみ上げるもの（5612），つまみ上げるもの（5613）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

7718号土坑（ＳＫ7718，第368・540図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上で確認した直径46cm，深さ15cmを測るもの。出土遺物には土師器・中世土師器（5614・5615）・珠洲（5616）がある。

5614・5615は中世土師器皿。口径9.8cm・12.8cmを測り，口縁部が短く外反するもの（5614），口縁部が大きく外反し端部がやや尖るもの（5615）がある。15世紀中頃・16世紀後半のもの。5616は珠洲壺。口径13.8cmを測り，頸部は緩やかに外傾し，周囲にヨコナデ調整による微隆起がみられる。口縁形態は端部を下向きに突出させる。珠洲Ⅳ期のもの。

7722号土坑（ＳＫ7722，第535図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上，Ｘ78Ｙ96に位置し，ＳＫ7723と重複するが，新旧関係ではＳＫ7722が新しい。直径80cm，深さ58cmを測り，埋土は上層が黄灰色シルト，下層が黄灰色粘土質シルトである。出土遺物には中世土師器がある。

7726号土坑（ＳＫ7726，第540図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上で確認し，規模は48cm×35cm，深さ40cmを測る。出土遺物には珠洲（5617）がある。

5617は珠洲壺。口径10.6cmを測り，口縁形態は崩れた方頭を呈する。珠洲Ⅴ期のもの。

7728号土坑（ＳＫ7728，第535・540図，図版206）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上，Ｘ78Ｙ98に位置し，ＳＫ7729と重複するが，新旧関係ではＳＫ7729が新しい。出土遺物には中世土師器（5618）・石製品がある。

5618はロクロ成形の中世土師器皿。底径3.8cmを測り，底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。

7741号土坑（ＳＫ7741，第540図）

ＳＢ156の方形竪穴状土坑ＳＫ8145上で確認したもので，56cm×46cm，深さ16cmを測る。出土遺物には中世土師器（5619）がある。

5619は中世土師器皿。口径は8.2cmを測り，丸底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7765号土坑（ＳＫ7765，第540図）

Ｘ80Ｙ98に位置し，ＳＢ155・ＳＢ156の方形竪穴状土坑上で確認した。規模は直径28cm，深さ21cmを測り，出土遺物には中世土師器（5620）がある。

5620は中世土師器皿。口径9.7cmを測り，口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7775号土坑（ＳＫ7775，第540図）

Ｘ82Ｙ97に位置し，ＳＫ7087に重複する。平面形は1.1m×0.6mの不整形を呈し，深さ５cmを測り，出土遺物には中世土師器（5621）がある。

5621は中世土師器皿。口径8.8cmを測り，口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7776号土坑（ＳＫ7776，第537・540図）

調査区端に位置し，ＳＤ7004・ＳＫ7868と重複する。新旧関係はＳＫ7868，ＳＫ7776，ＳＤ7004の順に新しく，ＳＫ7776の底面からはＳＫ7781・ＳＫ7783～ＳＫ7887が検出されている。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黒褐色砂質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5622）・珠洲・越前がある。底面で確認した土坑ではＳＫ7783から中世土師器（5625）・加工材・砥石（5626），ＳＫ7785から中世土師器，ＳＫ7786から須恵器が出土している。

5622は中世土師器皿。口径7.6cmを測り，丸底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。5625は口径6.8cmを測り，平底で口縁部が内湾気味に立ち上がる。

5626は丹波・山城産の砥石。両長側面と短側面に鋸挽き痕がみられる。

7778号土坑（ＳＫ7778，第540図）

ＳＫ7869上で確認した，直径24cm，深さ16cmを測るもの。出土遺物には中世土師器（5623・5624）がある。

5623・5624は中世土師器皿。口径7.8cm・11.8cmを測り，口縁部が短く外反するもの（5623），体部が内湾気味に立ち上がるもの（5624）がある。15世紀中頃～後半のもの。

7788号土坑（ＳＫ7788，第536・540図，図版214）

ＳＢ163の方形竪穴状土坑で，ＳＤ7551・ＳＤ7002とが交わる地点にあり，ＳＫ7792・ＳＥ7813と重複する。ＳＥ7813の掘形が大きいため，ＳＫ7788とＳＫ7792との新旧関係は不明である。埋土は黄灰色砂質シルトであり，中世土師器（5627）・中国製青磁（5628）が出土している。

5627は中世土師器皿。口径は7.2cmを測り，尖り気味の丸底に短く外反する口縁部がつく。15世紀中頃のもの。5628は龍泉窯系青磁碗。断面四角形の高台をもつが，下部外面の斜めの面取りが大きい。全面施釉後，底部外面の釉を輪状に削り取っている。内面見込みには草花文のスタンプがみられる。上田分類のＥ類の底部と考えられる。

7792号土坑（ＳＫ7792，第536図）

ＳＥ7813と重複する方形竪穴状土坑で，ＳＢ163に付随したものと考える。確認した規模は2.6m×2.1m，深さ25cmを測り，埋土は礫が多い黄灰色砂質シルトである。

7801号土坑（ＳＫ7801，第535図）

ＳＢ160の方形竪穴状土坑で，調査区西端に位置し，調査区外へのびる。ＳＤ7551と重複しているが，ＳＫ7801の方が新しい。確認した規模は4.5m×4.3m，深さ57cmを測る。西にあるＳＫ7802～ＳＫ7804はＳＫ7801より新しく，ＳＫ7814はＳＫ7801より古い。埋土は黄灰色砂質シルトで，下層には礫が混じる。出土遺物には中世土師器がある。

7803号土坑（ＳＫ7803，第540図）

ＳＢ160の方形竪穴状土坑ＳＫ7801上に位置し，出土遺物には中世土師器（5629）がある。

5629は中世土師器皿で，口径8.2cmを測る。口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げて面をとる。15世紀後半のもの。

7853号土坑（ＳＫ7853，第540図）

Ｘ82Ｙ99に位置し，直径１m，深さ22cmを測り，出土遺物には中世土師器・珠洲（5630）がある。

5630は珠洲Ｒ種壺で，底径11.8cmを測る。

7868号土坑（ＳＫ7868，第537図）

ＳＫ7776の南に重複し，調査区外にのびている。確認した規模は1.6m×1.2m，深さ23cmを測り，埋土は黄灰色砂質シルトで，越前が出土している。

7890号土坑（ＳＫ7890，第540図）

ＳＢ164内部に位置するが，建物とは直接関連しない。平面形は1.6m×0.8mの方形で，深さ18cmを測る。出土遺物には中世土師器（5631）・越前がある。

5631は中世土師器皿。口径10.9cmを測り，口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7893号土坑（ＳＫ7893，第373・540・552図）

ＳＢ164の整地部分ＳＫ8051の南から東側に緩やかに屈曲する溝状のもの。埋土は礫が多量に混じる黄灰色砂質シルトで，須恵器・中世土師器（5632・5633）・越前が出土している。ＳＫ8051との関連は不明であるが，排水溝的な機能をもつ可能性が考えられる。

5632・5633は中世土師器皿で，口径は7.6cm・7.8cmを測る。やや丸底気味で，口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7908号土坑（ＳＫ7908，第538図）

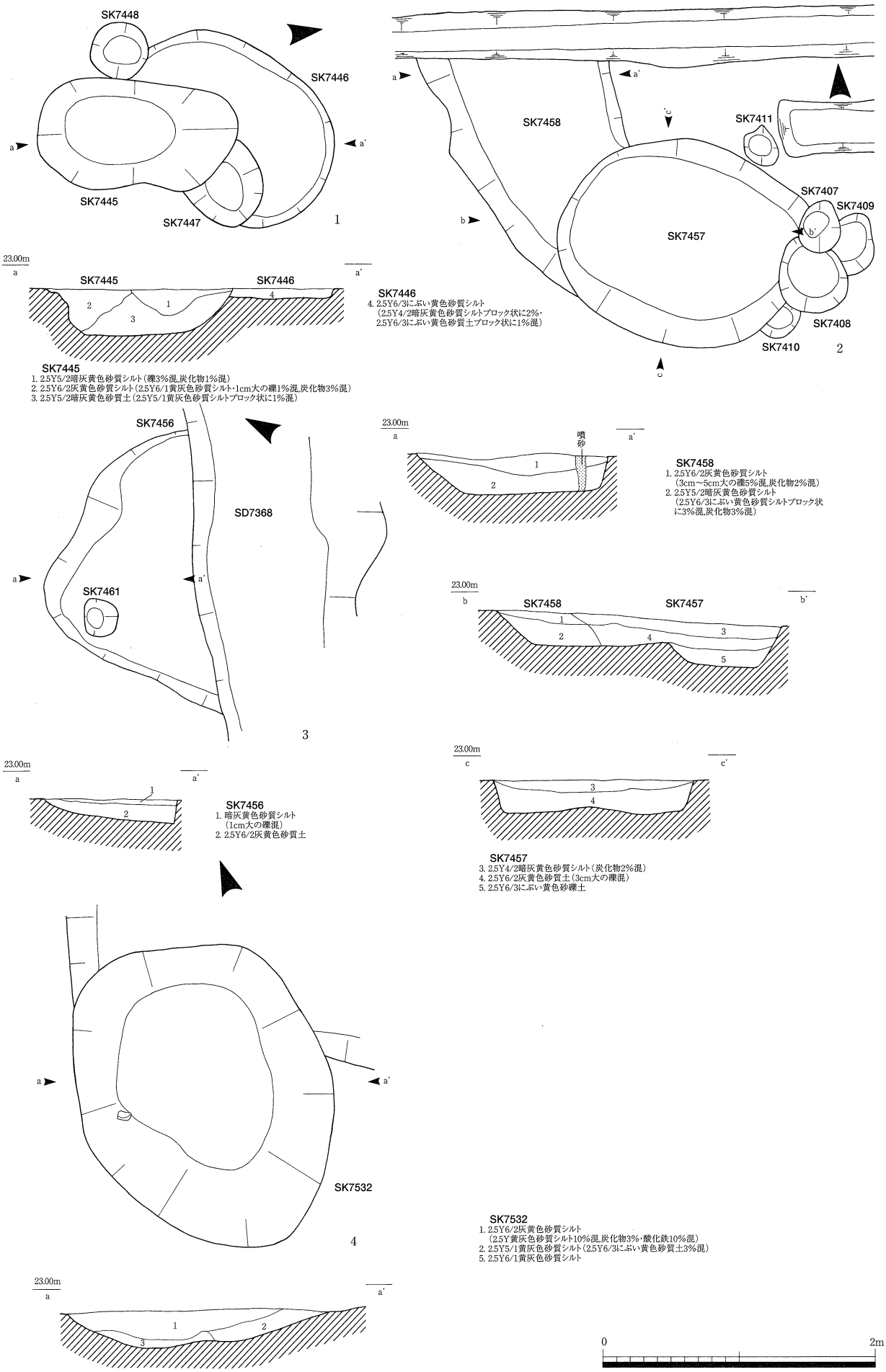
ＳＤ7003の東約２mに位置し，ＳＫ7910と重複している。平面形は2.9m×2.5mの不整な方形を呈し，深さ11cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトであり，須恵器・中世土師器が出土している。相対的には遺構が少ない地点であるが，ＳＫ7908付近には小型の土坑が数基隣接することから，整地された部分をもつ建物があった可能性も考えられる。

7910号土坑（ＳＫ7910，第538図）

ＳＫ7908の北に重複する。1.6m×1.4m，深さ23cmを測り，平面形は不整な楕円形を呈する。埋土は上層が黒色粘土質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトであり，土師器・中世土師器・中国製青磁が出土している。

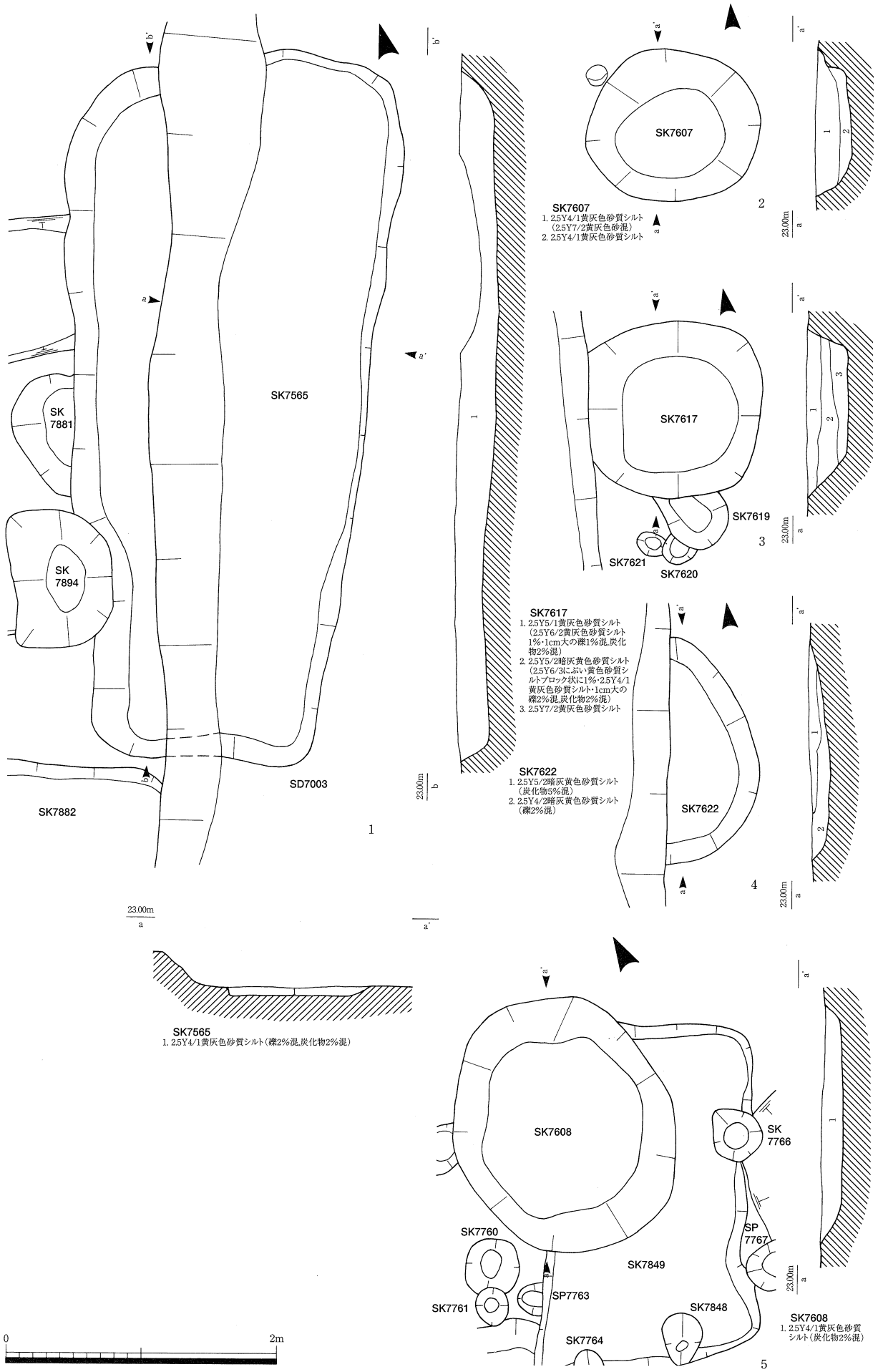
7925号土坑（ＳＫ7925，第538・540図）

ＳＤ7003の東肩，ＳＢ172の柱穴ＳＰ7920・ＳＰ7923他複数の土坑と重複しており，新旧関係ではＳ



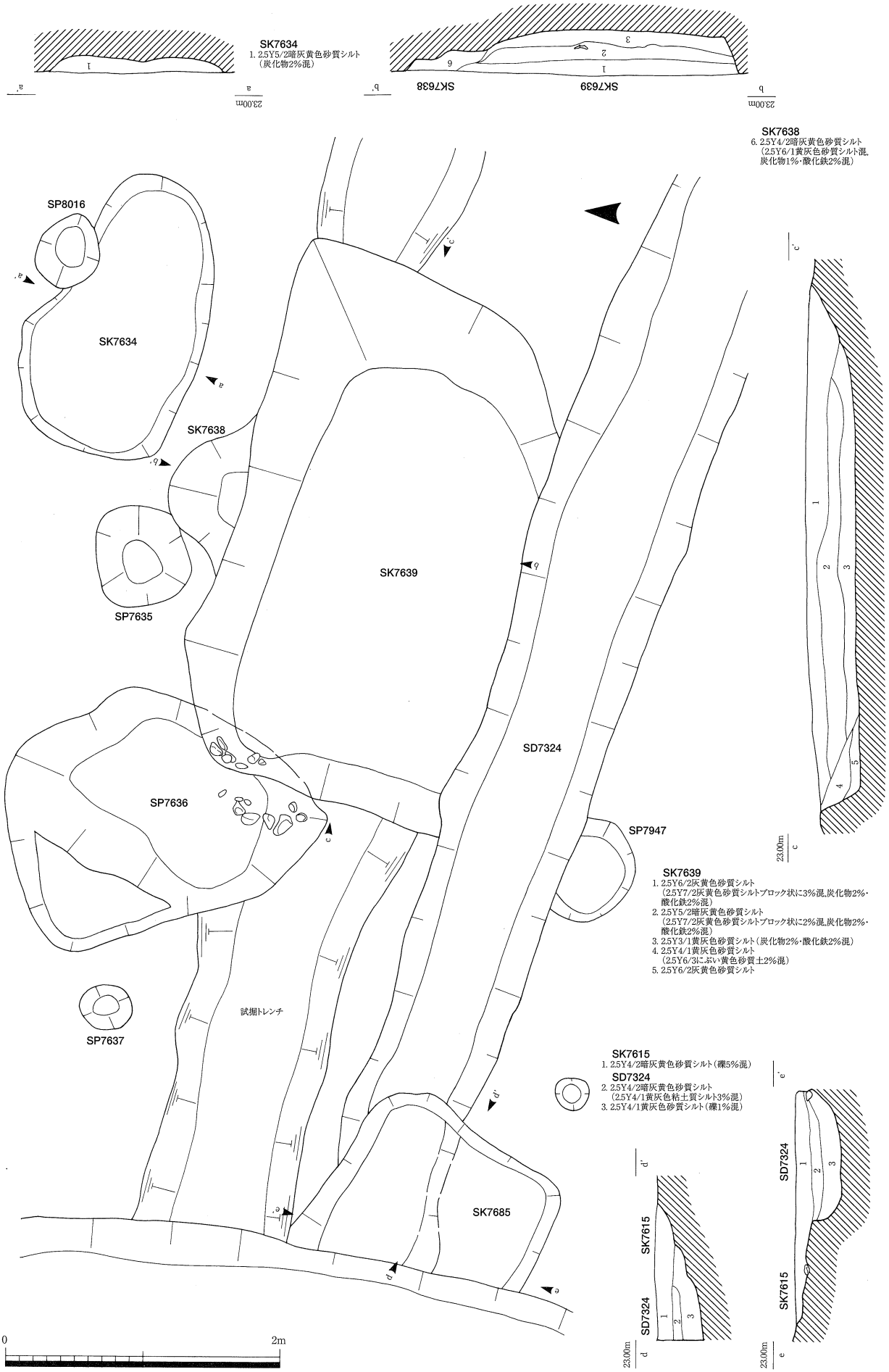
第532図　遺構実測図

1. SK7445・SK7446　2. SK7457・SK7458　3. SK7456　4. SK7532



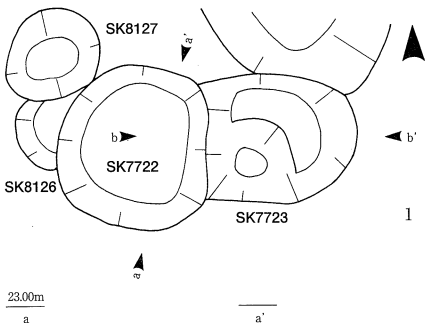
第533図　遺構実測図

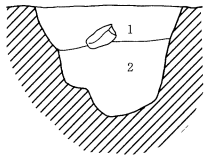
1. SK7565　2. SK7607　3. SK7617　4. SK7622　5. SK7608



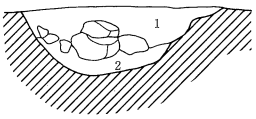
第534図　遺構実測図

SK7634・SK7638・SK7639・SK7685

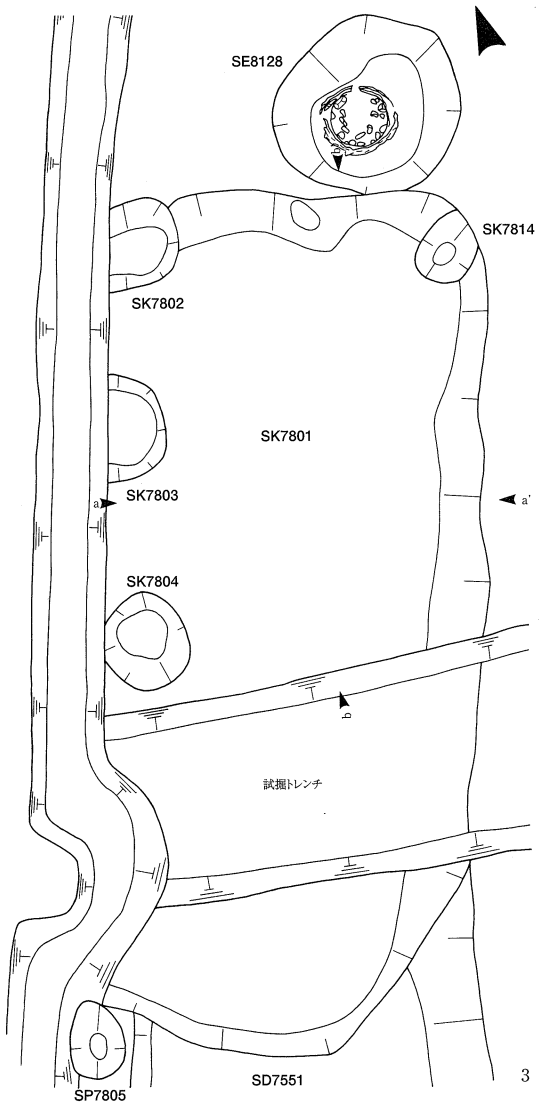


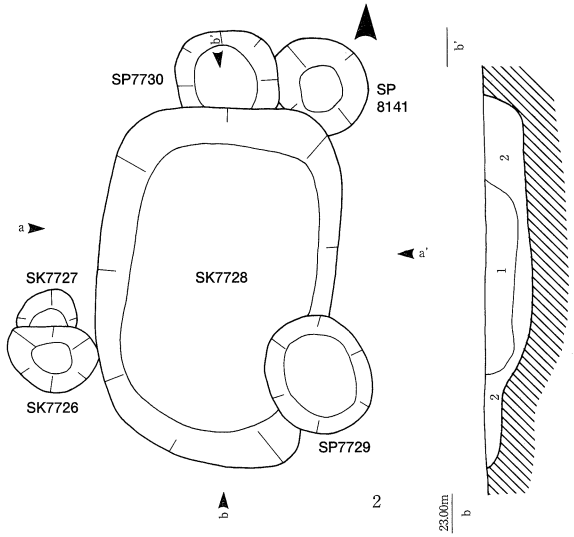


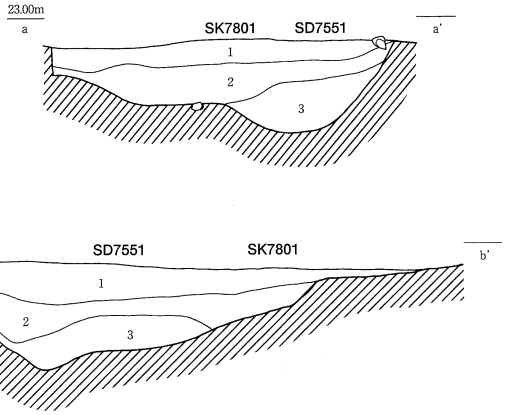
SK7722
1. 2.5Y4/1黄灰色シルト
（2.5Y7/2灰黄色砂混）
2. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト



SK7723
1. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
（1cm大の礫2%混,炭化物1%混）
2. 5Y6/2灰オリーブ色砂質土（礫混）







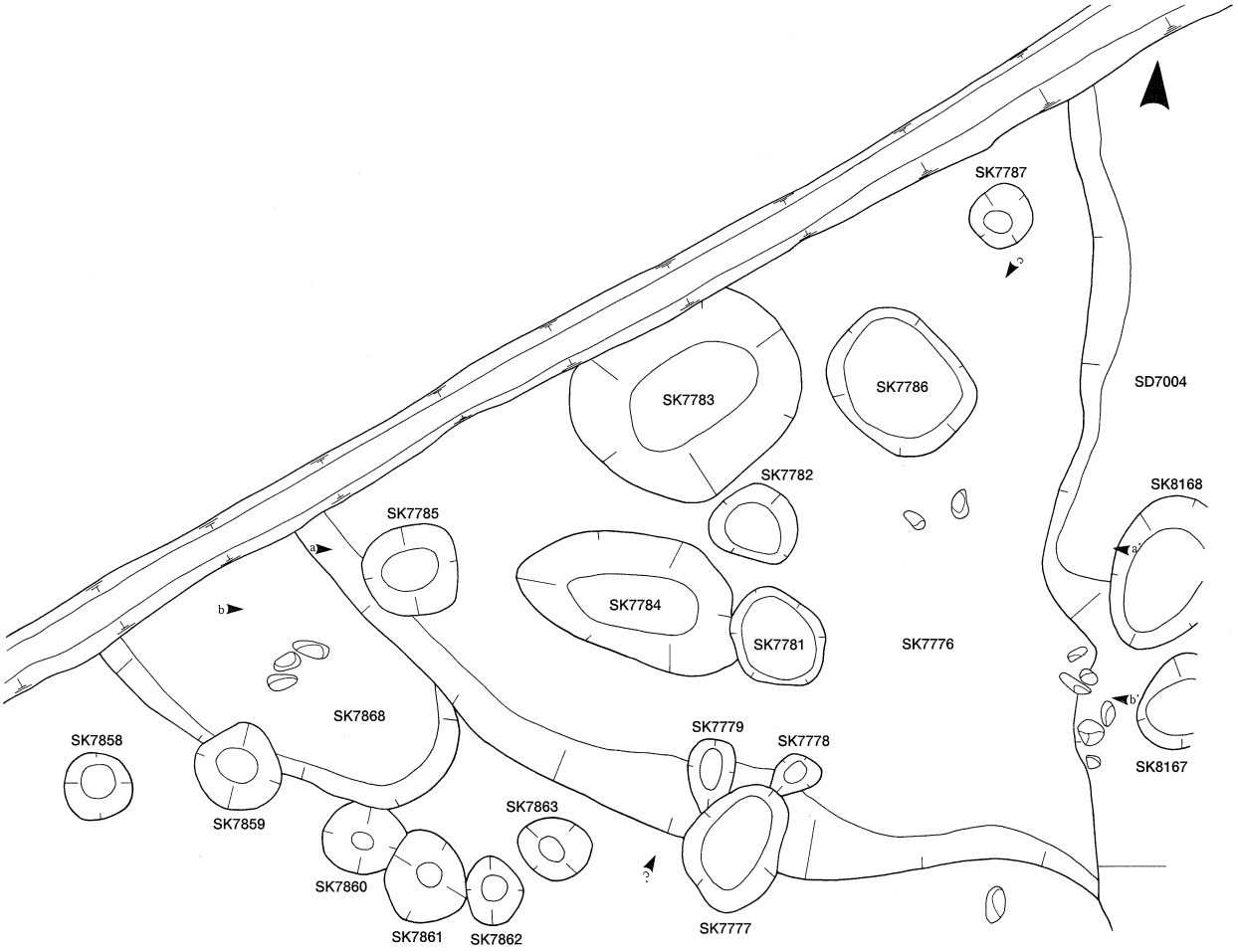
SK7801
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂7%・2.5Y4/1黄灰色砂3%混）
2. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（礫5%混）
SD7551
3. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/1黄灰色砂ブロック状50%混）

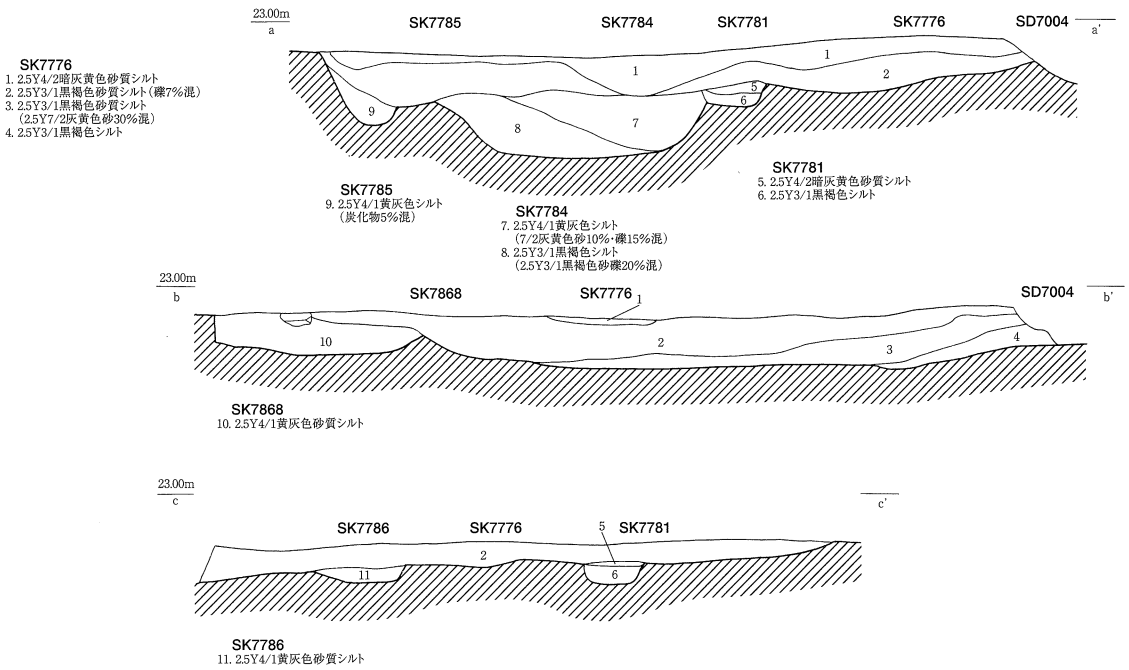
SK7728
1. 2.5Y4/1黄灰色シルト
2. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト

0　2m

第535図　遺構実測図
1. SK7722・SK7723　2. SK7728　3. SK7801

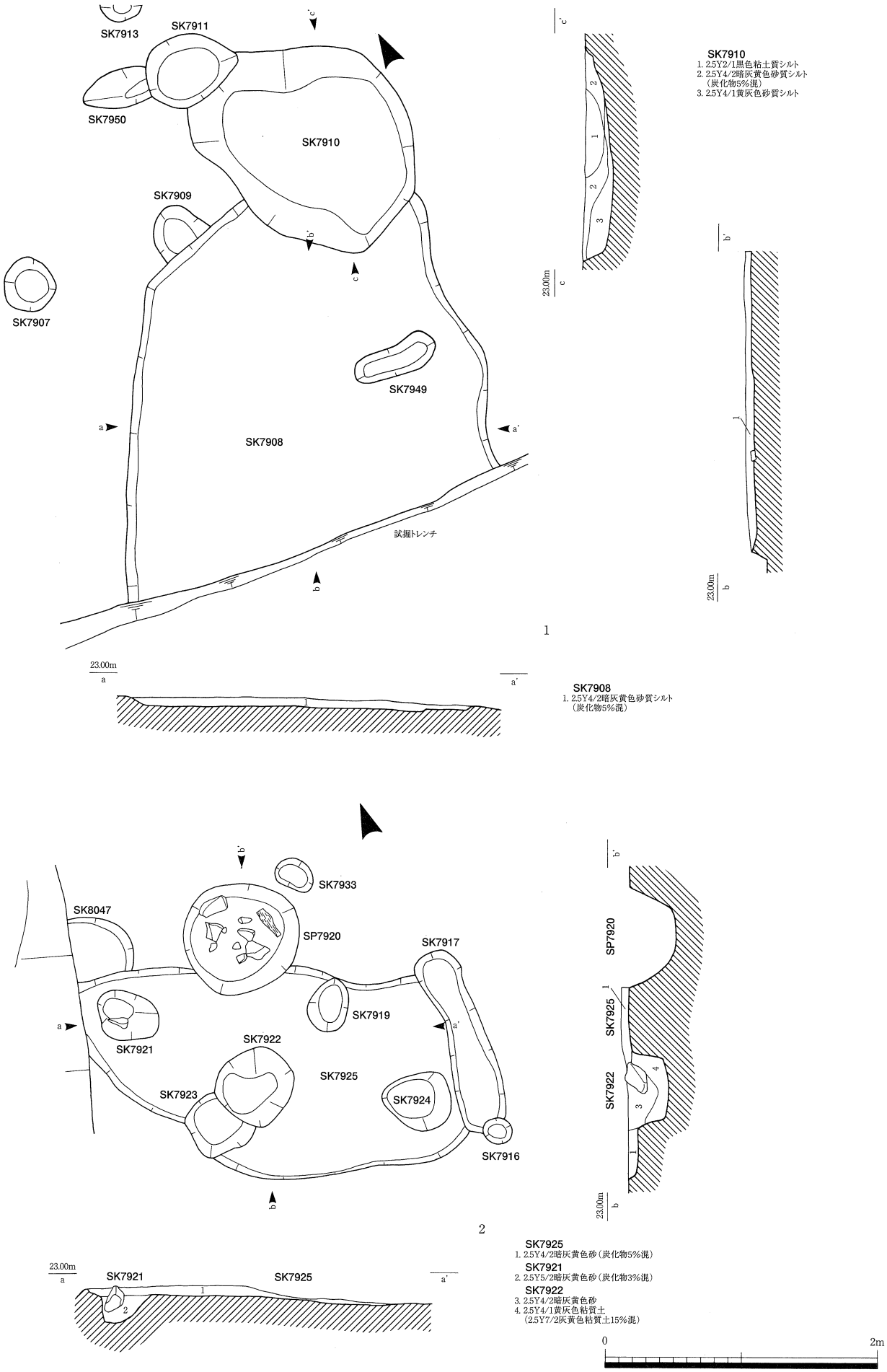
第536図　遺構実測図
SK7788・SK7792・SE7813





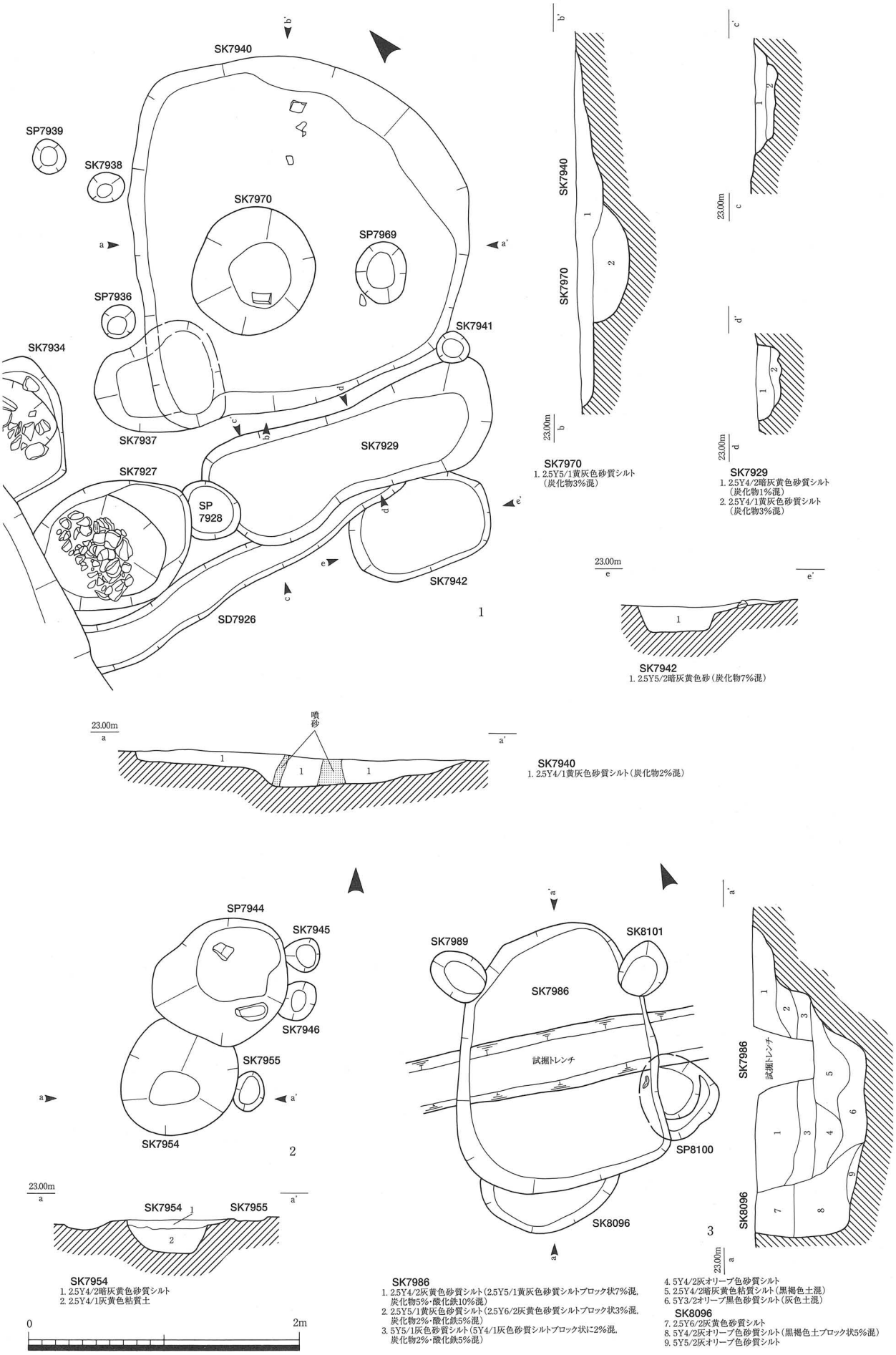
第537図　遺構実測図

SK7776・SK7781・SK7784～SK7786・SK7868



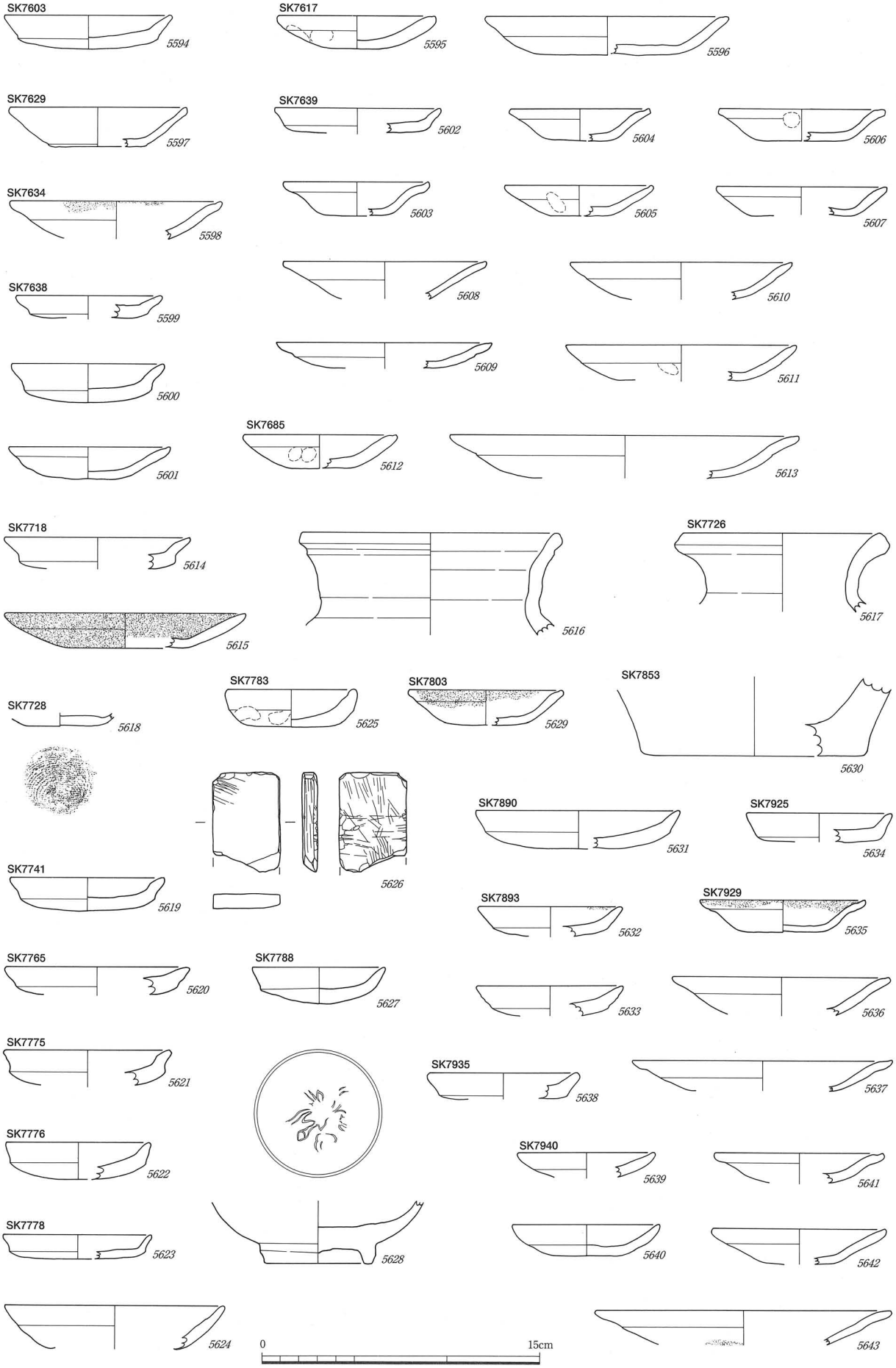
第538図　遺構実測図

1. SK7908・SK7910　2. SK7921・SK7922・SK7925



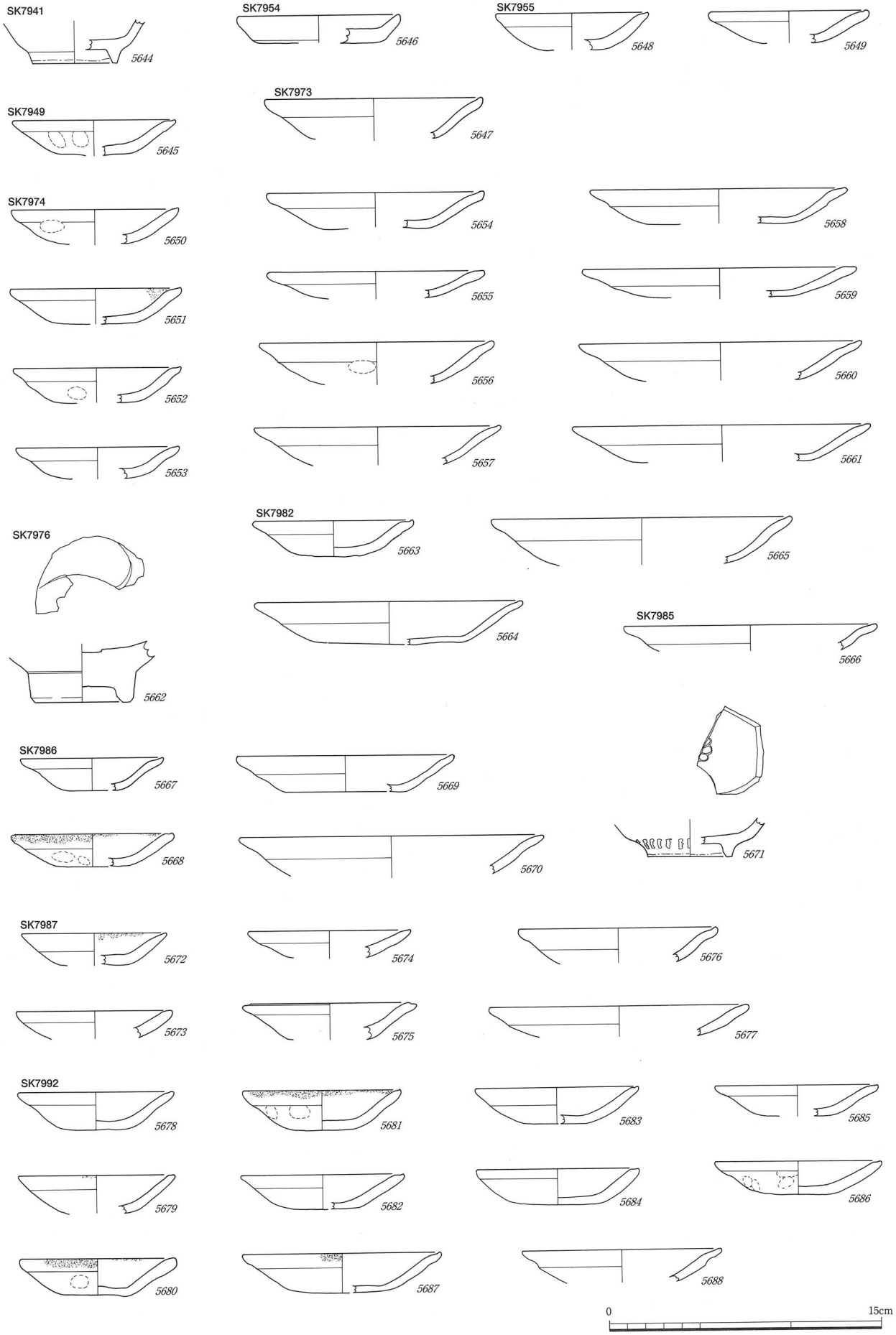
第539図　遺構実測図

1．SK7929・SK7940・SK7942・SK7970　2．SK7954　3．SK7986・SK8096



第540図　遺物実測図　(1/3)

SK7603(*5594*)　SK7617(*5595・5596*)　SK7629(*5597*)　SK7634(*5598*)　SK7638(*5599～5601*)
SK7639(*5602～5611*)　SK7685(*5612・5613*)　SK7718(*5614～5616*)　SK7726(*5617*)　SK7728(*5618*)
SK7741(*5619*)　SK7765(*5620*)　SK7775(*5621*)　SK7776(*5622*)　SK7778(*5623・5624*)　SK7783(*5625・5626*)
SK7788(*5627・5628*)　SK7803(*5629*)　SK7853(*5630*)　SK7890(*5631*)　SK7893(*5632・5633*)
SK7925(*5634*)　SK7929(*5635～5637*)　SK7935(*5638*)　SK7940(*5639～5643*)



第541図　遺物実測図　(1/3)

SK7941（*5644*）　SK7949（*5645*）　SK7954（*5646*）　SK7955（*5648・5649*）　SK7973（*5647*）　SK7974（*5650～5661*）
SK7976（*5662*）　SK7982（*5663～5665*）　SK7985（*5666*）　SK7986（*5667～5671*）　SK7987（*5672～5677*）
SK7992（*5678～5688*）

K7925，ＳＫ7921の順に古くなる。平面形は不整形で，規模は2.6m×1.5m，深さ10cmを測り，埋土は炭化物が混じる暗灰黄色砂である。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5634）・珠洲・越前がある。重複する遺構の出土遺物にはＳＫ7919から中世土師器，ＳＫ7921から越前，ＳＫ7922から加工板がある。

5634は中世土師器皿。口径7.7cmを測り，平底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

7927号土坑（ＳＫ7927，第542・543図，図版206・223）

ＳＢ172に隣接し，ＳＤ7003の東に位置する。確認した規模は1.1m×0.9m，深さ30cmで，平面形は楕円形を呈するとみられる。埋土は黄灰色砂質シルトであるが，上層から珠洲・越前の甕の破片が破砕された状態でぎっしり詰まっており，意図的に廃棄されたものとみられる。出土遺物には中世土師器・珠洲（5689）・越前（5690）・瓦質土器がある。類似した遺構としてはＳＢ172の柱穴ＳＰ7920・ＳＫ7934があり，いずれも近接した位置にある，遺物は互いに接合すること等から，同時期のものと考えられる。

5689は珠洲甕。口径59.2cmを測り，短頸くの字口縁で口縁端部形態は円頭を呈する。外面のタタキは３cmに８目の原体による。珠洲Ⅳ期のもの。5690は越前甕。口径62.5cmを測り，やや崩れた口縁帯が巡るが，上に折り曲げた部分がやや肥厚し，内側には凹線だけとなる。外面には「本」に格子を組み合わせたスタンプが13箇所押印され，内面には漆継ぎ痕がみられる。15世紀前半のもの。

7929号土坑（ＳＫ7929，第539・540図）

ＳＢ172内部，西側柱穴ＳＰ7928と重複する。遺構が集中しているが，新旧関係ではＳＫ7942，ＳＤ7926，ＳＫ7929，ＳＰ7928の順に新しくなる。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が黄灰色砂質シルトで，中世土師器（5635～5637）が出土している。重複する遺構の出土遺物にはＳＫ7942から土師器・中世土師器がある。

5635～5637は中世土師器皿。口径8.9cm～14cmを測り，口縁部が大きく外反して開き，端部をつまみ上げる。5635は口縁端部内外面に煤が付着している。15世紀後半のもの。

7934号土坑（ＳＫ7934，第542・543図，図版206）

ＳＫ7927の北に隣接し，確認した規模が0.9m×0.7m，深さ20cmを測る。埋土は炭化物が混じる黄灰色砂質シルトで，東半部分に珠洲・越前の甕の破片がぎっしり詰まっている。出土遺物には中世土師器・珠洲・越前（5691）がある。

5691は越前甕。口径62cmを測り，口縁部は口縁帯が退化して肥厚し，内面が凹線，外面が稜線となっている。外面のスタンプは「本」と格子の組み合わせで，他にヘラ状工具による３条の平行線がみられる。16世紀前半のもの。

7935号土坑（ＳＫ7935，第540図）

ＳＤ7003の東に位置し，確認した規模は直径32cm，深さ16cmを測る。出土遺物には土師器・中世土師器（5638）・越前がある。

5638は中世土師器皿で，口径８cmを測る。口縁部が短く外反し，平底とみられる。15世紀中頃のもの。

7940号土坑（ＳＫ7940，第539・540・541図，図版206・214）

ＳＫ7929の北に隣接し，平面形は2.6m×2.5mの不整な円形を呈し，深さ27cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで，噴砂がみられ，出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5639～5643）・越前がある。底面からはＳＫ7970が確認され中世土師器が出土し，南東に重複するＳＫ7941からは中国製青

磁（5644）が出土している。

5639～5643は中世土師器皿。口径は7.4cm～15.8cmを測り，口縁部が大きく外反して開く。口縁端部の形態には尖るもの（5639・5640），つまみ上げて面をとるもの（5641・5642），つまみ上げて丸く収めるもの（5643）がある。15世紀後半～16世紀中頃のもの。

5644は龍泉窯系青磁小碗。高台径は4.6cmを測り，細く尖る。高台部先端を除いて全面に施釉し，露胎部と施釉された部分との境は赤色に発色している。太宰府分類小碗Ⅲ類にあたると考える。

7949号土坑（ＳＫ7949，第541図）

ＳＫ7908の床面で確認した，64cm×22cm，深さ14cmを測る平面形が楕円形を呈するもの。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5645）・瓦質土器がある。

5645は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.9cmを測り，口縁部が外反し端部をつまみ上げている。15世紀後半のもの。

7954号土坑（ＳＫ7954，第539・541図）

ＳＢ173の柱穴ＳＰ7944の南に重複しており，直径0.8m，深さ25cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色砂質シルト，下層が灰黄色粘質土である。出土遺物には中世土師器（5646）がある。南にはＳＫ7955が重複しており，中世土師器（5648・5649）・越前・桶が出土している。

5646はＳＫ7954出土の中世土師器皿。口径8.8cmを測り，平底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

5648・5649はＳＫ7955出土の中世土師器皿。口径8.3cm・8.6cmを測り，口縁部は大きく外反して開き，端部はやや肥厚しつまみ上げる。16世紀前半～中頃のもの。

7973号土坑（ＳＫ7973，第405・406・541図）

ＳＢ171の内部，北東隅に位置し，確認した規模は2.1m×1.1m，深さ19cmを測る。平面形は方形を呈するとみられ，ＳＢ171の方形竪穴状土坑の可能性が高い。出土遺物には中世土師器（5647）・越前・瓦質土器がある。

5647は中世土師器皿。口径11.9cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7974号土坑（ＳＫ7974，第541図）

ＳＫ7973の西に位置し，1.6m×0.6m，深さ18cmを測る不整形な溝状を呈する。出土遺物には須恵器・中世土師器（5650～5661）・中国製白磁・加工材がある。

5650～5661は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.8cm～16.4cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7976号土坑（ＳＫ7976，第541図，図版214）

ＳＢ173の整地部分ＳＫ7964の西に位置し，ＳＢ172の柱穴ＳＰ7962と隣接していることから，同一遺構の可能性がある。出土遺物には中世土師器・珠洲・越前・中国製青磁（5662）がある。

5662は龍泉窯系青磁碗。高台径5.2cmを測り，外面に蓮弁文，内面に片切彫りの文様をもつ。全面に施釉後，底部外面の釉を輪状に削り取っており，高台は漆継ぎされた痕跡がみられる。上田分類Ｂ－Ⅲ類であろう。

7982号土坑（ＳＫ7982，第541図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上に位置し，71cm×47cm，深さ21cmを測る。出土遺物には中世土師器（5663～5665）・珠洲がある。

5663～5665は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.7cm～16cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7985号土坑（ＳＫ7985，第541図）

ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080上に位置し，41cm×31cm，深さ15cmを測る。出土遺物には中世土師器（5666）がある。

5666は非ロクロ成形の中世土師器皿で，口径13.9cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7986号土坑（ＳＫ7986，第539・541図，図版206・214）

ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080上で確認した。平面形は２ｍ×1.5ｍのやや不整な方形を呈し，深さ46cmを測る。ＳＢ178の柱穴ＳＰ8100の他４基の土坑と重複しているが，新旧関係ではＳＫ8101に次いで新しい。出土遺物には中世土師器（5667～5670）・珠洲・瀬戸美濃・中国製青磁（5671）がある。

5667～5670は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.8cm～11.6cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。5668の口縁端部内外面には油煙が付着している。15世紀後半のもの。5671は龍泉窯系青磁小碗。高台径4.6cmを測り，断面四角形の高台の畳付け部分のみ露胎である。内面見込みには花文のスタンプがある。太宰府分類小碗Ⅲ－２類にあたる。

7987号土坑（ＳＫ7987，第541・542図，図版206）

ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080上，南端中央に位置し，平面形は1.9ｍ×0.8ｍの楕円形を呈し，深さ30cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層が灰色砂質土，下層が暗灰黄色粘質シルトであり，西端部分には被熱したり，煤が付着した破砕礫が集中する。出土遺物には中世土師器（5672～5677）・越前がある。ＳＫ7987の周囲には多量の破砕礫が上面にみられる遺構が多い。

5672～5677は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.9cm～14.2cmを測り，口縁部が大きく外反して開く。口縁端部の形態には直線的にのびてやや尖るもの（5672・5674），やや肥厚してつまみ上げるもの（5673・5675），つまみ上げるもの（5676・5677）がある。15世紀後半～16世紀中頃のもの。

7992号土坑（ＳＫ7992，第541・544・549図，図版206）

ＳＢ178の整地部分ＳＫ8080の中央に位置し，ＳＫ7993と重複しているが，ＳＫ7992の方が古い。確認した規模は3.4ｍ×1.5ｍの不整な方形で，深さ22cmを測る。埋土は黄灰色砂質シルトで，上層には煤が付着した破砕礫が多量にある。礫は中央から西寄りに偏っており，礫の上面は比較的水平であるが，煤が付着した面は不定方向を向く。ＳＢ178に付随する可能性が高いが，遺構の性格は不明である。出土遺物には中世土師器（5678～5688・5092～5696）・珠洲・越前・瓦質土器・加工板がある。

5678～5688・5092～5696は8.4cm～17.8cmを測り，口縁部が大きく外反する。口縁端部の形態にはつまみ上げて面をとるもの（5678～5685），つまみ上げやや尖るもの（5681～5686），つまみ上げるもの（5687・5688・5692・5693・5695），丸く収めるもの（5694・5696）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

7994号土坑（ＳＫ7994，第545・549図）

ＳＫ7992の南西に隣接し，平面形が1.7ｍ×1.2ｍの隅丸方形を呈し，深さ56cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，下層が灰色砂質シルトが主体で，上面には破砕礫が多量に入っている。礫上面は比較的水平であり，礫に混じって中世土師器（5697～5699）・加工板が出土している。

5697～5699は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.4cm～16.8cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

7996号土坑（ＳＫ7996，第545図，図版207）

ＳＢ167の柱穴ＳＰ8092と重複し，平面形が方形を呈し，規模は1.5m×1.1m，深さ50cmを測る。埋土は上層が黄褐色砂質土，中層がオリーブ褐色砂質土，下層が黄灰色砂質シルトで，上面東半部には煤が付着した破砕礫が多量に入っている。礫上面は比較的水平であるが，被熱した部分は不定方向を向く。出土遺物には中世土師器・珠洲・瓦質土器・加工材がある。

8007号土坑（ＳＫ8007，第545・549図，図版265）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上，西端に位置し，規模は1.9m×0.7m，深さ46cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，下層は礫が混じる暗灰黄色砂質土である。出土遺物には土師器・中世土師器（5700・5701）・加工板・硯（5702）がある。

5700・5701は中世土師器皿。口径8.8cm，11.8cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

5702は凝灰岩製の長方硯。二面製作し，うち一面を使用しており，使用面の前縁9.5mm，側縁5.5mmを測る。

8020号土坑（ＳＫ8020，第549図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上に位置し，平面形は直径50cmの円形を呈し，深さ31cmを測る。出土遺物には中世土師器（5703）がある。

5703は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径11.8cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げる。15世紀後半のもの。

8021号土坑（ＳＫ8021，第545・549図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上に位置し，平面形が1.2m×1.1mの方形で，深さ９cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，中世土師器（5704）が出土している。

5704は中世土師器皿で，口径7.8cmを測り，口縁部がやや肥厚し尖る。16世紀前半のもの。

8024号土坑（ＳＫ8024，第405・406・547・549図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046の底面で確認したもので，規模は1.9m×1.2m，深さ11cmを測る。ＳＫ8039と重複するが，ＳＫ8024の方が新しい。埋土は焼土・炭化物が混じる暗灰黄色砂質シルトで，須恵器・中世土師器（5705～5713）が出土している。

5705～5713は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.4cm～16.2cmを測り，口縁部が大きく外反し，端部の形態には尖るもの（5705），つまみ上げ面をとるもの（5706～5708・5710～5712），丸く収めるもの（5709・5713）がある。15世紀後半のもの。

8034号土坑（ＳＫ8034，第546・549・550図，図版206・223・224）

ＳＢ179の内部中央やや南寄りに位置し，ＳＫ8036・ＳＫ8041と重複するが，新旧関係ではＳＫ8041，ＳＫ8034，ＳＫ8036の順に新しくなる。平面形は不整な方形を呈し，規模は4.4m×2.4m，深さ23cmを測る。埋土は上層が焼土が混じる暗灰黄色砂質シルト，下層が灰オリーブ色砂質シルトで，上層からは多量の礫に混じって須恵器・中世土師器（5714～5753）・珠洲・曲物・加工板等の遺物が出土している。礫は中央より北に集中しており，上面は比較的水平である。ＳＢ179に付随する可能性が高いが，遺構の性格は不明である。

5714～5752は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.6cm～19.6cmを測り，7.6cm～9.2cmのものが多い。器形には平底で口縁部が内湾気味なもの（5714），口縁部が大きく外反するもの（5715～5752）がある。口縁端部の形態にはつまみ上げて面をとるもの（5715～5725・5744・5748～5750），つまみ上げ

てやや尖るもの（5728～5730・5742・5743），肥厚しつまみ上げるもの（5726・5727・5731～5734），丸く収めるもの（5735～5741・5745・5746），尖るもの（5747・5751・5752）がある。5753はロクロ成形の中世土師器皿。口径13.6cmを測り，外反する口縁端部を上につまみ上げ尖る。底部外面はヘラ削りし，丸底風に仕上げる。15世紀後半～16世紀後半のものである。

8035号土坑（ＳＫ8035，第550図，図版224）

ＳＥ7481の西に重複し，直径60cm，深さ11cmを測り，須恵器・中世土師器（5754・5755）・珠洲（5756）・箸・加工板が出土している。

5754はロクロ成形の中世土師器皿。口径7.8cmを測り，口縁部が外反し，端部は四角く面をとる。5755は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径9.8cmを測り，口縁部が短く外反する。15世紀前半～中頃のもの。5756は珠洲擂鉢。口径37cmを測り，内傾する口縁内端面はやや幅広く，９目の口縁帯が巡り，端部形態は鋭い長三角形を呈する。卸目は３cmに８目の中太の櫛歯原体により全面に隙間なく施入される。珠洲Ⅴ期のもの。

8036号土坑（ＳＫ8036，第405・406・547・550図）

ＳＫ8034の北に位置し，平面形は2.1m×1.5mの不整な方形で，深さ26cmを測る。ＳＢ179の柱穴ＳＰ8043，ＳＥ8037と重複するが，新旧関係では新しい。埋土は上層が礫が多い暗灰黄色砂質シルト，中層が黄灰色砂質シルト，下層が暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5757～5762）・珠洲がある。

5757～5762は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.8cm～14.7cmを測り，器形には口縁部が外反し端部が内湾するもの（5757），端部をつまみ上げるもの（5758～5762）がある。15世紀代のもの。

8038号土坑（ＳＫ8038，第550図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上に位置し，平面形は0.9m×0.8mの方形を呈し，深さ30cmを測る。出土遺物には中世土師器（5763～5771）がある。

5763～5771は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.3cm～16.6cmを測り，口縁部が大きく外反し，端部形態には尖るもの（5763・5764），肥厚しつまみ上げるもの（5765・5766），つまみ上げるもの（5767～5770），丸く収めるもの（5771）がある。15世紀後半～16世紀前半のもの。

8039号土坑（ＳＫ8039，第405・406・551図）

ＳＫ8024・ＳＫ8041と重複しており，新旧関係では最も古いもので，規模は３m×1.3m，深さ22cmを測る。出土遺物には須恵器・中世土師器（5772～5789）・瓦質土器・加工材がある。

5772～5789は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.4cm～12.8cmを測り，器形には口縁部が短く立ち上がるもの（5772），口縁部が大きく外反するもの（5773～5789）がある。口縁端部の形態には丸く収めるもの（5773・5778・5779），つまみ上げるもの（5774・5785），尖るもの（5775・5781・5782～5784），つまみ上げて面をとるもの（5776・5777・5786～5789）がある。15世紀前半～16世紀前半のもの。

8041号土坑（ＳＫ8041，第547・551図，図版224）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上，ＳＫ8034の東に位置し，平面形が不整な方形を呈する。規模は3.2m×1.7m，深さ15cmを測り，埋土は暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物には須恵器・中世土師器（5790～5811）・珠洲・瓦質土器・漆器・円形板がある。

5790～5811は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径8.2cm～14.8cmを測り，口縁部が大きく外反する。口縁端部形態には肥厚してつまみ上げるもの（5790～5792・5798），丸く収めるもの（5793・5808・

5810・5811），つまみ上げてやや引き出すもの（5794～5796），つまみ上げて面をとるもの（5797），つまみ上げてやや尖るもの（5799～5801），尖るもの（5802～5804），つまみ上げるもの（5805～5807・5809）がある。15世紀後半～16世紀後半のもの。

8040号土坑（ＳＫ8040，第405・406・548図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046上，東端に位置する不整形なもの。埋土は上層が灰色砂質シルト，下層が灰黄色砂質シルトであり，須恵器・中世土師器が出土している。

8045号土坑（ＳＫ8045，第551図）

Ｘ82Ｙ118，ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046の底面に位置する。規模は50cm×25cm，深さ31cmを測り，中世土師器（5812）が出土している。

5812は非ロクロ成形の中世土師器皿で，口径8.4cmを測り，口縁部が大きく外反し端部はつまみ上げる。15世紀後半のもの。

8047号土坑（ＳＫ8047，第551図，図版227）

ＳＤ7003の東に位置し，ＳＫ7925とも重複しているため全形は不明であるが，土師器・須恵器・中世土師器（5813）・中国製白磁（5814）が出土している。

5813は非ロクロ成形の中世土師器皿で，口径8.7cmを測り，口縁部が外反して開き端部をつまみ上げている。15世紀後半のもの。5814は中国製白磁碗。口径13.2cmを測り，内面に沈線が１条巡る。釉は薄く，やや黄色味を帯びた白色を呈し，体部外面下半には施釉されていない。太宰府分類皿Ⅱ類またはⅢ類にあたると考えられる。

8069号土坑（ＳＫ8069，第379・380・551図）

ＳＢ167の整地部分ＳＫ8065の底面で確認したもの。平面形は1.7m×0.8mの楕円形を呈し，深さ53cmを測り，中世土師器（5815）が出土している。

5815は非ロクロ成形の中世土師器皿で，口径7.6cmを測り，やや丸底で口縁部が外反する。15世紀代のもの。

8084号土坑（ＳＫ8084，第551図）

ＳＢ179の整地部分ＳＫ8046の底面で確認したもの。平面形は不整形で，深さ17cmを測り，中世土師器（5816・5817）が出土している。

5816・5817は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径14.6cm，17.8cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げている。15世紀後半のもの。

8108号土坑（ＳＫ8108，第551図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面に位置し，ＳＥ8107と重複している。規模は60cm×42cm，深さ15cmを測り，中世土師器（5818）が出土している。

5818は非ロクロ成形の中世土師器皿で，口径9.8cmを測り，丸底で口縁部が短く外反する。15世紀中頃のもの。

8109号土坑（ＳＫ8109，第551図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055上から掘り込んでおり，ＳＢ158の柱穴ＳＰ8158の南に重複している。平面形は直径40cmの円形を呈し，深さ33cmを測り，中世土師器（5819・5820）が出土している。

5819・5820は非ロクロ成形の中世土師器皿。5819は口径7.7cmで，平底で口縁部が短く外反する。5820は口径9.5cmを測り，口縁部が大きく外反し端部をつまみ上げてやや尖る。15世紀中頃～16世紀前半のもの。

8126号土坑（ＳＫ8126，第553図，図版264）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面に位置し，ＳＫ7722・ＳＫ8127と重複している。出土遺物には礎石（5824）がある。

5824は直径23cmを測る礎石。自然面を残したまま底面側をほぼ水平に割り，底面全面が焼けている。上面には直径約14cmの柱を立てるための窪みを作っている。

8144号土坑（ＳＫ8144，第548図）

ＳＢ156の方形竪穴状土坑ＳＫ8145の南に位置し，平面形が1.7m×1.2mの楕円形を呈し，深さ52cmを測る。埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，下層は礫が混じる灰色砂質シルトである。

8145号土坑（ＳＫ8145，第368・551図）

ＳＢ156に付随した方形竪穴状土坑で，規模は3.7m×1.6mを測る。出土遺物には中世土師器（5821）・珠洲があり，5821はＳＢ159の柱穴ＳＰ8155と接合している。

5821は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径は8.3cmを測り，口縁部が外反し端部はつまみ上げ丸く収め，口縁端部内外面には油煙が付着している。15世紀後半のもの。

8149号土坑（ＳＫ8149，第551図）

ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面に位置し，ＳＥ8148と重複している。規模は直径1.6m×1.3m，深さ32cmを測り，中世土師器（5822）・箸（5823）・加工板が出土している。

5822はロクロ成形の中世土師器皿で，内面見込みにはナデによる段があり，底部外面には回転糸切り痕がそのまま残る。15世紀後半のもの。

5823は断面長方形の箸。一端を尖らせているが，他端は欠損している。

8156号土坑（ＳＫ8156，第368・548図）

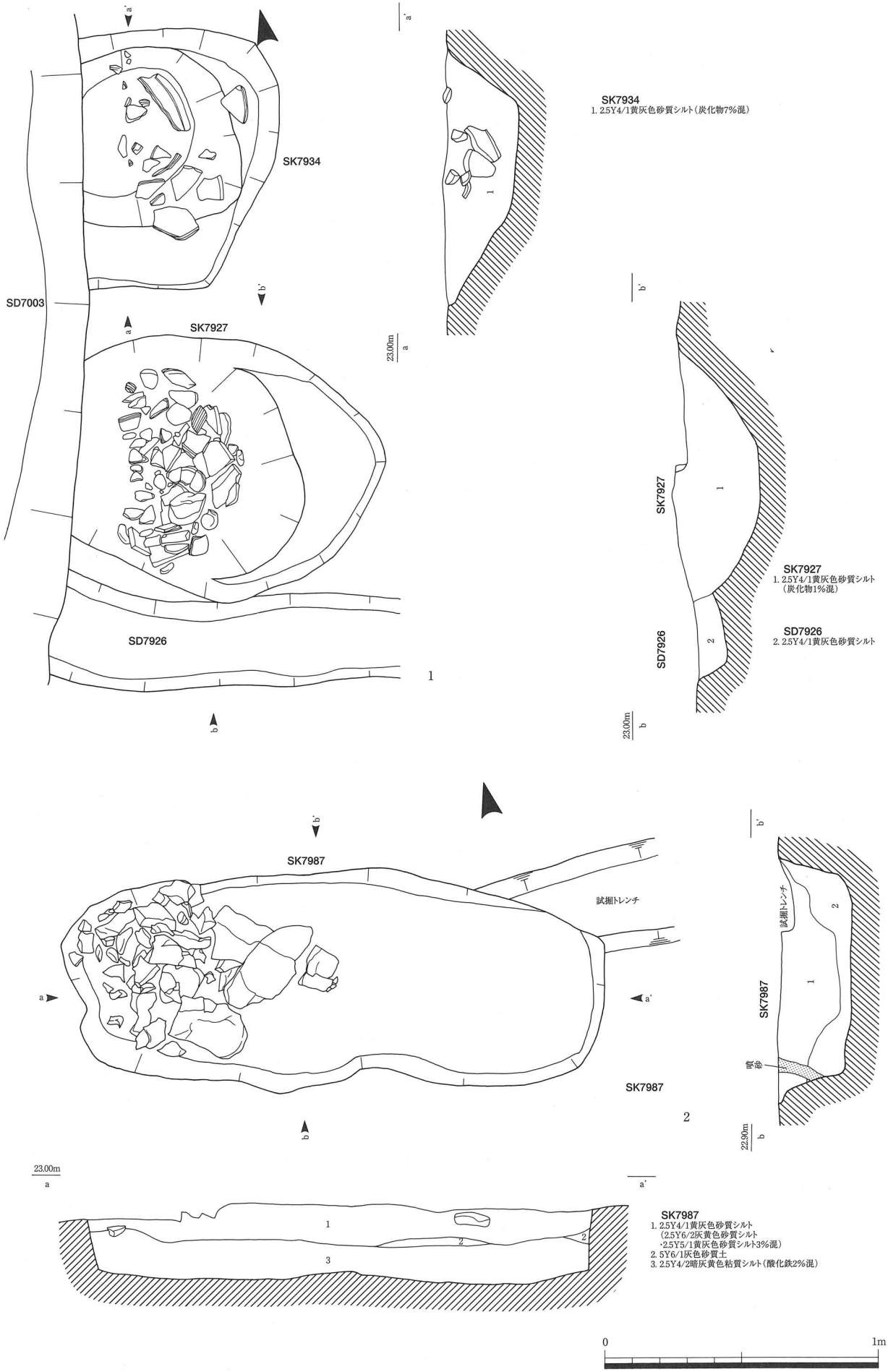
調査区西端，ＳＢ157の整地部分ＳＫ8055の底面で確認した。2.2m×0.8m，深さ40cmの規模をもち，埋土は上層が黄灰色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，灰黄色砂質シルト，下層は礫が混じる暗灰黄色砂質シルトである。

8161号土坑（ＳＫ8161，第373・552・553図，図版208・224・255・256）

ＳＫ8051・ＳＫ7893の下層で確認したもので，平面形は直径4.3mの円形を呈し，深さ50cmを測る。断面形は擂鉢状を呈し，埋土には礫が多く，遺物は下層から多く出土している。出土遺物には中世土師器（5825～5829）・珠洲（5830）・越前・中国製白磁（5831）・中国製青磁・漆器（5832・5833）・折敷（5834）・曲物・円形板・箸・加工板（5835）・加工材（5836）がある。

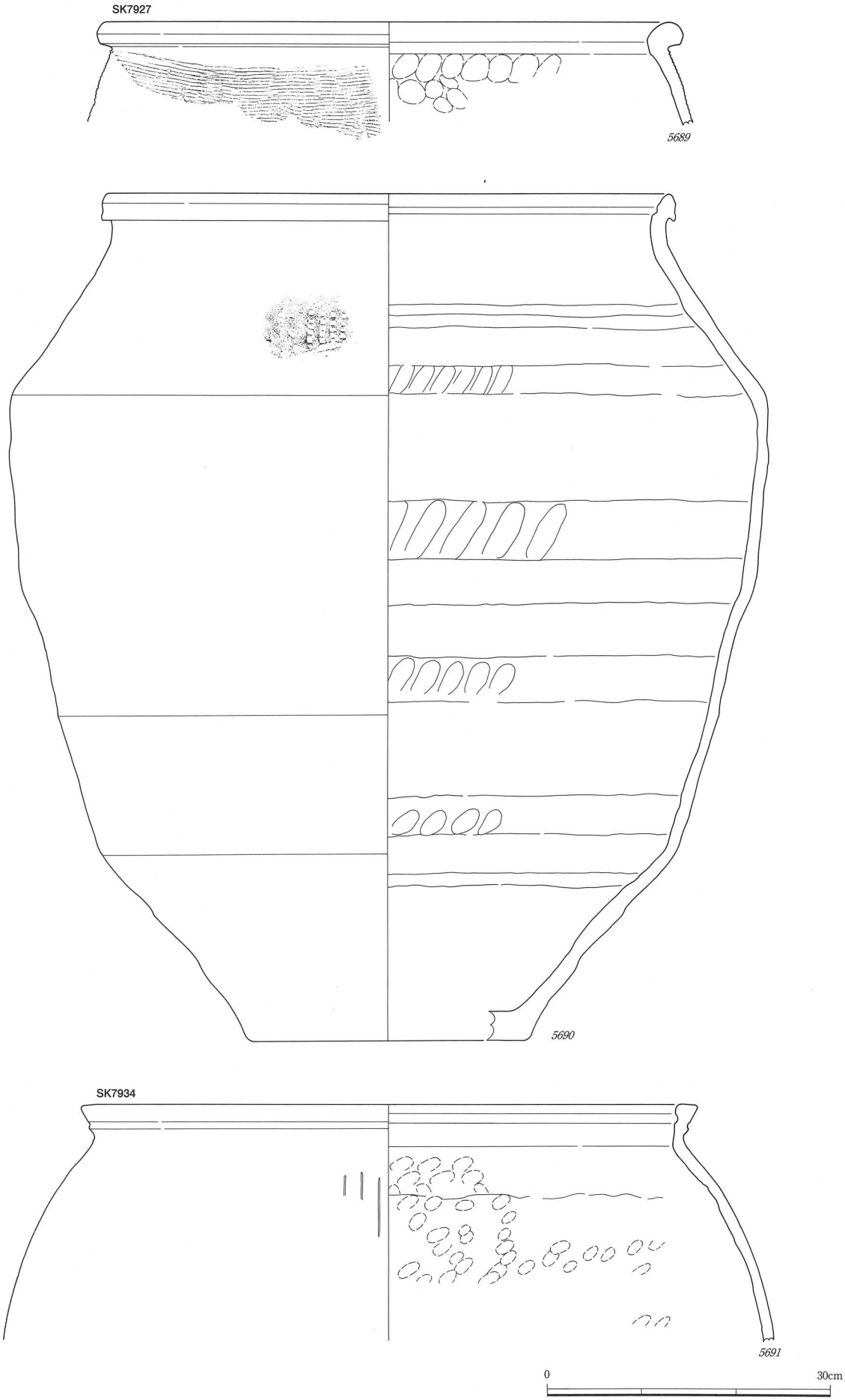
5825～5829は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径7.8cm～9.7cmを測り，口縁部が短く外反する。底部は丸底のもの（5825・5826・5829），平底のもの（5827・5828）がある。5825は内面見込みに「静」と墨書がある。15世紀中頃のもの。5830は珠洲擂鉢。底径12cmを測り，卸目は2.5cmに11目の櫛歯原体により全面に施入され，底部外面には静止糸切り痕がある。内面から割れた断面にかけて炭化物が付着している。5831は中国製白磁端反碗。口径14.4cmを測り，体部内面上位に浅い沈線をもつ。胎土は灰白色で，釉は薄い。太宰府分類碗Ⅴ－４類にあたると考えられる。

5832・5833は漆器椀。5832は低い高台をもち，体部は高台脇から屈曲して立ち上がる。内面見込みには赤色漆による文様がある。5833は5832よりやや高い高台をもち，内面と外面が赤色漆，高台内面のみ黒色漆で赤色漆による文様状のものがみられる。5834は折敷底板で，周囲にはほぼ等間隔で側板との結合のための樺皮とその綴じ孔が７箇所ある。一部炭化している部分もあるが，側板との結合部



第542図　遺構実測図

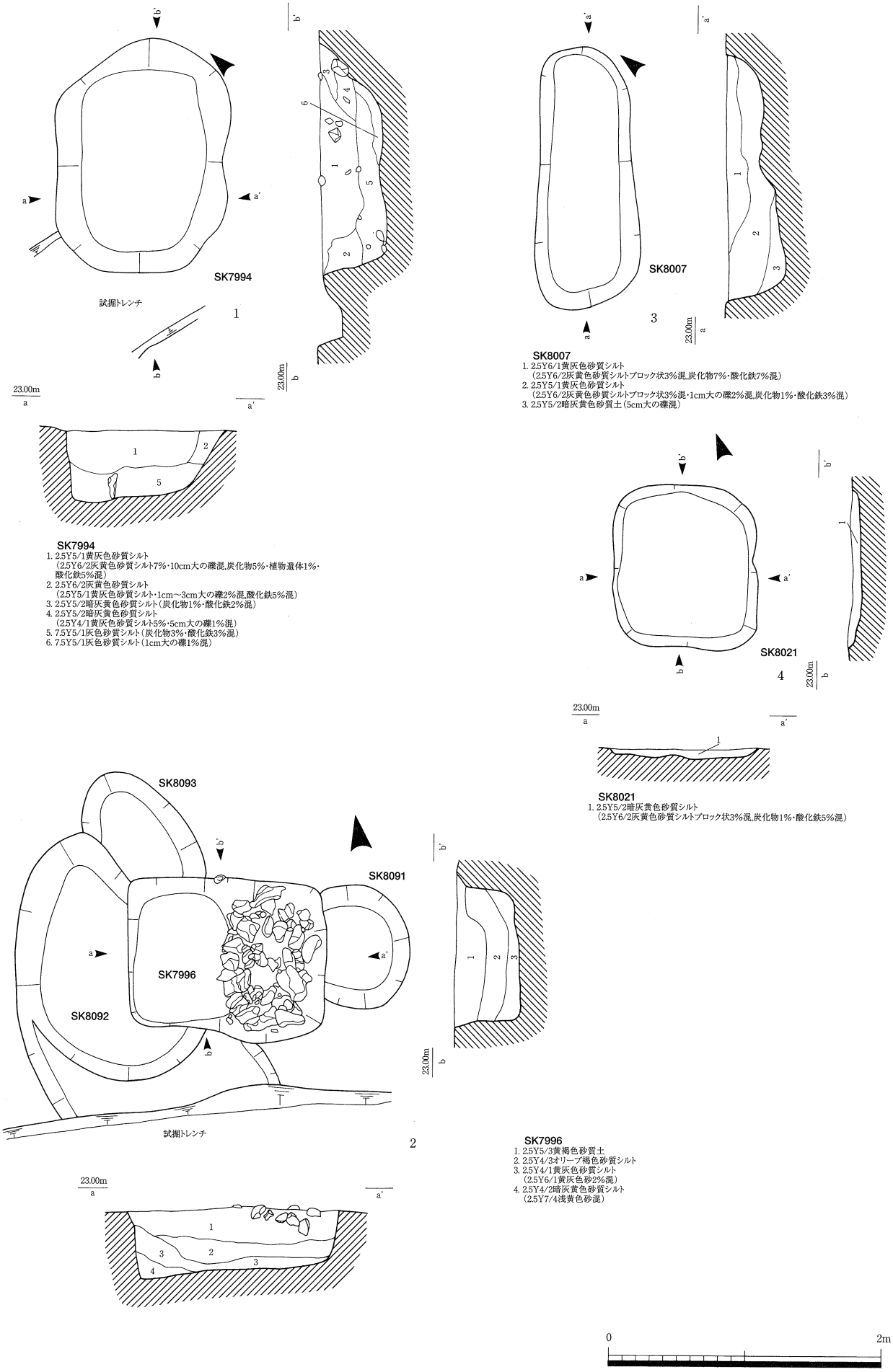
1. SD7926・SK7927・SK7934　2. SK7987



第543図　遺物実測図　(1/6)
SK7927(*5689・5690*)　SK7934(*5691*)

SK7992
1. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状3%混，
炭化物2%・酸化鉄5%混）
SK7993
2. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
（炭化物3%・酸化鉄5%混）

第544図　遺構実測図
SK7992・SK7993



SK7994
1. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルト7%・10cm大の礫混,炭化物5%・植物遺体1%・酸化鉄5%混）
2. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
（2.5Y5/1黄灰色砂質シルト・1cm～3cm大の礫2%混,酸化鉄5%混）
3. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（炭化物1%・酸化鉄2%混）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
（2.5Y4/1黄灰色砂質シルト5%・5cm大の礫1%混）
5. 7.5Y5/1灰色砂質シルト（炭化物3%・酸化鉄3%混）
6. 7.5Y5/1灰色砂質シルト（1cm大の礫1%混）

SK8007
1. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状3%混,炭化物7%・酸化鉄7%混）
2. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状3%混・1cm大の礫2%混,炭化物1%・酸化鉄3%混）
3. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土（5cm大の礫混）

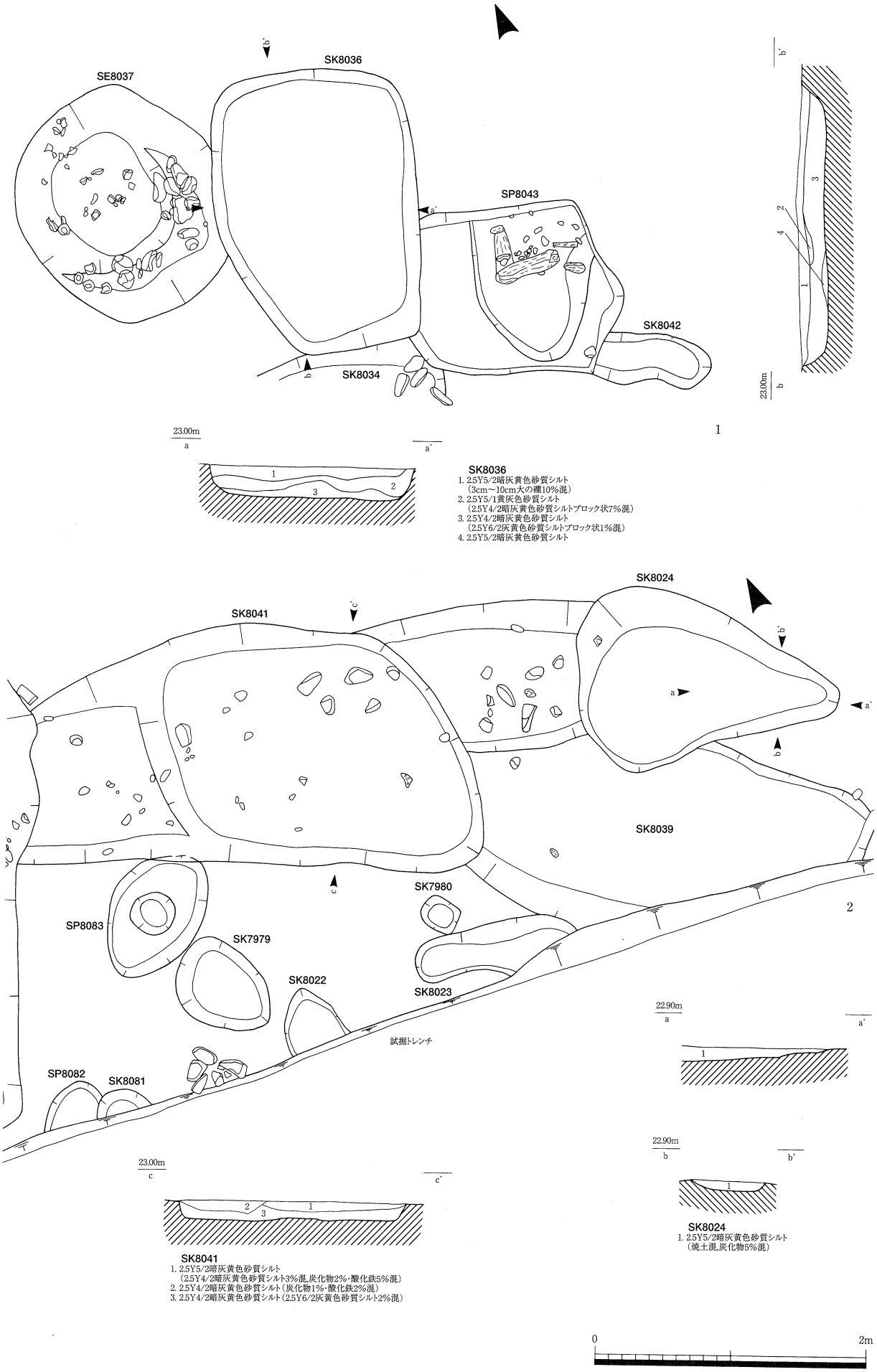
SK8021
1. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
（2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック状3%混,炭化物1%・酸化鉄5%混）

SK7996
1. 2.5Y5/3黄褐色砂質土
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
3. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト
（2.5Y6/1黄灰色砂2%混）
4. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
（2.5Y7/4浅黄色砂混）

0　2m

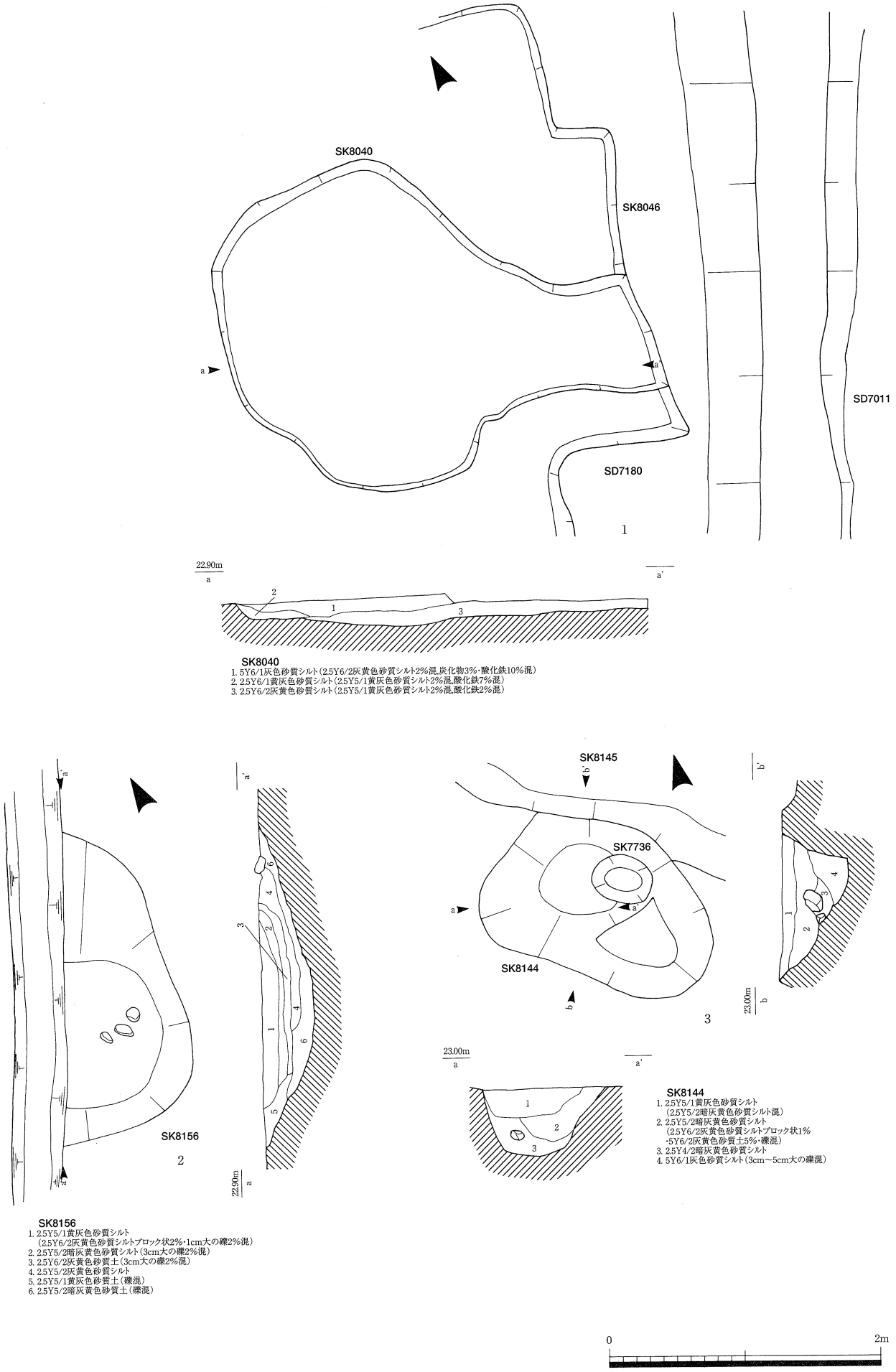
第545図　遺構実測図
1. SK7994　2. SK7996　3. SK8007　4. SK8021

第546図　遺構実測図
SK8034



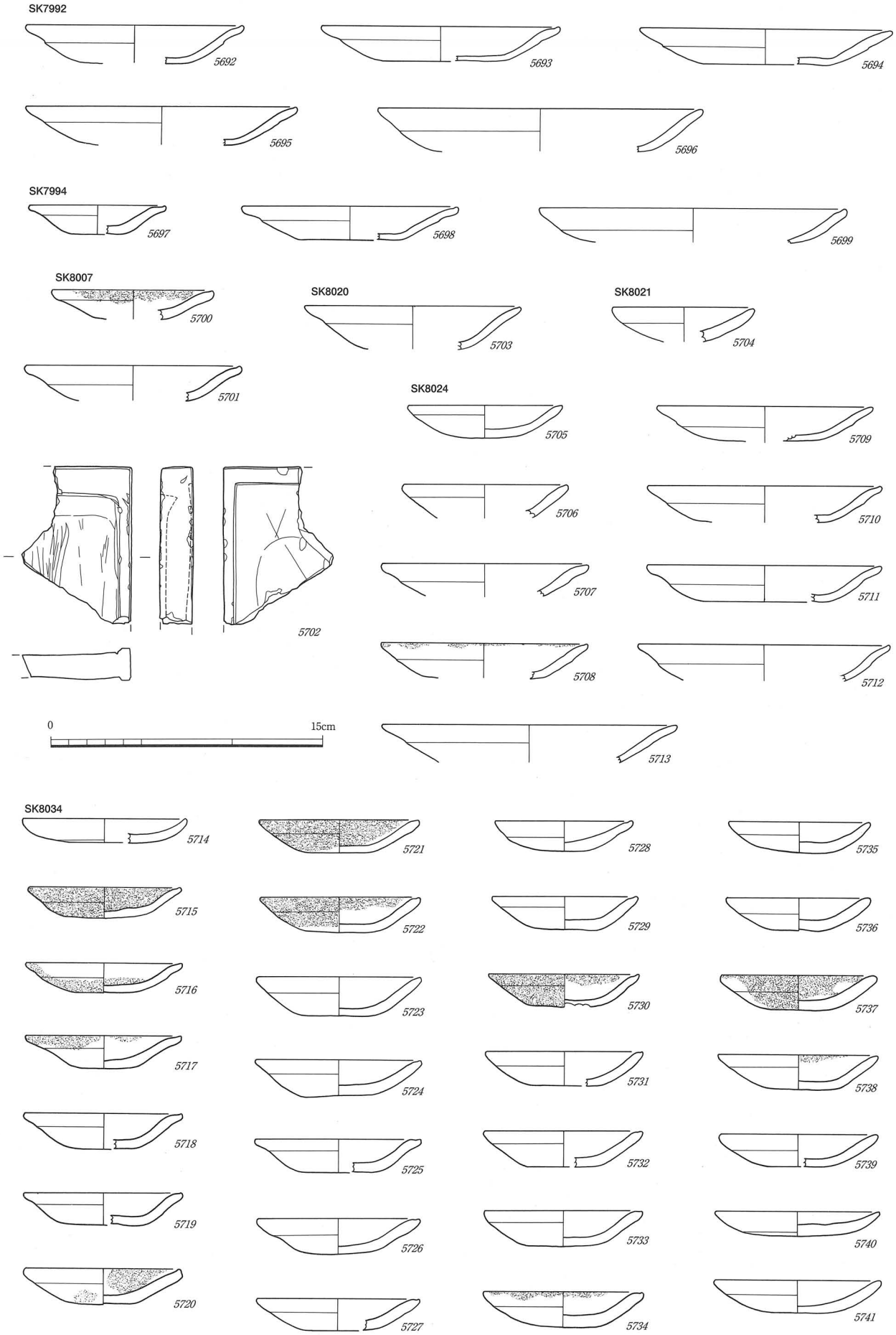
第547図　遺構実測図

1. SK8036　2. SK8041・SK8024



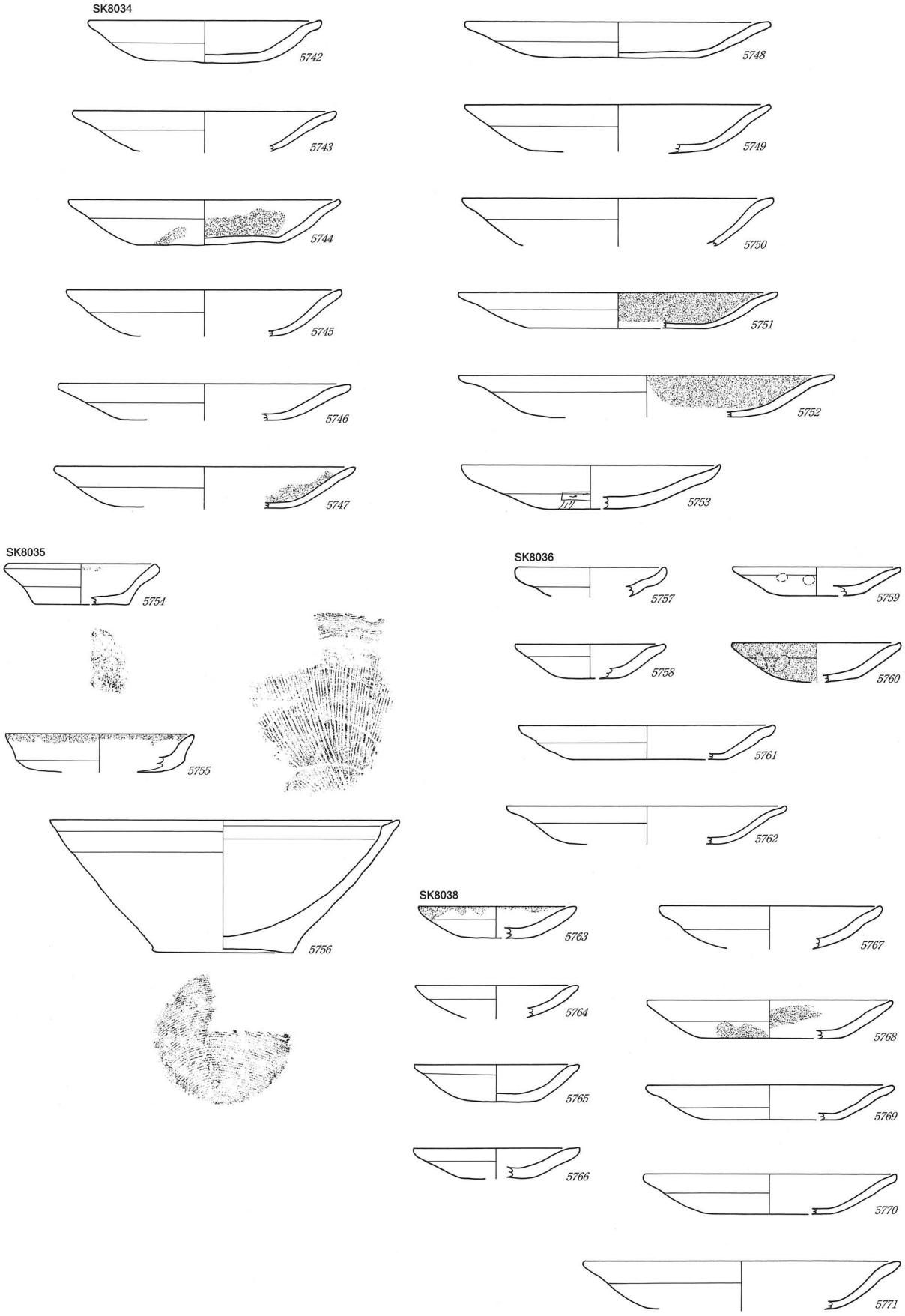
第548図　遺構実測図

1. SK8040　2. SK8156　3. SK8144

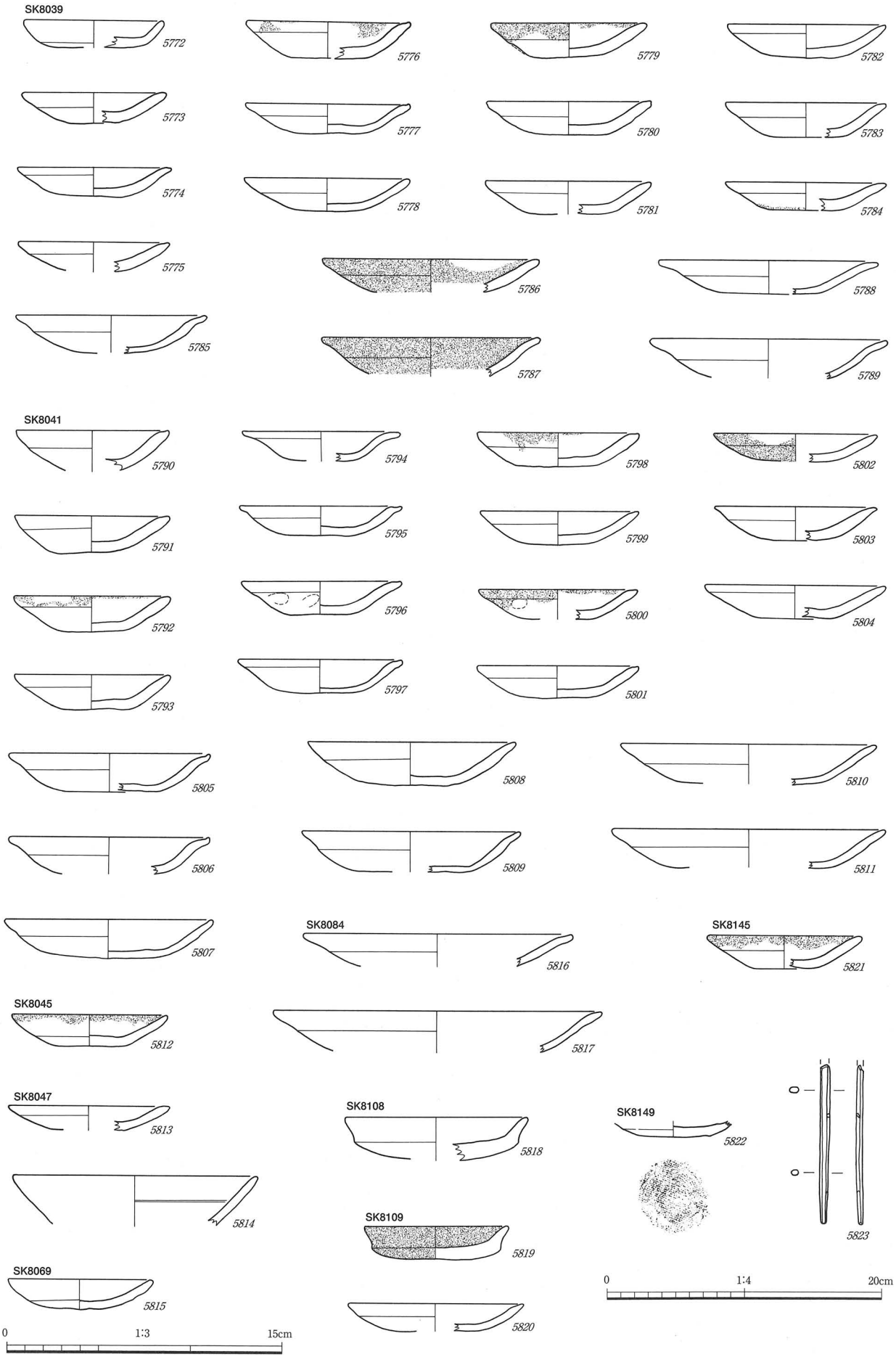


第549図　遺物実測図　(1/3)

SK7992(*5692～5696*)　SK7994(*5697～5699*)　SK8007(*5700～5702*)　SK8020(*5703*)　SK8021(*5704*)
SK8024(*5705～5713*)　SK8034(*5714～5741*)

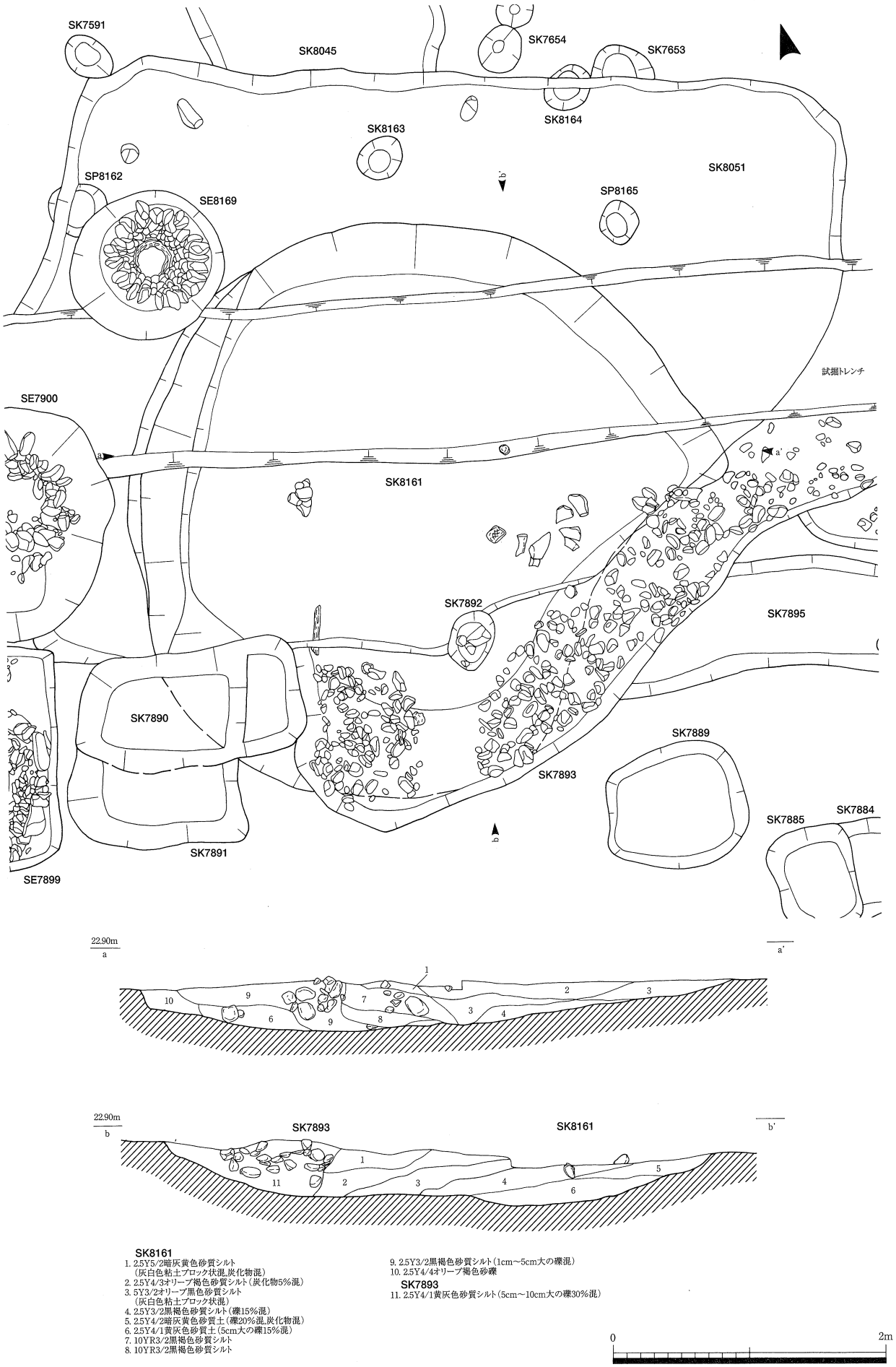


第550図　遺物実測図　（*5742～5755・5757～5771*　1/3，*5756*　1/6）
SK8034（*5742～5753*）　SK8035（*5754～5756*）　SK8036（*5757～5762*）　SK8038（*5763～5771*）



第551図　遺物実測図　（*5772～5822*　1/3，*5823*　1/4）

SK8039（*5772～5789*）　SK8041（*5790～5811*）　SK8045（*5812*）　SK8047（*5813・5814*）　SK8069（*5815*）
SK8084（*5816・5817*）　SK8108（*5818*）　SK8109（*5819・5820*）　SK8145（*5821*）　SK8149（*5822・5823*）

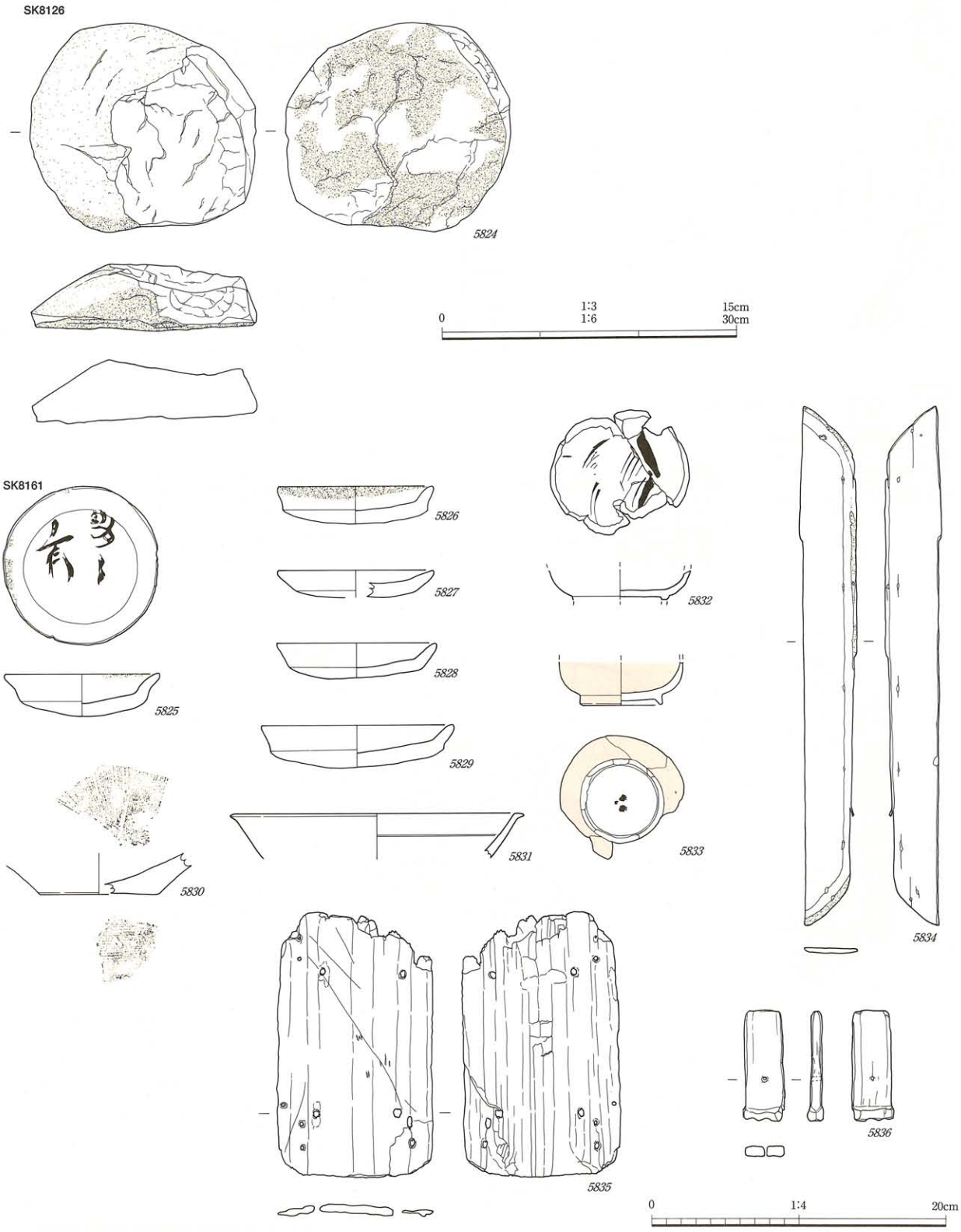


第552図　遺構実測図
SK7893・SK8161

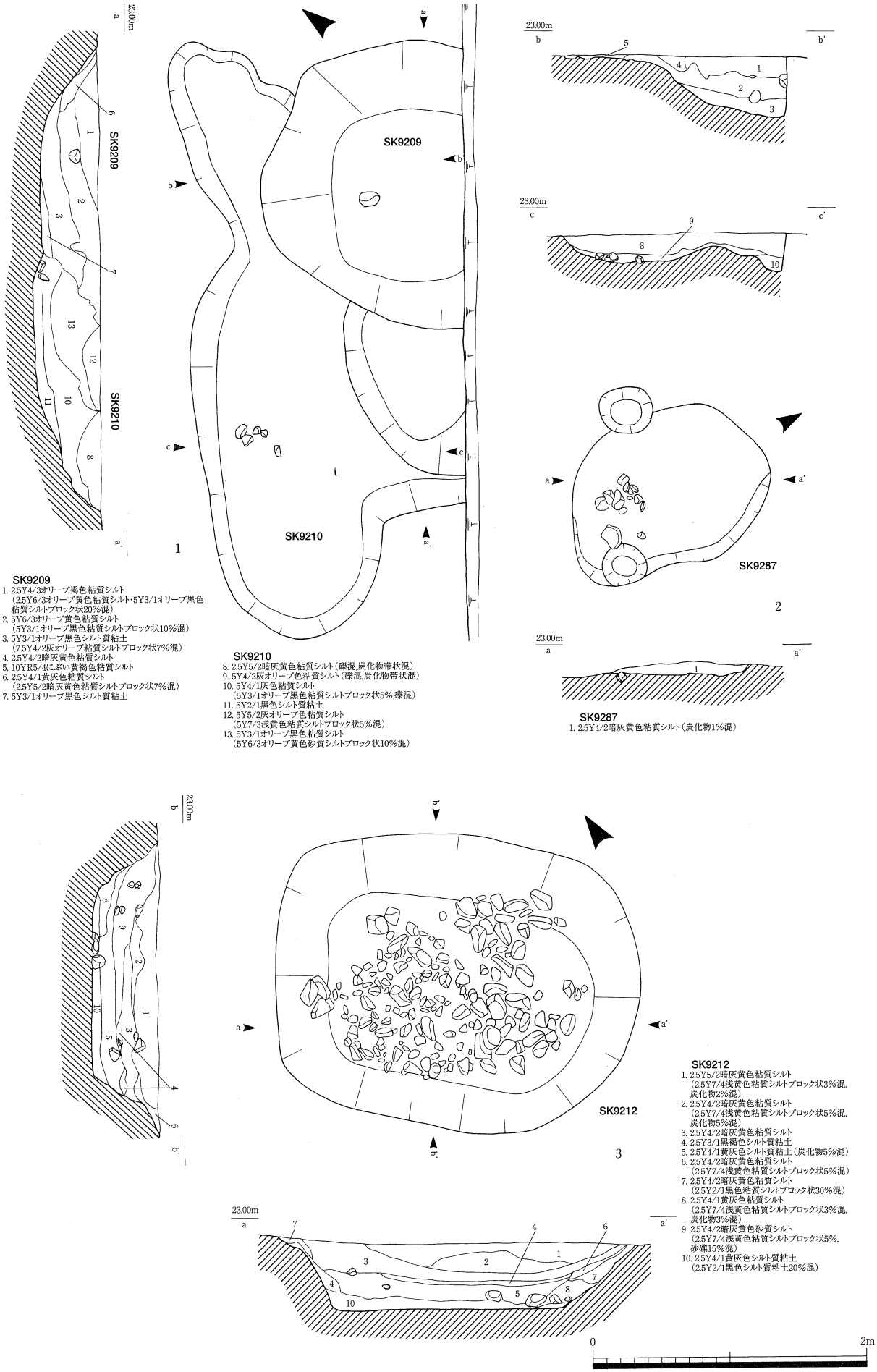
分には明瞭な痕跡がみられる。5835は方形を呈する板材で，対称の位置に孔径が若干異なる孔が穿たれている。孔径が小さいものは補修孔であろうか。5836は一端を方形にし，他端をＴ字状に削り出した材。ほぼ中央に穿孔されているが用途は不明。（中川道子）

9209号・9210号土坑（ＳＫ9209・ＳＫ9210，第554図）

Ｆ４調査区中央東端で部分的に検出した不整形の土坑。断面観察では北側の円形を呈すると推定されるＳＫ9209がＳＫ9210を切る。ＳＫ9209には数種類の土がブロックで混じり込む土が堆積しており，



第553図　遺物実測図　（*5825～5829・5831*　1/3，*5832～5836*　1/4，*5824・5830*　1/6）
SK8126（*5824*）　SK8161（*5825～5836*）



SK9209
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト
（2.5Y6/3オリーブ黄色粘質シルト・5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトブロック状20%混）
2. 5Y6/3オリーブ黄色粘質シルト
（5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトブロック状10%混）
3. 5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土
（7.5Y4/2灰オリーブ粘質シルトブロック状7%混）
4. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
5. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト
6. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
（2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルトブロック状7%混）
7. 5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土

SK9210
8. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト（礫混,炭化物帯状混）
9. 5Y4/2灰オリーブ色粘質シルト（礫混,炭化物帯状混）
10. 5Y4/1灰色粘質シルト
（5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトブロック状5%,礫混）
11. 5Y2/1黒色シルト質粘土
12. 5Y5/2灰オリーブ色粘質シルト
（5Y7/3浅黄色粘質シルトブロック状5%混）
13. 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
（5Y6/3オリーブ黄色砂質シルトブロック状10%混）

SK9287
1. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（炭化物1%混）

SK9212
1. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト
（2.5Y7/4浅黄色粘質シルトブロック状3%混,炭化物2%混）
2. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
（2.5Y7/4浅黄色粘質シルトブロック状5%混,炭化物5%混）
3. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
4. 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土
5. 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土（炭化物5%混）
6. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
（2.5Y7/4浅黄色粘質シルトブロック状5%混）
7. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
（2.5Y2/1黒色粘質シルトブロック状30%混）
8. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
（2.5Y7/4浅黄色粘質シルトブロック状3%混,炭化物3%混）
9. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
（2.5Y7/4浅黄色粘質シルトブロック状5%,砂礫15%混）
10. 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土
（2.5Y2/1黒色シルト質粘土20%混）

0　2m

第554図　遺構実測図
1. SK9209・SK9210　2. SK9287　3. SK9212

ＳＤ9203やＳＤ9204の埋土とよく似ており，意識的に短期間に埋めた堆積状況を示している。これに対しＳＫ9210は，炭化物が部分的に堆積する暗灰黄色粘質シルトなどが堆積している。遺物は共に中世土師器が出土している。

9212号土坑（ＳＫ9212，第554・556図，図版207・256）

ＳＢ182の内部，ＳＥ9213の北側に隣接して検出した長方形の土坑。井戸に関連する施設と考えている。長径2.7m，短径2.2m，深さは58cmと深い。埋土は上層に暗灰黄色粘質シルトが堆積し，中層にはバンド状に黒褐色シルト質粘土が，下層には黄灰色シルト質粘土が堆積し，床面直上には直径５cm～20cmの自然礫が敷き詰められていた。この礫の上面には珠洲や漆器・下駄などの木製品が出土している。5838は総黒色漆の椀。輪高台で，内面と体部外面の２箇所には赤色漆で草花文が描かれる。5839は幅広の長円形の連歯下駄で，長さは16cmと小型で，断面形は長方形を呈し，歯は後歯のほうが前歯に比べわずかに磨り減る。遺物はこの他にも土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・打製石斧（5840）が出土している。

9287号土坑（ＳＫ9287，第554・556図）

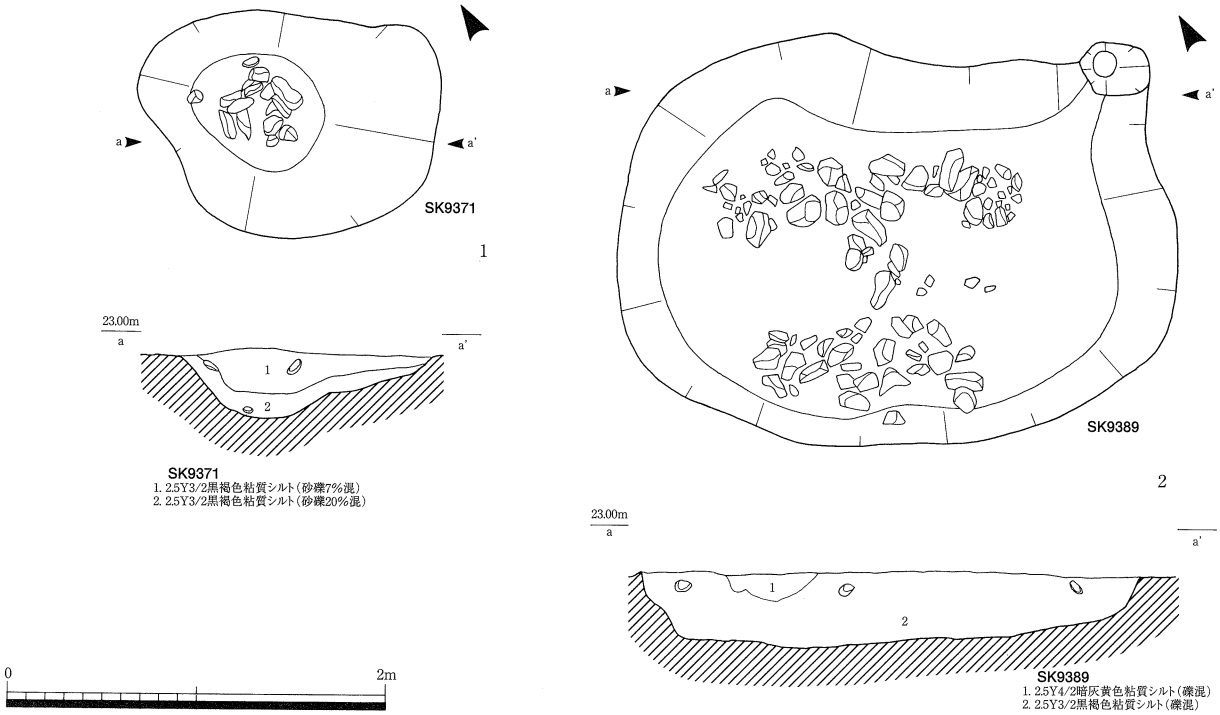
ＳＢ184の内部，ＳＥ9286の北側に隣接して検出した楕円形の浅い土坑。規模は長径1.6m，短径1.2m，深さ11cmである。埋土は暗灰黄色粘質シルトの単層で，遺物は瀬戸美濃が出土している。5837は灰釉の瀬戸美濃の丸皿の底部。見込みには印花文が押捺され，浅黄色を呈する釉薬は全面に施釉される。高台内側には輪状に重ね焼きの跡が残る。

9345号土坑（ＳＫ9345，第556図）

ＳＢ183の南で検出した小型の土坑。規模は直径約25cm前後の円形で，深さは16cmである。遺物には中国製青磁の碗（5841）の底部がある。オリーブ灰色を呈し，釉は高台外面まで施釉され，畳付け・高台内側は露胎である。

9356土坑（ＳＫ9356，第556図）

ＳＢ185の内部で検出した小型の土坑。規模は直径約40cm前後の円形で，深さは21cmである。中世土師器（5842）が出土しており，同一個体の破片が北に位置するＳＫ9353から出土し，接合できた。口



第555図　遺構実測図
1. SK9371　2. SK9389

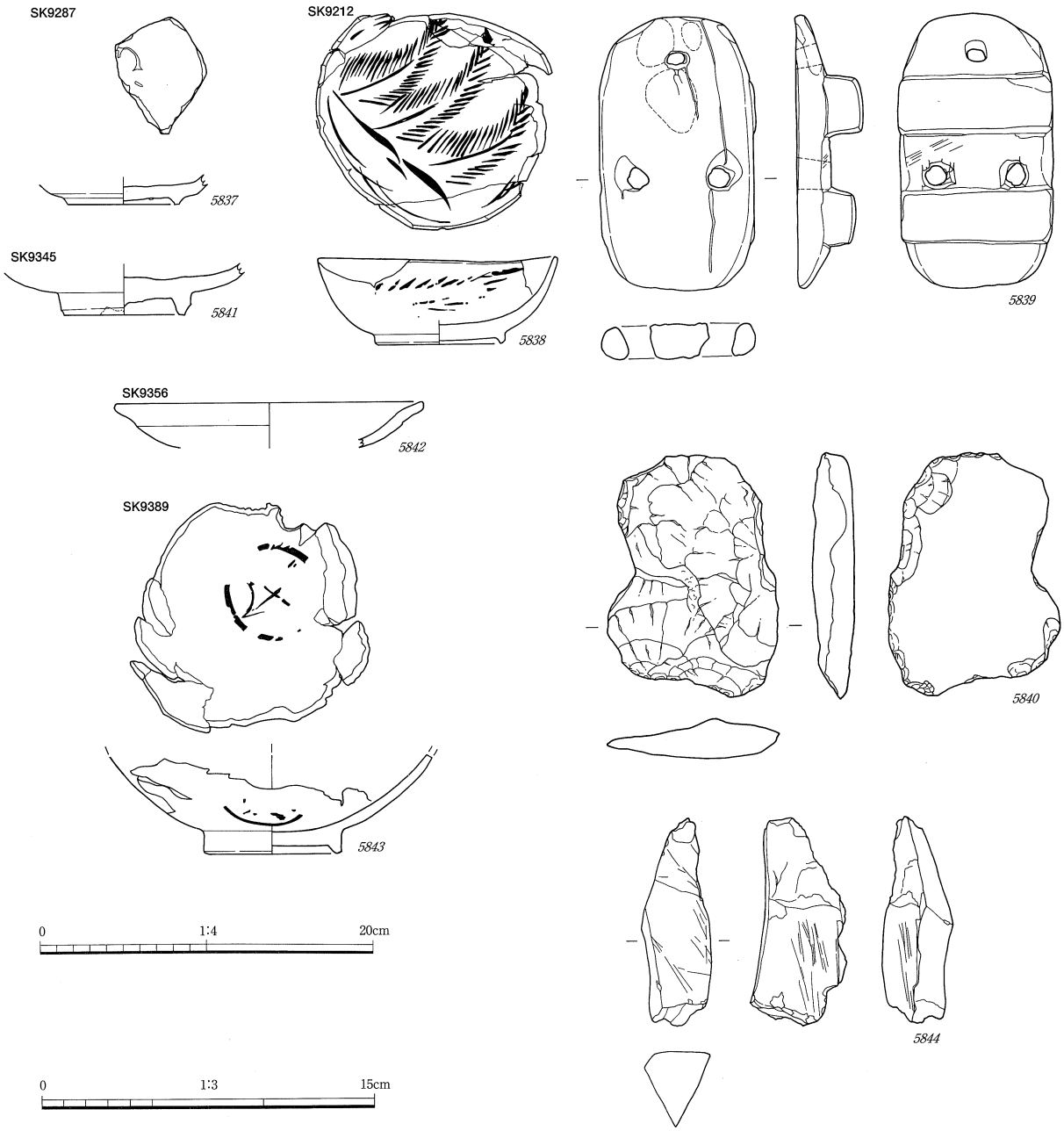
径13.8cmで，口縁部がやや外反するタイプである。

9371号土坑（ＳＫ9371，第555図）

ＳＢ185の内部で検出した楕円形の土坑。長径1.6m，短径1.2m，深さ37cmで，断面形は擂鉢状である。埋土は上面に暗灰黄色粘質シルトが堆積している。建物に伴うと考えられ，遺物は中世土師器が出土している。

9389号土坑（ＳＫ9389，第555・556図，図版207・257・265）

ＳＢ185の南端で検出した長方形の土坑。建物の梁行と土坑の長辺が揃うことからこの建物の伴う土坑と考えている。規模は長辺３ｍ，短辺２ｍで，深さは43cmである。埋土は10cm～20cmの礫が混じる黒褐色砂質シルトの単層である。遺物は中世土師器・珠洲・木製品・石製品（5844）・銅銭が出土している。5843は総黒色漆の椀の底部で，見込みと体部外面に赤色漆で文様を描く。　（島田美佐子）



第556図　遺物実測図　（*5837・5840～5842・5844*　1/3，*5838・5839・5843*　1/4）
SK9212（*5838～5840*）　SK9287（*5837*）　SK9345（*5841*）　SK9356（*5842*）　SK9389（*5843・5844*）

9613号土坑（ＳＫ9613，第557・561図）

ＳＢ192の内部に位置し，長径3.9m×短径3.2m，深さ66cmを測る。平面形は楕円形を呈し，北にＳＫ9614がある。埋土はほぼ水平に堆積しており，上層に10cm大の礫が多く混じる黒褐色砂質土，中層に３cm大の礫が混じる黒褐色砂質シルト，下層に黒褐色粘質シルトである。西側に重複しているＳＥ9603はＳＫ9613より新しい。出土遺物には珠洲（5845）・越前がある。5845は珠洲擂鉢。体部は直線的に開き，内面には３cmに10条の卸目が施入される。珠洲Ⅴ期のもの。

9614号土坑（ＳＫ9614，第557図）

ＳＫ9613の北に重複しており，ＳＫ9613より古い。平面形は2.7m×1.2mの不整形を呈し，深さは23cmを測る。埋土は上層が礫が多く混じる黒褐色砂質土，下層が黒褐色砂質シルトである。西に隣接するＳＥ9615との新旧関係は明確ではない。

9617号土坑（ＳＫ9617，第557図）

ＳＢ193の北東隅に位置し，規模は1.6m×1.3m，深さ15cmで，平面形は方形を呈する。埋土は礫が多い黒褐色砂質シルトである。ＳＢ193の柱穴ＳＰ9656と重複し，ＳＫ9617の方が古いことから，ＳＢ193に関連したものではないと考える。

9618号土坑（ＳＫ9618，第558図）

ＳＢ193の西に近接し，3.7m×2.3m，深さ76cmを測る。平面形は隅丸方形で北側が一段深くなっている。埋土には礫が多く混じっており，上層が黒褐色砂質土，下層が黒色粘質シルトである。出土遺物には中世土師器・珠洲・中国製青磁・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里がある。

9620号土坑（ＳＫ9620，第558図）

ＳＢ192の内部に位置し，ＳＫ9614の北に隣接している。規模は2.1m×1.8m，深さ64cmを測る。上層の埋土は礫が多く混じる黒褐色砂質シルトであるが，下層の黒色粘質シルト，褐色砂礫の堆積は人為的なものと考えられる。

9624号土坑（ＳＫ9624，第558図）

ＳＢ189とＳＢ190が重複する部分に位置し，平面形は1.9m×1.4mの楕円形，深さは44cmを測る。埋土は礫が多い黒褐色砂質土で，炭化物が混じる。

9629号土坑（ＳＫ9629，第561図）

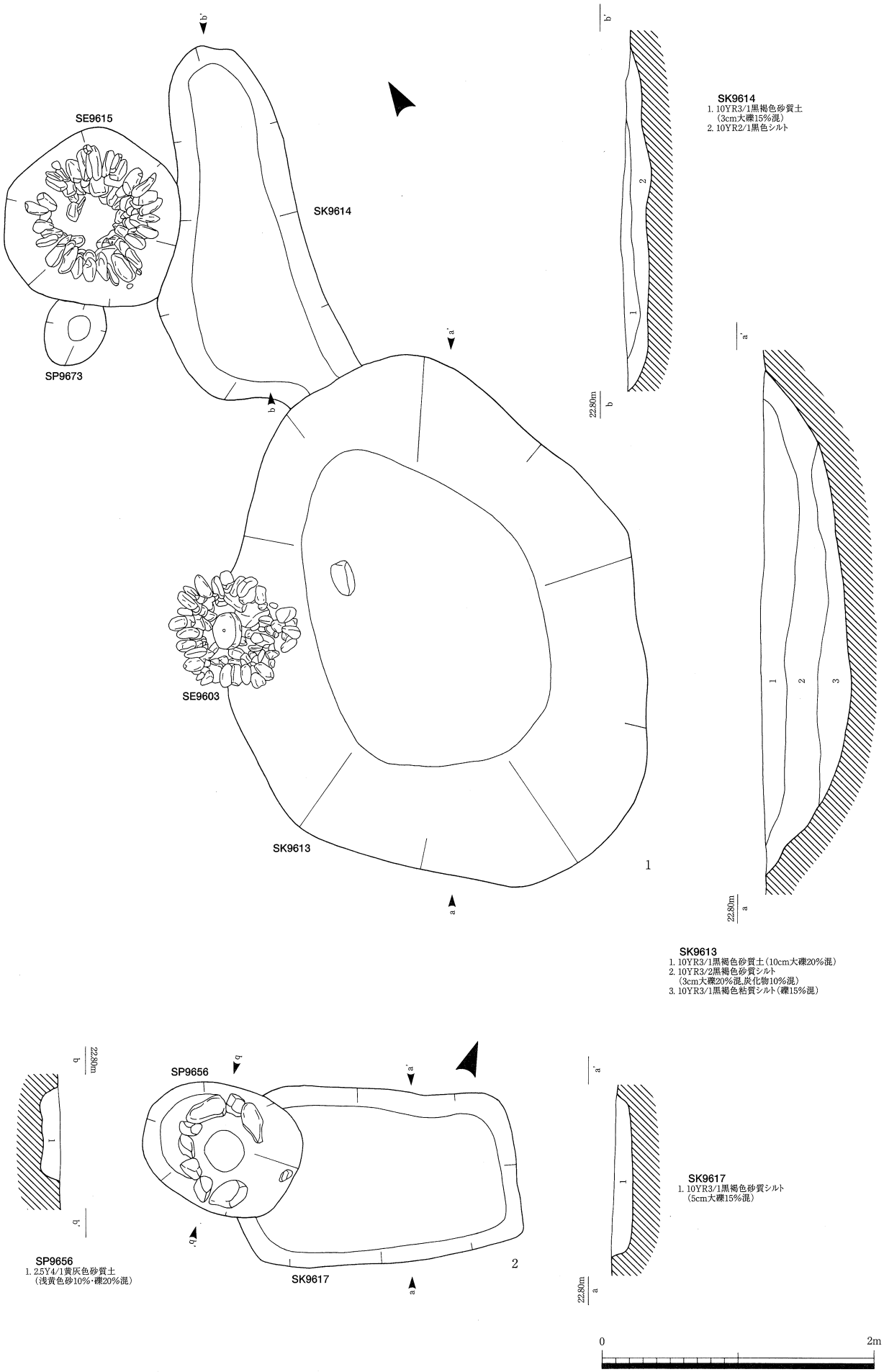
撹乱坑であるが，遺物は越前（5846）が出土した。5846は越前擂鉢。口径24.2cmを測り，体部は直線的に開き，口縁部はやや内湾気味に屈曲し端部を丸く収める。内面には８条一単位の卸目が間隔をあけて施入される。16世紀のもの。

9631号土坑（ＳＫ9631，第559・561図）

ＳＢ190内部北東隅に位置し，建物に関連した遺構と考える。規模は2.4m×1.8m，深さ67cmで，平面形は楕円形を呈する。埋土は上層が灰黄褐色砂質シルト，中層が黒褐色砂質シルト，下層がにぶい黄褐色砂で，上層ほど大きな礫が混じっている。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5847・5848）がある。5847・5848は中世土師器皿で，口径は9.5cm・10.9cmを測る。体部は直線的に開き，5847の口縁端部はつまみ上げてやや肥大しており，5848はやや尖る。16世紀のもの。

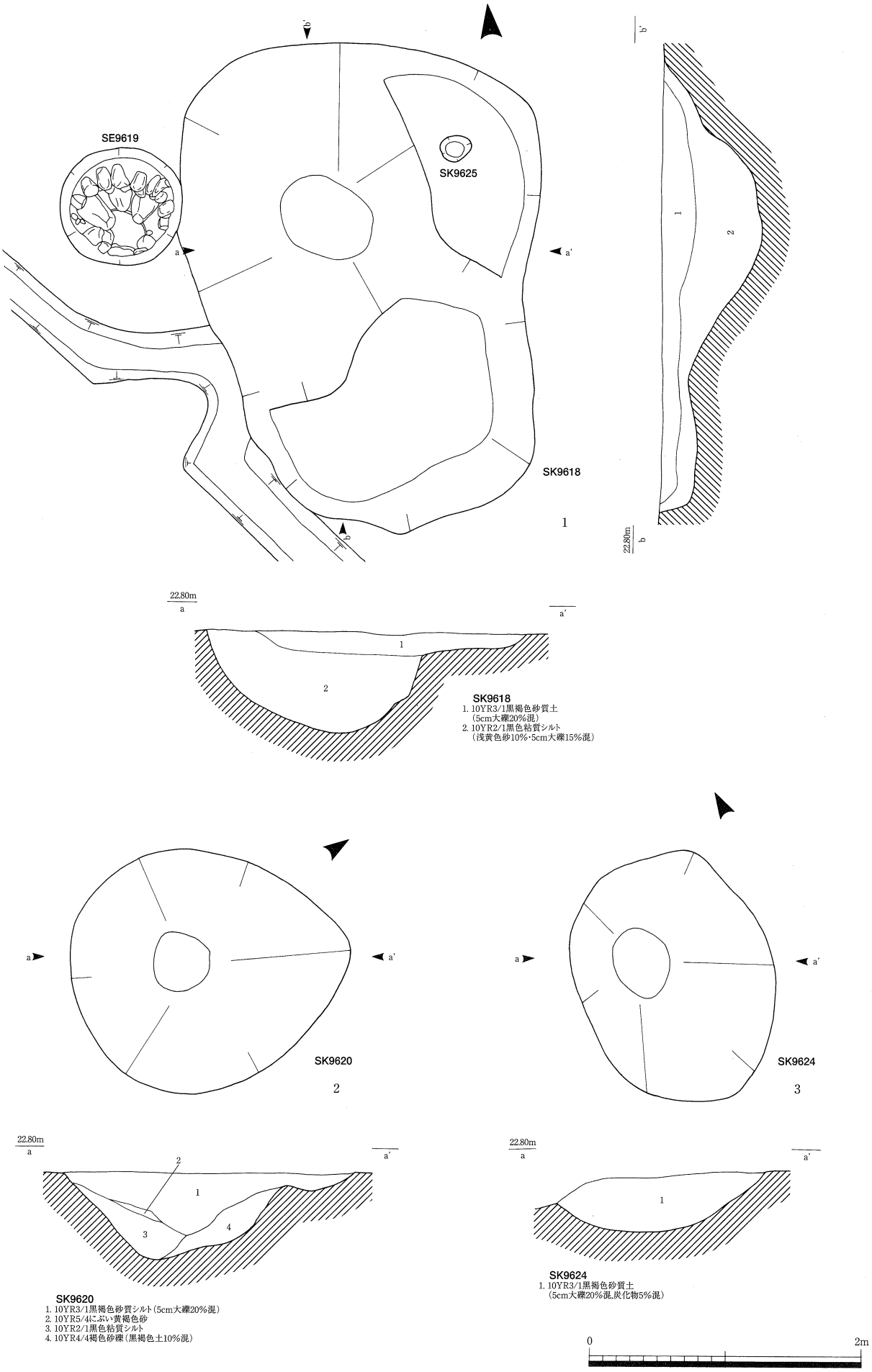
9632号土坑（ＳＫ9632，第559・561図）

ＳＢ189の北西隅に位置し，建物に関連した遺構と考える。平面形は不整形であるが，規模は2.5m×2.1m，深さ54cmを測る。埋土は上層が大きい礫が多い暗灰黄色砂質土，中層がオリーブ黒色粘質シルト，下層は黄褐色砂礫である。出土遺物には中世土師器（5849・5850）・珠洲・中国製白磁・中国



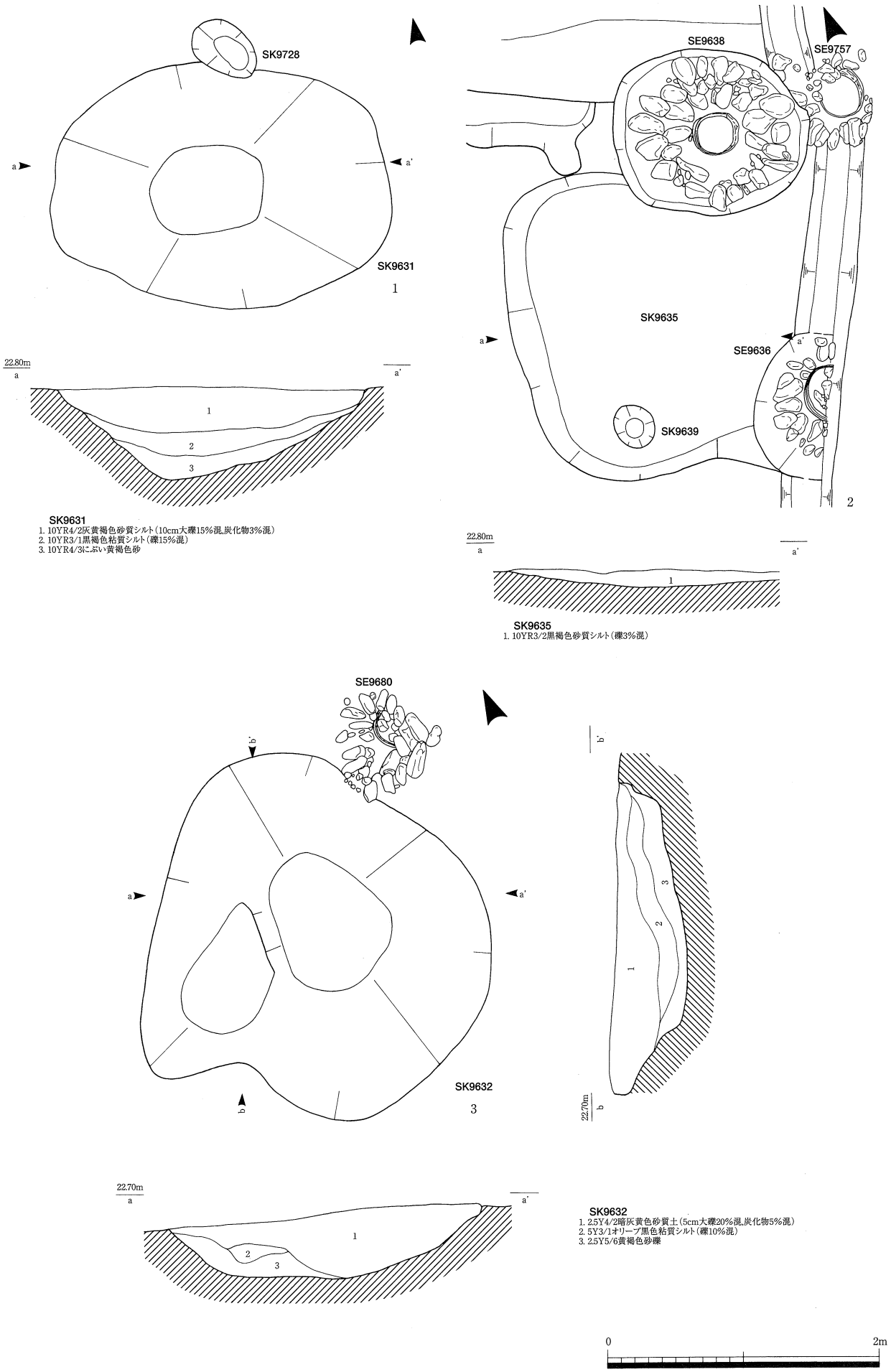
第557図　遺構実測図

1. SK9613・SK9614　2. SK9617・SP9656

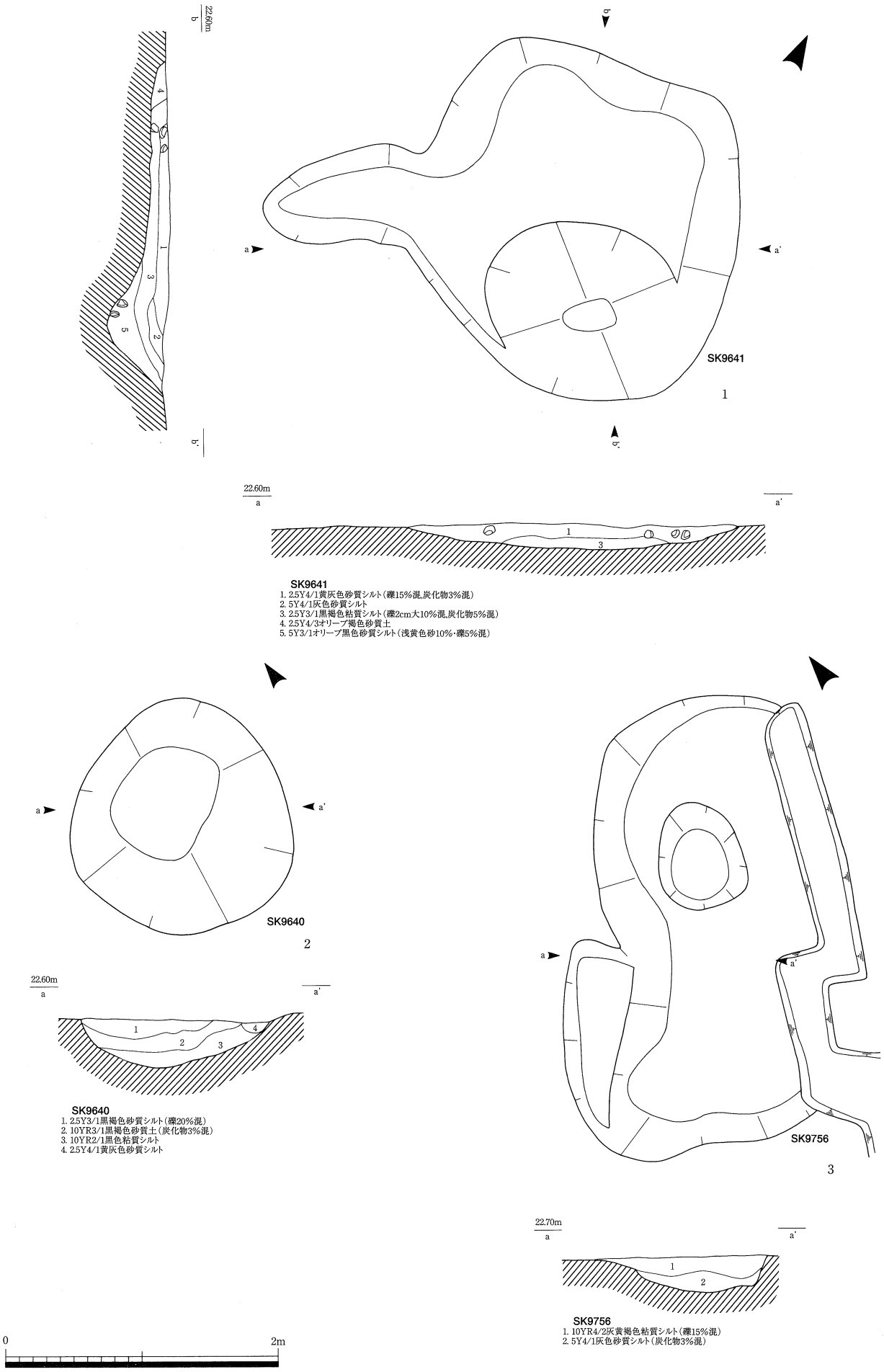


第558図　遺構実測図

1. SK9618　2. SK9620　3. SK9624



第559図　遺構実測図
1. SK9631　2. SK9635　3. SK9632



第560図　遺構実測図

1. SK9641　2. SK9640　3. SK9756

製青磁・伊万里（5851）・加工板がある。5849・5850は中世土師器皿。口径は7.8cm・9cmを測り，体部は直線的に開き，口縁端部の形態は5849はつまみ上げて丸く，5850は外反して尖る。5849は口縁端部に煤が付着しており，灯明皿として使用されたものである。16世紀のもの。5851は伊万里碗。口径8.8cmを測り，体部は直線的で口縁端部は鉄釉を施す。

9635号土坑（ＳＫ9635，第559・561図）

調査区端に位置するため，西部分の調査のみとなった。ＳＢ188の内部にあり，規模は2.2m×2.1m，深さ13cmを測る。底面はほぼ水平で，埋土は黒褐色砂質シルトである。建物に付属した方形竪穴状土坑で，土間状の作業スペースと考える。出土遺物には中国製白磁（5852）がある。5852は中国製白磁皿。底径3.5cmを測り，体部と底部外面は露胎である。

9640号土坑（ＳＫ9640，第560図）

ＳＢ187とＳＢ188の中間に位置し，直径1.7m，深さ36cmを測る。埋土は上層が黒褐色砂質シルト，中層が黒褐色砂質土，下層が黒色粘質シルトであり，上層には礫が多い。出土遺物には珠洲・曲物がある。

9641号土坑（ＳＫ9641，第560図）

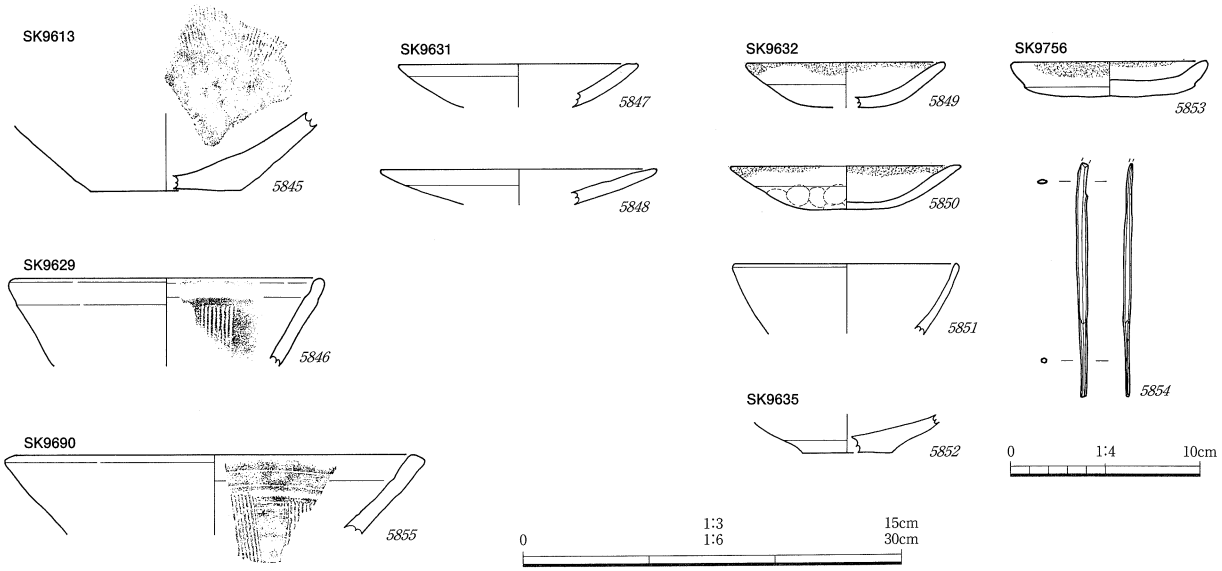
ＳＢ187の内部に位置し，平面形は不整形である。上部を削平されているが，もっとも深い所で47cmを測る。一段高い部分はほぼ水平で，建物内部の竪穴状土坑と推定する。埋土には炭化物が混じり，黄灰色砂質シルト，黒褐色粘質シルトが主体である。

9690号土坑（ＳＫ9690，第561図）

ＳＢ190の西1.5mに位置する。直径37cm，深さ5cmを測る小型の土坑で，越前（5855）が出土している。5855は越前擂鉢。口径31.4cmを測り，体部は直線的に開き，口縁端部は外傾した面をとる。内面には7条一単位の卸目が間隔をあけて施入されている。

9756号土坑（ＳＫ9756，第560・561図）

ＳＢ186に近接するが，調査区端に位置するため東部分は未調査である。平面形は不整形で，規模は長さ3.3m，幅1.5m，深さ40cmを測る。埋土は上層が灰黄褐色粘質シルト，下層が灰色砂質シルトで，上層には礫が混じる。出土遺物には中世土師器（5853）・箸（5854）・加工板がある。5853は中世土師器皿。口径7.7cm，器高1.4cmを測り，丸底から体部が短く立ち上がり，体部と底部の境には段ができる。14世紀後半のもの。5854は箸。一方の端部を欠損しているが，側面は先端に向かって細く削ら



第561図　遺物実測図（*5847～5853*　1/3，*5854*　1/4，*5845・5846・5855*　1/6）
SK9613（*5845*）　SK9629（*5846*）　SK9631（*5847・5848*）　SK9632（*5849～5851*）　SK9635（*5852*）　SK9690（*5855*）
SK9756（*5853・5854*）

れ，断面形は円に近くなる。

9807号土坑（ＳＫ9807，第562～564図，図版207・224・228・257・258・264）

ＳＤ9760内部の東肩付近にあり，ＳＤ9802から東に分岐するＳＤ9808が流れ込んでいる。平面形はやや不整な方形を呈し，規模は4.9m×3.9m，深さ46cmを測る。埋土の主体は上層が黒褐色砂質シルト，下層が黒褐色硬質ロームであり，ＳＤ9808が流れ込む付近には巻貝や二枚貝の堆積層がある。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（5856～5858）・珠洲・瀬戸美濃（5859）・中国製青磁（5860）・瓦質土器（5861）・漆器（5862～5868）・折敷（5878・5879）・糸巻（5869～5875）・加工材（5876・5877）・加工板・石鉢（5880）がある。

5856～5858は中世土師器皿。口径は8.5cm～9.3cmを測り，体部は大きく外反し，口縁端部はつまみ上げる。15世紀後半のもの。5859は瀬戸美濃の端反皿。口径9.1cm，器高2.1cmを測り，口縁は緩やかに外反し，高台は断面逆三角形の付高台である。内外面に灰釉が施釉され，畳付け部分だけは釉を削り取っている。大窯Ⅰ期のもの。5860は龍泉窯系青磁碗。口径11.6cmを測り，体部はやや内湾気味で，外面には細描蓮弁文が施される。口縁端部内面には煤が付着している。5861は瓦質土器。体部には方形の窓が空けられている。

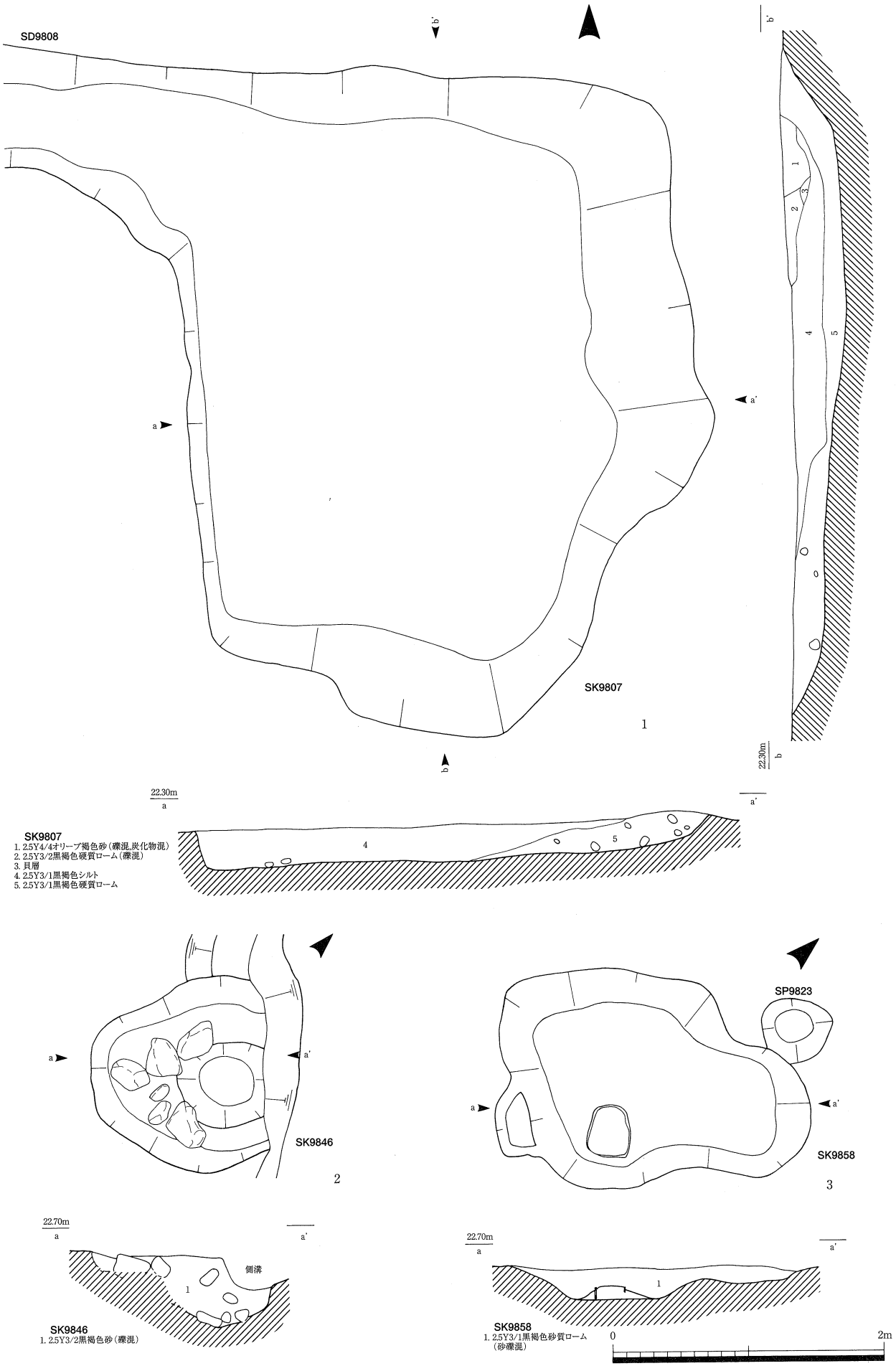
5862・5863は漆器皿。体部は直線的に開き，5862は口径10cmで，内面に赤色漆による文様があるが意匠は不明。5863は口径9.2cmで，内外面とも黒色漆である。5864～5868は漆器椀。5865～5867は低い高台脇から体部が緩やかにカーブして立ち上がり，口縁部が直線的に開く。内外面に赤色漆による文様が施されており，5865・5867は鶴文，5866は亀甲に扇文である。5868は外黒内赤色漆の椀で，体部は緩やかにカーブして立ち上がる，深身のもの。

5869～5875は糸巻。糸巻の構造としては，4本の枠木とそれを固定するための２箇所の横木がある。横木は２枚の板を十字形に相欠きでかみ合わせ，中心に軸孔をあけ，四方の端を棒状に削り出し，枠木に結合させるもの。5869～5872は横木。5869が最も残存状態が良く残存長18.1cmを測るが，他の３点も同形態で２組の横木を構成すると考えられる。板の中央を幅広く残し，両端は棒状に削り出して枝部を作る。相欠き仕口のかみ合わせ部分の中央には直径1.6cmの軸孔が穿たれている。5873～5875は枠木。最も長いもので27.8cmを測り，大型品とみられる。腹面は平坦で断面がかまぼこ形を呈し，横木の結合部から両端に向かって斜めに削り込む。枘孔は方形で２箇所穿たれている。5876・5877は加工材。5876は弓状で，丸木の樹皮を取去る程度の整形しかしていない。両端には紐掛けを削り出し，端部は削って尖らせ，内側には方形の刳り込みを入れる。用途不明。5877は残存長46.1cm，幅3.9cmを測る。断面形は長楕円形を呈するが，端部は斜めに削り込み断面形は長方形である。5878・5879は折敷の底板。5878は長辺側に２孔一対の孔が２箇所，短辺側には２箇所と１箇所釘孔がある。長辺側からは樺皮紐結合とみられるが，釘孔は補修痕であろうか。5879は１箇所に釘孔が残ることから折敷と考える。

5880は石鉢。口径26cmを測り，やや下向きの注口がつく。内面は摩滅していることから，かなり使用されている。

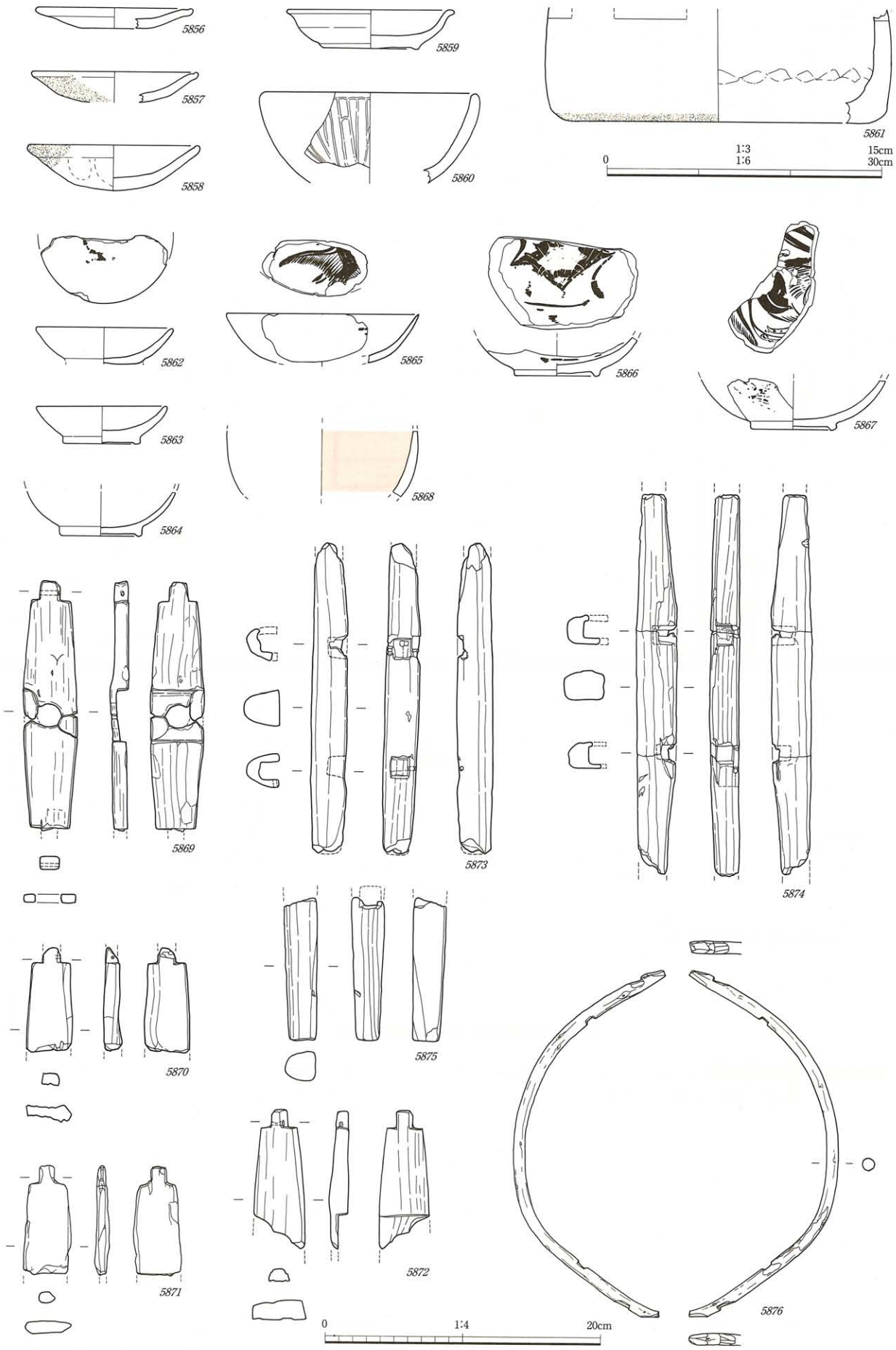
9814号土坑（ＳＫ9814，第564図）

ＳＢ195の柱穴ＳＰ9817とＳＰ9883の中間に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.2m，深さ14cmを測る。出土遺物は中世土師器（5881）がある。5881は中世土師器皿。口径は13.9cmを測り，体部は大きく外反し，口縁端部はつまみ上げる。15世紀後半のもの。

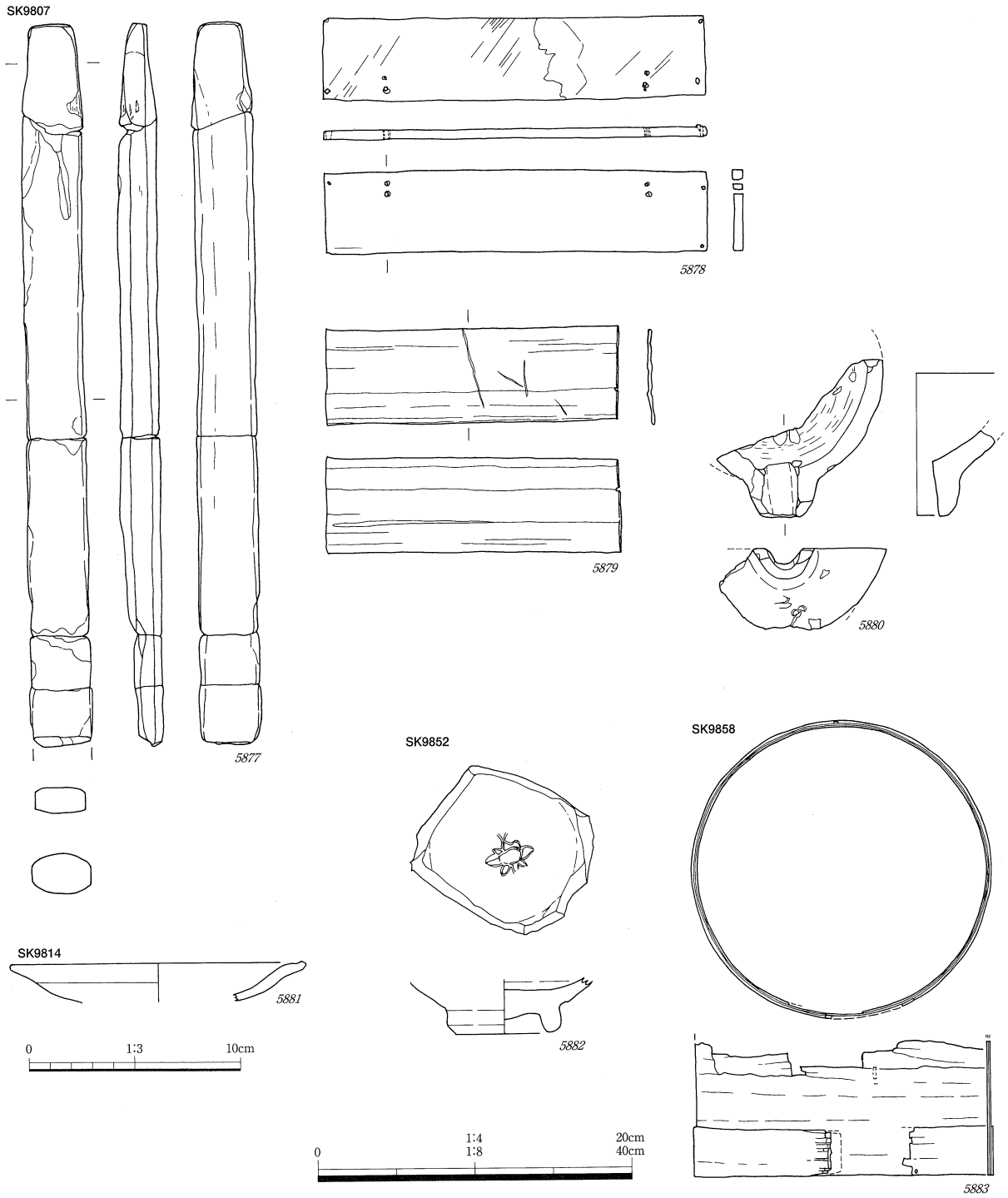


第562図　遺構実測図

1. SK9807　2. SK9846　3. SK9858



第563図　遺物実測図　（*5856*～*5861*　1/3，*5862*～*5875*　1/4，*5876*　1/6）
SK9807



第564図　遺物実測図　（*5881・5882*　1/3，*5877～5879*　1/4，*5880・5883*　1/8）
SK9807（*5877～5880*）　SK9814（*5881*）　SK9852（*5882*）　SK9858（*5883*）

9846号土坑（ＳＫ9846，第562図）

ＳＢ194の内部南東隅に位置し，調査区外にのびる。確認した規模は1.5m×1.3m，深さ58cmを測る。埋土は礫が混じる黒褐色砂であるが，上層には大きな礫が無造作に入っている。

9852号土坑（ＳＫ9852，第564図，図版228）

ＳＢ194の内部に位置し，ＳＥ9847と重複するが，ＳＫ9852の方が古い。規模は95cm×65cm，深さ19cmを測り，出土遺物には中国製青磁（5882）がある。5882は碗底部。見込みに草花文のスタンプが施されている。釉は内面と外面から高台内端部まで施され，底部外面は露胎である。15世紀のもの。

9858号土坑（ＳＫ9858，第562・564図）

ＳＢ196とＳＢ197が重複する北西隅に位置し，ＳＢ197の柱穴ＳＰ9823と重複するが，ＳＫ9858の方が古い。平面形は不整形を呈し，規模は2.3m×1.5m，深さ26cmを測る。埋土は砂礫が混じる黒褐色砂質ロームである。南端では曲物（5883）が出土したことから，井戸の可能性が考えられる。5883は釘結合曲物で，下部にタガがある。タガ，側板とも残存状態が悪いため直径，綴じ合せの復元は困難であるが，タガの綴じ合せは１列外５段綴じとみられる。また，下縁には釘孔がみられることから，本来は底板と結合していたが井戸の水溜として転用する際，底板を抜いたと考えられる。

（中川道子）

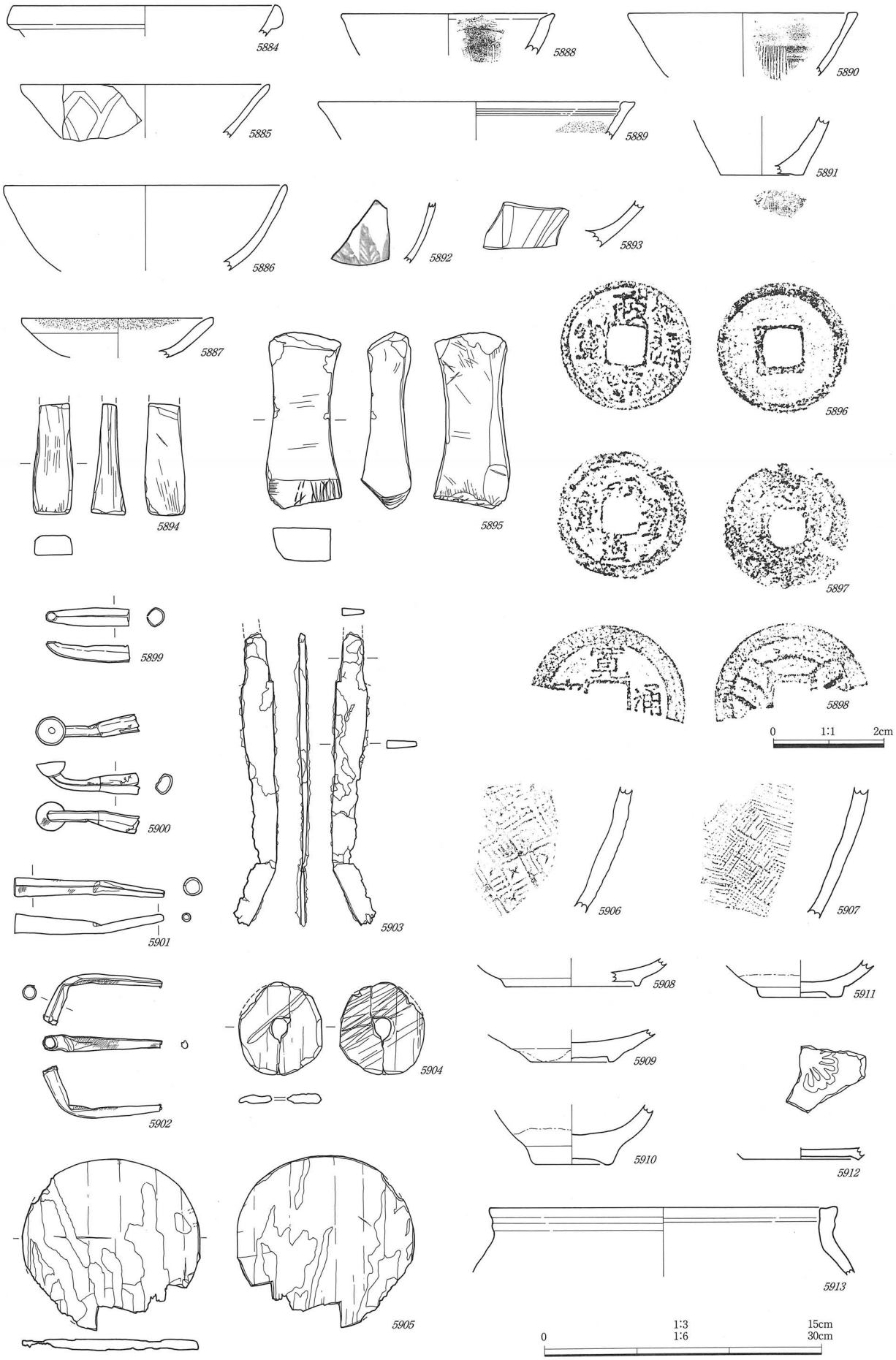
Ｆ　包含層出土遺物

Ｄ地区包含層出土遺物（第565図，図版168・178）

Ｄ地区の包含層からは中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国製白磁・中国製青磁・青花・越中瀬戸・唐津・木製品・石製品・金属製品が出土している。

5884は中国製白磁碗。口径14cmを測り，口縁部には大きな玉縁をもつ。太宰府分類白磁碗Ⅳ類にあたる。5885・5886・5893は龍泉窯系青磁碗。5885・5893は鎬蓮弁文をもつ。5892は青花碗。外面には葉文がみられる。5888～5891・5906・5907は珠洲。5888～5890は擂鉢。口縁端部は内傾するものと水平で端部が肥厚するものがあり，5888の卸目は２cmに８目の櫛目原体で全面に，5890は２cmに８目の原体で間隔をあけて施入されている。珠洲Ⅴ期のもの。端面には櫛目波状文帯が巡る。5891・5906・5907は壺。5906・5907は装飾叩打文を施すもので，5906は一辺1.2cmの区画に「×」を入れ，右上がり方向を３筋，左下がり方向を４筋で枠取りした四方襷文，5907は綾杉文である。珠洲Ⅰ・Ⅱ期のもの。5887は中世土師器皿。口径10.4cmを測り，口縁部が大きく外反し，端部はやや肥厚しつまみ上げる。16世紀前半のもの。5908・5912は瀬戸美濃皿。貼付高台をもち，5908は全面に，5912は畳付け部分を除いて灰釉がかけられ，5912は内面見込みに印花文がある。16世紀代のもの。5909・5911は越中瀬戸。5909は断面三角形の削り出し高台の皿で，内禿で釉止めの段はなく，内面見込み部分は使用により摩滅している。5911は天目茶椀で，削り出し高台をもつ。内面と体部外面には鉄釉がかけられ，体部下半から底部にかけては露胎である。17世紀後半～18世紀前半のもの。5910は唐津椀。内外面に灰釉が施釉される。5913は越前甕。口径37.8cmを測り，口縁部は口縁帯が退化して肥厚し，内面が凹線，外面が稜線となっている。16世紀前半のもの。

5904・5905は円形板。5904は直径4.5cmを測り，中央に0.8cmの円孔がある。片面には刃痕が多くみられることから，転用されたものと考える。5905は欠損がかなり激しい。5894・5895は砥石。5894は直方体を呈し，両面を使用している。5895は中央がややくびれた長方形を呈するもので，短側面に鋸痕がみられる。5899～5902は煙管。5899・5900は雁首。5899は火皿を欠損しているが，脂返しは僅かに湾曲し首部が取り付く。5901・5902は吸口。5903は刀子であろうか。5896は政和通寶。5897は元豊



第565図　遺物実測図（*5896～5898*　1/1，*5884～5887・5892～5895・5899～5912*　1/3，*5888～5891・5913*　1/6）
包含層

通寶。5898は寛□永ヵ通寶。

Ｆ１地区包含層出土遺物（第566～568図，図版226・259・266・267）

地区の北半分は撹乱により，また東半分は現代にいたる川による撹乱のため，量は少ないが幅広い時期の遺物が出土している。中世以降の遺物には中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・中国製青磁・越前・越中瀬戸・唐津・木製品・石製品・金属製品の他，近世から現代の陶磁器がある。

5914～5929は中世土師器皿。5914～5917は口縁部を強くナデて外反させるもの。口径は7.4cm～9.8cmで，5915がやや丸底である以外は平底である。5918～5922は丸底で口縁部が外反，またはやや内湾気味なもの。口径は7.4cm～11cmで，5919の口縁端部には煤が付着する。5923～5925は平底で口縁部が大きく外反し，端部をつまみ上げる。口径は8.5cm～9.4cmで，5924は口縁内外面に煤が付着している。5926は口縁部二段ナデで，端部の面取りはなく，内面にハケ状工具痕がある。5927は口縁が内湾気味で，端部に面をとらないもの。5928・5929は口縁部が直線的に伸び，端部には外傾した面をとり断面三角形を呈するもの。口径12.7cm・14cmを測り，5929は体部が黒変している。5930は瀬戸美濃皿の底部。全面に灰釉が施され，底部外面には輪ドチ痕がみられる。16世紀後半のもの。

5931は中国製青白磁渦文瓶。体部の小破片であるが，全面に櫛状の施文具で渦文を施している。釉は薄い水色を帯びており，外面にはやや厚く，内面には薄くかかる。

5932～5935は中国製青磁。5932は杯。体部下部が「く」字状に屈曲し，体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は肥厚させている。5933は線描蓮弁文。細線と剣頭とは蓮弁を意識して施入されているが，離れている。15世紀後半～16世紀のもの。5934は内面に沈線が１条巡る。

5936～5943は珠洲。5936～5939は擂鉢。5936は口縁部が内湾気味で，端部は外傾し方頭，卸目は1.6cmに11条の細密な原体で施入されるが，小破片のため間隔は不明。珠洲Ⅱ期のもの。5937は体部が直線的に開き，口縁外端部を僅かに挽き出す。卸目は3.3cmに13条を間隔をあけて施入する。Ⅲ期のもの。5938は内湾気味な口縁で，内傾した端面には1.2cmに５条の波状文を施す。卸目は３cmに９条の原体で間隔をあけて施入される。珠洲Ⅳ期のもの。5939は体部は直線的に開き，口縁は肥厚した内端に1.8cmの幅広な面をとり，端部が鋭い長三角形を呈する。端面には８条の櫛目波状文を施す。珠洲Ⅴ期のもの。5940・5941は甕。口縁部は短く，端部の形態は5940は略三角形，5941は方頭の「く」字口縁である。珠洲Ⅳ期のもの。5942・5943は壺。5942は壺の肩部。一辺1.2cmの区画に「×」を入れ，右上がり方向を３筋，左下がり方向を４筋で枠取りした四方襷文である。珠洲Ⅰ・Ⅱ期にみられる装飾叩打文を施すもの。5943は体部が直線的に伸び，底部外面は静止糸切りである。

5944～5947は越中瀬戸。5944は向付。口縁部が屈曲して直立し，端部はやや外反する。底部は削り出し高台。登窯期のもので，17世紀前葉～中頃と考える。鉄釉を施すが，見込みと外面体部下半から底部は無釉である。5945～5947は皿。5945は体部が若干丸みをもって立ち上がり，口縁部が端反り風になる内禿皿である。断面が三角形を呈する削り出し高台で，鉄釉を施す。5946は外反気味に立ち上がり，口縁部は直線的に伸びる。断面が三角形を呈する削り出し高台で，灰釉を施す。見込みと外面体部下半から底部は無釉であるが，見込み中央の窪みには釉が残っている。また，見込みには重ね焼き痕がみられる。底部外面には墨書「×または十」がある。5945・5946は17世紀前葉～中頃のもの。5947は付け高台の皿底部である。内面には釉止めの段があり，灰釉を施す。底部外面には墨書「×または十」がある。16世紀末～17世紀初頭のもの。

5948は唐津皿。やや丸みをもつ体部で，断面四角形の削り出し高台をもつ。釉は透明に近い灰釉で，見込みと外面体部下半から底部が無釉である。

5949～5954は木製品。5949・5950は漆器椀で，5949は内面赤色漆，外面は黒色漆に赤色漆による草木文の漆絵が施される。5950は内面が赤色漆，外面が黒色漆で，高台が高く，内側の削り込みが深い。5953はしゃもじ。炭化物が付着している。5951・5952は折敷で，2枚以上の板をはぎ合わせている。5951は一辺のほぼ中央に結合孔があり，もう一辺は側板との組み合わせのために低い段を作っている。5952は四角形の四隅を削って八角形にしたものと考える。各辺のほぼ中央には側板との結合のための木釘が残る釘孔があるほか，中心寄りに釘孔がみられる。5954は連歯下駄。台は隅丸方形を呈し，歯は台と同じ幅で，後歯は磨り減っている。前壺周囲は指圧痕がある。5955は竹製のヘラ。先端を丸く削り出し，外面の節を削り落としている。

5956は刀子の破片と考える。断面長方形であることから茎の一部であろうか。

5957～5962は石製品。5957は方形に抉られた穴をもち，上下と2側面を水平・垂直に作っている。5958は断面形が隅丸長方形を呈するもので，V字状の溝が一カ所彫られている。5959～5960は石臼。5959・5960は上臼。5959は断面方形で上縁端部がほぼ水平，窪みも水平である。挽き木の装着方法は横打ち込み式である。挽き目は8分画で，8～11条の副溝が刻まれる。5960は上部を欠損しており，芯棒受けと供給口が残るのみであるが，風化が激しい。5961は下臼。摺り面はやや凸面で，片側が特に摺り減っている。挽き目は8分画で，8～11条の副溝が刻まれる。5962は蓮弁状の浮き彫りのある台座状。上面は欠損しているため，用途は不明。

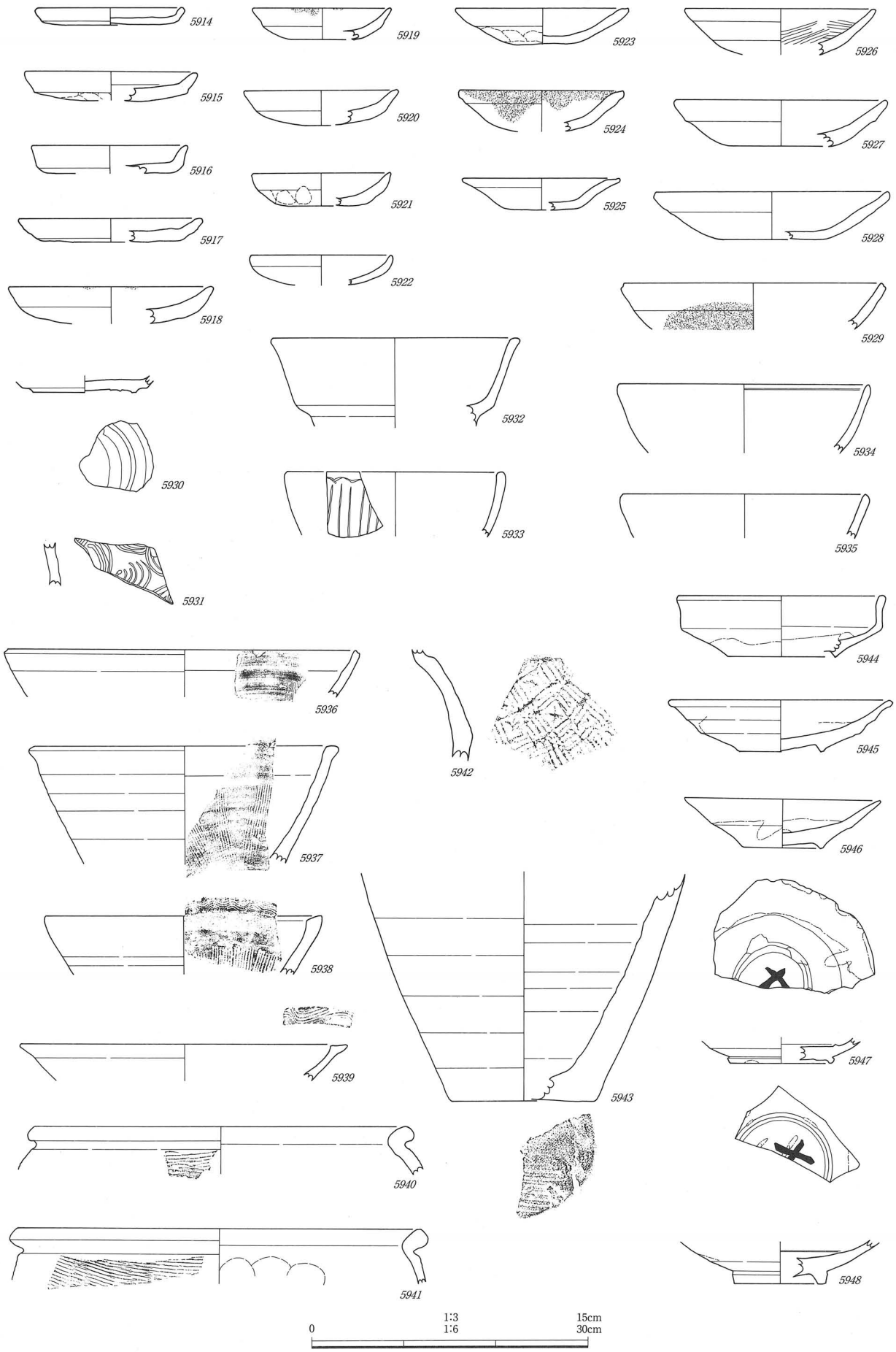
F2地区の包含層出土遺物（第569～571図，図版178・224・225・259・270）

遺構が南に大きく偏ることから，包含層の遺物も同様な出土状況である。包含層の遺物には中世土師器・中国製青磁・中国製白磁・珠洲・越前・瓦質土器・木製品・石製品・金属製品がある。

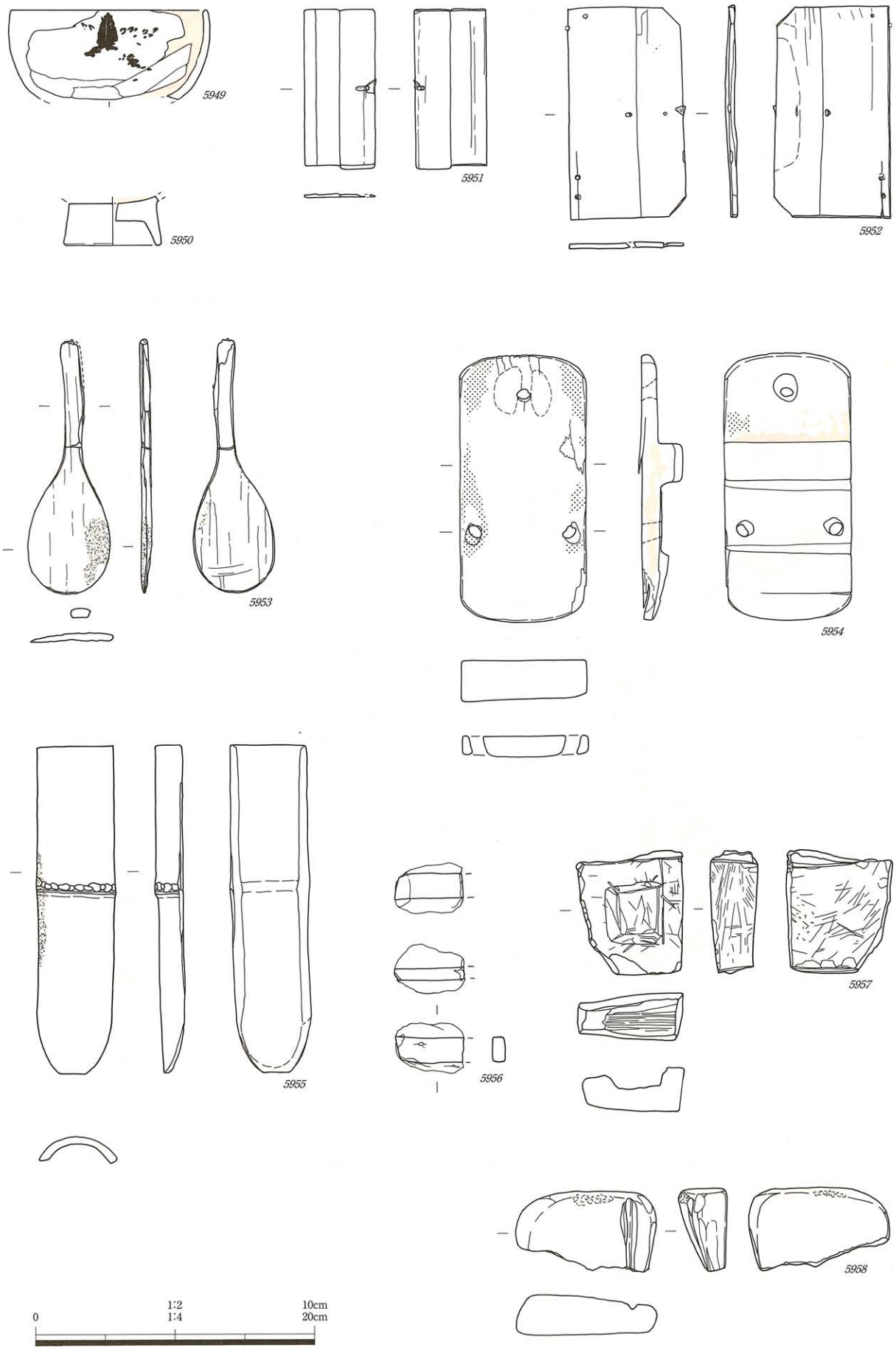
5963～5984は中世土師器皿。5963～5965は口縁部が直立気味で，平底である。口径は7㎝～7.6㎝を測り，5963の底部内面にはハケ状工具痕があり，内外面が火を受けている。14世紀のもの。5970～5983は一段ナデで，体部は丸みをもち口縁部が内湾する。口径8㎝～12.2㎝を測る。14世紀後半のもの。5966～5969は口縁部を強くナデて底部と体部の境に段ができ，端部は外反する。底部は厚く丸底のものと平底のものがある。5969の内底面には炭化物が付着している。14世紀後半のもの。5972～5981は一段ナデで口縁部が大きく開き，平底なもの。端部の形態には少し肥大し面をとるもの（5972～5975）と，つまみ上げやや尖るもの（5976～5981）がある。口径は8.3㎝～10㎝まであり，8㎝台のものが多い。5974～5976・5981は口縁端部内外面，5978は全面に煤が付着しており，灯明皿に使用したものと考える。16世紀前半～中頃のもの。5982は一段ナデで口縁部が外反気味に大きく開き，口径11.4㎝を測る。5984は二段ナデで，体部は丸みをもって外上方に伸びる。口径12.1㎝を測り，器壁は厚い。13世紀中頃～後半のもの。

5985は龍泉窯系青磁碗。高台は比較的高く，断面三角形に近い。釉は透明でくすんだ黄緑色で，全面に施釉後，底部外面を輪状に削り取っている。見込みには草花文のスタンプがある。太宰府分類Ⅳ類になると考える。15世紀後半のもの。

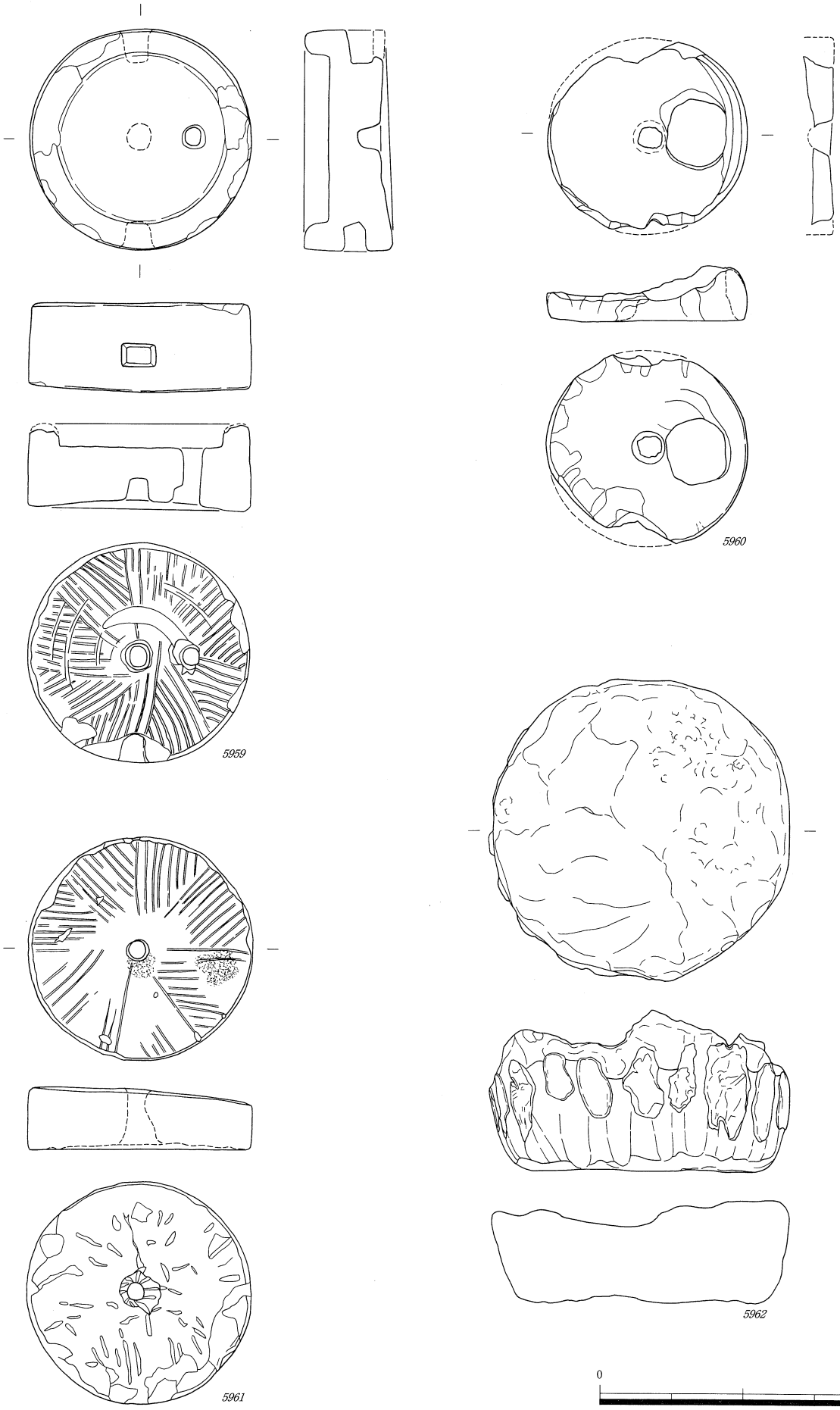
5986～5990は中国製白磁。5986は碗。体部は丸みをもち，高台が細く断面三角形を呈する。底部の厚さは平均的に薄く，内面は無文である。釉は灰白色を呈し，内面と外面は高台畳付けとの境まで施釉される。5987～5990は皿。5987～5989は体部下半から底部外面が露胎である。5987の釉調はやや緑色を帯びた灰色で，畳付け部分に付いた釉を削り取っている。体部が直線的に伸び，見込みに沈線状の段が1段ある。高台は外面を直に，内面を斜めに削り，底部中央部は厚い。漆接ぎがみられる。5988はやや黄色みを帯びた灰白色を呈する釉で，高台内中心部に黒色の漆が付着している。5989は高台の



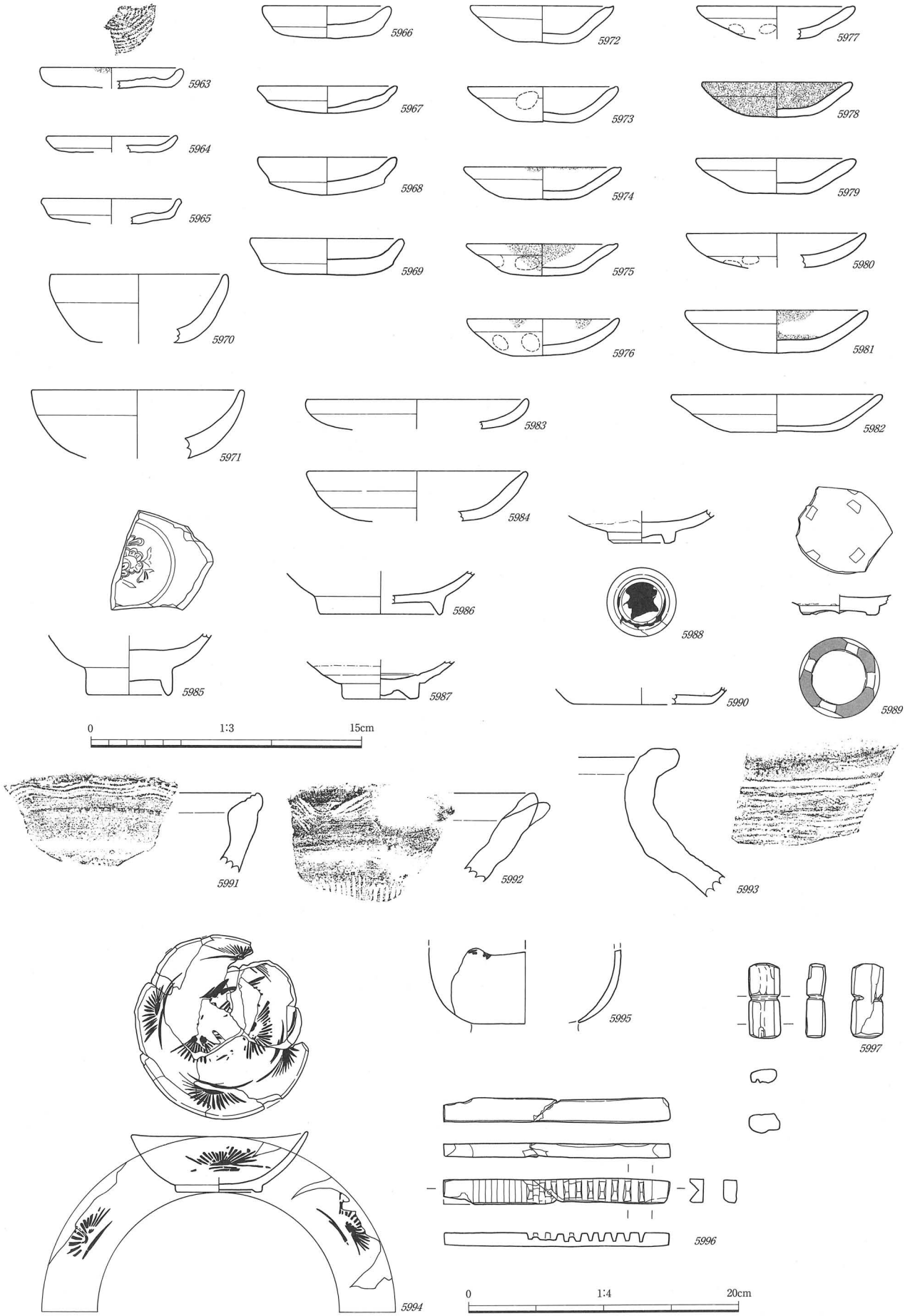
第566図　遺物実測図　（*5914～5935・5942～5948*　1/3，*5936～5941*　1/6）
包含層



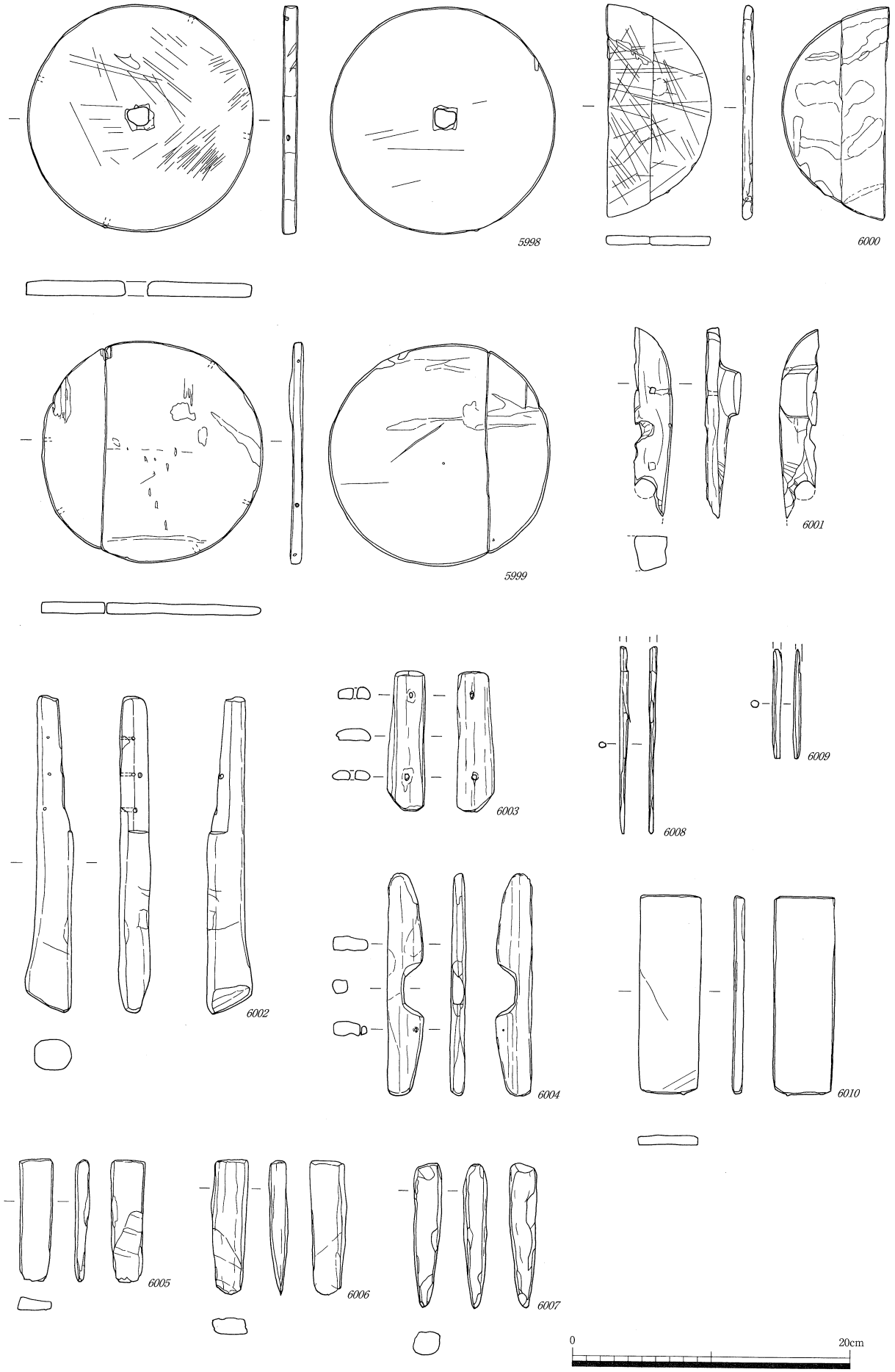
第567図　遺物実測図　（*5956・5957*　1/2，*5949～5955・5958*　1/4）
包含層



第568図　遺物実測図　(1/8)
包含層



第569図　遺物実測図　（*5963～5993*　1/3，*5994～5997*　1/4）
包含層

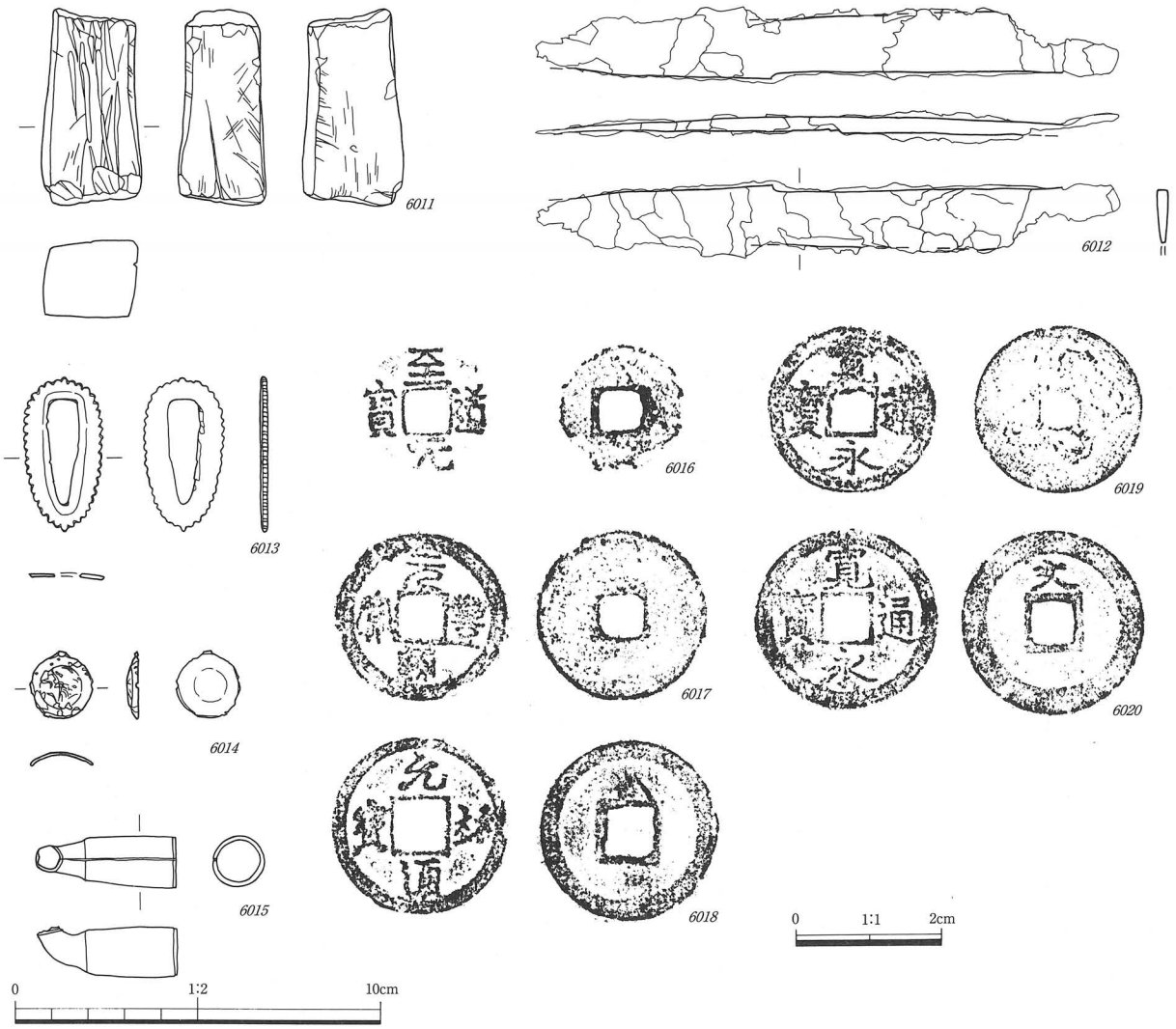


第570図　遺物実測図　(1/4)
包含層

4箇所に抉り込みを入れる割高台で，見込みには重ね焼きの目跡が4箇所ある。外面の施釉されない部分には墨痕がみられる。5990はやや透明な白色の釉を全面施釉するもので，体部が内湾気味に立ち上がる。太宰府分類のⅢⅨ類である。

5991～5993は珠洲。5991・5992は擂鉢。5991は口縁が肥厚した内端に幅2㎝の面をとり，4条一単位の櫛目波状文帯を巡らす。口縁部は口端基部を強くナデ，顎状を呈する。珠洲Ⅴ期のもの。5992は直線的に開く器体で，口縁端部は円頭を呈し，幅2.5㎝を測る広い口縁内端面に5条一単位の櫛目波状文帯を巡らす。卸目は3㎝に9条（破片のためそれ以上の可能性がある）の原体を用い，全面に施入される。注口は指2本分で小さく作られる。珠洲Ⅵ期のもの。5993は甕。コ字状に外反する長頸で，口縁部は嘴頭で端部を水平に僅かに突出させている。外面のタタキは頸基部から一段下がったところから始まり，3㎝当たり10条の原体を用いている。珠洲Ⅰ期のもの。

5994～6010は木製品。5994・5995は漆器椀。5994は低い高台で，体部が高台脇から直線的に伸び，口縁部が大きく開く浅い椀。内外面共に黒色漆に赤色漆で文様が施されている。5995は内面黒色漆，外面は黒色漆に赤色漆で文様が施されているが，意匠は不明。5996は長さ16.2㎝，幅1.8㎝，厚さ1㎝を測る材の一面に刻み目を入れたもの。刻みの幅は約0.4㎝で，両側から削り込みほぼ中央が最も深くなる。刻み目の間隔約0.6㎝で，予め目安として線を入れてあり，10本の刻み目が並ぶ以外に，削り込まれない9本の線がみられる。用途は不明。5997は抉りが入ったもので，長さ5.6㎝，幅2.2㎝を測る。



第571図　遺物実測図　（*6016～6020*　1/1，*6011～6015*　1/2）
包含層

一方を圭頭にし，抉りは三方から施されている。5998～6000は直径15.4cm～16cmを測る円形板。5998は中央に不整形な孔がある。6000の側面には側板との結合のための釘孔がみられる。6001は連歯下駄。6009は箸。6002～6004は加工材。6002は長さ23cmを測り，上部には３箇所の釘孔がみられる。下端部はやや裾広がりで断面形は隅丸方形である。6003は断面半円形で，上下２箇所に釘孔がある。6004は長さ16cmを測り，一方の長辺は緩やかな弧を描く。中央に相欠きの仕口があり，仕口端には釘孔がある。6010は加工板。長さ14.3cm，幅4.3cmを測り，桶の側板状である。6005～6007は楔状。長さ8.8cm～10.3cm，幅２cm～2.5cmを測り，断面が長方形から方形で，両面から先端に向けて削られ，薄くなっている。

6011は砥石。断面が方形で，使用痕があるのは３面で，他の一面には鑿状工具痕がある。

6012～6020は金属製品。6012は刀子。錆朽が激しく茎の先端部を欠損しているが，長さ16cmを測る。6013は切羽。長さ4.2cm，幅２cm，内寸長2.9cm，幅0.9cmを測る。周囲は細かい花形を呈する。6014は円盤状で端部の一部を僅かに折り曲げ，何かを通すように作られている。また，左右対称に抉りが入っており，何かと組み合わせて使用したものと考えられる。表面には２本の沈線と中央の丸から放射状に線が出ているような文様があるが，錆のため不鮮明である。また部分的に漆状のものが付着している。6015は煙管の雁首。脂返しは短く，火皿部分を欠損しているが，火皿と首部の接合部には補強帯が付くとみられる。時期は17世紀中頃と考えられる。6016は至道元寶，6017は元豊通寶，6018は元祐通寶，6019・6020は寛永通寶である。

Ｆ３地区包含層出土遺物（第572～576図，図版219・224・260・267・270）

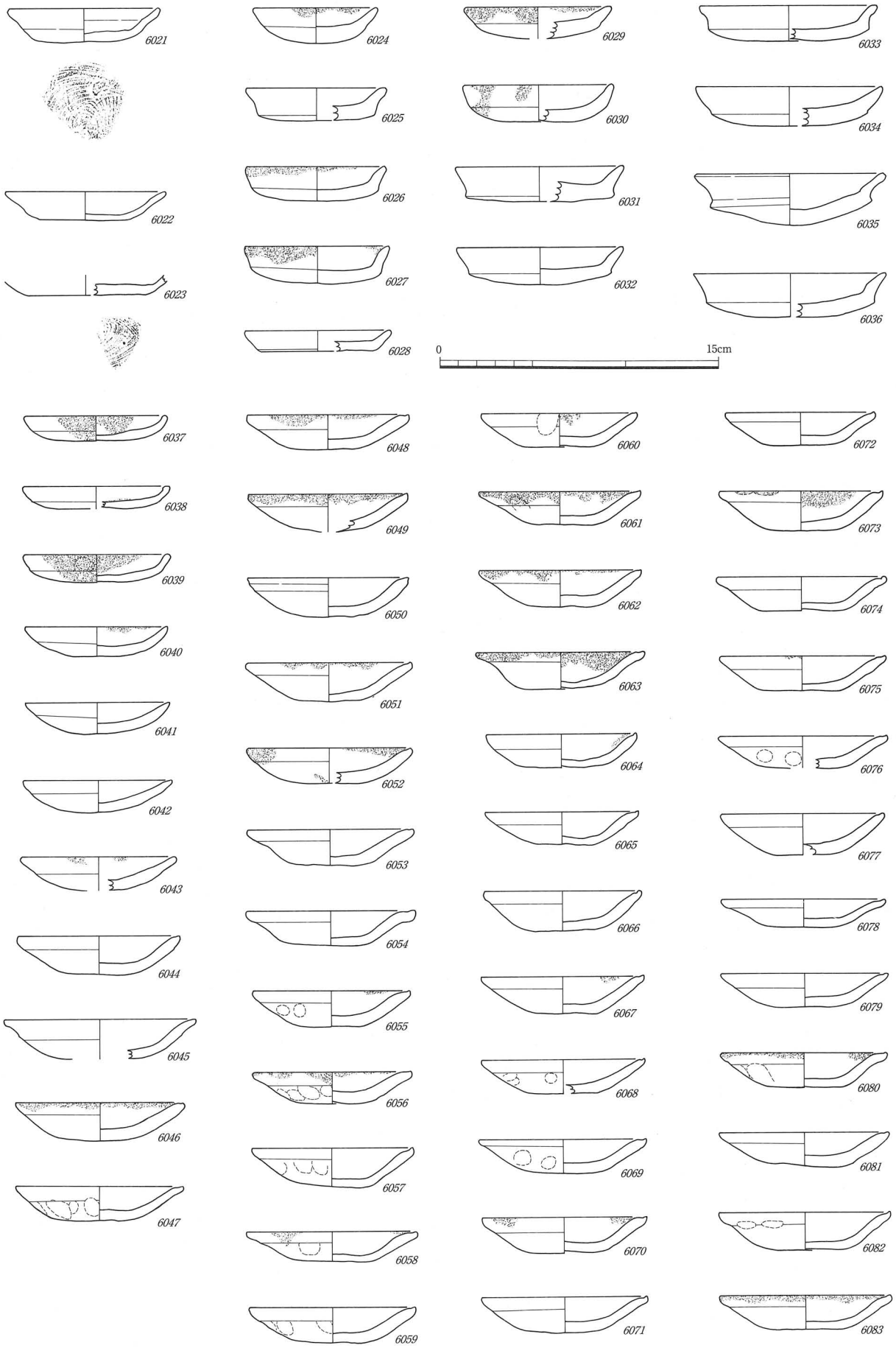
中世の遺物には中世土師器（6021～6152）・珠洲（6155～6171）・越前・瀬戸美濃（6153）・中国製白磁・中国製青磁（6154）・青花・瓦質土器（6172・6173）・越中瀬戸（6174・6175）・木製品（6176・6177）・石製品（6178・6179）・金属製品（6180～6194）がある。

6021～6023はロクロ成形の中世土師器皿。口径８cm～8.6cmを測り，口縁部が外反し，端部を丸く収める。底部には回転糸切り痕をそのまま残すもの（6021・6023），ナデ消すもの（6022）がある。6024～6152は非ロクロ成形の中世土師器皿。口径には6.5cm～20.3cmがあり，9cm台のものが大半を占める。器形には丸底または平底で口縁部が短く外反するもの（6024～6030），口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（6037～6039），口縁部が外反して開くもの（6040～6152）があり，後者が主体である。口縁端部の形態には外上方につまみ上げてやや尖るもの（6040～6045），つまみ上げて四角く面をとるもの（6046～6054），つまみ上げて面をとるもの（6055～6058・6148・6152），つまみ上げてやや尖るもの（6059～6063・6146・6151），つまみ上げ尖るもの（6064～6073），つまみ上げ丸く収めるもの（6074～6083・6125～6145・6147・6149・6150），やや肥厚しつまみ上げるもの（6084～6086），やや肥厚し丸く収めるもの（6087～6094），肥厚しつまみ上げるもの（6095～6109），やや肥厚し端部を水平につまみ出すもの（6110～6118），肥厚し丸く収めるもの（6119～6122），尖るもの（6123～6130）がある。14世紀後半～16世紀後半のもの。

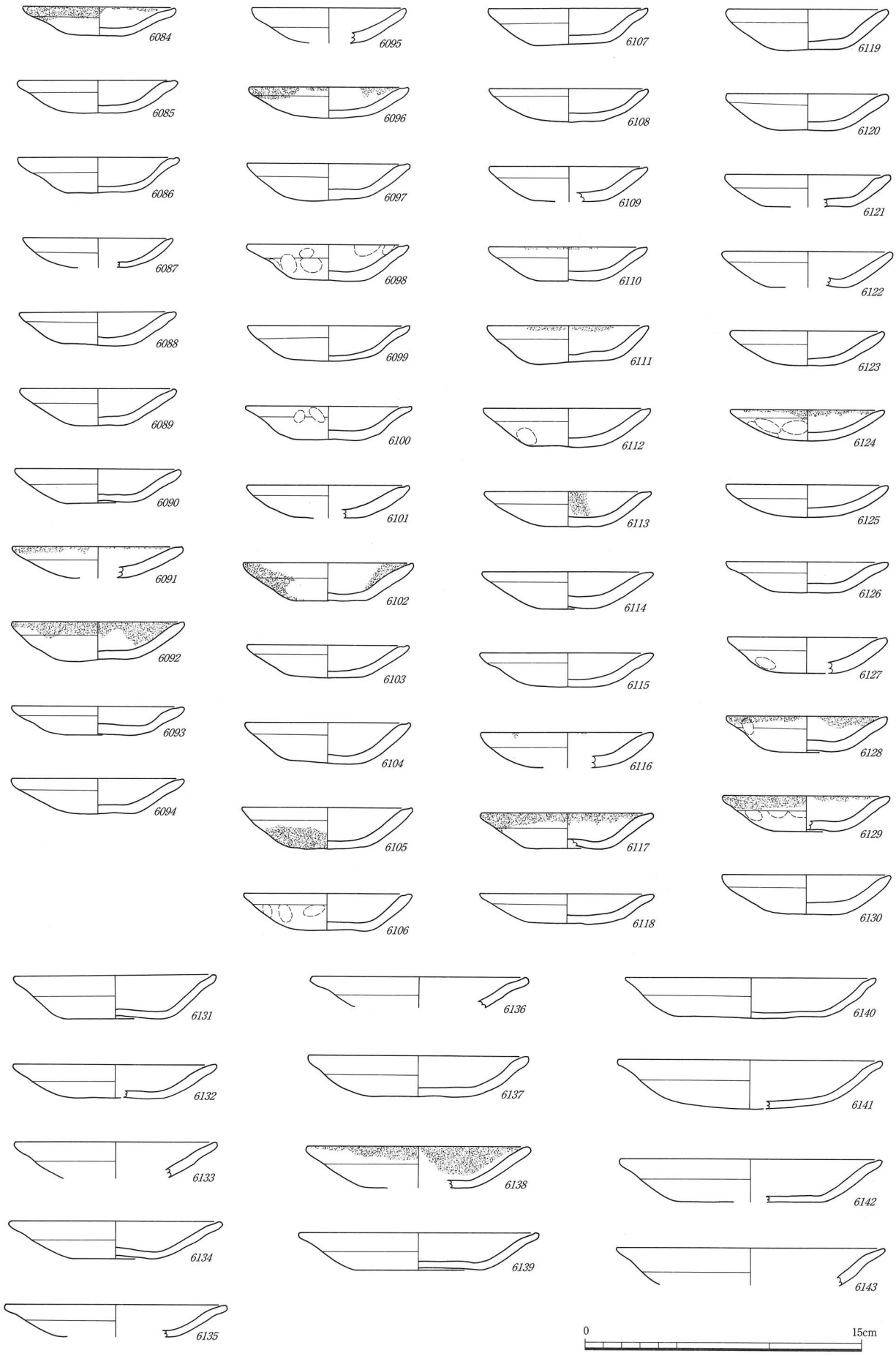
6153は瀬戸美濃の天目茶椀で，底径4.4cmを測る。体部には鉄釉，体部下半には錆釉が施されているが，被熱して変色している。

6154は龍泉窯系青磁碗。口径15.8cmを測り，内面にはヘラ及び櫛状のもので花文を施し，口縁端部外面には厚く釉が溜まっている。太宰府分類碗Ⅰ－３類にあたる。

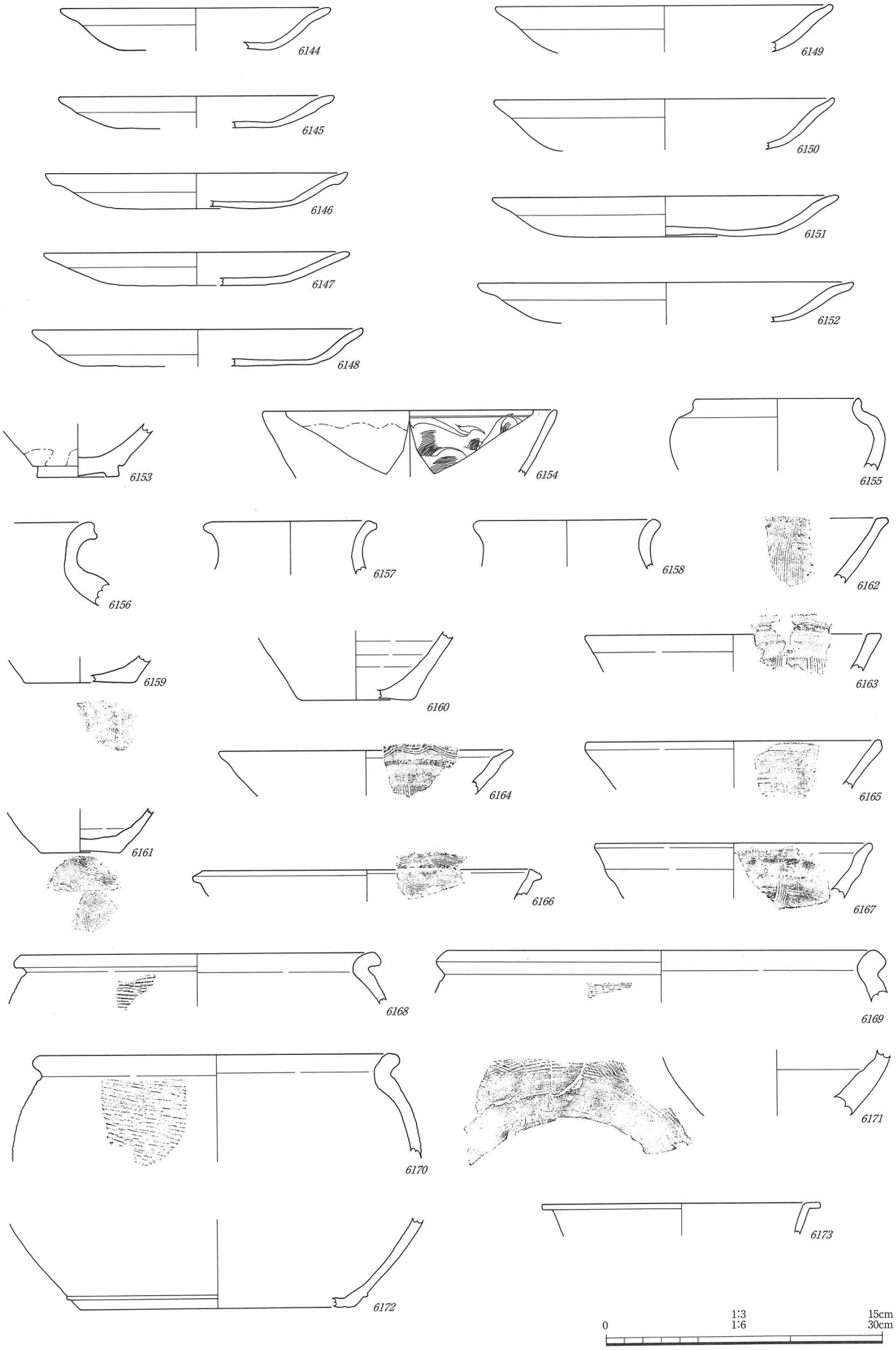
6155～6160は珠洲壺。6155は口径8.8cmを測る短頸壺で，体部は球形を呈する。6156は口縁先端が肥厚し端面に条溝が巡る。6157・6158は口径8.4cm・9.4cmを測り，口縁部が外反し端面が外傾する。6159



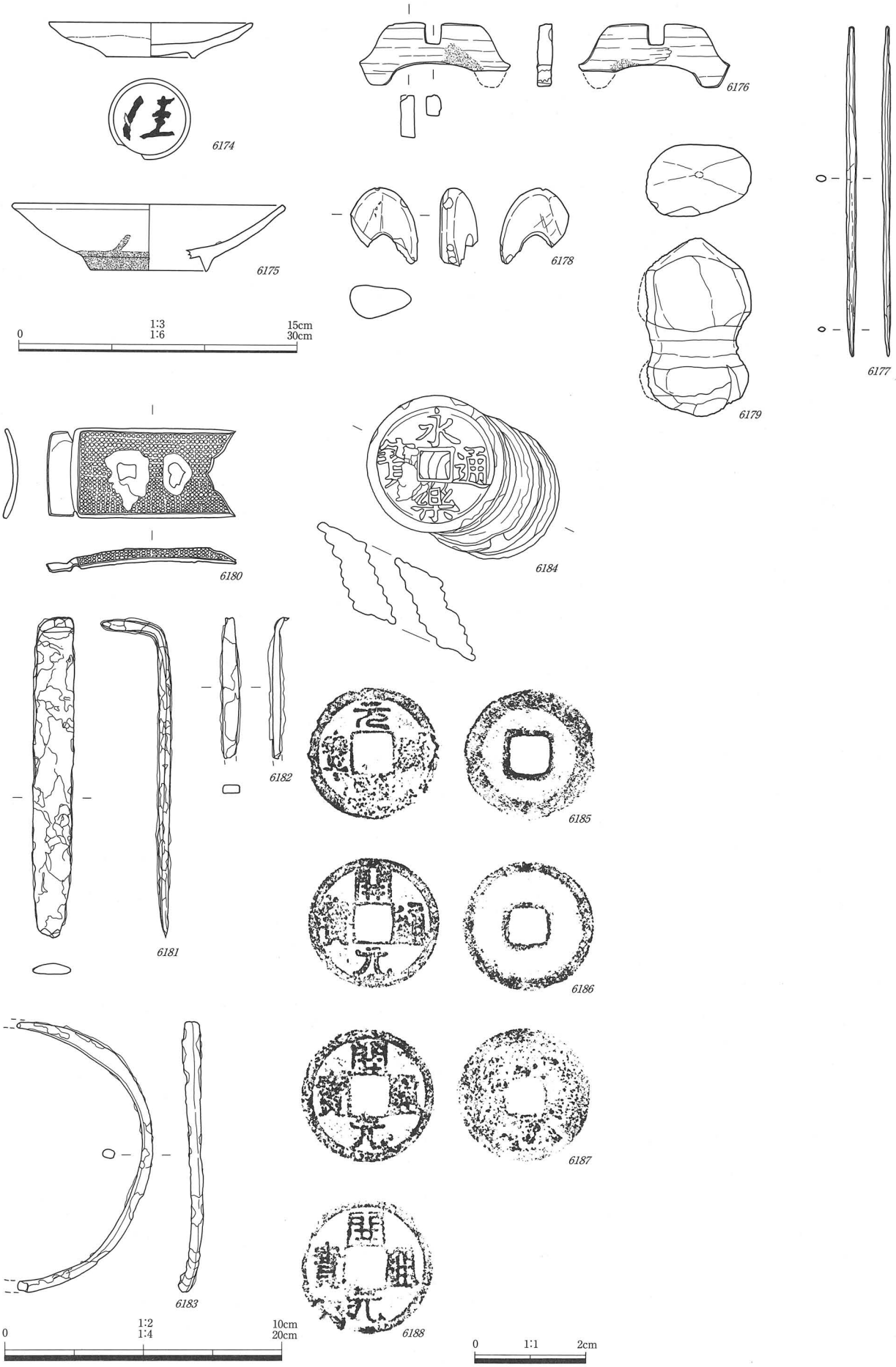
第572図　遺物実測図　(1/3)
包含層



第573図　遺物実測図　(1/3)
包含層



第574図　遺物実測図　（*6144～6158*　1/3，*6159～6173*　1/6）
包含層



第575図　遺物実測図（*6184*～*6188*　1/1，*6180*～*6183*　1/2，*6174*・*6175*・*6178*　1/3，*6176*・*6177*　1/4，*6179*　1/6）
包含層

～6161は壺底部で，6159・6160はR種，6161はT種である。底径8.5cm～12cmを測り，底部外面には静止糸切り痕がある。6162～6167は珠洲擂鉢で，口径29.8cm～35.6cmを測る。口縁端面に櫛目波状文帯が巡るものには6164・6166があり，6164は幅2.4cmの口縁内端面に6目，6166は外傾する口縁端面に9目，更に内面に1.5cm当たり10目の櫛目波状文帯が巡る。6162～6167は卸目のみのもので，6162は3.5cmに15目，6163は1.8cmに8目，6165は2.5cmに12目，6167は1.5cmに5目の卸し目が間隔をあけて施入されており，6167は曲線とみられる。6168～6171は珠洲甕。口径38cm～46.8cmを測り，短頸で方頭のくの字口縁である。体部外面のタタキは6168が3cm当たり9目，6170が7目と粗いのに対し，6166は細かいタタキである。珠洲Ⅲ期～Ⅴ期のものがあり，Ⅳ期のものが主体である。

6172・6173は瓦質火鉢。6172は底径29.6cmを測り，体部が内湾し下端に凸線を1条巡らせている。浅鉢形で，脚がつくものと考えられる。6173は体部が直線的に外上方にのび，口縁部を外方に水平に折り返している。

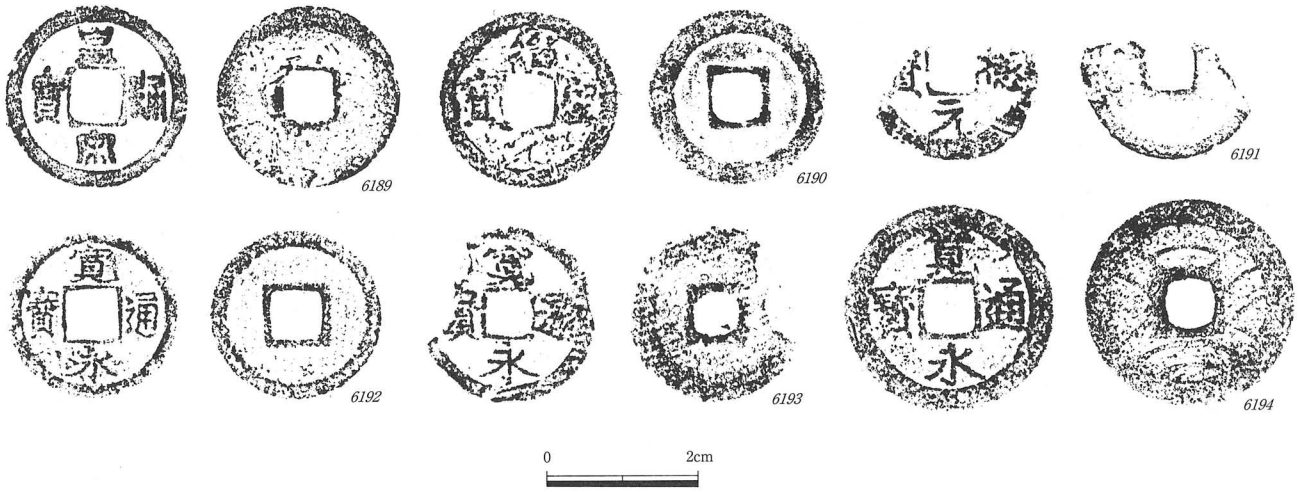
6174・6175は越中瀬戸皿。6174は口径11cmを測り，削り込み高台で，口縁部が外方にのびる。鉄釉が施され，内禿で釉止めの段がなく，内面見込み部分は使用で摩滅している。底部外面には「佳」と墨書がある。6175は口径14.6cmを測り，断面三角形の削り出し高台で，内面全面に鉄釉が施されている。内面には釉止めの段がなく，見込みには目跡がみられる。体部外面露胎部分と底部外面には炭化物が付着している。17世紀後半～18世紀前半のもの。

6176は長方形の板材の両端を弧状に落とし，中央には相欠き仕口がある。一方の長側辺には弧状の刳形を入れており，同様なものを組み合わせて使用したと考えられるが用途は不明。6177は両端を尖らせ断面形が長楕円形を呈する箸。

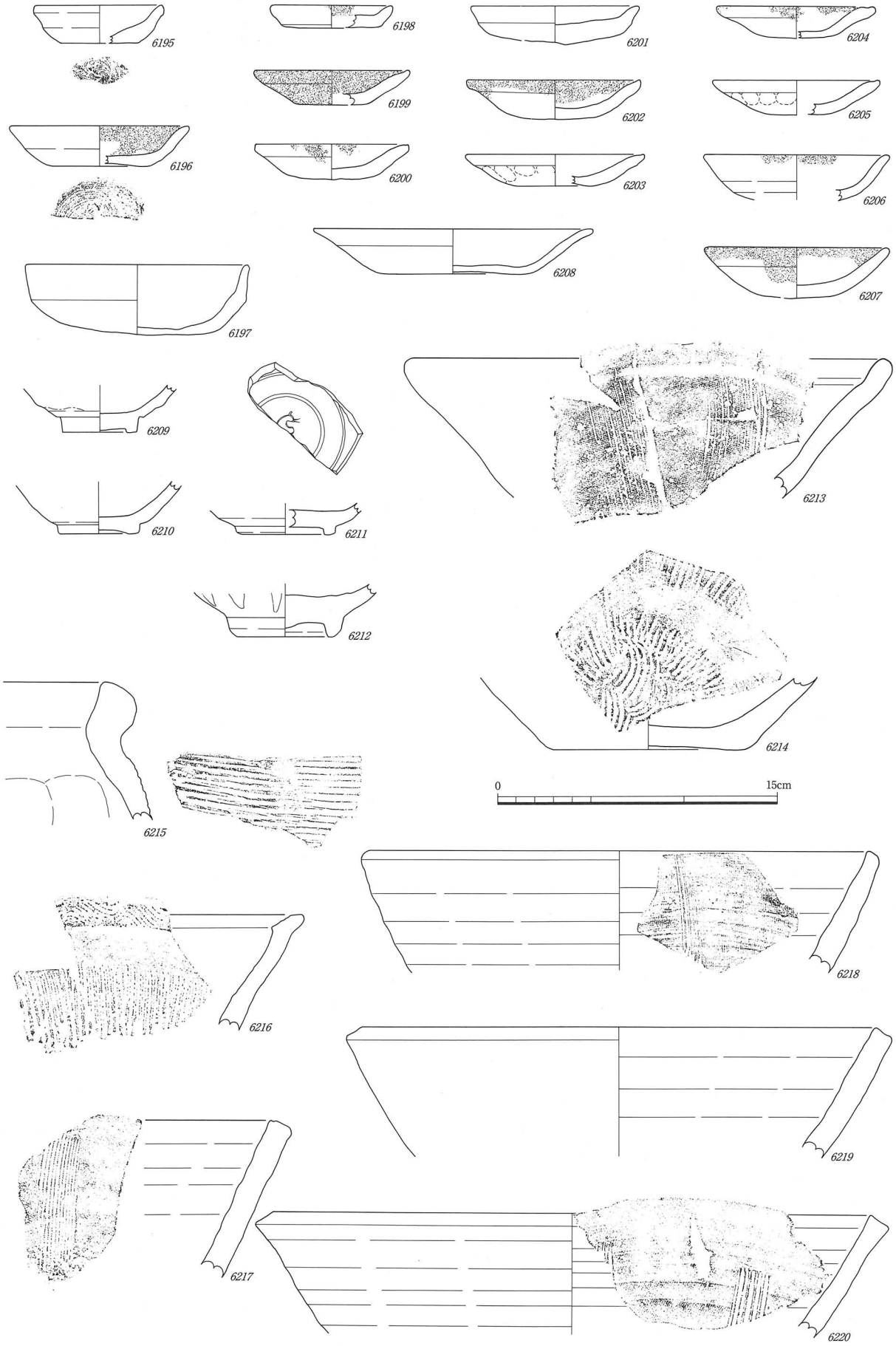
6178は中央に穿孔された加工石。6179は五輪塔の空風輪。宝珠と請花の間に欠首をもち，宝珠のつまみは上方に尖る。

6180は一端を入八双形，他端の小口は一文字にし，猪目と方形の鋲孔があり，魚々子で埋めた八双金物と考えられる。6181・6182は鎹。6183は輪状を呈する。6184～6194は銭。6184は永楽通寶他7枚が錆びてくっついているもので，銭緡の一部分と考えられる。6185は元豊通寶か。6186～6188は開元通寶で，6188は2枚が貼り付いている。6189は皇宋通寶。6190は紹聖元寶。6191は景ヵ徳元寶。6192～6194は寛永通寶。

（中川道子）



第576図　遺物実測図　(1/1)
包含層

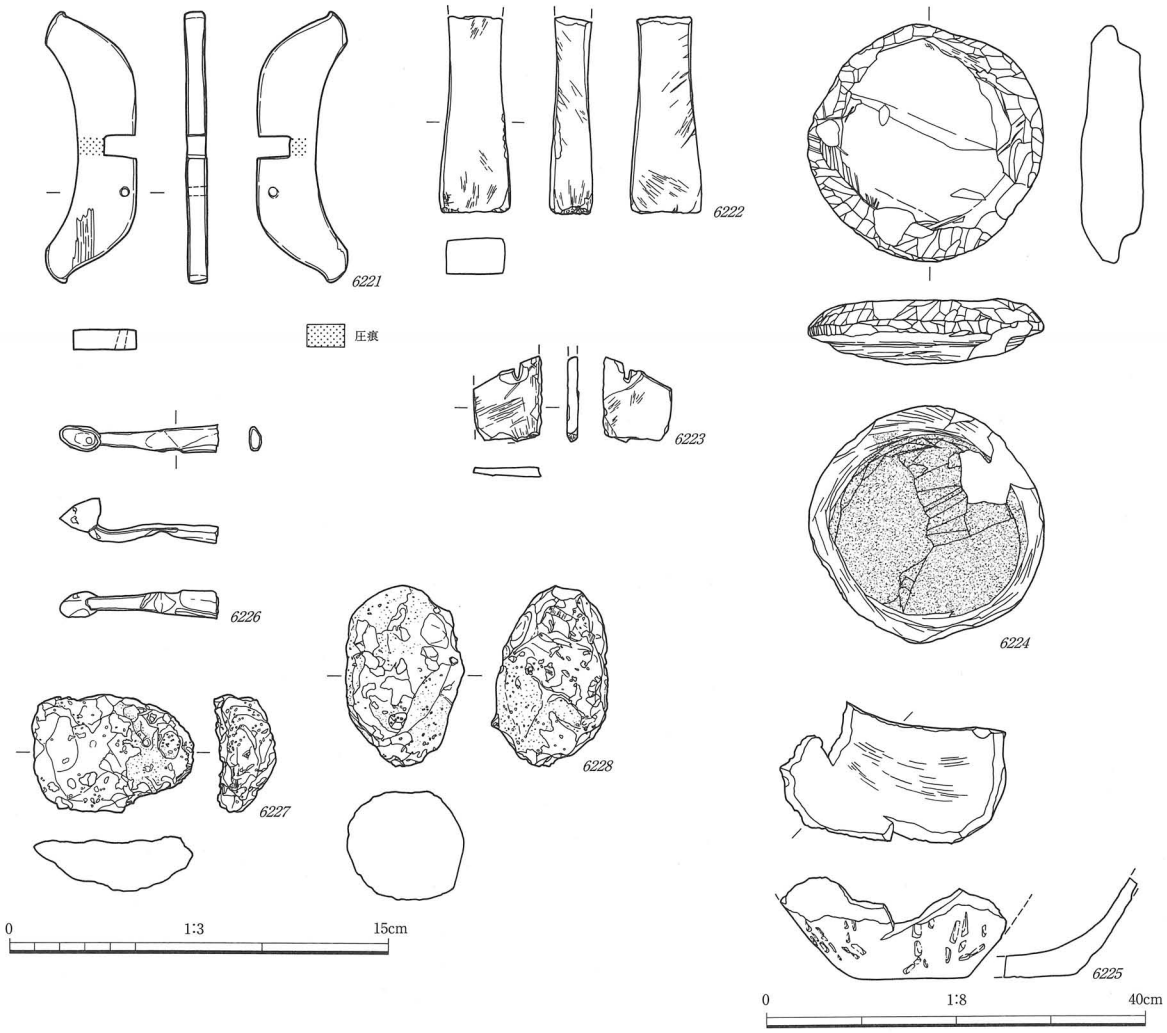


第577図　遺物実測図　(1/3)
包含層

F４地区の包含層出土遺物（第577・578図，図版260・267）

包含層からは中世土師器・瀬戸美濃・輸入陶磁器・珠洲・瓦質土器・木製品・石製品・金属製品が出土している。

6195～6208は中世土師器。ロクロ成形（6195・6196・6206）と非ロクロ成形のものがある。6195は口縁部を強くナデる口径6.8cmの小型の皿で，6196は内面全体に油痕が付着する。非ロクロ成形のものは口縁部が短く，底部近くまでヨコナデするタイプ（6198・6201）と口縁部をつまみ上げるようにナデるタイプと器壁が薄く口縁部が大きく外反するタイプに分けられる。口径が10cm以下のもののほとんどには口縁端部に煤の付着が認められる。6202はほぼ完形であるが口縁部の片側にだけ煤が付着している。6197は口径11.8cmの軟質な土器で，口縁部が直立し，ヨコナデの幅が広い。時期は他とは異なり14世紀頃のもの。6209・6210は瀬戸美濃の天目茶椀の底部。6209の高台は輪高台で，周辺には茶褐色の錆釉が塗られる。見込みは使用により摩耗し白く釉が禿げている。6210の高台は中央を浅く削った内反り高台で，周辺には紫がかった錆釉が塗布される。16世紀前半頃のもの。6211・6212は中国製青磁の碗の底部。6211は高台内側まで施釉し，高台内部は釉を削り取る。内底面には２本の沈線が巡り，中央には判読不能であるが浅い線刻による文様が残る。6212は外面に片切彫りの蓮弁文を施した碗で，畳付けを越えて一部高台内側まで施釉される。外底面は露胎で，全面に墨痕が残る。内底面は輪状に釉を剥ぎ取り見込みは露胎である。15世紀後半から16世紀前半頃のもの。6213・6214は瓦質土器の擂鉢。6213は口縁端部を丸く仕上げ，内側には浅い凹線が巡る。卸目の単位は10本１束である。



第578図　遺物実測図　（*6221～6224・6226～6228*　1/3，*6225*　1/8）
包含層

6214は７本１束の卸目が時計回りに施される。6215～6220は珠洲。6215は甕の口縁部で，口頸部と体部の境があまくなっており，Ⅴ期またはⅥ期のもの。6220は幅広の内端面に櫛歯波状文帯を巡らすⅤ期の鉢で，卸目が隙間なく施される。6217は口縁部方頭のⅣ期の鉢。6218は挽き出した口縁端部が外傾して面を取るもので，Ⅱ期のもの。6219・6220は外傾する端部をもつⅢ期の鉢である。

6221は組み合わせ式の器台の部材と推定する木製品である。２枚の板を十字に組み合わせて使用したと考えられ，レンズ状に窪んでいるほうが上になり，下端の小孔は小さな棒状のものを通して板が寄るのを防ぐ役割をしたと考えられる。大きさから燈火台の可能性がある。

6222・6223は砥石。6222は丹波・山城産。6224は石製蓋。天井部は未調整で，縁辺部を細かく削って縁を作り出し，内側は縁辺を輪状に削り込み，受け部を作り出している。内側は黒色で煤けており，やや小型ではあるが消炭などを入れた容器の蓋であろうか。6225は石鉢。明緑灰色の凝灰岩系の石材である。6226は煙管の雁首。火皿と首部の境に補強帯を巻かないもので，変形が著しいが，首部の湾曲が小さくなったタイプと思われる。6227・6228は鉄滓である。（島田美佐子）

Ｇ地区の包含層出土遺物（第579～581図，図版227・260・261）

遺物はほぼ調査区全域で出土したが，特に北半部分からの出土が多い。出土遺物には中世土師器・瀬戸美濃・中国製青磁・中国製青白磁・中国製白磁・珠洲・越前・木製品・金属製品がある。

6229～6240は中世土師器皿。6229～6234は短い口縁部がほぼ垂直からやや外反するもの。6229・6230は口径7.6cm・7.8cmを測り，口縁部が垂直に立ち，6230は平底である。6231・6232は口径7.8cm・9.8cmで，口縁部はやや外反気味で丸底。14世紀後半～15世紀前半のもの。6233・6234は口径8.8cm・9.8cmで，口縁部は外反し，底部は丸底で器壁が厚い。6234は内外面煤が付着している。15世紀前半のもの。6235～6239は口径8.8cm～9.4cmを測り，平底から体部が直線的に開くもの。口縁端部の形態は6235はつまみ上げ，6236～6239は端部をつまみ上げて丸くなりやや肥厚している。全て口縁部に煤が付着しており，灯明皿として使用されたことがわかる。6237は口径11.9cmで，体部は大きく外反して開き，端部をつまみ上げている。6240はロクロ成形で，底部外面には板状圧痕がある。体部は直線的に開くようである。15世紀後半～16世紀前半のもの。

6241～6243は瀬戸美濃。6241・6242は口径11.8cmを測る天目茶椀。6241は体部が直線的に開き，口唇部も直立するもので，内外面には鉄釉が施される。6242は体部が直線的に開き，口唇部がややくびれ，内外面に鉄釉，高台周辺には錆釉が施される。大窯第２段階のもの。6243は削り出し高台。内面には灰釉が施され，外面は露胎である。

6244・6245は龍泉窯系青磁。6244は碗底部。見込みには花文のスタンプがある。内外面に施釉され，底部外面を輪状に削り取っている。破片は高台部分のみが残るように周囲を意図的に打欠いている。15世紀のもの。6245は盤で口径23.4cmを測る。体部は直線的に開き，口縁部を「く」字状に折り曲げ，さらに端部を上方に引き上げている。体部内面には細い丸のみ状施文具で蓮弁を表現している。釉調はややムラがあるが，明オリーブ灰色を呈する。14世紀のもの。6247は中国製白磁の端反皿で，口径9.6cmを測る。高台は比較的厚い削り出し高台で，見込みは輪状に釉を削り取っており，体部下位から底部外面は露胎である。太宰府分類白磁皿Ⅲ類で，16世紀のもの。6246・6248・6249は中国製青白磁。6246は梅瓶底部。高台は削り込まれ，外面体部下縁には２条の沈線が巡り，上部には渦文とみられる文様がかすかにみられる。16世紀のもの。6248は皿。口径11.5cmを測り，体部は緩やかに内湾し，口縁端部は尖る。釉は透明感があり僅かに水色を帯びた白色である。6249は皿。体部下位から底部外面にかけては露胎である。釉は透明感がある水色を帯びた白色である。

6250～6256は珠洲。6250～6254は擂鉢。6250は口径31cmを測り，体部は膨らみをもって立ち上がり，口縁を内湾気味におさめる。内面に卸目はない。珠洲Ⅰ期のもの。6251は口径29.8cmを測り，体部が直線的に開き，口縁部の形態は水平口縁で方頭である。卸目は一単位９目のやや太い櫛歯原体によりやや間隔をあけて施入されている。6253は底部の破片であるが，卸目は一単位11目の櫛歯原体により間隔をあけて施入している。珠洲Ⅳ期のもの。6252・6254は体部が直線的に開き，口径は6252は41.8cm，6254は39.2cmを測る。口縁部の形態は6252は水平口縁でやや端面が拡張した方頭，6254は内傾した三角頭で端面が肥厚したもので，ともに内端面には櫛目波状文帯が巡る。櫛目波状文は6252が７目一単位，6254が８目一単位で波濤状に変化をつけている。卸目は6252は一単位11目，6254は一単位９目の櫛歯原体で全面にくまなく施入されている。6252は珠洲Ⅳ期～Ⅴ期のもの。6254は珠洲Ⅴ期のもの。6255は壺。肩部の破片で５条～８条の櫛描波状文が２段みられる。珠洲Ⅰ期のもの。6256は甕。口径45cmを測り，口縁形態は平直で方頭の「く」字口縁である。珠洲Ⅳ期のもの。

6257・6258は越前。6257は甕で，口径38cmを測る。折り曲げた口縁端部はほぼ垂直で，口縁帯を形成している。13世紀後半～14世紀前半のもの。6258は擂鉢。体部は直線的に開き，内面には卸目が一単位3.3cmに12目の櫛歯原体により，間隔をあけて施入されているが，見込みに卸目はない。15世紀後半のもの。

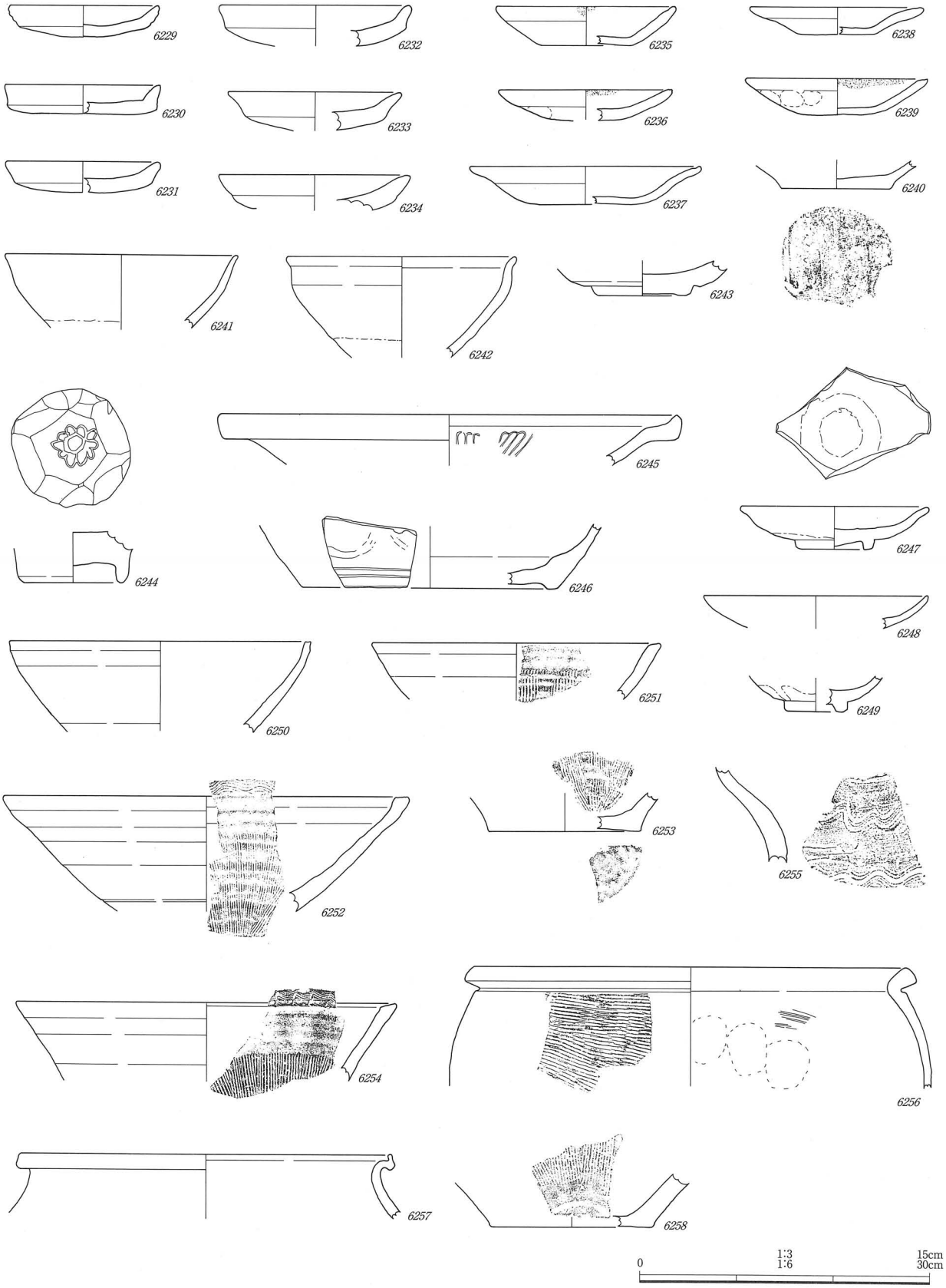
6259～6261は漆器。6259・6260は漆器椀。低い高台脇から体部がややカーブしながら内湾気味に立ち上がる。内外面とも黒色漆に赤色漆で鶴と草が描かれている。6261は皿で，内外面に生漆が塗られている。6262～6265は円形板。6264は別板と結合された際の木釘が２箇所みられる。6265は端に寄って２箇所穿孔されている。6266～6268は箸。断面形は長楕円形で，一端を欠損している。6269は付札。長方形の材の一端を圭頭にし，左右に切り込みを入れているが，他端は欠損している。片面には刃痕が多数みられるが，文字等はない。切り込み部分には縄等で縛ったような圧痕がある。6270は連歯下駄で，前壺から先を欠損している。前壺は円形，後壺は方形である。6271は断面方形の材の一端を尖らせており，釘孔が１箇所ある。6272・6273は断面長方形の材の中央に方形の突起があり，突起の中央は緩やかにカーブを描いて窪んでいる。材の一端には入枘を作り出していることから，組み合わせて使用したものであろうが，用途は不明。6274～6282は木錘。全形がわかるものは6274のみで，長さ15.5cm，直径４cmを測る芯持材を用い，表面を円筒形に削り整えている。一端に縄掛け状の刳込みを巡らし，先端部は笠形に作られている。6275～6282は同形のもので，製作の際か使用により破損したかは不明であるが，溝部分から欠損している。6283は長さ28cm，幅1.8cmを測り，ほぼ中央に溝状に削り込みがある。両端は薄く刀状となり，全面に削り痕がみられるが，用途は不明。

6284は洪武通寶。

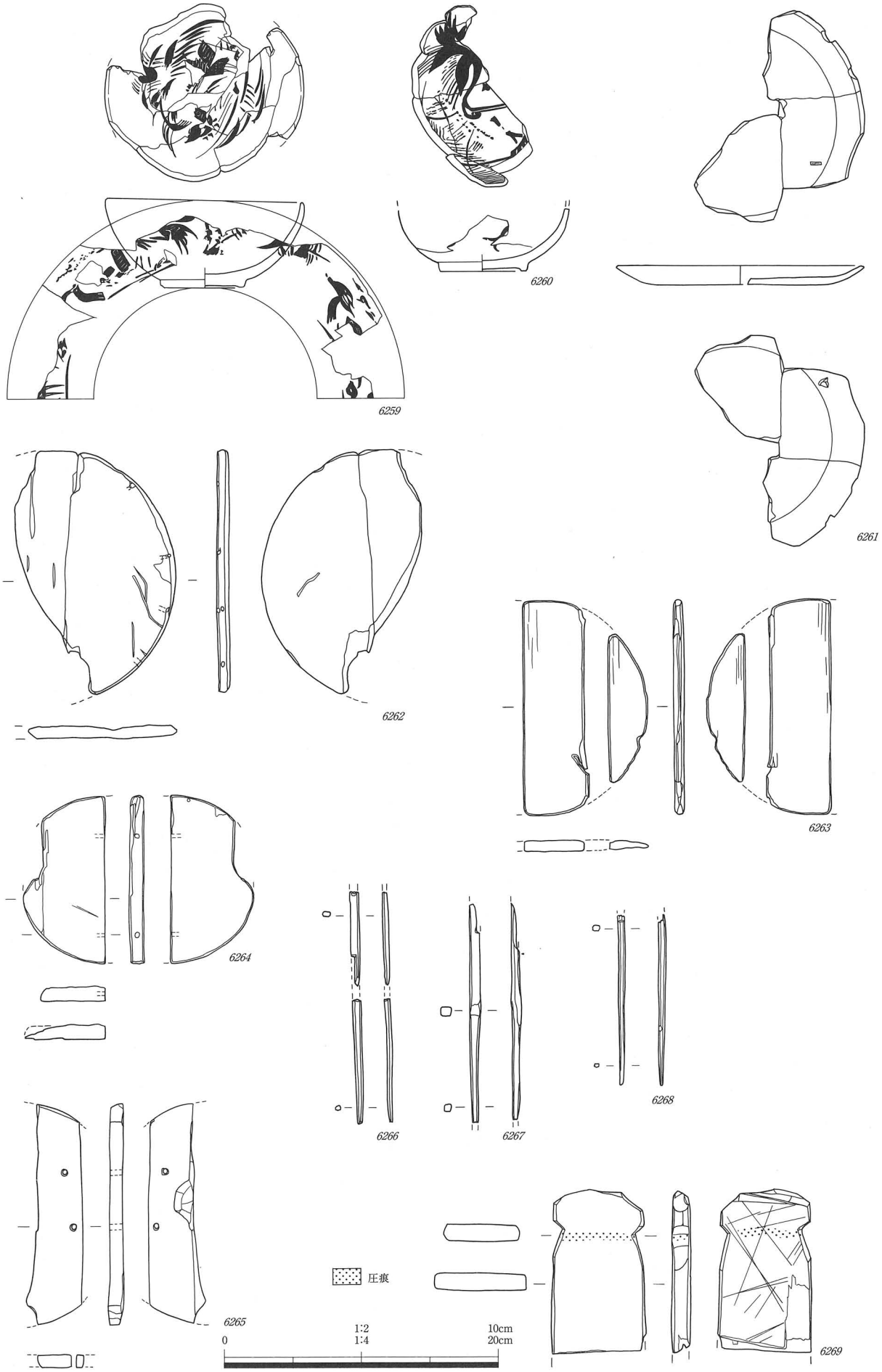
H地区の包含層出土遺物（第582～586図，図版168・225・228・261・262・268～271）

H地区からは中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・中国製青磁・瓦質土器・越中瀬戸・木製品・石製品・金属製品が出土している。

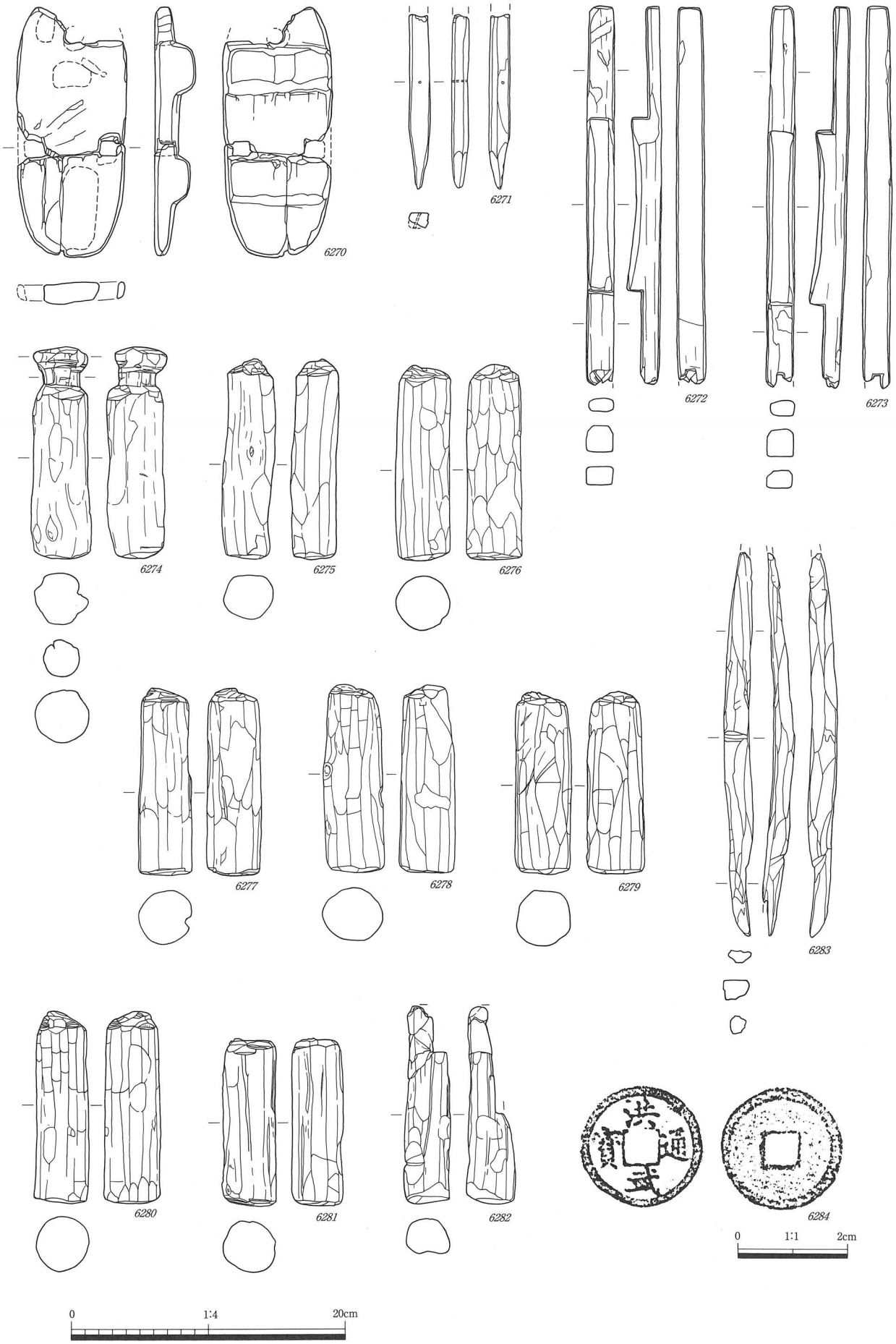
6285～6317は中世土師器皿。6285～6313は非ロクロ成形。6285～6288は口径6.4cm～7.8cmを測り，口縁部が短く外反気味に立ち上がる。6289・6290は平底風の丸底で，口縁部を強く撫でるため端部はやや外反し，段ができる。15世紀前半のもの。6291～6313は平底で口縁部が大きく外反するもので，端部の形態と口径により細分される。端部の形態にはつまみ上げるもの（6291～6294・6310～6313），端部をつまみ上げ丸くなり，肥大するもの（6295・6296），端部を内につまみ上げるもの（6297～6299・6304・6305），端部が尖るもの（6300～6303・6306），口縁部が外反し端部が尖るもの（6307～6309）



第579図　遺物実測図　（*6229～6249・6255*　1/3，*6250～6254・6256～6258*　1/6）
包含層



第580図　遺物実測図　（*6269*　1/2，*6259*～*6268*　1/4）
包含層



第581図　遺物実測図　（*6284*　1/1，*6270～6283*　1/4）
包含層

がある。口径には8.2cm～10cm，13.8cm，16.8cmがある。15世紀後半～16世紀のもの。内外面に煤が付着したものは6286～6289・6293・6294・6296・6301・6304・6305・6308・6309・6314～6317である。6314～6317はロクロ成形。口径8.2cm～10cmを測り，体部は直線的に開き，口縁端部は外反気味である。15世紀前半のもの。

6318～6322は瀬戸美濃。6318は小杯。口径5.4cm，底径2.5cmを測り，口縁部は内湾する。鉄釉が施され，底部外面には回転糸切り痕をそのまま残している。窖窯Ⅳ期のもの。6319～6321は天目茶椀。6319は口径11.4cmを測り，口唇部はあまりくびれず，口縁端部は玉縁状になる。6320は口径12.8cmを測り，口唇部は若干くびれ，体部下部には錆釉が施される。6321は被熱している。6322は丸椀。全面に灰釉が施され，体部外面には中国製青磁の蓮弁文碗を写した粗雑な線描がある。大窯Ⅰ期のもの。

6323～6328は中国製青磁。6323～6327は碗。6323は口径13.4cmを測り，口縁部は外反し端部は丸く玉縁状になる。上田分類D類にあたる。6324は全面に施釉後外底面の釉を輪状に削り取っており，漆継ぎした痕跡がある。6325は被熱により釉も胎土も変色しているが，台形状の高台をもち，見込みと体部との境に段を有する。太宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ類にあたる。6326は全面に施釉後見込み中央を円形に，高台の畳付けから内面中心部付近までの釉を削り取っている。また，見込みには重ね焼き痕がみられる。6327は体部外面に蓮弁文，見込みに花文？が片切彫りされている。釉は畳付けを越えて高台内面途中まで施されるが，畳付けの釉は削り取られていない。上田分類BⅢ－aにあたる。6328は杯。体部は丸みをもって内湾気味に立ち上がり，口縁部は鋭く外反する。釉は明るい緑青色を呈し，厚くかかる。太宰府分類では龍泉窯系青磁杯Ⅲ類にあたる。

6329～6341は珠洲。6329～6331・6335は壺。6329は口径22cmを測り，口縁部は外反し嘴状の水平口縁形態をとる。端面には7目一単位の櫛目波状文帯が巡る。6331は肩部に4目一単位の櫛目波状文帯が2条巡る。珠洲Ⅱ期のもの。6330は扁球胴の小壺で，珠洲Ⅴ期のもの。6332～6334は甕。6332は口径37cm，6333は口径40.4cmを測り，短頸の「く」字口縁で口縁形態は方頭である。珠洲Ⅳ期のもの。6334は短頸の水平口縁で口縁形態は円頭である。珠洲Ⅴ期のもの。6336～6341は擂鉢。6336・6337・6339の口縁形態は方頭で，6336は外傾口縁，卸目は1cmに4目の細い櫛目原体で不規則に施入されている。6337・6339は水平口縁で，6339の端面には櫛目波状文帯が巡る。珠洲Ⅳ期のもの。6338・6340は内傾口縁で，口縁形態は6338は幅の広い端面が三角形をなし，卸目は3cmに11目の原体により上端にやや間隔をあけて施入されている。6340は端部が肥厚し，卸目は2cmに8目の原体で間隔をあけて施入されている。内面は被熱により黒変している。珠洲Ⅴ期のもの。6341は口端面が拡張し幅2.5cmを測り，内端面には粗雑な波状文帯が巡る。内面の卸目も3.8cmに8目，一目約3mmの太い原体により全面に施入されているが，使用により下半の卸目は摩滅している。珠洲Ⅵ期のもの。

6342～6349は瓦質土器。6342～6344は擂鉢。6342は体部は直線的に開き，口縁端部はやや内湾気味に屈曲する。注口は小さく作り出され，卸目は2.3cmに7目の原体で間隔をあけて施入されている。外面は煤が付着している。6344は3.5cmに13目の細かい櫛目原体で体部全面に施入されているが，底部内面にはない。6345・6346は底径11cm・11.6cmを測り，体部は直立する。外面には草状または蓮弁状の彫り込みがある。6345の外面彫り込み部分に僅かに黒い部分が残っており，本来は黒色であったとみられる。また，6346の外面には黒色漆が塗られている。6347は火鉢。丸い体部に方形の窓が開けられている。6348は香炉。扁球形の体部からくの字に屈曲して直線的に開く頸部がつく。体部には雷文と半裁の菊花文が施文されている。6349は火鉢底部。3足のもので，体部は直線的に開き，沈線が1条巡り，直上には菊花文のスタンプが施文されている。

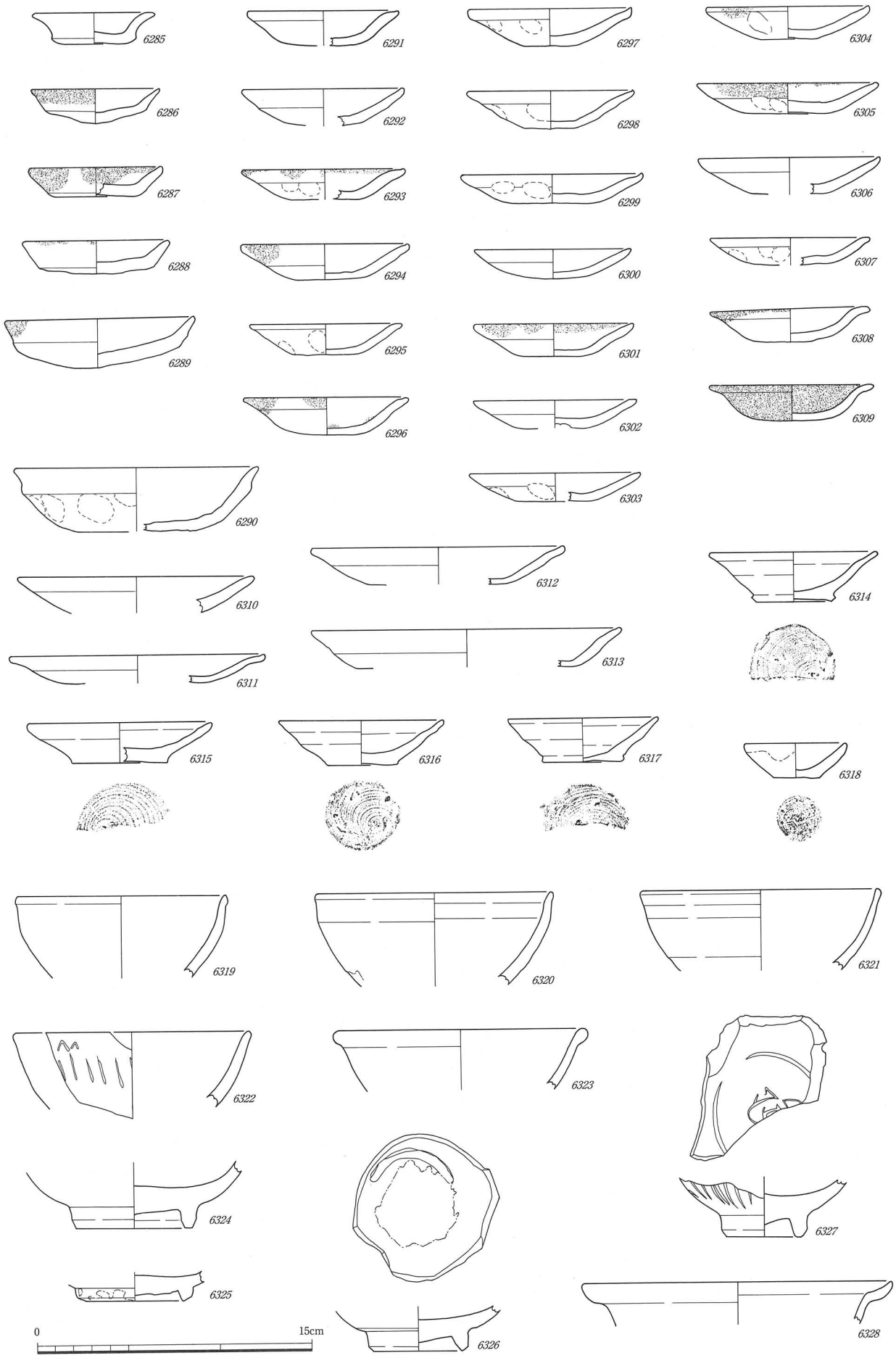
6350～6354は越中瀬戸。6350は丸椀。口径12cmを測り，鉄釉が施釉されるが，体部下半は露胎で錆釉がかかる。16世紀末～17世紀初めのもの。6351～6353は鉄釉を施す内禿皿。6351は付高台の丸皿で，口縁部が屈曲する。見込みには菊花文の印花文，底部外面には墨書がみられる。6352は削り出し高台の丸皿で，口縁端部が屈曲する。6353は削り出し高台部分のみで，底部外面に「十」とみられる墨書がある。6354は削り込み高台の向付。口縁端部は角張り，内底面の釉止めの段は僅かに残り，灰釉がかけられている。17世紀前葉～17世紀中頃のもの。

6355～6369は木製品。6355～6359は漆器。6355～6357は椀で，6355は低い高台脇から僅かにカーブを描きながら体部が立ち上がり，内外面には赤色漆で鶴と草花文が描かれている。6356・6357は草花文のような文様が描かれている。6358・6359は皿で，6358は外面黒色内面赤色漆，6359は内外面赤色漆である。6360は円形板。直径8.4cm，厚さ0.7cmを測り，柄杓の底板の可能性がある。6361～6364は下駄。全て連歯下駄であるが，6362は裏面の前壺周囲に方形の刳り込みがある。6361・6363は歯の作りが粗雑で，歯の向きは台に対して斜めである。6364は前壺と後壺の一方が残存しているが，歯はなく後壺に近い板の中央に穴が穿たれている。下駄としては幅が狭いことから，破損したものを再利用したのであろうか。6365は両端を平坦に削り込み，8箇所の釘孔が並ぶ部材。6366は長さ12cmを測り，「八」字状に開き，一辺は弧状に刳り込みを入れ，直な他辺中央には相欠仕口をもつ。同形のものを２個体組み合わせて，台として使用したものか。6367は紡織具の横木に似るが，破損が激しい。6368は箱。残存長15cmを測る。内面には黒色漆が塗られており，側面の一部が残存する。6369は円孔が３箇所ある長方形の板材。

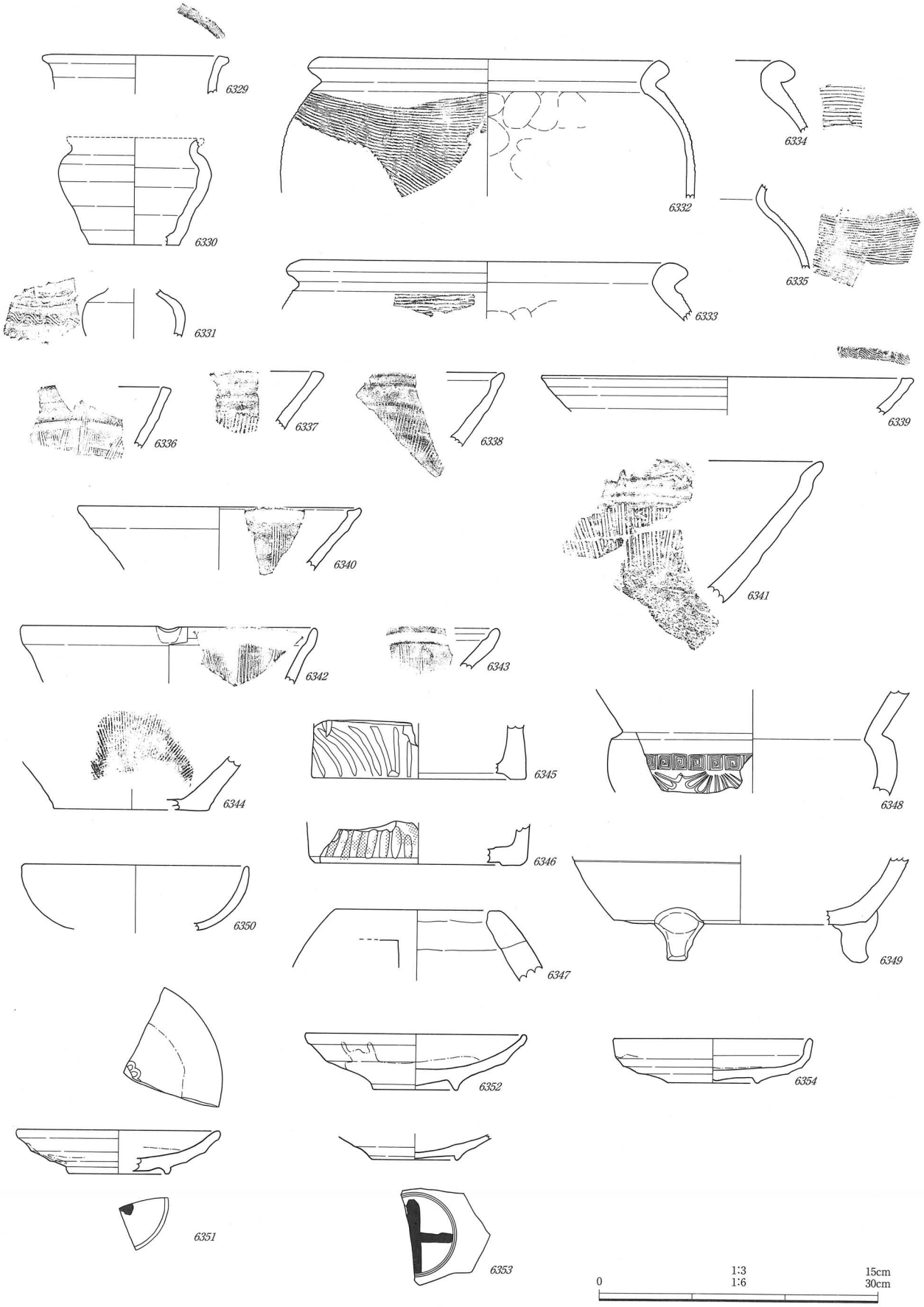
6370～6379は石製品。6370は砥石。厚さ1.3cmと薄い板状のもの。6371は蓋。上面は平滑で，平面形は長楕円，または隅丸方形，下面は盛り上がっている。内面から側面にかけて煤が付着していることから，石製暖房具の蓋の可能性が考えられる。6372・6373は茶臼。摺り面の直径は18cm～20cmを測り，摺り目は８分画で８～10本の副溝がある。6374～6377は石臼。6374・6375は上臼で，直径31cm前後を測る。挽木の取り付けは側面の方形の穴に差し込む横打ち込み式で，摺り目は８分画とみられ，4本～６本の粗い副溝がある。6376・6377は下臼。直径31cm～32cmを測り，6376の摺り目は８分画で４本～５本の粗い副溝がある。6377は表面が破損しており，摺り目がほとんど残っていない。6378は断面方形の石の中央から円形の刳り込みを入れたもの。礎石として使用されたものか。6379は五輪塔の空風輪。宝珠と請花の間に欠首を施し，宝珠のつまみはやや尖る。

6380～6391は金属製品。6380～6382は鍋。6380は口径22.3cm，高さ10cmを測り，底部はやや中央が窪む。底部外面周囲には等間隔に３足，中央に湯口がある。6381・6382は口縁部の破片であるが，6380と同一個体の可能性が高い。6383～6386は鍋と共に出土したものであるが，用途不明。6387は飯食器。器形は鉄鉢形と支台形を一体とした形で，鉄鉢部分は破損が激しく口径の復元は困難である。腰は締まり，裾広がりの高脚に紐帯を巡らすのみの素文である。6388は小柄。刃先端を僅かに欠くが，全長23.3cmを測る。刀身は峰が直角で，茎で細くくびれる。柄尻には猪目の透かしがあり，片面には５条の溝が刻まれており，他面は平滑である。6389は煙管の雁首。脂返しは湾曲せず，首部が火皿から急に横に取り付く。表面には鍍金が残存している。18世紀のもの。6390・6391は寛永通寶。

（中川道子）



第582図　遺物実測図　(1/3)
包含層



第583図　遺物実測図　（*6345～6354*　1/3，*6329～6344*　1/6）
包含層

第584図　遺物実測図　(1/4)
包含層